

患難から栄光へ

下 卷

エレン・G・ホワイト著

清 野 喜 夫

安 藤 千 代 子 訳

福 音 社

THE ACTS OF THE APOSTLES
by
ELLEN G. WHITE

Fuk u i n s h a
Y o k o h a m a , J a p a n

目次

第三一章	患難と栄光・	1
第三二章	豊かにまく者は豊かに刈り取る・	15
第三三章	労働の祝福・	27
第三四章	使命を持つ者の働き・	40
第三五章	ユダヤ人への福音・	54
第三六章	福音から離れた人々・	67
第三七章	パウロの最後のエルサレム旅行・	74

第三十八章	投獄されたパウロ・	84
第三十九章	カイザリヤにおける裁判・	105
第四〇章	パウロ、カイザルに上訴する・	116
第四一章	アグリッパ王大いに感銘す・	121
第四二章	航海と難破・	129
第四三章	ローマにて・	138
第四四章	ネロの宮廷・	153
第四五章	ローマからの手紙・	161
第四六章	自由の身になって・	180
第四七章	最後の逮捕・	184
第四八章	皇帝ネロの前に立つパウロ・	187
第四九章	パウロの最後の手紙・	194

第五〇章	義の冠が待つ・	206
第一章	忠実な羊飼い・	212
第二章	最後まで忠実に・	229
第三章	愛された弟子・	241
第四章	忠実な証人・	249
第五章	恵みによって変えられた人・	260
第六章	パトモス島に流される・	271
第七章	ヨハネ、黙示録を書く・	282
第八章	真理は勝利する・	301
〔解説〕	使徒たちの足跡をたどって・	313
	年表・	347
	馬場 嘉市・	
聖句索引		

第二章 患難と栄光

本章は、コリント人への第二の手紙に基づく

パウロは、以前に働いたことのあるヨーロッパの各地をもう一度訪問しようと思って、また、エペソから伝道旅行に出発した。パウロは、しばらくの間、「キリストの福音のために」トロアスにとどまり、彼の言葉を聞く人々を幾人か見いだした。その場所における働きのことを彼は、後で、「わたしのために主の門が開かれた」と言った。彼は、トロアスの働きが成功したにもかかわらず、長く滞在することができなかった。「諸教会の心配ごと」、特にコリントの教会のことが彼の心に重くのしかかっていた。彼は、トロアスでテトスに会って、自分がコリントの兄弟たちに送った勧告と譴責の言葉を、彼らがどのように受けたかを知りたいと思ったけれども、彼の願いは果たされなかった。彼は、「兄弟テトスに会えなかったので、わたしは気が気でな」かったと、この経験について書いた。そこで、彼は、トロアスを離れて、マケドニアへ行き、ピリピにおいて、テモテに会ったのである。

パウロは、コリントの教会について、憂慮してはいたが、望みを捨ててはいなかった。しかし、時には、深い悲しみが彼の心を閉ざし、彼は自分の勧告と忠告が誤解されるのではないかと恐れた。彼は、後で次のように書いた。「わたしたちの身に少しの休みもなく、さまざまの患難に会い、外には戦い、内には恐れがあった。しかるに、うちしおれている者を慰める神は、テトスの到来によって、わたしたちを慰めて下さった」。

この忠実な使者テトスは、コリントの信者たちの間に驚くべき変化が起こったという、励ましとなる知らせをもたらした。多くの者はパウロの手紙の中の教えを受けいれて、自分たちの罪を悔い改めた。彼らの生活は、もはや、キリスト教の恥辱ではなくなり、实际的な信仰ということを力強く示すものとなった。

パウロは喜びに満ちあふれて、コリントの信者たちにもう一つの手紙を送り、彼らの中に行われたよい働きのことを聞いての心の喜びを表明した。「そこで、たとい、あの手紙であなたがたを悲しませたとしても、わたしはそれを悔いていない。」彼は、自分の言葉が、軽べつされるのではないかという恐れにさいなまれ、時には、あのように断固として厳しく書いたことを後悔したのであった。しかし、「今は喜んでゐる。それは、あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めるに至ったからである。あなたがたがそのような悲しんだのは、神のみこころに添うたことであって、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのである。神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導く」

く。人の心に神の恵みが働く結果生じる悔い改めは、罪の告白と放棄に至らせる。パウロは、コリントの信者たちの生活にこのような実が実ったと言ったのである。「神のみこころに添うたその悲しみが、どんなにか熱情をあなたがたに起させたことか。また、弁明、義憤、恐れ、愛慕、熱意……に至させたことか」。

パウロは、しばらくの間、諸教会に対する魂の重荷を負っていた。それは、ほとんど耐えられないような重荷であった。偽教師たちは、信者間における彼の影響力を破壊し、福音真理の代わりに彼らの教理を広めようとした。パウロを取りかこんだ困惑と失望は、次の言葉によく表されている。「わたしたちは極度に、耐えられないほど圧迫されて、生きる望みをさえ失ってしま」った。

しかし、今、心配の種が一つ取り除かれた。パウロは、コリントの人々が彼の手紙を受け入れたという知らせを聞いて、喜びの声をあげた。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でもわたしたちを慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めていただくその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々を慰めることができるようにして下さるのである。それは、キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである。わたしたちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救とのためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるの

である。だから、あなたがたに対していただいているわたしたちの望みは、動くことがない。あなたがたが、わたしたちと共に苦難にあずかっているように、慰めにも共にあずかっていることを知っているからである」。

パウロは、彼らがふたたび改心し、恵みに成長していることに、喜びを表し、この心と生活の変化に對して、すべての讃美を神にささげた。彼は叫んで言った。「神は感謝すべきかな。神はいつもわたしたちをキリストの凱旋に伴い行き、わたしたちをとおしてキリストを知る知識のありを、至る所に放って下さるのである。わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストのありである」。当時、戦いに勝利した將軍は、その帰還の時に、捕虜たちを引き連れてくる習慣があった。その際、香をたく者が選ばれ、軍隊が故郷に凱旋行進をしたとき、その芳香は、死に定められた者にとっては、死の香りであり、その処刑の時の切迫を示していた。しかし、彼らを捕らえた者の恵みに浴して、生命を助けられることになっていた者にとって、それは、生命の香りであり、自由が近づいたことを示していた。

パウロは、今や、信仰と希望に満ちていた。彼は、コリントにおける神の働きに對して、サタンが勝ち得ないことを知り、讃美の声をあげて、心からの感謝を注ぎ出した。彼と彼の同労者たちは、キリストと真理の敵に對する勝利を祝い、新たな熱意をもって、救い主についての知識を広めるために出て行くのであった。福音の芳香は、香のように、全世界に広く行きわたらなければならなかった。キリスト

を受け入れる者にとって、その使信は、いのちからのちに至らせるかおりであるが、不信を抱き続ける者には、死から死に至らせるかおりなのである。

パウロはこの働きの極めて重大なことを悟って、「いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか」と叫んだ。いったい、だれが、使命者や、彼の伝える使命をそしる口実をキリストの敵に与えることなく、キリストを宣べ伝えることができようか。パウロは、福音宣教の厳粛な責任を、信者たちに深く印象づけたいと望んだ。忠実にみことばを宣べ伝えると共に、純潔と言行の一致が生活に伴ってこそ、はじめて、伝道者たちの努力が神に受けいられるものとなり、人々の益となるのである。今日、牧師たちが、働きの重要性に圧倒されて、使徒パウロと共に、「いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか」と叫ぶのも当然である。

パウロが前の手紙を書いたとき、それは自分を推賞するためだと、彼を非難した人々があつた。そこで彼は、このことに触れ、教会の信者たちに、彼らもそのように彼の動機を批判したかをたずねた。

「わたしたちは、またもや、自己推薦をし始めているのだろうか。それとも、ある人々のように、あなたがたにあてた、あるいは、あなたがたからの推薦状が必要なのだろうか」。新しい場所へ移っていく信者たちは、よく、彼らが前に属していた教会からの推薦状を持って行ったものである。しかし、指導者たち、すなわち、これらの教会の創設者たちは、このような推薦状を必要としなかった。偶像の礼拝から福音の信仰に導かれたコリントの信者たち自身が、パウロに必要な推薦状のすべてであつた。彼ら

が信仰を受けいれ、その生活に改革が行われたことは、彼の働きが忠実になされていること、そして彼には、キリストの伝道者として、勧告と譴責と奨励を行う権威があることを、雄弁にあかししていた。パウロは、コリントの兄弟たちを、彼の推薦状と見なした。彼は、次のように言った。「わたしたちの推薦状は、あなたがたなのである。それは、わたしたちの心にしるされていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。そして、あなたがたは自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板ではなく人の心の板に書かれたものであることを、はつきりとあらわしている」。

罪人が悔い改めて、真理によってきよめられることは、神が、牧師を伝道の仕事に召された最も強力な証拠である。彼の使徒職の証拠は、改心した人々の心に書かれ、彼らの新たな生活によって、立証される。栄光の望みであられるキリストが、心の中に形づくられる。牧師は、彼の働きにこのような証拠が押されて、大いに力づけられるのである。

今日、キリストの牧師たちは、パウロの働きに対してコリントの教会があかししたのと同様の証言を持たなければならない。しかし、この時代において、牧師の数は多いが、有能で、きよめられた牧師、すなわち、キリストの心に宿った愛に満たされた人々は、実に少ないのである。誇り、自己過信、世を愛する心、あらさがし、辛辣さ、ねたみなどが、キリストの宗教を表明する多くの者の結ぶ実である。その人々の生活は、救い主の生涯とは著しい対照をなしていて、しばしば、彼らが、どのような牧師の

働きの下に改心したかという悲しいあかしを立てる。

人間にとって、福音の有能な牧師として神に受けいれられること以上に大きな栄誉はない。しかし、主が、主の働きにおいて力と成功を与えて祝福される人々は、誇ったりしない。彼らは、自分たちが、主に全く依存していることを認め、自分たちの無力を自覚している。彼らはパウロと共に、「もちろん、自分自身で事を定める力が自分にある、と言うのではない。わたしたちのこうした力は、神からきている。神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである」と言うのである。

真の牧師は、主の働きをする。彼は、自分の働きの重要性を感じ、自分の教会と世界とに対して、キリストが持続されたのと同様の関係を持続すべきことを自覚する。彼は、うまずたゆまず、罪びとをもっと高尚な生活へと導き、勝利者の報賞を彼らに得させようとする。祭壇からの燃える炭が彼のくちびるに触れ、彼はイエスを、罪びとの唯一の希望として掲げる。彼の説教を聞く者は、彼が、熱烈な力ある祈りによって神に近づいたことを知る。聖霊が彼の上にとどまり、彼の心は燃えさかる天からの火を受け、彼は、霊によって霊のことを解釈することができる。彼には、サタンの砦を破壊する力が与えられる。人々は、神の愛についての彼の説教を聞いて、心をくだかれ、多くの者が、「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」とたずねるに至る。

「このようにわたしたちは、あわれみを受けてこの務についているのだから、落胆せず、恥ずべき隠れたことを捨て去り、悪巧みによって歩かず、神の言を曲げず、真理を明らかにし、神のみまえに、

すべての人の良心に自分を推薦するのである。もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとっておおわれているのである。彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである。しかし、わたしたちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝える。わたしたち自身は、ただイエスのために働くあなたがたの僕にすぎない。『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。このようにパウロは、キリストの使者としての彼に与えられた、神聖な信任の中に示されている、神の恵みとあわれみを、大いに讃美した。彼と彼の仲間たちは、神の豊かなあわれみによって、困難と苦難と危険のなかにも守られたのであった。彼らは、彼らの信仰と教えを、聴衆の願うところに従って作り変えたりせず、教えをもっと魅力あるものにするために救いに不可欠な真理を差し控えたりはしなかった。彼らは簡単明瞭に真理を宣べ伝え、人々が罪を認めて、悔い改めることを祈った。彼らは、自分たちの行為が、教えていることと一致するように努力し、自分たちの伝える真理が、すべての人の良心を感服させるように努めた。

パウロは、続けて言った。「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである」。神は、罪なき天使たちによって神の真理を宣布することもおできになったが、しかしこれは、神の計画ではな

い。神は、神の計画を実施する器として、弱さを持った人間をお選びになる。この上なく貴重な宝が、土の器に盛られる。神の祝福は、人間によって世界に伝えられるのである。彼らを通して、神の栄光が、罪の暗黒の中に輝き出るのである。彼らは、愛の奉仕によって、罪のうちにある人々や困っている人々に接し、その人々を十字架に導かねばならない。そして、彼らは、そのすべての働きにおいて、栄光と誉れと讃美を、すべてのものの上におられるかたに帰すのである。

パウロは、彼自身の経験に言及して、彼がキリストに仕えるようになったのは、利己的動機からではないことを説明した。なぜなら彼の道は、試練と誘惑に満ちていたからである。彼は次のように書いた。「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」。

パウロは、彼と彼の同労者たちが、キリストの使者として、絶えず危険にさらされていることを、兄弟たちに思い起こさせた。彼らの耐える苦難は、徐々に彼らの力を弱らせていた。彼は、次のように書いた。「わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。こうして、死はわたしたちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのである」。これらのキリストの伝道者たちは、貧困と労苦によって、肉体的苦しみに会い、キリストの死にならっていた。しかし、彼らの中に死をもたらししていたものが、

コリント人には霊的生命と健康をもたらしていた。彼らは真理を信じて、永遠の生命を受ける者とされたのである。こうしたことを考えて、イエスの弟子たちは、怠慢や不和によって働き人たちの重荷や試練を増すことのないよう、注意しなければならない。

パウロは続けて言った。『わたしは信じた。それゆえに語った』としるしてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである」。パウロは、彼にゆだねられた真理が真実のものであることを堅く信じていたので、どんなものも、彼に、神のことはを欺瞞的に扱わせたり、または、彼の心の確信を隠させたりすることはできなかった。彼は、世俗の意見に迎合して、富や栄誉や快樂を得ようとはしなかった。彼はコリント人に宣べ伝えていた信仰のために、絶えず殉教の危機にさらされていながらも、おびえてはいなかった。死んでよみがえられたかたが、彼を墓からよみがえらせて、天の父のみ前に立たせて下さることを知っていたからである。

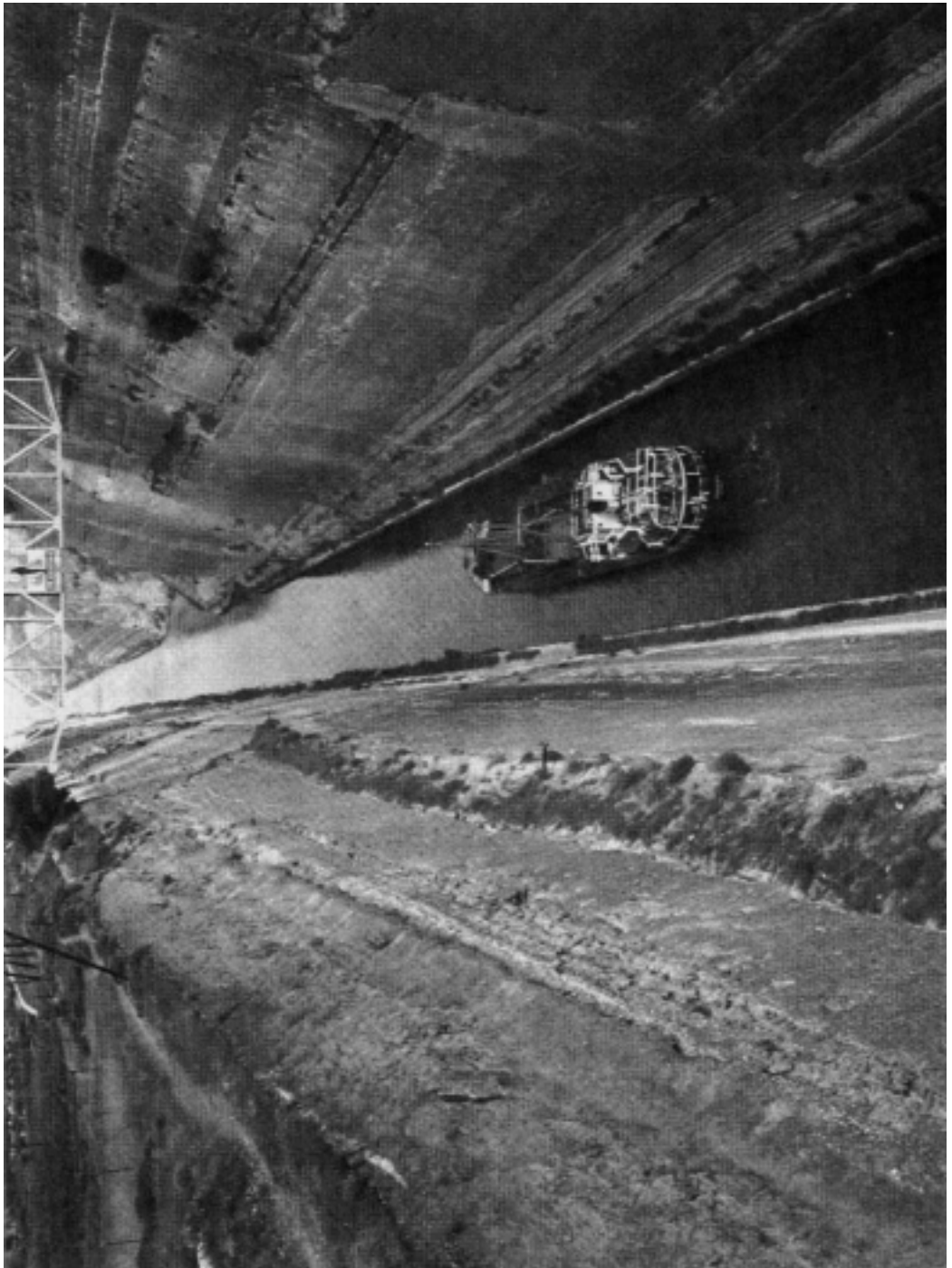
「すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである」と彼は言った。使徒たちは、自分たちの栄達を求めて、福音を宣べ伝えたのではなかった。彼らがこの働きにその生涯を献身したのは、人々の救われることを望んだからであった。危険におびやかされ、あるいは、実際に苦難に会ってもなお、彼らが努力することをやめなかったのは、この希望を抱いていたからである。

「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに

新しくされていく」とパウロは言った。パウロは、敵の力を知っていた。しかし、彼は肉体の力は衰えても、ひるむことなく忠実に、キリストの福音を宣べ伝えた。この十字架の英雄は、神のすべての武器をまとして、戦いに突進して行った。彼は歓呼の声をあげ、みずから戦いに勝利を収めたと言った。彼は、忠実な者に与えられる報賞に目を向け、勝ち誇って叫んだ。「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」。

パウロがコリントの兄弟たちに、もう一度彼らのあがない主の無比の愛を熟考するようにと訴えた言葉は、実に真剣で、感動的である。「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである。」あなたがたは、キリストがどのように高い所から降りて来られて、どのような屈辱のきわみまで、身を低められたかを知っている。キリストは、ひとたび、自己否定と犠牲の道を歩き始められるや、協道にそれることなく、ついにその生命をお与えになった。玉座と十字架との間において、主には片時も休むひまがなかった。

パウロは、彼の手紙を読む人々が、彼らのための救い主の驚くべき謙遜を十分理解することができるように、順を追って懇切に説明した。パウロは、キリストが神と等しくあられて、神と共に天使たちの



コリント運河 コリント地峡に架けられた鉄橋から西に向かって
望んだコリント運河の景観で、船は静かに波を切って進む。一八八
二―一八九三年に完成したもので、長さ六・四キロメートル、幅二
二メートル、水深八メートルである。

崇敬を受けておられた時から、ついに最も低い屈辱のきわみにまでこられた、その道筋をたどった。パウロは、もし彼らが天の王の驚くべき犠牲を理解することができたならば、彼らの生活からすべての利己心が排除されることを確信していた。パウロは、神の子が、墮落した人類を救い出して、希望と喜びと天国を得させるために、どのようにその栄光を放棄し、みずから進んで人間の性質をとり、おのれを低くしてしもべとなり、死に至るまで、「しかも十字架の死に至るまで従順であられた」かを示した。

(ピリピ二ノ八)。

われわれは、十字架の光に照らして神のご品性を学ぶときに、あわれみと慈愛とゆるしが公平と正義に入り混じっていることを見る。神の玉座の真ん中に、人間を神と和解させるために受けられた苦難のしるしを、その手と足とわきに持っておられるかたを見るのである。無限の父なる神が、近づくことのできない光の中に住んでおられ、それでもなおみ子の功績によって、われわれを受け入れて下さるのを見るのである。悲惨と絶望しかもたらないように見えた報復の雲は、十字架の光に照らしてみるときに、次のような神の筆のあとをあらわすのである。生きよ、罪人よ、生きよ。あなたがた、悔い改めて信じる人々よ、生きよ。わたしは、あがないの価を払った。

われわれは、キリストのことを瞑想するときに、広大無辺の愛の岸辺をさまようのである。われわれは、この愛について語ろうとするが、ふさわしい言葉がでてこない。キリストの地上の生涯、われわれのための犠牲、われわれの仲保者としての天における働き、そして、主を愛する者のために備えておら

れる住居のことを考えて、われわれは、ただ、キリストの愛は何と高く、何と深いことだろうと叫ぶことしかできない。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。」「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい」（ヨハネ第一・四ノ一〇、三ノ一）。

この愛は、すべての真の弟子の中で、聖なる火のように、心の祭壇の上で燃える。キリストによって神の愛があらわされたのは、この地上においてであつた。神の民が、きずのない生活によつて、この愛をあらわすのは、この地上においてである。こうして、罪人は、十字架へと導かれて、神の小羊を眺めるのである。

第二二章 豊かにまく者は豊かに刈り取る

パウロは、コリント教会にあてた第一の手紙の中で、地上における神の働きを支持するための一般的原則に関する教えを信者たちに与えた。彼は、彼らのための使徒としての自分の働きについて書き、次のように問うた。

「いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者があるうか。ぶどう畑を作っていて、その実を食べない者があるうか。また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があるうか。わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。すなわち、モーセの律法に、『穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない』と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだろうか。それとも、もっぱら、わたしたちのために言っておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、

その分け前をもらう望みをもってこなすのである。」

使徒パウロは、さらに次のように問うている。「もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをいただいたなら、肉のものをあなたがたから刈りとるのは、行き過ぎだろうか。もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。あなたがたは、宮仕えをしている人たちは宮から下がる物を食べ、祭壇に奉仕している人たちは祭壇の供え物の分け前にあずかることを、知らないのか。それと同様に、主は、福音を宣傳している者たちが福音によって生活すべきことを、定められたのである」（コリント第一・九ノ七一四）。

パウロは、ここで、神殿の務めをする祭司たちを支えるための主の計画に言及している。この聖職のために選ばれた人々は、彼らが霊的祝福を与えたその兄弟たちによって支えられたのである。「さて、レビの子のうちで祭司の務をしている者たちは、兄弟である民から、…十分の一を取るように、律法によって命じられている」（ヘブル七ノ五）。レビの部族は、神殿と祭司職に関する聖職のために、主に選ばれた。主は、祭司について、次のように言われた。「あなたの神、主が、…彼を選び出して：主の名によって立つて仕えさせられるからである」（申命記一八ノ五）。主は、すべての産物の十分の一を主のものとして要求された。そして主は、十分の一をささげないことを、盗みとみなされるので

あつた。

パウロが「主は、福音を宣べ伝えている者たちが福音によって生活すべきことを、定められたのである」と言ったのは、伝道を支持するためのこの計画を指していたのである。パウロは、後に、テモテに、「働き人がその報酬を受けるのは当然である」と書いた（テモテ第一・五ノ一八）。

十分の一を納めることは、神の務めを支えるための神のご計画の一部にすぎなかった。神は、多くのささげ物や供え物をお定めになった。ユダヤの制度下においては、人々は、神の働きを支えるとともに貧者の欠乏を満たすためにも、物惜しみしない精神を抱くように教えられた。特別な折には、自発的な供え物がささげられた。穀類やぶどうの収穫の時には、畑の初穂、すなわち、穀物、ぶどう、酒、油などを供え物として主にささげた。落ち穂や畑のすみずみは、貧者のために残しておかれた。羊の毛を切ったときの羊毛の初穂や、麦を脱穀した時の穀物の初穂も神にささげられた。同様に、すべての動物のういごもささげなければならなかった。そして、人間のういごのためには、あがないの価を払わなければならなかった。初穂は、聖所で主の前にささげられ、それから、祭司たちの用に供されるのであった。主は、このような慈悲深い制度によって、すべての事において、主を第一にすべきことを、イスラエルに教えようとなさった。こうして彼らは、神が彼らの畑、彼らの牛や羊の持ち主であり、神が日光や雨を送って、穀物を生長させ、実らせて下さったことを思い起こさせられたのである。彼らの持ち物は、すべて神のものであった。彼らは、ただ神の物の管理者にすぎなかった。

ユダヤ民族よりも、はるかに優れた特権にあずかっているクリスチャンたちが、彼らよりも少なくささげることが、神のみこころではない。「多く与えられた者からは多く求められ」と救い主は言われた（ルカ二ノ四八）。ヘブル人に要求された物惜しみしない心は、主として、彼ら自身の国の利益のためであった。今日、神の働きは、全世界にひろがっている。キリストは、弟子たちの手に福音の宝をゆだね、救いの喜びの知らせを全世界に伝える責任を彼らに負わせられた。確かに、われわれの義務は古代イスラエルの人々よりはるかに大きいのである。

神の働きが拡張するにつれて、援助を求める声は、ますます頻繁になる。クリスチャンは、そのような声に答えるために、「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい」という命令に留意しなければならない（マラキ書三ノ一〇）。もしクリスチャンと称する人々が、忠実に十分の一とささげ物を神にささげるならば、神の宝庫は満ちあふれることであろう。そうすれば、福音の事業を支える資金を得るために、バザー、富くじ、娯楽のパーティーなどを開く必要がなくなる。人々は、彼らの金銭を放縦な生活、食欲の満足、装身具、あるいは、家の装飾などのために用いたくなる。多くの教会員は、こうしたことのためには、惜しげもなく、ぜいたくにさえ費やすことを躊躇しない。しかし、地上における神の働きを推進するために、主の宝庫にささげることが求められるとき、彼らは異議を唱える。彼らは、多分、何も出さないわけにはいかないと感じて、彼らがむだな放縦のためにはしばしば費やすものよりは、はるかに少ない額を、しぶしぶと出すのである。彼らは、キリストの

奉仕に対する真の愛を表さず、魂の救いに対する熱烈な関心を示さない。このような人々のクリスチャン生活が、委縮して病的な状態であっても、何の驚くこともないのである。

キリストの愛に燃えている人は、人間にゆだねられた最も高尚で最も聖なる働き——恵みとあわれみと真理の富を世界に伝える働き——の進展を援助することは、義務であるばかりでなく、喜びであると思うのである。

当然神に属する財産を自己満足のために保留するのは、貪りの精神である。神は、預言者によって神の民を厳しく譴責された時と同様に、今日においても、この精神を憎まれる。主は言われた「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。十分の一と、ささげ物をもってである。あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである」(マラキ書三ノ八、九)。

物惜しみしない精神は、天の精神である。この精神は、十字架上のキリストの犠牲に最もよく現されている。父なる神は、われわれのために、神のひとり子をお与えになった。そして、キリストは、ご自分の持つておられたものをすべて与えた上で、人間の救いのためにご自身をお与えになった。カルバリの十字架は、救い主に従うすべての者の慈悲心に訴えるところがなければならぬ。そこで明示されている原則は、与えよ、与えよということである。「『彼における』と言う者は、彼が歩かれたように、そ

の人自身も歩くべきである」(ヨハネ第一・二ノ六)。

それに反して、自分を愛する精神は、サタンの精神である。世俗の人々の生活にあらわれている主義は、手に入れよ、手に入れよである。こうして、幸福と安楽を得ようと望むのであるが、maidamonoの実は、不幸と死である。

神がその民を祝福することをおやめにならない限り、彼らも神が要求されるものを神にお返しする義務がある。彼らは、ただ単に、神に属するものをお返しするだけでなくて、感謝のささげ物として、物惜しみせぬささげ物を神の宝庫にたずさえて来なければならぬ。彼らは喜びにあふれて、受けた賜物の初穂、すなわち、彼らの持ち物の中の最上の物、彼らの最善で最も清い奉仕を、創造主にささげなければならぬ。こうして彼らは、豊かな恵みを受けるのである。神ご自身が、彼らの心を水の絶えることのない潤った園のようにしてくださる。そして、最後の大きな収穫が集められるときに、彼らが主に持つてくることができた束は彼らにゆだねられたタラントを無私の心で活用したことの報賞となる。

神に選ばれ、活動的働きに従事している使者たちは、兄弟たちの同情と心からの援助を受けず、自費で戦いに従事するように強いられるはならない。伝道に献身するために世俗の職業を放棄する人々を、厚く待遇することは、教会員のなすべき務めである。神に仕える伝道者が励ましを受けるときに、神のみわざは大いに進展するのである。しかし、人々の利己心のために、伝道者の当然受けるべき支援が滞るならば、彼らの手は弱くなり、しばしば彼らの有用性は大いに損なわれるのである。

神に従っていると言いながら、献身的な働き人が、生活必需品の欠乏に苦しみながらも活発に伝道に従事しているのを放任する人々に対して、神は怒りを発せられる。これらの利己的な人々は、ただ単に主の金銭の誤用のためばかりでなく、主の忠実なしもべたちになめさせた意気消沈と心の痛みのためにも、申し開きをしなければならぬのである。伝道の働きに召され、それに答えて神の働きのためにすべてをささげる者は、その自己犠牲的努力に対して、彼らとその家族を支えるのに十分な給与を受けなければならぬ。

一般の労働においては、知的と肉体的とを問わず、各種の働きの部門で、忠実に働く者はよい給料を得ることができる。真理を伝え、魂をキリストに導く働きは、一般の事業よりさらに重要なものではなからうか。そして、忠実にこの仕事に従事する者は、十分な報酬を受ける権利があるのではなからうか。精神的幸福と物質的幸福のための働きの相対的価値をいかに評価するかによって、われわれは、地上のものよりも、天上のものにどれほどの関心を持っているかを示すのである。

牧師職を支えるためと、伝道事業の援助の要求に答えるために、金庫に資金があるようにするために、神の民は喜んで惜しみなくささげる必要がある。牧師たちは、常に神のみわざの必要を教会に知らせ、惜しまずささげるように彼らを教育する厳粛な責任が負わされている。もしこれを怠り、教会が、他の人々の必要のために与えることをしなくなると、主の働きに支障をきたすばかりでなく、信者たちと与えられるべき祝福も受け損じるのである。

どんなに貧しい者でも、神にささげ物を持って来なければならない。彼らも、自分たちよりもっと困っている人々を助けるために犠牲を払って、キリストの恵みにあずからなければならない。貧者のささげ物、すなわち自己否定の実は、神の前に香ばしい香りとして昇っていく。そして、自己犠牲の行為の一つ一つは、ささげた者の思いやりの心を強める。そしてそれは彼を、富んでおられたのにわれわれのために貧しくなられ、その貧しさによってわれわれが富む者となるようにして下さったおかたに、ますます密接に結びつけるのである。

自分の持っているすべてであるレプタ二つをさいせん箱に入れたやもめの行為は、貧しさと戦いながらも、ささげ物によって神の事業を援助したいと望んでいる人々の、励ましのために記録された。キリストは、「その生活費全部」をささげたこの婦人に、弟子たちの注意をお向けになった（マルコ二ノ四四）。彼は、自己否定を必要としなかった人々の多額のささげ物よりも、彼女のささげ物のほうを高く評価された。彼らは、ありあまる物の中から、わずかの物をささげた。このやもめは、ささげ物をするために、生活に必要な物をすら犠牲にし、神が明日の必要を満たして下さることを信じたのである。救い主は、彼女についてこう宣言された、「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ」（四三節）。こうして、彼は、ささげ物の価値は、その量ではなくて、ささげられた物の割合と、ささげた人を動かした動機によって評価されることをお教えになった。

使徒パウロは、諸教会の中で伝道したとき、新しい改心者たちの心に、神のみわざのために大きな事をしようという願いを起こさせようとして、たゆまず努力した。彼は、物惜しみせぬ心を働かせるようにと、たびたび勧告した。パウロは、エペソの長老たちに、自分が以前に彼らの間で働いた時の事を語って言った。「わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである」。彼はコリント人に次のように書いた。「少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである」（使徒行伝二〇ノ三五、コリント第二・九ノ六、七）。

マケドニアの信者たちは、ほとんどすべて、この世の財産は乏しかったが、彼らの心は、神と神の真理に対する愛に燃えていた。そして彼らは、福音を支えるために喜んでささげた。ユダヤの信者たちの救援のために、異邦人教会において広く献金が集められたときに、マケドニアの改心者たちの物惜しみしない精神が、他の教会の模範として掲げられた。パウロは、コリントの信者たちに手紙を送って、彼らの注意を喚起した。「マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせよう。すなわち、彼らは、患難のために激しい試練をうけたが、その満ちあふれる喜びは、極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て惜しみなく施す富となったのである。…彼らは力に依じて、否、力以上に施しを

した。すなわち、自ら進んで、聖徒たちへの奉仕に加わる恵みにあずかりたいと、わたしたちに熱心に願い出」た（コリント第二・八ノ一―四）。

マケドニアの信者たちの自発的な犠牲は、彼らが真心から献身していた結果であった。彼らは、神の霊に動かされて、「自分自身をまず……主にささげ」、そして、福音を支えるために彼らの財産を進んで惜しみなくささげた（コリント第二・八ノ五）。彼らには、ささげるように勧める必要はなかった。彼らは、他の人々の窮乏を補うために、自分たちに必要な物さえ犠牲にすることを、特権としておしる喜んだ。パウロは彼らを抑制しようとしたが、彼らは強いて彼らの献金を受け取らせた。彼らは、素朴で、誠実で、兄弟たちに対する愛をもち、喜んで自己を犠牲にし、慈悲の実を豊かに結んだのである。

パウロは、信者たちを励ますためにテトスをコリントへ送ったとき、施しという善いわざにおいても教会を強化するように彼に指示を与え、信者たちへの個人的な手紙の中でも、彼自身の訴えをつけ加えて、次のように言った。「さて、あなたがたがあらゆる事について富んでいるように、すなわち、信仰にも言葉にも知識にも、あらゆる熱情にも、また、あなたがたに対するわたしたちの愛にも富んでいるように、この恵みのわざにも富んでほしい」。「だから今、それをやりとげなさい。あなたがたが心から願っているように、持っているところに応じて、それをやりとげなさい。もし心から願ってそうするなら、持たないところによらず、持っているところによつて、神に受けいられるのである」。「神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良

いわずに富ませる力のあるかたなのである。……こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである」(コリント第二・八ノ七、一一、一二、九ノ八一―一二)。

初代教会は、おのれを忘れて惜しみなく施すことによって、大いなる喜びに満たされた。なぜなら信者たちは、自分たちの努力が、暗黒の中にいる人々に福音の言葉を伝えるのを助けていることを知っていたからである。彼らの物惜しみしない心は、彼らが神の恵みをむだに受けなかったことをあかししている。聖霊のきよめによる以外に、いったい何が、このような寛い心を生じさせることができようか。信者と未信者の目の前において、これは恵みの奇跡であつた。

霊的繁栄は、クリスチャンの物惜しみしない心と密接につながっている。キリストの弟子たちは、その生活の中にあがない主の恵み深さをあらわすという特権を喜ばなければならない。彼らは、主にささげるときに、彼らの宝が彼らに先だつて天の宮廷に行くという保証が与えられる。人々は、自分たちの財産を確保したいと思つているであらうか。それならば、財産を十字架の傷あとのある手にゆだねるとよい。彼らは、資産を享受したいと思つているであらうか。それならば、貧しい人々や苦しんでいる人のために用いるとよい。彼らは、財産をふやしたいと思つているであらうか。それならば、「あなたの財産と、すべての産物の初なりをもつて主をあがめよ。そうすれば、あなたの倉は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる」という神の命令に耳を傾けるとよい(箴言三ノ九、一〇)。もし彼ら

が、利己的な目的のために、財産を保留しておこうと思うならば、それは永遠の損失になる。しかし、もし宝を神にささげるならば、その瞬間から、それに神の刻印が押される。それは、神の不変性をもつて印される。

神は、「すべての水のほとりに種をま（く）…あなたがたは、さいわいである」と宣言なさる（イザヤ書三二ノ二〇）。どこにおいても神のみわざのため、またはわれわれの援助を要する人類の窮乏のために、神の賜物を絶えず分け与えたとしても、貧しくなることはない。「施し散らして、なお富を増す人があり、与えるべきものを惜しんで、かえって貧しくなる者がある」（箴言一一ノ二四）。種をまく者は、種をまき散らして、増加させる。忠実に神の賜物を分け与える者もこれと同じである。彼らは彼らの祝福を分け与えることによって、増加させるのである。「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう」と神は約束しておられるのである（ルカ六ノ三八）。

第二十三章 労働の祝福

パウロは、神の働きを正しく維持することについての聖書の明白な教えを、彼の改心者たちに注意深く示し、また、彼自身、福音の使者として、生活のために世俗の仕事の「労働をせずにいる権利」を主張しながらも、しばしば文明の大中心地における伝道において、生活を支えるために、手の仕事に従事した（コリント第一・九ノ六）。

ユダヤ人の間では、肉体的労働は、変わった事でも、卑しい事でもなかった。ヘブル人は、子供たちに勤労の習慣をつけさせるように、モーセを通して教えられていた。そして、青少年に肉体労働をさせずに育てることは、罪とみなされていた。たとえば、聖職のための教育を受ける子供であっても、實際生活の知識は不可欠であると思われる。親が富んでいようが貧しかろうが、すべての青少年は、何かの職業の訓練を受けた。こうした訓練を子供たちに与えることを怠った親は、主の教えに背いたものと

みなされた。パウロは、このような習慣に従って、若い時から天幕作りの職業を学んでいた。

パウロは、キリストの弟子になる前は、高い地位についていたので、生活のために手仕事をしなくてもよかった。しかし、後に、キリストの働きを推進するために財産を全部使い果たしたとき、彼は時々、生活費を得るために手仕事をしたのである。特に、動機が誤解されそうな所においては、そうだったのである。

パウロがみことばを宣べ伝えながら手仕事をして自給したことを、まず最初に読むのは、彼がテサロニケにいた時のことである。彼は、自分が「重んじられることができた」ことを彼らに思い起こさせ、次のようにつけ加えた。「兄弟たちよ。あなたがたはわたしたちの労苦と努力とを記憶していることであらう。すなわち、あなたがたのだれにも負担をかけまいと思つて、日夜はたらきながら、あなたがたに神の福音を宣べ伝えた」(テサロニケ第一・二ノ六、九)。またパウロは、テサロニケ人への第二の手紙の中で、自分と同労者たちが、彼らの所にいた時には、「人からパンをもらつて食べることもしなかった」と言った。「あなたがたのだれにも負担をかけまいと、日夜、労苦し努力して働き続けた。それは、わたしたちにその権利がないからではなく、ただわたしたちにあなたがたが見習うように、身をもって模範を示したのである」と彼は書いた(テサロニケ第二・三ノ八、九)。

パウロは、テサロニケで、労働することを拒む人々に出会った。彼が後で、次のように書いたのは、この人々に対してであつた。「あなたがたのうちの者は怠惰な生活を送り、働かないで、ただいた

ずらに動きまわっていることである。こうした人々に対しては、静かに働いて自分で得たパンを食べるように、主イエス・キリストによって命じまた勧める。」パウロは、テサロニケで働いていたときに、気を配ってこのような人々に正しい模範を示すようにした。「また、あなたがたの所にいた時に、『働こうとしない者は、食べることもしてはならない』と命じておいた」と彼は書いた（一一、一二、一〇節）。

サタンは、各時代において、教会に狂信的精神を引き起こして、神のしもべたちの働きを損おうとした。パウロの時代でもそうであった。後の宗教改革の時代でもそうであった。ウィクリフ、ルター、その他、その感化と信仰によって世界に祝福をもたらした多くの人々も、熱心が過ぎてバランスを失い、清められていない者たちを、狂信におとし入れようとする敵の策略に遭遇したのである。欺かれた人々は、真の清めに到達すれば、心はこの世の思いをすべて超越し、全く仕事をしなくなると教えた。他の人々は、聖書の言葉を極端に解釈して、働くことは罪であると教えた。すなわち、クリスチャンは、自分のことや家族のことなどの物質的幸福について考えるべきではなく、その全生涯を霊的な事のためにささげるべきであると言った。使徒パウロの教えと模範は、こうした極端な意見に対する譴責であった。パウロは、テサロニケにいたときに、全く彼の手仕事だけに依存していたのではなかった。彼はあとで、その町における彼の経験に言及して、彼がそこにいた間にピリピの信者たちから受けた贈り物を感じ謝して、彼らに次のように書いた。「また、テサロニケでも、一再ならず、物を送ってわたしの欠乏を

補ってくれた」(ピリピ四ノ一六)。彼は、この援助を受けたとは言っても、テサロニケの人々の前で勤勉のよい模範を示すことに注意した。それは、彼が貪ったなどといういわれのない非難を、だれからも受けることのないためであり、また、肉体労働について狂信的な意見を持った人々に、実際の譴責を与えるためであった。

パウロは、初めてコリントを訪問したとき、自分が、異国人の動機に疑惑を持つ人々の中にいることに気づいた。海岸沿いのギリシヤ人は、腕ききの商人であった。彼らは、長い間抜け目のない商売のやりかたに慣れていたので、利益を得ることは敬虔なことであると信じ、また、金をもうけることは、正しい方法であろうと詐欺的方法であろうと、称賛に値することと考えるに至っていた。パウロは、彼らの特性を熟知していたので、自分を富ますために福音を伝えていると言わせる機会を、彼らに与えたいなかった。彼は、コリントの聴衆の援助を当然のこととして受けることができたのであるが、進んでこの権利を放棄した。それは彼が、利益のために福音を伝えているという不当な疑惑を受けて、彼の伝道者としての有用性と成功を傷つけなくなかったからである。彼は、誤解を招くあらゆる口実を取り除いて、彼の言葉の力を失うまいと努めた。

パウロは、コリントに到着して間もなく、「アカラというポイント生れのユダヤ人と、その妻プリスキラとに出会った。……彼らは近ごろイタリヤから出てきたのである」。彼らは、彼の「同業であった」。アカラとプリスキラは、クラウデオ帝がすべてのユダヤ人をローマから退去させたときに追放され、コ

リントに来て、そこで天幕業を営んでいた。パウロは、彼らのことを人にたずねた。そして、彼らが、神を恐れ、彼らの周囲の邪悪な影響を避けようとしていることを知って、「その家に住み込んで、一緒に仕事をした。…パウロは安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシヤ人の説得に努めた」

（使徒行伝一八ノ二―四）。

後で、シラスとテモテが、コリントにいるパウロに加わった。この兄弟たちは、働きを支えるために、マケドニアの教会がささげた資金を持ってきた。

パウロは、コリントに強力な教会を設立した後で、コリント人への第二の手紙を書いて、彼が彼らの中で、どんな生活をしたかを振りかえって次のように問うた。「それとも、あなたがたを高めるために自分を低くして、神の福音を価なしにあなたがたに宣べ伝えたことが、罪になるのだろうか。わたしは他の諸教会をかすめたとわれながら得た金で、あなたがたに奉仕し、あなたがたの所にいて貧乏をした時にも、だれにも負担をかけたことはなかった。わたしの欠乏は、マケドニアからきた兄弟たちが、補ってくれた。こうして、わたしはすべての事につき、あなたがたに重荷を負わせまいと努めてきたし、今後も努めよう。わたしの内にあるキリストの真実にかけて言う、この誇がアカヤ地方で封じられるようなことは、決していない」（コリント第二・一一ノ七―一〇）。

パウロは、コリントにおけるこのような行動の理由を説明している。それは、「機会をねらっている者ども」にそしる口実を与えないためであった（コリント第二・一一ノ一二）。彼は、天幕を作りなが

ら、福音の宣教もまた忠実に行った。彼自身、その働きについて言っている。「わたしは、使徒たるの
実を、しるしと奇跡と力あるわざとにより、忍耐をつくして、あなたがたの間であらわしてきた」。彼
は続けて言っている。「いったい、あなたがたが他の教会よりも劣っている点は何か。ただ、このわた
しがあなたがたに負担をかけなかったことだけではないか。この不義は、どうか、ゆるしてもらいたい。
さて、わたしは今、三度目にあなたがたの所に行く用意をしている。しかし、負担はかけないつもりで
ある。わたしの求めているのは、あなたがたの持ち物ではなく、あなたがた自身なのだから。……そこ
でわたしは……大いに喜んで費用を使い、また、わたし自身をも使いつくそう」(コリント第二・一二
ノ一二―一五)。

パウロは、長期にわたったエペソ伝道において、その地域一帯に積極的な伝道活動を推し進めた三か
年間、ふたたび、彼の職業に従事した。コリントにいたときと同様に、エペソにおいても、アクラとプ
リスキラがパウロと共にいて、彼の心を引き立てた。二人は、パウロの第二伝道旅行が終わって、アジ
ヤに帰ったときに、彼に従って行ったのであった。

パウロが手を使って働くことは、福音の伝道者にふさわしくないと行って、反対する人々があつた。
パウロのような、最高の地位を占める伝道者が、言葉の宣教に、手の仕事を結合させなければならない
のだろうか。働き人は給料を受ける価値があるのではなからうか。なぜパウロは、明らかによりよい事
のために用いることができる時間を、天幕の製造に費やさねばならないのだろうか。

しかし、パウロは、このように費やした時間を損失であるとは考えなかった。彼は、アクラと働いていた時、大教師であられるおかたとの連絡を保ちつづけ、救い主のためにあかしを立て、援助が必要な人々を助ける、どんな機会をも見失わなかった。彼の心は、常に、霊的知識を追求していた。彼は、霊的事物に関する教えを同労者に与え、また、勤勉さと徹底的に仕事をするこの模範をも示した。彼は仕事の速い、熟練した働き人で、実業に励み、「霊に燃え、主に仕え」た（ローマ二ノ一）。パウロは、彼の職業に従事したときに、他の方法では接することができない階級の人々に近づくことができた。彼は、仲間たちに、普通の技芸の手腕は、神の賜物であることを示した。神は、賜物とそれを正しく用いる知恵とを共に与えになるのである。パウロは、日常の労働においてさえ、神に榮譽を帰すべきことを教えた。労働で固くなった彼の手は、キリストの伝道者としての彼の感動的な訴えの迫力を少しも損じなかった。

パウロは、時には、昼も夜も働いた。それは、彼自身を支えるためだけでなく、同労者たちを助けるためでもあった。彼は、収入をルカと分かち合った。そして彼は、テモテを援助した。パウロは、他の人々の窮乏を助けるために、飢えをしのいだことさえあった。彼の生涯は、無我の生涯であった。彼は、その伝道の終わりごろ、ミレトにおいて、エペソの長老たちに訣別の言葉を語ったとき、苦勞の跡を示す手をあげて、言った。「わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない。あなたがた自身が知っているとおり、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、

働いてきたのだ。わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである」（使徒行伝二〇ノ三三―三五）。

もし伝道者たちが、キリストのみわざにおいて、困難と窮乏に苦しんでいると感じるならば、心の中で、パウロが働いた働き場を想像してみるとよい。この神の選びを受けたパウロが天幕を作っていたとき、彼は、使徒としての働きによって当然受けるべきであつた報酬のために働いていたのであつた。

労働は、のろいではなくて、祝福である。怠惰な精神は、敬神の念を失わせ、神の霊を悲しませる。よどんだ池は、不快なものである。しかし、清く流れる小川は、全地に健康と喜びをまき散らす。パウロは、肉体的労働を怠る者は、やがて衰弱することを知っていた。彼は、若い伝道者たちが、彼らの手を動かし、筋骨を活動させることにより、伝道地において彼らを待ち受けている苦勞と窮乏に耐える力が与えられることを、彼らに教えようと望んだ。そして彼は、もし自分が自分の体のすべての部分を適当に運動させないならば、彼自身の教えが生氣と活力を失うことを自覺していた。

怠惰な者は、人生の普通の義務を忠実に実行することによって得られる貴重な経験を受け損じる。少数の者ではなくて、幾千という人々が、恵みのうちに神が授けられた祝福を、ただ消費するために生存している。彼らは、神が彼らにゆだねられた富に対して、感謝の供え物を主に持つてくることを忘れる。彼らは、主が彼らにゆだねられたタラントを賢明に活用して、ただ消費者であるだけでなく、生産者

でもあるべきことを忘れている。もし彼らが、主の助手として彼らがなすよう主が望んでおられる働きを理解したならば、彼らは責任を回避しないことであろう。

宣教のために神の召命を受けたと感じる青年の有用性は太いに、彼らが仕事に従事する態度いかにかかっている。伝道の働きのために神に選ばれた人々は、その高い召しの証拠を示し、ありとあらゆる方法を用いて、有能な働き人になろうとする。彼らは、計画と組織と実行に適した者になるための経験を得たいと努力する。彼らは、自分たちの召しの神聖さを自覚し、克己によって、ますます主のようになり、主の慈悲と愛と真理をあらわす。そして、彼らが、ゆだねられたタラントを発達させるために熱心になったときに、教会は、賢明な援助を彼らに与えなければならぬ。

自分たちは宣教のために召されたと感じる者をみな、その家族とともに、直ちに教会の継続的経済支持に依存するように奨励してはならない。経験の浅い者は、おだてられて増長し、分別を欠く奨励を受けて、自分たちでは何のまじめな努力もせず、全的に援助を受けることを期待する危険がある。神の働きを拡張するためにささげられた資金は、援助によって利己的野心を満足させ、安楽な生活を送り、ただ説教することだけを希望する人々のために消費すべきではない。

自分の才能を伝道の働きに活用しようと望む青年たちは、テサロニケ、コリント、エペソ、その他の地におけるパウロの模範から、有益な教訓を学ぶことができる。パウロは、雄弁な説教家であって、特別の働きをするために神に選ばれたのであったが、労働に従事することを恥じず、彼が愛したみわざの

ために犠牲を払うことをいとわなかった。彼は、コリント人へ書いた。「今の今まで、わたしたちは飢え、かわき、裸にされ、打たれ、宿なしであり、苦勞して自分の手で働いている。はずかしめられては祝福し、迫害されては耐え忍んだ（コリント第一・四ノ一一、一二）。

この世界の最大の教師のひとりであるパウロは、最も崇高な義務と同様に、最も低い義務も快く果たした。パウロは、主のために働いたとき、事情が求めるならば、喜んで自分の職業に従事した。しかし彼は、福音の敵の反対に対処するために、または、人々をイエスに導く特別の機会を活用するために、いつでも世俗の仕事を放棄する用意があった。彼の熱心と勤勉は、怠惰と安逸を貪る心に対する譴責である。

パウロは、当時教会の中で勢力を得つつあった意見、すなわち、福音は完全に肉体的労働の必要から解放された者によってのみ有効に宣布されるという意見に反する模範を示した。彼は、福音の真理を知らない人が多くいる場所で、献身した信徒が何をするかということ、を、実際的方法で説明した。彼の行動は、卑しい労働者たちに励ましを与え、毎日の仕事によって生活を支えると同時に、神の働きを前進させるために彼らのなし得ることをしようという願望を起こさせた。アクラとプリスキラは、その全時間を福音の宣教のためにささげるようには召されなかったが、これら身分の卑しい働き人たちは、パウロに真理をさらに完全に示すために、神に用いられたのである。主は、ご自分の目的を達成させるために、種々の器をお用いになる。そして、特別の才能をもった人々が、福音を教え、説教す

る働きにその全精力をささげるように選ばれる一方において、按手礼を受けていない他の多くの人々が、救霊の重要な務めを行うように召されているのである。

自給伝道者の前に広い働きの方が開かれている。多くの者は、時間の幾分かを何かの労働に携わりながら、伝道の尊い経験を得ることができる。そして、このような方法によって、助けを必要としている伝道地の重要な働きのための強力な働き人が養成されるのである。

宣教と教えのために、たゆまず労している自己犠牲的神のしもべは、心に重い荷を負っている。彼は、その働きを時間ではからない。彼の働きは、給料に影響されることなく、また、不利な状況下にあるからといって、義務を怠らない。彼は、天から任命を受けた。そして、ゆだねられた働きが終わったときに、彼は、その報賞を天から受けることを望むのである。

このような働き人が、不必要な心配から解放されて、「これらの事を実行し、それを励みなさい」とパウロがテモテに言った命令に服従する十分な機会が彼らに与えられることが、神のみこころである。（テモテ第一・四ノ一五）。彼らは、心と体の活力を保つために十分運動するよう注意しなければならないことは、神の計画ではない。

これらの忠実な働き人は、喜んで福音のために費用を使い、また、彼ら自身をも使い尽くそうとするが、誘惑がないわけではない。教会が彼らに適当な経済的支持を与えないために、彼らが悩み苦しみに

おちいるとき「ある者たちは誘惑者に激しく悩まされる。彼らは、自分たちの働きが軽視されているのを見ると、意気消沈する。確かに彼らは、審判の時に正しい報賞が与えられることを待望して、これによって望みはつながれる。しかし、そうしている間、彼らの家族は、食物や衣服がなければならぬ。もし彼らが、神の任命から解放されたと感じることであれば、彼らは、喜んで手を使って働くことであろう。しかし、彼らに十分な資金を支給すべき人々に、先見の明がないにもかかわらず、彼らは、自分たちの時間が神に属することを自覚している。そこで、彼らは、何か事業をすれば速やかに窮乏を脱することができるという誘惑に打ち勝って、努力を続け、自分たちの生命よりも尊んでいるみわざを推進するのである。しかし、彼らがこうするためには、パウロの模範にならって、彼らの伝道の働きを推進しながら、一時、手の仕事に従事しなければならないことであろう。これは、彼ら自身の利益のためではなくて、地上の神のみわざを発展させるためである。

神のしもべは、時折、なすべき働きをすることが不可能だと思う。それは、強力で堅固な働きを続ける資金がないからである。ある者は、彼らの所有する物資では、しなければならぬと感じることをすべて行うことは不可能ではないかと思う。しかし、もし彼らが信仰をもって前進すれば、神の救いがある。彼らの努力は必ず成功するのである。世界のあらゆる場所に行けと弟子たちにお命じになった神は、神の命令に従って神の使命を伝えようとするすべての働き人を、支えてくださるのである。

主は、みわざを推進するにあたって、常に万事を神のしもべたちに明らかにされるとは限らない。神

は、時には、神の民を、信仰をもって前進しなければならないような状態におとし入れて、彼らの信仰を試みられる。神は、時折、彼らを厳しい困難な場所に至らせ、彼らの足が、ヨルダン川の水に触れると思われるときに、前進することをお命じになる。このような時に、神のしもべたちは、熱烈な信仰の祈りを神にささげ、神が、彼らの前に道を開いて、彼らを広い場所に導いて下さることを祈るのである。

神の使命者たちが、主のぶどう園の困窮している場所に対する責任を認めて、主イエスの精神をもって、魂の悔い改めのためにたゆまず働くならば、神の天使は、彼らの前に道を開き、神の働きを前進させるために必要な資金は備えられる。光を受けた人々は、自分たちのためになされた働きを支えるために、心からささげるのである。彼らは、援助を求めるすべての呼び声に惜しみなく応答する。そして、神の霊は、ただ国内だけでなく、遠方の地における主のみわざを支えるように、彼らの心を動かされる。こうして、他の所で働いている働き人たちに力が与えられ、主の働きは、神ご自身がお定めになった方法で前進するのである。

第三十四章 使命を持つ者の働き

キリストは、彼の生涯と教えの中で、神に起源を発する無我の奉仕の、完全な模範を示された。神は、ご自分のために生きておられない。神は、世界を創造し、万物を維持して、常に他のために奉仕しておられる。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである」（マタイ五ノ四五）。天の父は、この奉仕の理想をみ子におゆだねになった。イエスは人類の頭として立ち、奉仕とは何であるかを、彼の模範によつて教えることを命じられた。彼の全生涯は、奉仕の律法のもとにあつた。彼は、すべてに仕え、すべてに奉仕した。

イエスは幾度となく、この原則を弟子たちの間に確立しようとなさつた。ヤコブとヨハネが、最高の地位を要求したときに、彼は言われた。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない。それは、人の子がきたのも、

仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」(マタイ二〇ノ二六―二八)。

キリストは、昇天後、選ばれた使者たちによってご自分の働きを推進し、彼らを通して、人々に語り、彼らの必要に奉仕される。教会の大いなる頭であられるキリストは、神の代表者として神の命を受けた人間の器を通して、神の働きを監督しておられる。

宣教と教えによって、神の教会を築き上げるために、神に召された者の地位は、実に責任重大である。彼らは、キリストに代わって、人々に訴え、神の和解を受けさせなければならない。そして、彼らは、上からの知恵と能力を受けることによってのみ、彼らの任務を果たすことができるのである。

キリストの伝道者は、彼らにゆだねられた人々の霊的保護者である。彼らの働きは、見張りの者の仕事にたとえられている。昔、町の城壁の上によく番兵が立ち、その有利な位置から、防衛すべき重要な地点を見おろして、敵の攻撃に対して警告を発することができた。城内のすべての者の安全は、彼らの忠実さに依存していた。彼らは、ある一定の時間ごとに互いに呼びかわして、皆が目を覚ましているだけに、危害が加えられなかったことを確認した。励ましや警告の叫びは、次々と伝えられ、各自がその叫びを繰り返して、城内全体に響き渡るのであった。

主は、すべての伝道者に言われる。「それゆえ、人の子よ、わたしはあなたを立てて、イスラエルの家を見守る者とする。あなたはわたしの口から言葉を聞き、わたしに代って彼らを戒めよ。わたしが悪

人に向かつて、悪人よ、あなたは必ず死ぬと言う時、あなたが悪人を戒めて、その道から離れさせるように語らなかつたら、悪人は自分の罪によって死ぬ。しかしわたしはその血を、あなたの手に求める。しかしあなたが悪人に、その道を離れるように戒め「るなら」…あなたの命は救われる」（エゼキエル書三三ノ七―九）。

預言者の言葉は、神の教会の保護者、神の奥義の管理者として任命された者の厳粛な責任を宣言している。彼らは、シオンの城壁の上に見張りびととして立ち、敵の接近に対して警報を発しなければならぬ。人々は、誘惑に負けそうになっている。そして、もし神の伝道者たちが、彼らの任務を忠実に果たさないならば、人々は滅びてしまうのである。もし何かの理由で、彼らの霊的感覚が麻痺して、危険を認めることができず、警告を発しないために、人々が滅びるならば、神は、失われた人々の血の責任を、彼らの手にお求めになる。

シオンの城壁の上で見守る者は、神と親しく交わり、聖霊の印象に敏感になる特権が与えられている。神は、彼らを用いて、人々に危険を告げ、安全な場所に導かれる。彼らは忠実に、罪の確かな結果について人々に警告を与え、忠実に教会の利益を保護しなければならない。彼らは、どんな時にも、警戒をゆるめてはならない。彼らの働きは、人間のすべての能力を活用しなければならない働きである。彼らは、ラッパの音のように彼らの声をあげ、不安定な震える音は、絶対に出してはならない。彼らは、賃銀のために働くのではなく、そうしなければならぬからであり、福音を宣べ伝えなければわざわいで

あると感じるからである。彼らは、神に選ばれ、献身の血の証印を受けたのであるから、人々を切迫する滅亡から救い出さなければならない。

キリストと共に働く伝道者は、自分の働きの神聖さと、働きを成功させるために必要な労苦と犠牲を深く感じる。彼は、自分自身の安逸や便宜を求めようとしない。彼は、無我の人である。失われた羊を捜し求める時に、彼は、自分の疲労、寒さ、飢えを感じない。彼は、失われた者を救うというただ一つの目的しか考えていないのである。

インマヌエルの血染めの旗の下で仕える者は、英雄的努力とたゆまぬ忍耐力を要求することをしなければならぬ。しかし、十字架の兵卒は、恐れることなく、戦いの最前線に立つのである。敵が攻め寄せてくると、彼は、とりでに助けを求める。そして、彼は、みことばの約束を主の前において訴えるときに、その時の務めをなす力が与えられる。彼は、上からの力の必要を感じる。彼が得る勝利は、彼を自己高揚に導くのでなくて、力強いおかたにますます依り頼むようにさせるのである。彼は、大いなるかた、主に依り頼むことによって、力強く救いの使命を宣べ伝え、他の人々の心をゆり動かすことができるのである。

みことばを教える者は、彼自身が、祈りと神のみことばの研究によって、意識的に絶えず神と交わっていないなければならない。なぜならば、ここに力の源があるからである。神との交わりは、伝道者の努力に、彼の説教の影響よりもさらに大きな力を与える。彼は、この力を失ってはならない。彼は、とうて

い拒まれることがないような熱意をもって、神に嘆願し、義務と試練に耐える力と堅固さが授けられ、くちびるに燃える火が触れることを求めなければならない。キリストの使者たちの、永遠の現実に対する理解は、時には、あまりにも浅薄である。もし人々が、神と共に歩くならば、神は彼らを岩なるイエスの裂け目に隠してください。こうして、彼らは隠されて、モーセが神を見たように、神を見ることができる。彼らは、神がお与えになる能力と光によって、さらに深く理解し、有限な判断力によって可能と思われたことよりも、さらに多くのことをなし遂げるのである。

サタンの策略は、意気消沈した者に対して最も効果をあらわす。失望が伝道者を圧倒しそうになるとき、彼は、その必要を神の前に差し出さねばならない。パウロが、最も完全に神に信頼したのは、パウロの頭の上の天が青銅のようになったときである（申命記二八ノ二三参照―訳者注）。彼は、大多数の人々よりはるかに苦難の意味を知っていた。しかし、誘惑と争闘に囲まれながらも天に向かって進んだ時の、彼の勝利の叫びに耳を傾けよう。「なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」（コリント第二・四ノ一七、一八）。パウロの目は、常に、見えない永遠のものに向けられていた。彼は、自分が超自然的勢力と戦っていることを自覚して、神に頼った。彼の力は、ここにあったのである。目に見えない主を見ることによって、魂に能力と活力が与えられ、心と品性に働きかける地上の勢力がくだかれるのである。

牧師は、彼が責任をもって働いている人々と自由に交わり、彼らをよく知ることによって、彼の教えをどのように彼らの必要に適合させるかを知らねばならない。伝道者が説教をしたときに、彼の働きは、始まったばかりである。彼は、個人的働きをしなければならない。彼は、人々の家庭を訪問し、熱誠と謙遜な態度で、彼らと語り祈らなければならない。もし神の恵みの管理者たちが、家庭に入って彼らに天への道を示すのでなければ、神のことばの真理に決して触れることがない家族がある。しかし、この働きに従事する者の心は、キリストの心と一つになって脈打たなければならない。

「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい」という命令には、多くのことが含まれている（ルカ一四ノ二三）。伝道者は、家庭において真理を教え、彼らが働いている人々と親しくなり、こうして、彼らが神と協力するときに、神は彼らに霊的能力をお授けになるのである。キリストは、彼らの働きにおいて、彼らを導き、聴衆の心に深い感銘を与える言葉を語らせて下さる。パウロと共に次のように言い得ることが、すべての伝道者の特権である。「神のみ旨を皆あますところなく、あなたがたに伝えておいたからである」。「また、あなたがたの益になることは、公衆の前でも、また家々でも、すべてあますところなく話して聞かせ、また教え、…神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、強く勧めてきたのである」（使徒行伝二〇ノ二七、二〇、二一）。

救い主は、家々を訪ねて病人をいやし、悲しんでいる者を慰め、苦しんでいる者を助け、悲嘆に暮れ

ている者に平安をお語りになった。彼は小さい子供たちを抱いて彼らを祝福し、疲れた母親たちに希望と慰めの言葉をお語りになった。彼は、つきることのない優しさと親切をもって、あらゆる人間の悲痛と苦難に立ち向かわれた。彼は、ご自分のためではなくて、他の人々のために働かれた。彼は、すべての人のしもべであつた。接するすべての人に希望と力を与えることが、彼の食物であり飲み物であつた。そして、人々が、ラビ（教師）たちの教える言い伝えや教理とは非常にかけ離れた、彼の語られる真理に耳を傾けたときに、彼らの心に希望がわいてきた。彼の教えには、熱誠がこもっていて、彼の言葉は、罪を悟らせる力をもって、深く人の心に入っていた。

神の伝道者たちは、彼らが働きかけている人々の霊的必要性を満たすものを、神のみことばの倉から取り出せるように、キリストの働きの方法を学ばなければならない。こうしてこそ、初めて彼らは、自分たちにゆだねられた信任を全うすることができる。キリストが、常に受けておられた教えを語られたときに、キリストの中に宿った同じ聖霊が、彼らの知識の源であり、救い主の働きを世界中で推進する能力の秘訣でなければならない。

伝道の働きをした者たちの中には、成功を収めることができなかった者たちがいた。それは、彼らが主の働きに専念しなかったからである。伝道者は、人々を救い主に導くという大きな働きから心を奪うような関心事を持つてはならない。キリストが召された漁夫たちは、直ちに、網を捨てて、主に従つた。伝道者は、個人的な大きな事業の重荷を負いながら、十分な神の働きをすることはできない。このよう

に心が二つに分かれていれば、彼らの靈的理解力は曇ってくる。彼らの思いと心は、地の事に捕らわれ、キリストの働きは、第二義的のものとなる。彼らは、神の要求に従って、彼らの事情を改めるのではなくて、自分たちの事情に合わせて、神の働きをしようとしているのである。

伝道者の精力は、彼の高い召しのために全部必要である。彼の最高の能力は神のものである。彼は、投機事業、または、彼の大きな働きから彼を引き離すような事業に携わってはならない。パウロは言った。「兵役に服している者は、日常生活の事に煩わされてはいない。ただ、兵を募った司令官を喜ばせようと努める」(テモテ第二・二ノ四)。このようにして、パウロは、伝道者が主の働きのために何一つ保留することなく、献身する必要があることを強調した。神に全く献身した伝道者は、彼の聖なる召しに完全に献身することを妨げる事業には従事しないようにする。彼は、地上の栄誉や富を得ようとしているのではない。彼の唯一の目的は、人類に永遠の生命の富を与えるために、ご自身を犠牲にされた救い主のことを人々に告げることである。彼の最高の願望は、この世で宝を貯えることではなくて、無関心な者や不忠実な者の心を永遠の現実に向けさせることである。彼は、大きな世俗的利益を約束する事業に携わるように要請されるかもしれないが、このような誘惑に対して、「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか」と彼は答えるのである(マルコ八ノ三六)。

サタンは、キリストをこの点で誘惑した。そして、もしキリストが、それをお受けになれば、世界はあがなわれることができないことを彼は知っていた。そしてサタンは、今日、いろいろ形を変えて、神

の伝道者たちに同じ誘惑をもちかけ、それに欺かれる者は、彼らにゆだねられた信頼を裏切る。

伝道者が富を追求することは、神のみこころではない。この点について、パウロはテモテに次のように書いた。「金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした。しかし、神の人よ。あなたはこれらの事を避けなさい。そして、義と信心と信仰と愛と忍耐と柔和とを追い求めなさい。」キリストの使者は、教えるだけでなく、模範を示さなければならない。「この世で富んでいる者たちに、命じなさい。高慢にならず、たよりにならない富に望みをおかず、むしろ、わたしたちにすべての物を豊かに備えて樂しませて下さる神に、のぞみをおくように、また、良い行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び、こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げるように、命じなさい」（テモテ第一・六ノ一〇、一一、一七―一九）。

伝道者の働きの神聖さについての使徒パウロの経験と教訓は、福音のみわざに従事している者にとって、助けと靈感の源である。パウロの心は、罪人に対する愛に燃えていた。そして彼は、救霊の働きに、全精力を注いだ。彼のように自分を犠牲にして、忍耐強く働いた者はなかった。彼は、自分の受けた神の恵みを、他を祝福するために用いる機会として、尊重した。彼は、救い主について語ったり、また、困っている人を助けたりする機会を見失わなかった。彼は、各地に行って、キリストの福音を宣べ伝え、教会を設立した。彼は、耳を傾ける人がいるところはどこであっても、邪悪を打破し、人々の足を義の

道に向けようと努めた。

パウロは、彼が建設した教会を忘れなかった。彼とバルナバは、伝道旅行を終えたあとで、彼らが設立した諸教会をふたたび訪れて、彼らと共に福音を宣べ伝えるために訓練することが出来る人々を選び出した。

パウロの働きのこの面は、今日の伝道者にとって、重大な教訓を含んでいる。パウロは、伝道の務めのために青年を訓練することを、彼の働きの一部にしていた。パウロは、彼らを、彼の伝道旅行に同伴し、このようにして、彼らは後に責任ある地位を占めることができるようになる経験を得たのである。パウロは、彼らと別れた後もなお、彼らの働きと接触を保った。そして、テモテやテトスに送ったパウロの手紙は、彼が、どれほど切に彼らの成功を願っていたかという証拠である。

今日、経験の豊富な働き人たちは、自分で全部の重荷を負おうとしないで、若い働き人たちを訓練し、重荷を彼らの肩に置くと共に、立派な働きをしているのである。

パウロは、キリストの伝道者として負わせられている責任、また、彼の不忠実のゆえに魂が失われるならば、神が彼に責任を問われるということを、忘れたことがなかった。彼は、福音について次のように言った。「わたしは、神の言を告げひろめる務を、あなたがたのために神から与えられているが、そのために教会に奉仕する者になっているのである。その言の奥義は、代々にわたってこの世から隠されていたが、今や神の聖徒たちに明らかにされたのである。神は彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、

いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである。わたしたちはこのキリストを宣べ伝え、知恵をつくしてすべての人を訓戒し、また、すべての人を教えている。それは、彼らがキリストにあつて全き者として立つようになるためである。わたしはこのために、わたしのうちに力強く働いておられるかたの力により、苦闘しながら努力しているのである」(コロサイーノ二五―二九)。

これらの言葉は、キリストのための働き人たちに、崇高な目標を示している。しかし、大教師の支配の下に自己をおき、キリストの学校で毎日に学ぶ者は、みなこの目標に到達することができる。神が持つておられる能力は、無限である。そして、大きな必要を感じた伝道者が、主と密室において親しく交わるならば、彼の聴衆に対していのちからいのちに至らせるかおりとなるものが与えられるという確証を持つことができる。

パウロの手紙は、福音の伝道者は、自分の教える真理の模範でなければならないことを示している。「この務がそしりを招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与えないようにしている。彼は、コリントの信者への手紙の中で、自分の働きのことを、次のように描写している。「かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、おち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、真理の言葉と神の力とにより、

左右に持っている義の武器により、ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ」ている（コリント第二・六ノ三、四―一〇）。

彼は、テトスにこう書いた。「若い男にも、同じく、万事につけ慎み深くあるように、勧めなさい。あなた自身を良いわざの模範として示し、人を教える場合には、清廉と謹厳とをもってし、非難のない健全な言葉を用いなさい。そうすれば、反対者も、わたしたちについてなんの悪口も言えなくなり、自ら恥じるであろう」（テトス二ノ六―八）。

神の目に、神の伝道者ほど尊いものはない。彼らは、地上の荒廃した所へ出て行って、真理の種をまき、収穫を待ち望むのである。神のしもべたちが、どんな心づかいをもって、迷った魂を求めるかは、キリストのほかにはわからない。キリストは、ご自身のみ霊を彼らにお与えになる。そして、彼らの努力によって、魂は、罪から義へと導かれるのである。

神は、農園や事業、また必要ならば家族を喜んで後に残し、神のための伝道者になる人々を召しておられる。そして、召しに答える人が必ずある。過去において、キリストの愛と失われた者の必要に心をゆり動かされて、家庭の慰めや友人の交わりを捨て、または、妻や子供たちの楽しみさえ捨てて、外国

へ行き、偶像教徒や未開の人々のなかで、あわれみの使命を宣べ伝えた人々があつた。そういう努力の中で、多くの者は生命を失つた。しかし、他の人々が、その働きを継続するために起こされた。こうして、キリストのみわざは、一步一步と前進し、悲しみのうちにまかれた種は豊かな実を結んだのである。神の知識は広く宣布され、十字架の旗は、異教の国々に立てられたのである。

伝道者は、ひとりの罪人の悔い改めのために、持てるすべてをつくさなければならぬ。神に創造され、キリストにあがなわれた魂は、その前にある可能性、それに授けられた靈的利益、神のことばが与える活力によって持ち得る能力、そして、福音が与える希望によって得られる永遠の命などのゆえに、実に大きな価値がある。そして、もしキリストが、一匹の失われた羊を捜すために、九十九匹を残して来られたとするならば、われわれの努力はそれ以下であつてよからうか。キリストが働かれたように働き、キリストが犠牲を払われたように犠牲を払うことを怠ることは、聖なる信賴の裏切りであり、神に対する侮辱ではなからうか。

眞の伝道者の心は、救靈の熱望に満ちあふれている。時間と精力を使いつくし、どんな労苦もいとわない。なぜならば、彼自身の心にこのような喜びと平和と歡喜とをもたらした眞理を、他の人々に聞かせなければならぬからである。キリストの靈が彼の上に宿る。彼は、言い開きをしなければならない者として、魂を見張っている。彼は、カルバリーの十字架に目を注ぎ、高く挙げられた救い主を眺め、救い主の恵みにより頼む。そして、彼は、主が彼の盾、彼の力、彼の能力となつて、最後まで共にあら

れることを信じつつ、神のために働くのである。彼は、神の愛の保証を織りまぜた招待と嘆願によって、人々をイエスに導こうとする。そして、彼は、天において、「召された、選ばれた、忠実な者」の中に数えられるのである（黙示録一七ノ一四）。

第二十五章 ユダヤ人への福音

本章はローマ人への手紙に基づく

パウロは、やむを得ぬ遅延を重ねたあとで、ついにコリントに到着した。ここは彼が、過去において、苦勞して働いたところであり、また一時は、彼の深い憂慮の対象であった。彼は、初期の信者たちの多くが、なお彼を、まず最初に福音の光を彼らに伝えた者として愛していることを知った。彼は、これらの弟子たちに会って、彼らの忠誠と熱心の証拠を見たとき、コリントにおける彼の働きがむだでなかったことを喜んだ。

かつては、キリストにおける崇高な召しを見失いがちであったコリントの信者たちは、強力なクリスチャン品性を發達させていた。彼らの言葉と行為は、神の恵みの改変力をあらわし、今やあの異教と迷信の中心地において、強固な善のための力となっていた。パウロは、愛する友人たちやこれらの忠実な改心者たちと交わって、彼の苦勞と心勞に疲れた心に休みが与えられた。

パウロは、コリントに滞在していたときに、さらに広大な、新しい伝道地を展望する機会を得た。彼は、特に、ローマへの旅行を切望していた。当時の世界の大中心地において、クリスチャンの信仰が確立されることは、彼の最も切に願った計画の一つであつた。ローマには、すでに教会が建設されていた。そしてパウロは、イタリアやその他の国々における働きを達成するために、ローマの信者たちの協力を得たいと願つたのである。彼は、これらの兄弟たちの多くをまだ知らなかったもので、彼らの間で行う働きの準備として、彼らに手紙を書き、彼のローマ訪問の目的とスペインに十字架の旗を立てたいという希望とを述べたのである。

パウロは、ローマ人への手紙の中で、福音の大原則を説明した。彼は、当時ユダヤ人や異邦人の教会において議論になつていた問題についての、彼の立場を表明した。そして、かつてはユダヤ人だけに与えられていた希望と約束が、今や異邦人にも与えられていることを示した。

パウロは、非常に明快に、力をこめて、キリストを信じる信仰による義の教理を説明した。彼は、ローマのクリスチャンたちに送った教えによつて、他の諸教会もまた、助けが与えられるようにと願つた。しかし彼は、自分の言葉がどんなに遠大な影響を及ぼすに至るかについては、なんとばく然とした予測しかできなかったことであろう。各時代を通じて、信仰による義という大真理は、大きな灯台のように立って、悔い改める罪びとを生命の道へ導いた。ルターの心を閉ざした暗黒を追い払い、罪を清めるキリストの力を彼に示したのは、この光であつた。同じ光が、幾千という罪の重荷に悩む魂を、ゆるしと

平和の真の源であられるイエスに導いた。すべてのクリスチャンは、ローマの教会への手紙に対して、神に感謝しなければならない。

パウロは、この手紙の中で、彼がユダヤ人のために負っている重荷について率直に述べている。彼は、回心以来、ユダヤの兄弟たちが福音の使命をはっきりと理解するよう助けたいと願った。「わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである」と彼は言った。

使徒パウロの願望は、ただ普通の願いではなかった。彼は、ナザレのイエスを約束のメシヤとして認めなかったイスラエルの人々のために働かれるよう、たゆまず神に嘆願していた。彼は、ローマの信者たちにはっきり言った。「わたしはキリストにあって真実を語る。・・・わたしの良心も聖霊によつて、わたしにこうあかしをしている。すなわち、わたしに大きな悲しみがあり、わたしの心に絶えざる痛みがある。実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわない。彼らはイスラエル人であつて、子たる身分を授けられることも、栄光も、もろもろの契約も、律法を授けられることも、礼拝も、数々の約束も彼らのもの、また父祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストもまた彼らから出られたのである。万物の上にいます神は、永遠にほむべきかな」。

ユダヤ人は、神の選民であつた。神は、彼らによつて、全人類に祝福を与えようとなさつた。神は彼らの中に、多くの預言者を起こされた。これらの預言者たちは、あがない主の来臨を預言したのであつ

だが、主は、最初に彼を約束のあがない主として受けいれるはずの人々によって拒否され、殺されるのであった。

預言者イザヤは、来るべき幾世紀を展望して、預言者たちが次々に拒否され、ついに神のみ子が拒否されるのをまのあたりに見、以前にはイスラエルの民の中には数えられていなかった人々が、あがない主を受けいれるに至ることを、靈感によって記した。パウロはこの預言について言っている。「イザヤも大胆に言っている、『わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、わたしを尋ねない者に、自分を現した』。そして、イスラエルについては、『わたしは服従せずに反抗する民に、終日わたしの手をさし伸べていた』と言っている」。

イスラエルは、神のみ子を拒絶したけれども、神は、彼らを拒絶なさらなかった。さらに続いて、パウロの議論に耳を傾けよう。「そこで、わたしは問う、『神はその民を捨てたのであろうか』。断じてそうではない。わたしもイスラエル人であり、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の者である。神は、あらかじめ知っておられたその民を、捨てることはされなかった。聖書がエリヤについてなんと言っているか、あなたがたは知らないのか。すなわち、彼はイスラエルを神に訴えてこう言った。『主よ、彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこぼち、そして、わたしひとりが取り残されたのに、彼らはわたしのいのちをも求めています。』しかし、彼に対する御告げはなんであったか、『パアルにひざをかがめなかった七千人を、わたしのために残しておいた』。それと同じように、今の時にも、恵み

の選びによって残された者がいる」。

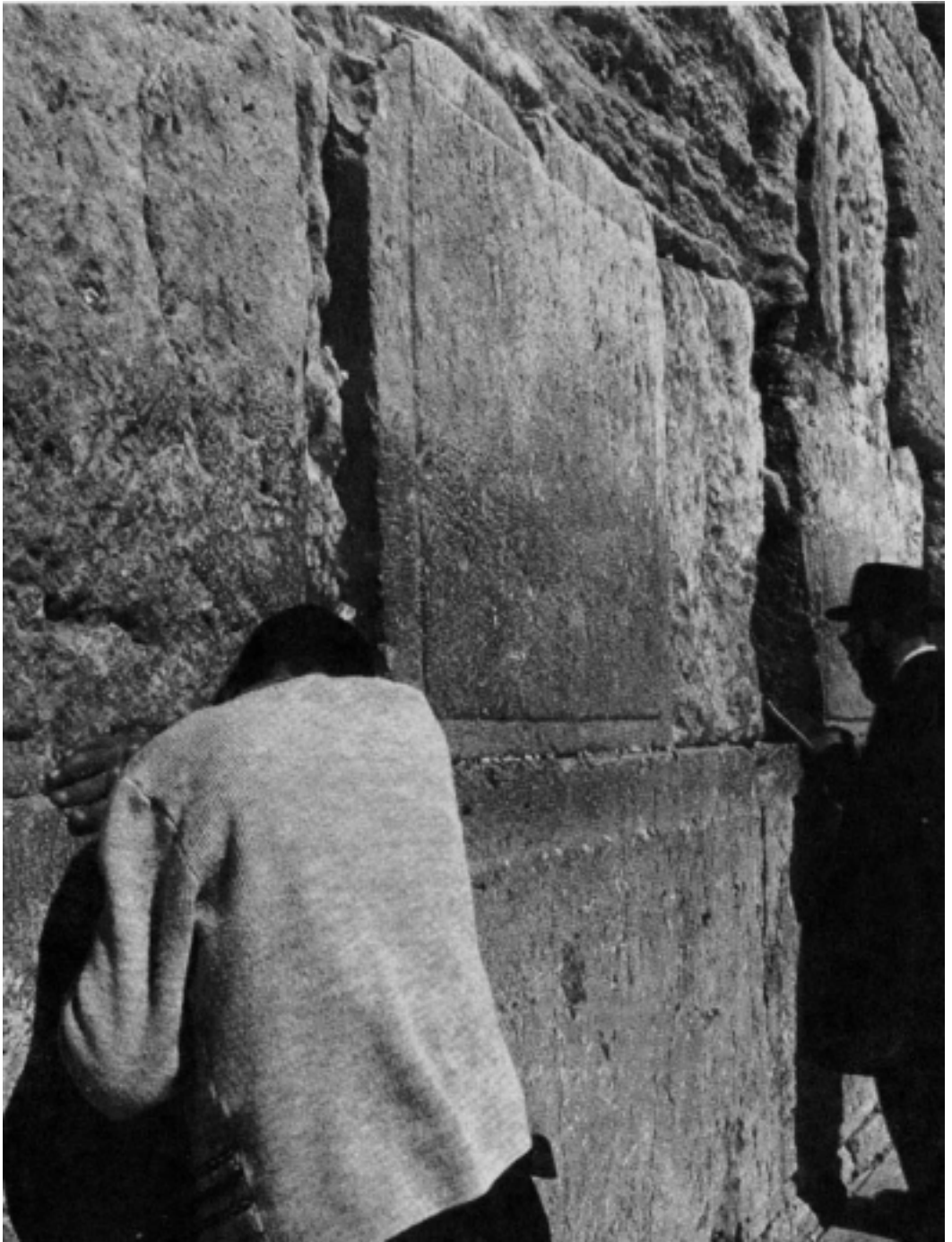
イスラエルは、つまり倒れたが、再起不能になっただけではなかった。「彼らがつまりいたのは、倒れるためであつたのか」という問いに対して、パウロは答える。「断じてそうではない。かえって、彼らの罪過によって、救が異邦人に及び、それによってイスラエルを奮起させるためである。しかし、もし、彼らの罪過が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となつたとすれば、まして彼らが全部救われたなら、どんなにかすばらしいことであろう。そこでわたしは、あなたがた異邦人に言う。わたし自身は異邦人の使徒なのであるから、わたしの務を光栄とし、どうかしてわたしの骨肉を奮起させ、彼らの幾人かを救おうと願っている。もし彼らの捨てられたことが世の和解となつたとすれば、彼らの受け入れられることは、死人の中から生き返ることではないか」。

イスラエルの民の間と同様に異邦人の間にも、神の恵みがあらわされることが、神のみこころであつた。この事は、旧約聖書の預言の中に明らかに説明されていた。パウロは、彼の議論の中で、これらの預言を用いている。彼は、次のようにたずねる。「陶器を造る者は、同じ土くれから、一つを尊い器に、他を卑しい器に造り上げる権能がないのであろうか。もし、神が怒りをあらわし、かつ、ご自身の力を知らせようと思われつつも、滅びることになっている怒りの器を、大いなる寛容をもって忍ばれたとすれば、かつ、栄光にあずからせるために、あらかじめ用意されたあわれみの器にご自身の栄光の富を知らせようとされたとすれば、どうであらうか。神は、このあわれみの器として、またわたしたちをも、

ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召されたのである。それは、ホセアの書でも言われているとおりである。『わたしは、わたしの民でない者を、わたしの民と呼び、愛されなかった者を、愛される者と呼ぶであろう。あなたがたはわたしの民ではないと、彼らに言ったその場所で、彼らは生ける神の子らであると、呼ばれるであろう』(ホセア書一ノ一〇参照)。

イスラエルは、国家として失敗はしたけれども、その中には、救われるべき多くの残りの民が残っていた。救い主が来臨されたとき、バプテスマのヨハネの使命を喜んで受け入れた忠実な男女があった。そして彼らは、こうしてメシヤに関する預言を新たに研究するように導かれたのである。初代教会が設立されたとき、教会を構成したのは、ナザレのイエスを、長く待望していたかたとして受け入れた、これらの忠実なユダヤ人であった。パウロが、「もし、麦粉の初穂がきよければ、そのかたまりもきよい。もし根がきよければ、その枝もきよい」と書いたのは、この残りの民のことであった。

パウロは、イスラエルの残りの民を、何本かの枝が切り去られた気高いオリーブの木にたとえている。彼は、異邦人たちを、元木につがれた野生のオリーブの枝にたとえている。彼は、異邦人の信者たちに次のように書いている。「しかし、もしある枝が切り去られて、野生のオリーブであるあなたがそれにつがれ、オリーブの根の豊かな養分にあずかっているとすれば、あなたはその枝に対して誇ってはならない。たとえば誇るとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのである。すると、あなたは、『枝が切り去られたのは、わたしがつがれるためであった』と言うであろう。まさに、



嘆きの壁にすぎるユダヤ人 彼らは神の選民であり、豊かな特権にあずかっていたが、キリストを拒むことによってその祝福を失ってしまった。その後の迫害と苦難の歴史は周知のとおりである。

そのとおりである。彼らは不信仰のゆえに切り去られ、あなたは信仰のゆえに立っているのである。高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。もし神が元木の枝を惜しまなかったとすれば、あなたを惜しむようなことはないであろう。神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。そうでないと、あなたも切り取られるであろう」。

イスラエルは、不信と、イスラエルに対する神のまことの拒否とによって、国家として神との関係が断たれてしまった。しかし、神は、元木から離れた枝をイスラエルの真の根、すなわち彼らの父祖の神に忠誠をつくした残りの民に、ふたたびつぐことがおできになった。パウロは、これらの切り去られた枝である「彼らも、不信仰を続けなければ、つがれるであろう。神には彼らを再びつぐ力がある」と言っている。彼は異邦人たちに次のように書いている。「なぜなら、もしあなたが自然のままの野生のオリブから切り取られ、自然の性質に反して良いオリブにつがれたとすれば、まして、これら自然のままの良い枝は、もっとたやすく、元のオリブにつがれないであろうか。兄弟たちよ。あなたがたが知者だと自負することのないために、この奥義を知らないでいてもらいたくない。一部のイスラエル人がかたくなになったのは、異邦人が全部救われるに至る時までのことである」。

「こうして、イスラエル人は、すべて救われるであろう。すなわち、次のように書いてある。『救う者がシオンからきて、ヤコブから不信心を追ひ払うであろう。そして、これが、彼らの罪を除き去る時

に、彼らに対して立てるわたしの契約である。』福音について言えば、彼らは、あなたがたのゆえに、神の敵とされているが、選びについて言えば、父祖たちのゆえに、神に愛せられる者である。神の賜物と召しとは、変えられることがない。あなたがたが、かつては神に不従順であつたが、今は彼らの不従順によってあわれみを受けように、彼らも今は不従順になっているが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、彼ら自身も今あわれみを受けるためなのである。すなわち、神はすべての人をあわれむために、すべての人を不従順のなかに閉じ込めたのである。」

「ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがたく、その道は測りがたい。『だが、主の心を知っていたか。だが、主の計画にあづかったか。また、だが、まず主に与えて、その報いを受けるであろうか』。万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がここにしえに神にあるように」。

こうしてパウロは、神がユダヤ人の心も異邦人の心も同様に変える力を十分に持っておられて、キリストを信じるすべての者に、イスラエルに約束された祝福を授けることがおできになることを教えている。彼は、神の民に関するイザヤの宣言をくり返している。『たとい、イスラエルの子らの数は、浜の砂のようであっても、救われるのは、残された者だけであろう。主は、御言をきびしくまたすみやかに、地上になしとげられるであろう。』さらに、イザヤは預言した、『もし、万軍の主がわたしたちに子孫を残されなかったなら、わたしたちはソドムのようになり、ゴモラと同じようになつたであろう。』

エルサレムが破壊され、神殿が荒廃したときに、幾千のユダヤ人が、異邦の地に奴隷として売られた。彼らは、荒涼たる岸边に打ち上げられた破片のように、各国にまき散らされた。ユダヤ人は、千八百年間にわたって、世界の国々をさまよい歩き、どこへ行っても、国家としての昔の威光を回復することができなかった。（注。世界のユダヤ人の中のほんの少数の者が建設した現代のイスラエルの国家は、ダビデとソロモンの治世のイスラエルの威光にとうてい匹敵するものでないことを見ても、この言葉の真実なことが十分証明されている）。彼らは、幾世紀にわたって、人から中傷を受け、憎まれ、迫害されて、苦難をなめなければならなかったのであった。

ユダヤ民族が、ナザレのイエスを拒否したときに、国家としてのユダヤ人に恐るべき運命が宣告されたのであったが、その後の各時代に、多くの気高い、神をおそれるユダヤ人たちが、黙々と苦難に耐えていた。神は、苦難の中にある彼らの心を慰め、彼らの悲惨な境遇をあわれまれた。神は、神のことばを正しく理解するために、一心不乱に探り求める人々の、切なる嘆願の祈りを聞かれた。ある者たちは、彼らの先祖たちが拒否して十字架につけた卑しいナザレ人イエスが、イスラエルの真のメシヤであることを認めるに至った。長い間、伝説と誤った解釈によって認めることができないでいた身近な預言の意味がわかったときに、彼らの心は、言いつくせない賜物のゆえに神に感謝した。この賜物は、神が、キリストを自分の救い主として受け入れるすべての者にお与えになるのである。

イザヤが、彼の預言の中で、「救われるのは、残された者」であると言ったのは、この人々のことで

ある。神は、パウロの時代から現代に至るまで、聖霊によって、異邦人と同様にユダヤ人にも呼びかけてこられた。パウロは、「神は人をかたよりみない」かたであると言った。パウロ自身、ユダヤ人に対すると同様に、「ギリシヤ人にも未開の人にも、…果すべき責任がある」と考えていた。しかし彼は、ユダヤ人は、「まず第一に、神の言が彼らにゆだねられた」ゆえに、他の民族にまさって決定的優位に立っていることを、忘れなかった。「それ「福音」は、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである」。パウロがローマ人への手紙の中で恥としないと言ったのは、ユダヤ人にも異邦人にも同様に力のあるこのキリストの福音である。この福音が、十分にユダヤ人に伝えられるときに、多くの者はキリストをメシヤとして受け入れるであらう。牧師たちの中には、ユダヤ人のために働くように召されたと感じる者は、わずかしいない。しかし、しばしばなおざりにされてきた人々にも、他のすべての人々と同様に、キリストにあるあわれみと希望の言葉を伝えなければならない。

福音の宣教が終結を迎え、これまでおろそかにされていた階級の人々に特別の働きが行われるときに、神は、神の使命者たちが、地球の至るところに散在しているユダヤ人に特別の関心を持つことを期待しておられる。旧約聖書が、新約聖書と混ざり合って、神の永遠のみこころを説明していることは、多くのユダヤ人にとって、新しい創造の曙光となり、魂の復活となるであらう。福音時代のキリストが旧約

聖書のページに描かれ、新約が旧約を明快に説明しているのを悟るときに、彼らの無気力な感覚が目覚めて、キリストが世界の救い主であることを認めるのである。多くの者が、信仰によってキリストを彼らのあがない主として受けいれる。「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」という言葉が彼らに成就する（ヨハネ一ノ一二）。

ユダヤ人の中には、タルソのサウロのように聖書に詳しい人がいて、驚くべき力をもって、神の律法の不変性を宣言する。イスラエルの神は、われわれの時代にこの事を実現して下さる。彼の腕は短かくて、救い得ないのではない。神のしもべたちが、長い間おろそかにされ軽べつされていた人々のために、信仰をもって働くときに、神の救いがあらわれる。

「それゆえ、昔アブラハムをあがなわれた主は、ヤコブの家についてこう言われる、

『ヤコブは、もはやはずかしめを受けず、

その顔は、もはや色を失うことはない。

彼の子孫が、その中にわが手のわざを見るとき、

彼らはわが名を聖とし、

ヤコブの聖者を聖として、

イスラエルの神を恐れる。

心のあやまれる者も、悟りを得、
つばやく者も教をつける。』

(イザヤ書二九ノ二二―二四)。

第三十六章 福音から離れた人々

本章はガラテヤ人への手紙に基づく

パウロは、コリントに滞在していたときに、すでに設立されていた教会のいくつかについて、深く憂慮するところがあった。エルサレムの信者たちの中から起こった偽教師の影響によつて、分裂、異端、肉欲主義が、急速にガラテヤの信者たちの間に広まっていた。これらの偽教師たちは、福音の真理にユダヤの伝承を混ぜ合わせていた。彼らは、エルサレム会議の決定を無視して、異邦人の改心者たちに礼典律を守るように勧めた。

事態は非常に深刻であつた。すでに入り込んで来た害悪は、急速にガラテヤの諸教会を破壊しようとしていた。

パウロは、彼が忠実に福音の原則を教えた人々が、このように公然と背教するのに心を痛め、不安を

感じた。彼は、直ちに、惑わされた信者たちに手紙を送って、彼らが受け入れた偽りの教えを暴露し、非常に厳しく、信仰から離れた人々を譴責した。彼は、「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように」と言ってガラテヤ人にあいさつしてから、次のような厳しい譴責の言葉を、彼らに語った。

「あなたがたがこんなにも早く、あなたがたをキリストの恵みの内へお招きになったかたから離れて、違った福音に落ちていくことが、わたしには不思議でならない。それは福音というべきものではなく、ただ、ある種の人々があなたがたをかき乱し、キリストの福音を曲げようとしているだけのことである。しかし、たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろわるべきである」。パウロの教えは、聖書と一致していた。そして聖霊が、彼の働きをあかししていた。それだからパウロは、彼が教えた真理に矛盾するどんな事にも耳を傾けないように、兄弟たちに警告した。

パウロは、ガラテヤの信者たちに、彼らのクリスチャン生活の最初の経験を慎重に考慮するように命じ、大声で叫んで言った。「ああ、物わかりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか。わたしは、ただこの一つの事を、あなたがたに聞いてみたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか。あなたがたは、そんなに物わかりがわるいのか。御霊で始

めたのに、今になって肉で仕上げるというのか。あれほどの大きな経験をしたことは、むだであったのか。まさか、むだではあるまい。すると、あなたがたに御霊を賜い、力あるわざをあなたがたの間でなされたのは、律法を行ったからか、それとも、聞いて信じたからか」。

こうして、パウロは、ガラテヤの信者たち自身の良心に訴えて、彼らの行動を阻止しようとした。パウロは、神の救いの力に頼って、背信した教師たちの教えを承認することを拒んだ。そして彼は、信者たちは大いに欺かれたけれども、彼らが以前の福音の信仰に立ち帰るならば、なおサタンの計略を挫折させることができることを、彼らに悟らせようと努力した。彼は、真理と義の側に堅く立った。パウロが自分の伝えた使命に対して抱いた絶大な信仰と確信は、信仰を失った多くの者が救い主に立ち帰る助けとなった。

パウロがコリントの教会に書いた方法は、ガラテヤ人に書いた方法となんと異なっていることである。彼は、前者を注意深く、優しく譴責したが、後者には、容赦なく譴責の言葉を語った。コリント人は、誘惑に負かされたのであった。彼らは、真理のように見せかけて誤りを教えた教師たちの巧みな詭弁に欺かれ、混乱と当惑におちいついていた。真理と誤りを見分けることを彼らに教えるには、慎重さと忍耐が必要であった。もしパウロが、苛酷さや無分別な焦燥を現せば、彼が助けようと望んでいる多くの人々に対する感化力を失ったであろう。

ガラテヤの諸教会においては、誤りが、公然と、何の仮面もかぶらずに、福音の使命に取って代わり

つつあった。信仰の真の土台であるキリストが、事実上捨て去られて、ユダヤ教の古い儀式がこれに代わった。パウロは、ガラテヤの信者たちを襲った危険な影響から彼らを救い出そうとすれば、最も断固たる措置を取り、最も厳しい警告を発しなければならないことを知った。

キリストのすべての伝道者が学ばなければならない重要な教訓は、益を与えようとしている相手の人の状態に、自分の働きを適合させることである。優しさ、忍耐、決断、堅固さなどはみな必要であるが、これらを正しく識別して用いなければならない。いろいろと異なった環境と状況下における、さまざまな異なった性質の人々を賢明に扱うことは、神の霊によって照らされ清められた知恵と判断力を必要とする働きである。

パウロは、ガラテヤの信者たちへの手紙の中で、彼自身の悔い改めと初期のクリスチャン経験の主要な事件を簡単に述べている。彼は、このような方法によつて、彼が福音の大真理を認めて理解したのは、神の力の特別な現れによるものであることを示そうとした。パウロがこのように厳粛で積極的な方法でガラテヤびとに警告と勧告を発したのは、神ご自身から受けた指示によるものであった。彼は、ためらいや疑いではなくて、堅い確信と疑う余地のない知識をもって書いた。彼は、人に教えられることと、キリストから直接教えを受けることとの相違を、はっきりと説明した。

パウロは、ガラテヤびとを誤った道に導いた偽の指導者から離れて、神の是認の確かな証拠を持った信仰に立ち帰るように、彼らに勧告した。彼らを福音の信仰から引き離そうとした人々は、心が不潔で

生活が腐敗した偽善者たちであった。彼らの宗教は、儀式の繰り返しであって、彼らは、それを行うことによって、神の恵みを得ようとしていた。彼らは、「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」ということばに服従を要求する福音を望まなかった（ヨハネ三ノ三）。彼らは、そのような教理に基づく宗教は、あまりに大きな犠牲を要求すると感じ、自分たちの誤った道に執着して、自分を欺き、他の人々を欺いた。

宗教の外的形式を心と生活の清めに代用することは、これらのユダヤの教師たちの時代と同様に今でもなお、改心していない人々に歓迎されている。今日も当時と同様に、偽の霊的指導者がいて、多くの人々が、彼らの教えに熱心に耳を傾けている。サタンは巧妙に働いて、キリストを信じ神の律法を守ることによって与えられる救いの希望から、人々の心をそらすようにしている。大敵サタンは、各時代において、彼が欺こうとする相手の偏見や好みに、彼の誘惑を適合させる。彼は、使徒時代においては、ユダヤ人を、礼典律を尊重してキリストを拒否するように導いた。彼は現代においては、多くの自称クリスチャンたちに、キリストを尊ぶという口実の下に、道德律を軽視させ、その戒めを犯しても罰はないと教えさせるのである。神のしもべは、信仰を曲解するこれらの人々に、しっかりした断固たる態度で立ち向かい、真理のことばによって、恐れることなく彼らの誤りを暴露しなければならない。

パウロは、ガラテヤの兄弟たちの信任を回復しようとして、キリストの使徒としての自分の身分について、巧みに弁明した。彼は、自分が使徒として立てられたのは、「人々からでもなく、人によってで

もなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによって」であると言った。

彼は、人からではなくて、天の最高の権威者から任命を受けたのである。そして彼の地位は、エルサレム会議によって認められ、パウロは、異邦人間でのあらゆる働きにおいて、その決定に従ったのである。パウロがこのようにして、彼の使徒としての地位を疑った人々に、自分が「あの大使徒たちにいささかも劣ってはいない」という証拠を示したのは、自己を高めるためではなくて、神の恵みを賛美するためであつた（コリント第二・一一ノ五）。彼の召命と彼の働きを軽視しようとした人々は、キリストに反抗していた。キリストの恵みと力が、パウロによってあらわれたのである。パウロは、敵の反対が起こつたために、やむを得ず、自分の地位と権威を維持するために、断固とした態度をとらなければならなかつた。

パウロは、かつてその生活に神の力を経験した人々に、福音の真理に対する最初の愛に立ち帰るようにと訴えた。彼は、彼らが、キリストにあつて自由な男女になれること、またキリストのあがないの恵みによつて、完全に献身する者はみな彼の義の衣を着せられることを、反駁することのできない議論によつて、彼らに示した。救いを得たいと願う者は、神の事について、真実で個人的な経験が必要であるというのが、彼の立場であつた。

パウロの熱心な嘆願の言葉は、効を奏した。聖霊が、大いなる力をもって働き、誤つた道に足をふみ入れた多くの者が、以前の福音の信仰に立ち帰つた。その後、彼らは、キリストがお与えになつた自由

に堅く立った。彼らの生活には、「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」などの聖霊の実があらわれた。神のみ名は崇められ、その地方全体の信者の数が大いに増加した。

第二十七章 パウロの最後のエルサレム旅行

本章は使徒行伝二〇章四節―二一章一六節に基づく

パウロは、過越の祭に世界の各地から集まってくる人々に会う機会があるので、祭の前にエルサレムに到着したいと切望した。彼は何とかして、不信仰な同胞の偏見を除き、彼らを福音の尊い光に導く器になりたいという希望を常に抱いていた。彼はまた、エルサレムの教会員に会い、異邦人がユダヤの貧しい兄弟たちにおくった贈り物を届けたいと願った。そして、彼は、この訪問によって、ユダヤ人と異邦の信者との間の結合を一層強固にしようと望んだ。

彼は、コリントにおける働きをなし遂げたので、パレスチナ海岸のどこかの港へ直接、船で行こうと決心した。すべての準備が整い、彼がまさに乗船しようとしたとき、彼は、ユダヤ人が彼の生命を取ろうと企てていることを聞いた。これまで、これら信仰の反対者たちが、パウロの働きをやめさせようとした努力は、みな挫折していた。

福音の宣教の成功が、新たにユダヤ人の怒りを引き起こした。ユダヤ人はもはや礼典律を守る必要はなくなり、異邦人はユダヤ人と同じように、アブラハムの子孫の特権にあずかるのである、という新しい教理が広まったとの報告が、各地から入って来ていた。パウロは、コリントで伝道したとき、手紙の中で力強く主張したのと同じように論じた。彼が強調した「もはやギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼……の差別はない」という言葉を、彼の敵たちは、はなはだしく神を冒瀆するものであるとみなし、彼の声を沈黙させなければならぬと決意した（コロサイ三ノ一）。

パウロは、陰謀の警告を受けて、マケドニヤを経由して行くことに決めた。過越の祭までにエルサレムに到着する計画は放棄しなければならなかったが、ペンテコステには間に合いたいと彼は望んだ。

パウロとルカに同行したのは、「ベレヤ人ソパテロ、テサロニケ人アリストタルコとセクンド、デルベ人ガイオ、それからテモテ、またアジア人テキコとトロピモ」などであった。パウロは、異邦の教会からの多額の金を持っていたので、ユダヤの働きを指導する兄弟たちの手に、それを手渡すつもりであった。そして、このために、献金をした各地の教会の代表者が、エルサレムまで彼に同行するように計画したのである。

パウロはピリピに滞在して、過越祭を過ぎた。ただルカだけがパウロととどまり、一行の他の人々はトロアスへ行って、そこで彼を待った。ピリピ人は、パウロの改心者たちの中で、最も愛情深く、また最も真実な人々であった。そして、彼は、祭の八日の間、彼らとの平和で幸福な交わりを楽しんだ。

パウロとルカは、ピリピから出帆し、五日かかってトロアスに到着して、仲間と落ち合い、その信者たちと共に七日間滞在した。

パウロが兄弟たちのところにとどまっていた最後の晩に、彼らは「パンをさくために集まった」。愛する教師が去ろうとしているので、平常より多くの人々が集まった。彼らは、三階の「屋上の間」に集まっていた。パウロは、彼らを熱烈に愛し、深く気づかっていたので、真夜中まで説教した。

ユテコという若者が、開いた窓に腰かけていた。彼は、この危ない場所で眠ってしまい、下の庭に落ちた。たちまち人々はあわてふためき、大騒ぎになった。若者をかかえ起こしてみると、もう死んでいた。そして、多くの人々が彼のまわりに集まって、嘆き悲しんだ。しかしパウロは、驚きあわてる人々の間をとあって、若者を抱き、神が彼を生きかえらせて下さるように、熱心な祈りをささげた。彼の祈りは聞かれた。人々の嘆きと悲しみの叫びを越えて、使徒パウロの、「騒ぐことはない。まだ命がある」という言葉が聞こえた。信者たちは喜んで、また屋上の間に集まった。彼らは、聖餐をすませ、それからパウロは、「明けがたまで長いあいだ人々と語り合っ」た。

パウロと同行者たちが旅を続けることになっていたその船が、まさに出帆しようとしていたので、兄弟たちは急いで乗船した。しかし、パウロ自身は、トロアスとアソス間の陸路の近道を行き、アソスで、仲間たちに会うことにした。こうして彼は、しばらくの間、瞑想と祈りの時間を持つことができた。今回のエルサレム訪問に伴う困難と危険、彼および彼の働きに対するエルサレム教会の態度などが、諸教

会の状態のことや、他の伝道地における福音の働きの進展の状況などと共に、彼が真剣に憂慮した問題であった。そして彼は、この特別の機会を活用して、神の力と導きを求めた。

旅の一行が、アソスから南下したときに、彼らは、パウロが長い間働いた場所であるエペソの町を過ぎた。パウロは、エペソの教会に重要な教訓と勧告とを与えようと思っていたので、ぜひ訪問したいと願った。しかし、よく考えた上で、「できればペンテコステの日には、エルサレムに着いていたかったので」、先を急ぐことにしたのである。しかし、ミレトに着いてみると、そこはエペソから約三十マイルの所で、船が出帆する前に教会と連絡がとれることがわかった。そこで彼は、直ちに長老たちに使いを送って、彼が出帆する前に、彼らがミレトまで彼に会いに来るように頼んだ。

長老たちが彼の招きに応じて来たとき、彼は、感動的で力強い勧告と告別の言葉を語って言った。

「わたしが、アジヤの地に足を踏み入れた最初の日以来、いつもあなたがたとどんなふうにも過ごしてきたか、よくご存じである。すなわち、謙遜の限りをつくし、涙を流し、ユダヤ人の陰謀によってわたしの身に及んだ数々の試練の中にあつて、主に仕えてきた。また、あなたがたの益になることは、公衆の前でも、また家々でも、すべてあますところなく話して聞かせ、また教え、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、強く勧めてきたのである。」

パウロは、常に神の律法を高く掲げた。彼は、律法には、不服従の罰から人々を救う力がないことを人々に示した。悪を行なった人は、罪を悔い改めて、神の前に心を低くしなければならぬ。彼らは、

神の律法を破ったので、当然、神の怒りをこうおつた。また彼らは、ゆるしの唯一の道であるキリストの血に対する信仰を働かせなければならない。神のみ子は、彼らの犠牲として命を捨て、昇天され、彼らの仲保者として父なる神の前に立たれた。彼らは、悔い改めと信仰によって罪の罰から逃れることができる。またキリストの恵みによって、今後、神の律法に服従することができるようになるのである。

パウロは、続けて言った。「今や、わたしは御霊に迫られてエルサレムへ行く。あの都で、どんな事がわたしの身にふりかかって来るか、わたしにはわからない。ただ、聖霊が至るところの町々で、わたしにはつきり告げているのは、投獄と患難とが、わたしを待ちうけているということだ。しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない。わたしはいま信じている、あなたがたの間を歩き回って御国を宣べ伝えたこのわたしの顔を、みんなが今後二度と見ることはあるまい」。

パウロは、このような言明をするつもりはなかった。しかし、彼が語っていたときに、聖霊の靈感を感じ、エペソの兄弟たちと会うのはこれが最後かもしれないと考えたことが事実になることを示された。「だから、きょう、この日にあなたがたに断言しておく。わたしは、すべての人の血について、なんら責任がない。神のみ旨を皆あますところなく、あなたがたに伝えておいたからである」。パウロは、人を怒らせはしないかという懸念や、友情と称賛を得たいという願望のゆえに、神が彼にお与えになった教訓、警告、訓戒のことを差しひかえるようなことはしなかった。今日、神は、神のしもべたちが、

何ものも恐れずにみことばを宣べ伝え、その戒めを実行することを要求しておられる。キリストの伝道者は、人々が最も喜ぶ真理だけを伝えて、彼らの心に苦痛を与える他の真理を差しひかえてはならない。彼は、心からの関心をもって、人々の品性の向上を見守らなければならない。もしも、彼の群れの中に、罪を抱いている者があれば、彼は忠実な牧者として、神のみことばから、彼らの事情に適した教訓を与えなければならない。もし彼らに何の警告も与えず、自負心をもつがままに放任しておけば、彼らの魂の責任を彼が負わなければならない。崇高な任務を達成する牧者は、信徒たちにキリスト教の信仰のすべての点を忠実に教え、神の日に完全に立ち得るためには、どんな人間になり、何をすべきかを示さなければならない。真理を忠実に教えた教師だけが、その働きの最後において、パウロと共に、「わたしは、すべての人の血について、なんら責任がない」ということができるのである。

パウロは、兄弟たちに勧告して言った。「どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである」。もし福音の伝道者たちが、自分たちの扱っているのはキリストの血によってあがなわれた人々であることを、常に覚えているならば、彼らは、自分たちの働きの重要性をさらに深く感じることであろう。彼らは、彼ら自身と彼らの群れとに気をくばっていなければならない。彼ら自身の模範が、彼らの教えを説明し、強化するものでなければならぬ。彼らは、生命の道の教師として、真理がそしられるような口実を与えてはならない。彼らは、キリ

ストの代表者として、キリストのみ名の栄えを維持しなければならない。彼らは、その献身と純潔な生活と敬虔な言行によって、自分たちが崇高な召しに値するものであることを証明しなければならない。

パウロは、エペソの教会を襲う危険を示して言った。「わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう」。パウロは将来を展望して、教会には、外部と内部の両方から敵の攻撃が襲ってくるのを見、震えおののいた。彼は、厳肅で熱誠のこもった口調で、兄弟たちが目を覚まして、彼らの神聖な義務を守るように命じた。その例として、彼は、自分が彼らの間でうまずたゆまず働いたことを指摘した。「だから、目をさましていなさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい」。

彼は続けて言った。「今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない」。エペソの兄弟たちのある者は富んでいたが、パウロは、彼らから個人的利益を求めたことは決してなかった。自分の必要に人の注意を引くことは、彼の使命の一部ではなかった。「わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ」と彼は言った。彼は、困難な仕事とキリストの働きのための長い旅のさ中にあっても、ただ自

分の必要を満たすだけでなく、仲間たちを支え、困っている人々を救済するために分け与えることができた。彼は、絶え間ない勤勉と、極度の儉約によって、これを達成したのである。彼が自己の模範を指し示して、次のように言うことができたのも当然である。「わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われるた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである」。

「こう言って、パウロは一同と共にひざまずいて祈った。みんなの者は、はげしく泣き悲しみ、パウロの首を抱いて、幾度も接吻し、もう二度と自分の顔を見ることはあるまいと彼が言ったので、特に心を痛めた。それから彼を舟まで見送った」。

一行は、ミレトを出港して、「コスに直航し、次の日はロドスに、そこからパトラに着いた」。パトラは、小アジアの南西岸にあった。彼らは、「ここでピニケ行きの舟を見つけたので、それに乗り込んで出帆した」。ツロで積荷が陸上げされ、彼らは、幾人かの弟子たちを見つけて、そこに七日間とどまることができた。これらの弟子たちは、エルサレムで危険がパウロを待ちうけているという警告を聖霊によって与えられ、「エルサレムには上って行かないように」しきりにパウロに勧めた。しかし、パウロは、苦難に会おうが、投獄されようが、意図したことを変えるつもりはなかった。

ツロにおける一週間の滞在が終わったときに、兄弟たちはみな、妻や子供を連れて、船までパウロと一緒に来た。そして彼らは、パウロが船に乗る前に、海岸にひざまずいて互いのために祈った。

一行は、ふたたび南に旅をつづけて、カイザリヤに着き、「かの七人のひとりである伝道者ピリポの家に行き、そこに泊まった」。ここで、パウロは、数日間の平和で幸福な時を過ごした。しかし、長期間にわたって、彼が完全な自由を楽しむのは、これが最後になるのであった。

ルカは、パウロがカイザリヤに滞在している間に、「アガボという預言者がユダヤから下ってきた」と言っている。「そして、わたしたちのところに来て、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って言った、『聖霊がこうお告げになっている、『この帯の持ち主を、ユダヤ人たちがエルサレムでこのように縛って、異邦人の手に渡すであろう』』」。

ルカは続けて言っている。「わたしたちはこれを聞いて、土地の人たちと一緒にあって、エルサレムには上って行かないようにと、パウロに願い続けた。」しかし、パウロは、義務の道からそれようとはしなかった。彼は、必要ならば、獄屋にも、死にも、キリストに従って行くのであった。彼は叫んだ。「あなたがたは、泣いたり、わたしの心をくじいたりして、いったい、どうしようとするのか。わたしは、主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことをも覚悟しているのだ」。兄弟たちは、いたずらに彼の心を苦しめ、彼の決心を変えることができないのを悟って、無理に強いことをやめ、「主のみこころが行われますように」と言っただけで、それ以上何も言わなかった。

やがて、カイザリヤにおける短い滞在の期間が終わる時が来た。そして、パウロと彼の一行は、数人の兄弟たちと共に、エルサレムに向かって出発した。彼らの心は、接近するわざわいの予感に深くおあ

われていた。

パウロはこれまで、このような悲しい思いをもってエルサレムに近づいたことはなかった。彼は、友が少なく、敵が多くいることを知っていた。彼は、神のみ子を拒否して殺害した都、そして、今や、神の怒りが臨もうとしている都に近づいているのであった。彼は、自分自身が、いかにキリストの弟子たちに対して苦々しい偏見を抱いていたかを思い起こして、惑わしにおちいつている同胞に、深いあわれみの情を感じた。しかし、彼らを助けることのできる望みは、なんとうすいことであろうか。かつて、彼自身の心の中に燃えていたのと同じ盲目的怒りが、今、彼に対して、恐ろしい勢いで、全国民の心の中で燃えているのであった。

またパウロは、同信の兄弟たちの同情と支援にさえ頼ることができなかった。悔い改めないユダヤ人たちは、しつこく彼につきまとって、時を移さず、直接また手紙の両方によって、彼と彼の働きに関する不利な報告を広めた。そして、使徒たちや長老たちのあるものは、この報告が真実であると信じて、何の反駁もしなければ、彼と一致しようとするどんな希望も示さなかった。

しかし、パウロは、失望すべき状況のさ中にありながらも、絶望しなかった。彼は、彼自身の心に語った天からの声が、なお、同胞の心に語りかけることを信じ、同信の弟子たちが愛し仕えている主が、彼らの心と彼の心を一致させ、福音の働きに従事させて下さることを信じたのである。

第三十八章 投獄されたパウロ

本章は使徒行伝二二章一七節 二三章三五節に基づく

「わたしたちがエルサレムに到着すると、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。翌日パウロはわたしたちを連れて、ヤコブを訪問しに行った。そこに長老たちがみな集まっていた」。

パウロの一行は、異邦人の教会が、ユダヤの兄弟たちの中の貧しい人々を援助するためにおくった献金を、エルサレムの働きの指導者たちに正式に手渡した。パウロと同労者たちは多くの時間を費やし、精神的、肉体的労苦をなめながら、これらの献金を集めたのである。その額は、エルサレムの長老たちの期待をはるかに越えたものであったが、これは、異邦の信者たちの多くの犠牲と、彼らの耐えた厳しい窮乏生活をあらわしたものであった。

こうした任意の献金は、世界中の、神の組織的働きに対する、異邦の信者たちの忠誠をあらわしていた。そして、すべての者は感謝してそれを受け取るべきであった。しかし、パウロと彼の仲間たちは、

今、彼ら面会している人々の中にさえ、この贈り物の動機となった兄弟愛の精神を理解することができない人々があるのを、明らかに知った。

異邦人の間の福音の働きの初期において、エルサレムの指導的兄弟たちのある者は、以前の偏見と思想の習慣に執着して、パウロと彼の仲間たちに心から協力しなかった。彼らは、すでに意味を失った二、三の形式と儀式を保持しようとするあまり、各地における主の働きを合同させようと努力し、そのために、彼らと彼らの愛するみわざに与えられる祝福を見失ってしまった。彼らは、キリスト教会の最大の利益を擁護することを望んだが、神の摂理の前進と歩調を合わせることができず、自分たちの人間的知恵によつて、働き人に種々の不必要な制限を加えようとした。こうして、遠方の伝道地で働く人々の特殊な必要や状況の変化を個人的に知らない一団の人々があらわれて、これらの伝道地の兄弟たちを、一定の働き方に従つて指揮する權威を主張したのである。彼らは、福音宣教の働きが、彼らの意見に従つて推進されるべきものと考えた。

エルサレムの兄弟たちが、他の主要な教会の代表者たちと共に、異邦人のために働いている者たちが行っていた方法について起きた困難な問題を注意深く考慮してから、数年が経過していた。この会議の結果、兄弟たちは一致して、割礼をも含む幾つかの儀式と習慣に関して、諸教会に一定の勧告をすることに決めたのであった。また兄弟たちが、バルナバとパウロを、すべての信者の完全な信任を受けるに値する働き人として、キリスト教会に一致して推薦したのも、この会議においてであった。

この会議に出席した者の中には、異邦の世界に福音を伝える重責を担った使徒たちの働きの方法を厳しく批判した者たちがいた。しかし、この会議の間に、神のみこころに関する彼らの見解が拡大されて、彼らは、兄弟たちと心をつなげて、賢明な決定をなし、信者全体の一致を可能にしたのである。

その後、異邦人の間の信者が急速に増加していることが明らかになったとき、エルサレムの指導者たちの中には、以前彼らが、パウロと彼の仲間たちのやりかたに対して抱いていた偏見を再び持ち始めた者たちがいた。こうした偏見は、年月の経過と共に深まり、ついにある指導者たちは、福音の宣教の働きは、今後、彼ら自身の意見に従って行われるべきであると決定するに至った。もしパウロが、彼らの主張する一定の方針に従って働くならば、彼の働きに対する彼らの承認と支持を受けるが、もしそうでなければ、彼らは、もはや、パウロの働きに賛成せず、また支持も与えないのであった。

この人々は、神が、神の民の教師であることを見失っていた。神のみわざに従事しているすべての働き人は、人間から直接指導を受けるのではなくて、天来の指導者に従うという個人的経験を得なければならぬ。それは、神の働き人が、人間の意見ではなくて、神のかたちにかたどって、形造られ、陶冶されるためである。

使徒パウロは、伝道したとき、「巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によって、人々を教えた。彼が宣言した真理は、聖霊によって彼に啓示されたものであった。「御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以

外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。：わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである」とパウロは言った（コリント第一・二ノ四、一〇 一三）。

パウロは、彼の伝道の期間を通じて、直接、神の指導を仰ぎ求めた。それと共に、彼は、エルサレムの会議の決定に一致して働くように、非常に慎重であった。その結果として、「諸教会はその信仰を強められ、日ごとに数を増していった」（使徒行伝一六ノ五）。そして、今、幾人かの者が彼に対して、共感を示さなかったのであるが、彼は、改心者たちの心に忠誠と寛大さと兄弟愛の精神を抱かせることができ、自己の義務を果たしたことを意識して、慰められた。この精神は、今回、彼がユダヤの長老たちの前におくことができた多額の献金にあらわされていた。

パウロは、贈り物を手渡してから、「神が自分の働きをとおして、異邦人の間になさった事どもを一説明した」。この事実の陳述は、すべての人の心と、疑っていた人々の心にさえ、パウロの働きには天の祝福が伴っていたことを確信させた。「一同はこれを聞いて神をほめたたえた」。彼らは、パウロが従事している働きの方法には、天の証印が押されているのを感じた。彼らの前におかれた多額の献金も、異教徒の間に建設された新しい教会の忠実さについてのパウロの証言に重みを加えた。エルサレムにおける働きの責任者に数えられていながらも、独断的な統制手段を主張していた人々は、パウロの伝道に対して、新しい認識を抱いた。そして、自分たちの行動が誤っていたことを認め、自分たちが、ユ

ダヤの習慣と言ひ伝えに捕らわれていたことを認めた。また、キリストの死によつて、ユダヤ人と異邦人の間の隔ての中垣がくだかれたことを、彼らが認めなかつたために、福音の働きが大いに妨げられてきたことを悟つた。

これは、指導的兄弟たちがみな、神はパウロによつて働かれたことと、時折彼らは、敵のうわさを聞いて、ねたみと偏見を抱いて誤りに陥つたことを、率直に告白する絶好の機会であつた。しかし、彼らは、名誉を傷つけられた者を正當に扱おうと心をつにして努力する代わりに、パウロに勧告を与え、パウロに対する偏見の大部分の責任は彼が負うべきであると、いまなお彼らが考えていることを明らかにした。彼らは、堂々と立つて彼を擁護し、不満を抱いた人々の誤りを指摘しようとはせず、誤解の原因をすべて取り除くだろうと彼らが考えた行動をとるよう、彼に勧告して、妥協させようとしたのである。

彼らは、パウロの証言に答えて、次のように言つた。「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人の中で信者になつた者が、数万にもものぼっているが、みんな律法に熱心な人たちである。ところが、彼らが伝え聞いているところによれば、あなたは異邦人の中にいるユダヤ人一同に対して、子供に割礼を施すな、またユダヤの慣例にしたがうなど言つて、モーセにそむくことを教えている、ということである。どうしたらよいか。あなたがここにきていることは、彼らもきつと聞き込むに違いない。ついては、今わたしたちが言うとおりのことをしなさい。わたしたちの中に、誓願を立てている者が四人いる。この人た

ちを連れて行って、彼らと共にきよめを行い、また彼らの頭をそる費用を引き受けてやりなさい。そうすれば、あなたについて、うわさされていることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守って、正しい生活をしていることが、みんなにわかるであろう。異邦人で信者になった人たちには、すでに手紙で、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを、憤むようにとの決議が、わたしたちから知らせてある」。

兄弟たちは、パウロが勧告された行動をとって、彼についての偽りのうわさに対して明確に反論することを望んだ。彼らは、異邦人の信者と礼典律に関する前回の会議の決議が、なお有効であると彼に言明した。しかし、彼らの勧告は、その決議と一致していなかった。この指示は、神の霊によって与えられたものではなかった。それは、臆病の結果であつた。エルサレムの指導者たちは、クリスチャンがもし礼典律を守らなければ、ユダヤ人の怒りを招き、自分たちを迫害にさらすことを知っていた。サンヒドリンは、福音の進展を阻止するために全力をつくしていた。サンヒドリンは、特にパウロの後をつけさせて、あらゆる方法で彼らの働きに反対させた。もしキリストの信者たちが、サンヒドリンの前で、律法の違反者として罪に定められるならば、彼らはユダヤ教の背信者として、直ちに厳しい刑罰に会わなければならなかった。

福音を信じた多くのユダヤ人は、なお礼典律を尊重し、自ら進んで無分別な譲歩をなし、こうすることによって、同胞の信頼を得て、彼らの偏見を取り除き、キリストを世界のあがない主として信じさせ

ようと望んだ。パウロは、エルサレム教会の指導者たちが彼に対して偏見を持ちつづけるかぎり、彼らは常に彼の働きに対して反対することを悟った。彼は、ここでなんらかの穏当な譲歩によつて、彼らを真理に導くことができれば、他の場所での福音の働きを成功させるための、大きな障害物を取り除くことになると感じた。しかし、パウロは、彼らが要求したほどに譲歩する権利を神から授けられてはいなかった。

兄弟たちと調和したいというパウロの大きな願い、信仰の弱い者に対する彼の思いやり、キリストと共にいた使徒たち、特に主の兄弟ヤコブに対する彼の尊敬、また、できるだけ原則を曲げずにすべての人に対しては、すべての人のようになるという彼の決心などをみな考慮するときに、彼が、これまで歩んできた堅固で明確な道からやむを得ずそれたとしても、大して驚くに当たらない。しかし、彼の和解の努力は、望んだ目的を達成するのではなくて、ただ危機の到来を促進し、彼の予告した苦難を早めるものであった。そして彼は、兄弟たちから引き離され、教会は、最も堅固な柱を失い、全地のクリスチヤンを悲しませる結果になったのである。

パウロは、その次の日に、長老たちの勧告を実行し始めた。ナジルびとなる誓願をしていた四人の者のきよめの期間が、ほとんど終わっていたので（民数記六章）、パウロは、彼らを宮に連れていき、「そしてきよめの期間が終つて、ひとりびとりのために供え物をささげる時を報告しておいた」。清めのために、一定の高価な犠牲を、まだささげなければならなかったのである。

このような行動をとるようにパウロに勧告した人々は、彼がどのように大きな危機にさらされるかを十分に自覚していなかった。この時、エルサレムには、各地からの礼拝者があふれていた。パウロは、神から与えられた任命に従って、異邦人に福音を伝え、世界の多くの大都會を訪れていた。そして彼は、祭に参列するために外国からエルサレムに来ていた幾千の人々に、よく知られていた。このような人々の中には、パウロに対して激しい憎しみを抱いていた者があった。彼が、公の祭の時に、神殿に入ることは、生命を危険にさらすことであった。彼は数日の間、礼拝者に混じって神殿に出入りしていたが、人々には気づかれなかったようであった。しかし、定められた期間が終わる前に、彼がささげる犠牲について、祭司と話をしていたとき、アジアから来た幾人かのユダヤ人が彼に気づいた。

彼らは、悪鬼のような憤怒をもってパウロに襲いかかり、「イスラエルの人々よ、加勢にきてくれ。この人は、いたるところで民と律法とこの場所にそむくことを、みんなに教えている」と叫んだ。そして人々が、加勢を求める声に応じたとき、「その上に、ギリシヤ人を宮の内に連れ込んで、この神聖な場所を汚したのだ」というもう一つの罪がつけ加えられた。

ユダヤの律法によれば、無割礼の者が神殿の奥に入ることは、死刑に値する罪であった。パウロは、エペソ人トロピモと一緒にいるのを町の中で見られていたので、彼を神殿の中に連れていったと憶測されたのである。そのようなことを、パウロはしていなかった。そして、彼自身はユダヤ人であるから、神殿にはいることは、律法に違反していなかった。告発は、全くの虚偽であったにもかかわらず、公衆

の偏見を引き起こすことになった。神殿内に叫びが鳴りひびいて、集まっていた群衆は、狂ったように騒ぎ出した。この知らせは、速やかにエルサレム中にひろがり、「市全体が騒ぎ出し、民衆が駆け集まってきた」た。

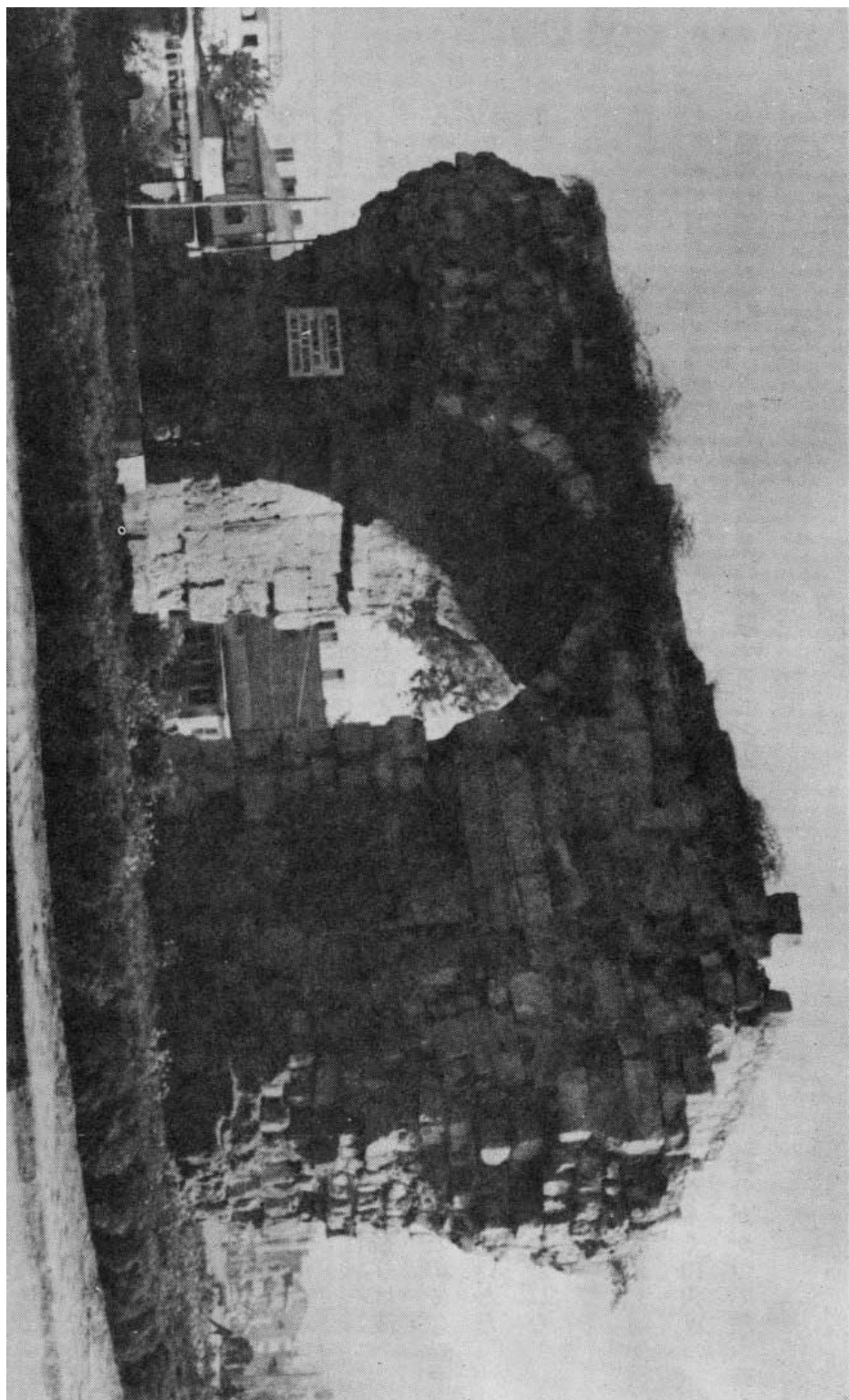
世界の各地から幾千という人々が礼拝に集まってきたこの時において、イスラエルの背教者が神殿を汚そうとしたということは、群衆の最も激烈な怒りを引き起こした。彼らは、「パウロを捕え、宮の外に引きずり出した。そして、すぐそのあとに宮の門が閉ざされた」。

「彼らがパウロを殺そうとしていた時に、エルサレム全体が混乱状態に陥っているとの情報が、守備隊の千卒長にとどいた」。クラウド・ルシヤは、彼が扱わねばならない不穏な分子をよく知っていたので、「彼はさっそく、兵卒や百卒長たちを率いて、その場に駆けつけた。人々は千卒長や兵卒たちを見て、パウロを打ちたたくのをやめた」。ローマの千卒長は、騒ぎの原因は知らなかったが、群衆の憤怒がパウロに集中しているのを見て、かねて聞いていた逃亡中のエジプト人の反乱者に違いないと考えた。そこで、千卒長は「パウロを捕え、彼を二重の鎖で縛っておくように命じた上、パウロは何者か、また何をしたのか、と尋ねた」。直ちに、多くの人々が、怒り狂って大声で訴えた。「しかし、群衆がそれぞれ違ったことを叫びつづけるため、騒がしくて、確かなことがわからないので、彼はパウロを兵営に連れて行くように命じた。パウロが階段にさしかかった時には、群衆の暴行を避けるため、兵卒たちにかつがれて行くという始末であった。大ぜいの民衆が『あれをやっつけてしまえ』と叫びながら、

ついできたからである」。

パウロは、騒ぎの最中にあっても、冷静で泰然自若としていた。彼は堅く神により頼み、天使たちが自分の回りにいることを知っていた。パウロは、同胞に真理を伝える努力をせずに、神殿を去りたくないと思った。彼は、兵営の中に連れていかれようとしたときに、千卒長に、「ひと言あなたにお話してもよろしいですか」と言った。ルシヤは、言った。「おまえはギリシヤ語が話せるのか。では、もしかおまえは、先ごろ反乱を起した後、四千人の刺客を引き連れて荒野へ逃げて行ったあのエジプト人ではないのか」。パウロは、それに答えて言った。「わたしはタルソ生れのユダヤ人で、キリキヤのれっきとした都市の市民です。お願いですが、民衆に話をさせて下さい」。

パウロの願いは許され、「パウロは階段の上に立ち、民衆にむかつて手を振った」。彼の身振りは彼らの注意を引き、その態度は、彼らの尊敬をかち得た。「すると、一同がすっかり静粛になったので、パウロはヘブル語で話し出した。『兄弟たち、父たちよ、いま申し上げるわたしの弁明を聞いていただきたい』。聞きなれたヘブル語を聞いて、「人々はますます静粛になった」。そして、一同が静かになったところで、彼は続けて言った。「わたしはキリキヤのタルソで生れたユダヤ人であるが、この都で育てられ、ガマリエルのひざもとで先祖伝来の律法について、きびしい薫陶を受け、今日の皆さんと同じく神に対して熱心な者であった」。パウロが語った事実は、まだエルサレムに住んでいた多くの人が熟知していたので、だれも彼の言葉に反駁することができなかった。それから彼は、自分がかつて熱



タルソのパウロの門 タルソの町の西端入口にある門で、ローマ時代の遺構とされる。三つのアーチから成るものであったが、左右とも欠けている。これはクレオパトラの門として知られたが、俗に「パウロの門」と呼ばれている。

心にキリストの弟子たちを迫害して、殺害したことを語った。そして、自分の回心の事情を語り、自分の高慢な心が、十字架につけられたナザレ人イエスにどのようにして屈服するに至ったかを聴衆に告げた。もしも彼が、反対者たちと議論しようとしたならば、彼らは彼の言葉を聞くことを頑強に拒んだことであろう。しかし、彼自身の経験の物語は、説得力があつて、しばし彼らの心を和らげ、静めるように思われた。

それから彼は、彼の異邦人への働きが、彼の選択によるものでなかったことを示そうと努めた。彼は、彼自身の同胞のために働くことを願っていた。しかし、神の聲が、その神殿の中で聖なる幻のうちに彼に語り、「あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」と指示したのである。

人々は、ここまででは、注意深く耳を傾けていたが、パウロが、異邦人へのキリストの使者として自分が任命を受けた時のことに言及したとき、彼らは、またもや憤激した。彼らは、自分たちだけが、神の恵みを受けた民族であると思ひ込んでいたので、これまで独占的に自分たちのものであると考えていた特権を、軽蔑している異邦人に分け与えることを好まなかった。彼らは、話しているパウロの声を聞かなくなると、そのような大声をあげて叫んだ。「こんな男は地上から取り除いてしまえ。生かしておくべきではない」。

「人々がこうわめき立てて、空中に上着を投げ、ちりをまき散らす始末であつたので、千卒長はパウロを兵営に引き入れるように命じ、どういふわけで、彼に対してこんなにわめき立てているのかを確か

めるため、彼をむちの拷問にかけて、取り調べるように言いわたした。彼らがむちを当てるため、彼を縛りつけていた時、パウロはそばに立っている百卒長に言った、『ローマの市民たる者を、裁判にかけもしないで、むち打ってよいのか。』百卒長はこれを聞き、千卒長のところに行つて報告し、そして言った、『どうなさいますか。あの人はローマの市民なのです』。そこで、千卒長がパウロのところに着て言った、『わたしに言ってくれ。あなたはローマの市民なのか』。パウロは『そうです』と言った。これに対して千卒長が言った、『わたしはこの市民権を、多額の金で買い取ったのだ』。するとパウロは言った、『わたしは生れながらの市民です』。そこで、パウロを取り調べようとしていた人たちは、ただちに彼から身を引いた。千卒長も、パウロがローマの市民であること、また、そういう人を縛っていたことがわかつて、恐れた。

翌日、彼は、ユダヤ人がなぜパウロを訴え出たのか、その真相を知ろうと思つて彼を解いてやり、同時に祭司長たちと全議会とを召集させ、そこに彼を引き出して、彼らの前に立たせた。

今やパウロは、悔い改める前は彼自身が一員であつたその議会によつて裁かれることになった。ユダヤ人の指導者たちの前に立つたとき、彼の態度は落ち着いており、彼の顔にはキリストの平和があらわれていた。「パウロは議会を見つめて言った、『兄弟たちよ、わたしは今日まで、神の前に、ひたすら明らかな良心にしたがつて行動してきた』。この言葉を聞いて、彼らはまたもや憎しみを燃え上がらせた。「すると、大祭司アナニヤが、パウロのそばに立っている者たちに、彼の口を打てと命じた」。パ

ウロは、この無情な命令を聞いて叫んだ。「白く塗られた壁よ、神があなたを打つであろう。あなたは、律法にしたがって、わたしをさばくために座についているのに、律法にそむいて、わたしを打つことを命じるのか」。「すると、そばに立っている者たちが言った、『神の大祭司に対して無礼なことを言うのか』。パウロは、いつもの礼儀正しい態度で答えた。「兄弟たちよ、彼が大祭司だとは知らなかった。聖書に『民のかしらを悪く言ってはいけない』と、書いてあるのだった」。

「パウロは、議員の一部がサドカイ人であり、一部はパリサイ人であるのを見て、議会の中で声を高めて言った、『兄弟たちよ、わたしはパリサイ人であり、パリサイ人の子である。わたしは、死人の復活の望みをいだいていることで、裁判を受けているのである』。彼がこう言ったところ、パリサイ人とサドカイ人との間に争論が生じ、会衆が相分れた。元来、サドカイ人は、復活とか天使とか霊とかは、いつさい存在しないと言い、パリサイ人は、それらは、みな存在すると主張している。」両派は互いに議論し始め、こうして、パウロに対する反対の勢力が分散された。「パリサイ派のある律法学者たちが立って、強く主張して言った、『われわれは、この人には何も悪いことがないと思う。あるいは、霊か天使かが、彼に告げたのかも知れない』」。

続いて起きた騒ぎの中で、サドカイ人は、なんとかしてパウロを捕らえて、彼を死刑にしようとしたが、パリサイ人は、力をつくして彼を保護しようとした。「千卒長は、パウロが彼らに引き裂かれるのを気づかって、兵卒どもに、降りて行ってパウロを彼らの中から力づくで引き出し、兵営に連れて来る

ように、命じた」。

後でパウロは、この日の苦い経験を思い返して、自分の行動は、神に喜ばれるものではなかったのではないかと考え始めた。結局、エルサレムの訪問は、間違いだったのであるうか。彼が、兄弟たちと団結することを熱望したことが、このような不幸な結果を招いたのであるうか。

パウロは、神の民と称するユダヤ人が不信の世界の前に示す態度に、深く心を痛めた。異教の将校たちは、彼らをどのように見ることであろう。彼らは、主の礼拝者であると称し、聖職にあるにもかかわらず、盲目的で不合理な怒りをほしいままにし、信仰において意見の異なる兄弟たちさえ殺そうとした。そして、彼らの最も厳粛な議会を、紛争と混乱の場所にしてしまった。パウロは、神の名が、異教徒の前で屈辱をこうむったことを感じた。

今や、彼は、捕らわれの身となった。そして彼は、敵たちが、悪意の限りをつくして、彼を殺そうとしているのを知っていた。教会のための彼の働きはもうこれで終わり、今、狂暴なおおかみがいり込んでくるのであろうか。パウロにとって、キリストのみわざは、重大な関心事であった。そして彼は、各地の教会の当面する危機について憂慮した。彼らは、パウロがサンヒドリンの議会において当面したのと同じような人々の迫害に会わなければならなかった。彼は、苦悶と失望のあまり、泣いて祈った。

主はこの暗黒の時に、ご自分のしもべをお忘れにならなかった。主は神殿の庭で、彼を暴徒の手から守られた。主は、サンヒドリンの議会において、彼と共にいられた。主は、兵営において、彼と共に

られた。そして、主は、導きを求めるパウロの熱心な祈りに答えて、ご自身を忠実なしもべにあらわされた。「その夜、主がパウロに臨んで言われた、『しっかりせよ。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなくてはならない』」。

パウロは、長い間、ローマを訪問したいと思っていた。彼はローマにおいて、キリストのためにあかしを立てたいと熱望していたが、彼の計画は、ユダヤ人の敵意によって挫折してしまったと感じていた。今ですら彼は、自分が囚人として行くようになるとは、夢想だにしていなかった。

主が、主のしもべを激励しておられる一方において、パウロの敵たちは、さかんに彼を殺害する計画を立てていた。「夜が明けると、ユダヤ人らは申し合わせをして、パウロを殺すまでは飲食をいっさい断つと、誓い合った。この陰謀に加わった者は、四十人あまりであった。」これは、主がイザヤによって、「見よ、あなたがたの断食するのは、ただ争いと、いさかいのため、また悪のこぶしをもって人を打つためだ」と譴責された種類の断食であった（イザヤ書五八ノ四）。

陰謀を企てた人々は、「祭司長たちや長老たちのところに行つて、こう言った。『われわれは、パウロを殺すまでは何も食べないと、堅く誓い合いました。ついては、あなたがたは議会と組んで、彼のことでなお詳しく取調べをするように見せかけ、パウロをあなたがたのところに連れ出すように、千卒長に頼んで下さい。われわれとしては、パウロがそこにこないうちに殺してしまう手はずをしています』」。

祭司とつかさたちは、この残酷な陰謀を譴責するかわりに、熱烈にそれに同意した。パウロがアナニ

ヤを白く塗った墓にたとえたことは、真実を語ったのであった。

しかし、神は、神のしもべの生命を救うために手を下された。パウロの姉妹の子が、暗殺者たちの、「この待伏せ」のことを耳にし、「兵営にはいつて行って、パウロにそれを知らせた。そこでパウロは、百卒長のひとりを呼んで言った、『この若者を千卒長のところに連れて行ってください。何か報告することがあるようですから』。この百卒長は若者を連れて行き、千卒長に引きあわせて言った、『囚人のパウロが、この若者があなたに話したいことがあるので、あなたのところに連れて行ってくれるようにと、わたしを呼んで頼みました』。」

クラウデオ・ルシヤは若者を親切に迎え、彼を、人のいないところへ連れて行って尋ねた、『わたしに話したいことというのは、何か』。若者が言った、『ユダヤ人たちが、パウロのことをもっと詳しく調べをするの見せかけて、あす議会に彼を連れ出すように、あなたに頼むことに決めています。どうぞ、彼らの頼みを取り上げないで下さい。四十人あまりの者が、パウロを待伏せしているのです。彼らは、パウロを殺すまでは飲食をいっさい断つと、堅く誓い合っています。そして、いま手はずをととのえて、あなたの許可を待っているところなのです』。そこで千卒長は、『このことをわたしに知らせたことは、だれにも口外するな』と命じて、若者を帰した。」

ルシヤは、直ちに、パウロを彼の管轄下から、総督ペリクスの管轄のもとに移すことにした。ユダヤ人は、国民全体が興奮と憤激状態にあつて、騒乱が頻繁に起こっていた。パウロをエルサレムにとどめ

ておくことは、都に危険を及ぼし、千卒長自身をさえ危険に陥れるかもしれない。そこで、彼は、「百卒長ふたりを呼んで言った、『歩兵二百名、騎兵七十名、槍兵二百名を、カイザリヤに向け出発できるように、今夜九時までに用意せよ。また、パウロを乗せるために馬を用意して、彼を総督ペリクスのもとへ無事に連れて行け』」。

パウロを送り出すのを、一刻も遅らせてはならなかった。「そこで歩兵たちは、命じられたとおりパウロを引き取って、夜の間にアンテパトリスまで連れて行った。そこから、騎兵がパウロをカイザリヤに護送し、四百人の兵士たちはエルサレムへ帰った。

部隊の隊長は、パウロをペリクスに引き渡し、それと共に、千卒長に託された手紙をも差し出した。

「クラウデオ・ルシヤ、つつしんで総督ペリクス閣下の平安を祈ります。本人のパウロが、ユダヤ人に捕えられ、まさに殺されようとしていたのを、彼のローマ市民であることを知ったので、わたしは兵卒たちを率いて行って、彼を救い出しました。それから、彼が訴えられた理由を知ろうと思い、彼を議会に連れて行きました。ところが、彼はユダヤ人の律法の問題で訴えられたものであり、なんら死刑または投獄に当る罪のないことがわかりました。しかし、この人に対して陰謀がめぐらされているとの報告がありましたので、わたしは取りあえず、彼を閣下のもとにお送りすることにし、訴える者たちには、閣下の前で、彼に対する申立てをするようにと、命じておきました」。

ペリクスは、手紙を読んだあとで、パウロがどの州の者かと尋ね、キリキヤの出だと知って、『訴え

人たちがきた時に、おまえを調べることにする』と言った。そして、ヘロデの官邸に彼を守っておくように命じた。

神のしもべが、主の民と公言する人々の憎しみを逃れて、異邦人の間に避難所を見いだしたことは、パウロの場合が最初ではなかった。ユダヤ人はパウロに対する激怒のあまり、ユダヤ民族の暗黒史に、さらにもう一つの罪を付け加えた。彼らは真理に対して心をいっそう固くし、彼らの破滅の運命を、さらに確実なものにしてしまったのである。

キリストがナザレの会堂において、ご自身を油注がれた者として宣言されたときの言葉の意味を、十分に理解している者は少ない。キリストは、ご自身の使命が、悲しんでいる者や罪深い者を、慰め、祝福し、救うことであると宣言された。そして、その次に、聴衆の心が、誇りと不信に支配されているのをごらんになって、彼は、神が過去において、神の選民の不信と反逆のゆえに彼らを離れて、まだ天の光を拒否していない異邦の国の人々にご自身をあらわされたことを、彼らに思い起こさせられたのである。サレプタのやもめとシリアのナアマンは、彼らの持っていたすべての光に従って生きていた。そのために彼らは、神に背信し、便宜と世俗的栄誉のために原則を犠牲にした神の選民よりは、義しい者とみなされたのである。

キリストは、背信したイスラエルには、神の忠実な使命者のために安全な所がないのであると宣言して、ナザレのユダヤ人に恐るべき真実を語られたのである。彼らは、神の使命者の価値を知ろうともし

ず、彼の働きを感謝しようとしなかった。ユダヤ人の指導者たちは、神の栄誉とイスラエルの幸福のために非常に熱心であると公言していたが、実のところ、彼らはこの両方の敵であった。彼らは、教えと行為によつて、ますます、神への服従から人々を引き離し、悩みの日に、神が彼らの保護となることができないところへと彼らを導いていった。

ナザレ人に対する救い主の譴責の言葉は、パウロの場合、ただ不信のユダヤ人だけでなく、同信の兄弟たちにも当てはまった。もし教会の指導者たちが、パウロに対する苦い感情をことごとく捨て去つて、異邦人に福音を伝えるために神の特別の召しを受けた者として彼を受け入れていたならば、主は、パウロを彼らに残しておかれたことであろう。神は、パウロの働きがこのように速やかに終わるようには定めておられなかった。しかし神は、エルサレム教会の指導者たちがひき起こした一連の事件を挫折させるために奇跡を行われはしなかった。

これと同じ精神が、同様の結果を招いている。神の恵みが備えて下さったものを尊重して活用することを怠るために、教会は多くの祝福を受け損じる。もし忠実な働き人の働きが、教会の人々に尊重されなければ、彼らの働きの期間を延ばそうと主が望まれたことが、幾度あったことであろう。しかし、もし教会が魂の敵によつて理解力を混乱させられ、キリストのしもべの言葉と行動を誤り伝えて曲解し、彼の働きを妨害するならば、主は、ご自分がお与えになった祝福を彼らから取り去られるのである。

サタンは、神が偉大な善い働きを完成するために選ばれた人々を失望させて、滅びに陥れようと、絶

えず彼の手下たちを用いて働いている。彼らは、キリストのみわざを推進するためには、その生命を犠牲にすることさえ惜しまないのであるが、大欺瞞者は、彼らに対して疑惑を抱くように兄弟たちに示唆する。もし兄弟たちがそのような考えを持つならば、この人々の品性の誠実さに対する確信はくつがえされて、彼らの働きの有用性は阻害されるのである。サタンは、働き人自身の兄弟たちによって、彼らの心に非常な悲しみを与えることに、しばしば成功する。そこで神は、恵み深い介入によって、迫害されている神のしもべたちに休息をお与えになるのである。脈搏が止まり、胸の上に手が組み合わされ、警告と激励の声が沈黙してしまったとき、そのときになって、強情な人々は初めて目を覚まし、自分たちが棄て去った祝福に気づいて、それを尊重するようになるのである。神のしもべたちの死は、彼らがその生前になし得なかったことを成就するのである。

第三十九章 カイザリヤにおける裁判

本章は、使徒行伝二四章に基づく

パウロがカイザリヤに到着してから五日後に、告訴人たちは、彼らが顧問として頼んだテルトロといふ弁護人を連れて、エルサレムからやって来た。この件の審問は、直ちに開かれることが許された。そこで、パウロは、裁判廷に呼び出されて、「テルトロは論告を始めた」。狡猾な弁護人は、ローマの総督には、へつらいのほうで、事実と正義についての簡単な陳述よりも効果があると判断し、まずペリクスを賞賛して、彼の弁論を始めた。「ペリクス閣下、わたしたちが、閣下のお陰でじゅうぶんに平和を樂しみ、またこの国が、ご配慮によつて、あらゆる方面に、またいたるところで改善されていることは、わたしたちの感謝してやまないところであります」。

テルトロはここで、しらじらしい偽りを平気で言った。というのは、ペリクスの品性は、卑劣で卑しむべきものだったからである。彼について、次のように言われていた。「彼は、あらゆる種類の欲望と

残酷な行為において、奴隷の気質をもって王の権力を振るつた」（タキトゥス『歴史』第五章第九節）。テルトロの話聞いた人々は、彼のへつらいの言葉が偽りであることを知っていた。しかし、真理を愛するよりは、パウロを罪に定めようとする願いのほうが強かった。

テルトロは彼の陳述の中で、もし証拠立てられるとすれば、政府に対する反逆罪に値する罪をパウロに負わせた。テルトロは言った。「この男は、疫病のような人間で、世界中のすべてのユダヤ人の中に騒ぎを起している者であり、また、ナザレ人らの異端のかしらであります。この者が宮までも汚そうとしていたので（あります）。それからテルトロは、ユダヤ人が彼らの律法に従って彼をさばこうとしていたときに、エルサレムの兵營の千卒長ルシヤが、パウロを強奪し去ったので、ペリクスの前にこの件が訴えられることになったと言った。このような言葉は、ユダヤの裁判廷にパウロを引き渡すことを総督に促すためのものであった。そこにいたユダヤ人は、すべての告発を熱烈に支持し、囚人パウロに対する彼らの憎しみを隠そうとしなかった。

ペリクスは、パウロを告発する人々の性質と品性を読み取る十分な洞察力を持っていた。ペリクスは、彼らが何の目的で彼にへつらったかを知った。そして彼はまた、彼らがパウロに対する告発の十分な証拠を提出し得ないことも見た。彼は被告に向かって、自己の弁明をするように合図した。パウロは、儀礼的なむだな言葉を言わないで、簡単に、ペリクスの前で自分を弁護できることを非常にうれしく思うと言った。それは、ペリクスが、長年にわたって総督を勤め、ユダヤ人の律法と習慣をよく理解

していたからである。パウロは、彼に対する告発が、一つとして真実のものではないことを明らかに示した。彼は、エルサレムのどの場所においても、騒ぎを起こしたことはなく、また、神殿を汚してもいなかった。彼は、次のように言った。「そして、宮の内でも、会堂内でも、あるいは市内でも、わたしがだれかと争論したり、群衆を煽動したりするのを見たものではありませんし、今わたしを訴え出ていることについて、閣下の前に、その証拠をあげうるものではありません。」

彼は、「彼らが異端だとしている道にしたがって」、彼の先祖たちの神を礼拝していたことを認めたが、しかし「律法の教えるところ、また預言者の書に書いてあることを」常に信じ、聖書の明白な教えに一致して、死者の復活を信じていることを主張した。さらに彼は、彼の生涯の主要な目的は、「神に對した人に対して、良心に責められることのないように」することであると述べた。

彼は率直で誠実な態度で、エルサレムを訪問した目的と、捕らえられて裁きを受けた事情を話した。

「さてわたしは、幾年ぶりに帰ってきて、同胞に施しをし、また、供え物をしていました。そのとき、彼らはわたしが宮できよめを行っているのを見ただけであって、群衆もいず、騒動もなかったのです。

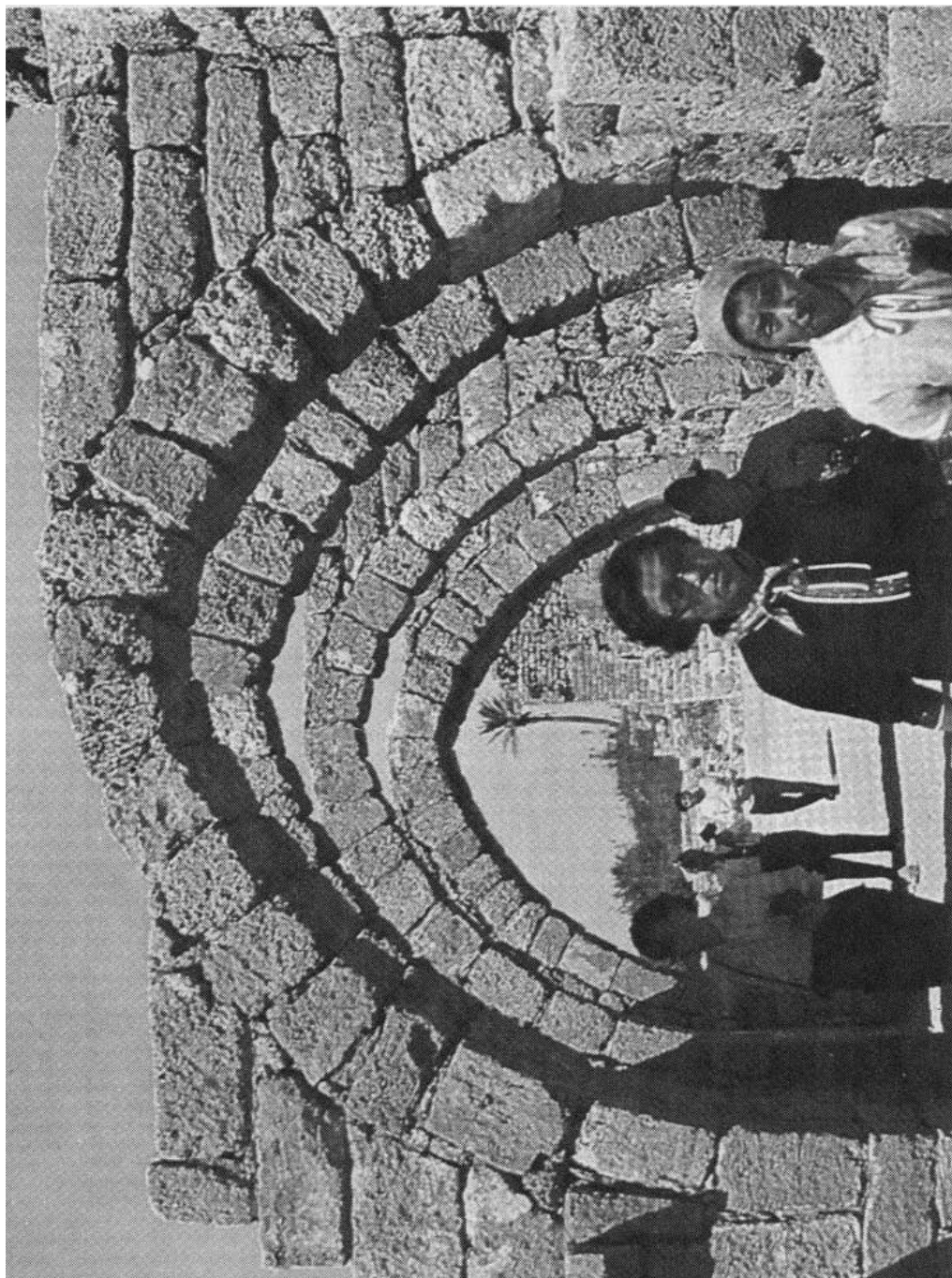
ところが、アジヤからきた数人のユダヤ人が 彼らが、わたしに對して、何かとがめ立てをすることがあったなら、よろしく閣下の前にきて、訴えるべきでした。あるいは、何かわたしに不正なことがあったなら、わたしが議会の前に立っていた時、彼らみずから、それを指摘すべきでした。ただ、わたしは、彼らの中に立って、『わたしは、死人のよみがえりのことで、きょう、あなたがたの前でさばきを

受けているのだ』と叫んだだけのことです」。

パウロは、熱誠こめて真心から語ったので、彼の言葉には、人々を感動させる力があつた。クラウデオ・ルシヤは、彼のペリクスへの手紙の中で、パウロの行動に関して同様の証言をしている。さらに、ペリクス自身、多くの者が想像する以上に、ユダヤの宗教について深い知識を持っていた。パウロの明白な事実の陳述によって、ペリクスは、ユダヤ人がどのような動機に動かされて、パウロを扇動と反逆の罪に陥れようとしているかを、さらに明らかに理解することができた。ペリクスは、ローマの市民を不当に罰して彼らに満足を与えることも、あるいは、パウロを彼らに引き渡して、正当な裁判をせずに死刑に処することもしたくなかった。とは言え、ペリクスは、私利私欲以上の高尚な動機を知らず、賞賛を愛する心と昇進を欲する心に支配されていた。彼は、ユダヤ人を怒らせることを恐れたので、パウロに罪がないと知りつつも、彼を全面的に釈放することを差しひかえた。そこで、彼は、ルシヤが来るまで裁判を延期することに決め、「千卒長ルシヤが下つて来るのを待つて、おまえたちの事件を判決することにする」と言った。

パウロは囚人ではあつたが、ペリクスは百卒長に、「彼を寛大に取り扱い、友人らが世話をするのを止めないようにと、命じた」。

この後しばらくして、ペリクスと彼の妻ドルシラは個人的にパウロを呼び出して、「キリスト・イエスに対する信仰のことを」彼から聞いた。彼らは、これらの新しい真理を、喜んで、熱心にさえ聞いた



カイザリアの有蓋街路 くロテ大王の創設したカイザリア海港の有蓋街路で、アーチにかこまれ、左右に店舗が立ち並んでいた。パウロは最後のローマ行きに、この海港から出航した。

のであるが、もし彼らが、ふたたび聞くことのないこれらの真理を拒否するならば、これらの真理は、神の日に彼らを罪に定める速やかなあかしとなるのである。

パウロは、これを神がお与えになった機会だと思い、忠実にそれを活用した。彼は、自分を殺すことも、自由にすることもできる人の前に立っていることを知っていた。それでも彼は、ペリクスやドルシラに賞賛やへつらいの言葉を言わなかった。彼は、自分の言葉が、彼らにとっては、生命のかけとなるか、あるいは死のかけとなるかであることを知っていた。だから、彼は利己的な考えを全く忘れ去って、彼らに自分たちの陥っている危険を認めさせようとしたのである。

パウロは、福音が、彼の言葉に耳を傾けるすべての者に対して、要求する権利を持っていることを自覚した。すなわち、やがて彼らは、大いなる白いみ座のまわりの純潔な清い人々の中にいるか、それとも、キリストが、「不法を働く者どもよ、行ってしまえ」と言われる人々の中にいるかのどちらかになるのである（マタイ七ノ二三）。彼は、天の審判廷において、彼の聴衆のひとりひとりに会い、ただ彼のすべての言行だけでなく、彼の言葉と行為の動機と精神に対しても、言い開きをしなければならぬことを知っていた。

ペリクスの行動は、非常に凶暴で残酷であったので、彼の品性と行為に欠陥があることをあえてほめかした者は、これまでほとんどなかった。しかし、パウロは、人を恐れなかった。彼は、率直に、キリストに対する彼の信仰とその信仰の理由を表明し、特に、クリスチャン品性に不可欠な徳について語

ったのであったが、彼の前にいる高慢な夫婦は、はなはだしくこうした徳に欠けていたのである。

彼は、ペリクスとドルシラの前に、神の品性、すなわち、神の義、正義、公正、神の律法の性質などを高く掲げた。彼は、まじめに生活して、節制し、情欲を理性の支配の下におき、神の律法に従い、肉体的、知的能力を健康な状態に保つことが、人間の本分であることを明確に示した。彼は、すべての者が自分の行ったことに応じて報いを受ける審判の日が、必ず来ることを宣言した。そしてその時には、富も地位も、あるいは称号も、人に神の恵みを得させ、または、罪の結果から逃れさせる力がないことが、明らかにされるのである。彼は、現世が、来世のための準備の時であることを示した。もし人が、現在の特権と機会をなおざりにするならば、永遠の損失をこうむるのである。新たな恩恵期間は、もはや与えられないのである。

パウロは特に、神の律法の遠大な要求について詳しく語った。パウロは、律法が人間の道徳性の奥深い秘密をさぐり、他の人々が見も知りもしない隠れたことをあらわに示すものであることを示した。手が行い、または口が語ることなど、外的生活があらわすことは、人間の道徳的品性を十分に示していない。律法は彼の思想と動機と目的を探る。人目に触れずにひそんでいる嫉妬、憎しみ、情欲、野心などの隠れた邪念、また、魂の奥深くで思いめぐらされたが、機会がなかったために実行されなかった邪悪な行為など、これらすべてを、神の律法は有罪と宣告するのである。

パウロは、罪のための大いなる犠牲キリストに、聴衆の心向けようと努力した。彼は、犠牲が、き

たるべき良いことの影であることを示し、その次に、これらすべての儀式の実体として、キリストを紹介したのである。実に、彼こそ、これらの儀式が、墮落した人類の生命と希望の唯一の根源として指し示したおかたであつた。古代の聖人たちは、キリストの血を信じる信仰によつて救われた。彼らは、犠牲の動物の死の苦しみを見て、各時代の深淵のかたに、世の罪を取り除く神の小羊を見たのである。

神が、造られたすべてのものの愛と服従を要求なさるのは、当然のことである。神は、律法の中に、義の完全な標準をお与えになつた。しかし、多くの者は、彼らの創造主を忘れ、神のみこころに反して自分勝手な道を選んだ。彼らは、天のように高く、宇宙のように広い愛に、敵意を示すのである。神は邪悪な人々の標準に迎合するために、神の律法の要求を下げることはおできにならない。また、人間は自分の力で、律法の要求に従うこともできないのである。罪人は、ただ、キリストを信じる信仰によつて、罪から清められ、創造主の律法に従うことができるようになるのである。

こうして、囚人パウロは、ユダヤ人と異邦人に対する神の律法の要求について力説し、軽べつされたナザレ人、イエスを、神のみ子、世のあがない主として紹介した。

ユダヤの王女ドルシラは、彼女が恥知らずにも違反した律法の、神聖な性質を熟知していたのであるが、カルバリーの救い主に対する偏見のゆえに、心をかたくなにして、いのちのことばを受け入れなかった。しかしペリクスは、それまで一度も真理を聞いたことがなかった。そして、神の霊が彼の心に罪の自覚を与えたときに、彼は激しく動揺した。今や、良心が目覚め、良心の声が聞こえてきた。そして

ペリクスは、パウロの言葉が真実であると感じた。過去の罪の記憶がよみがえった。彼の若い時の放蕩と流血の秘密、また、後年の暗い記録が、恐ろしいばかりに鮮やかに彼の前にあらわれた。彼は、自分が、放蕩で残酷で強欲な人間であることを悟った。真理がこのように彼の心に罪を自覚させたことは、これまでになかった。彼が、このように恐怖におののいたこともなかった。彼の生涯の犯罪の秘密がすべて、神の前に明らかであって、彼はその行為に従って審判を受けなければならないという思いが、彼をふるえおののかせた。

しかし、彼は、罪を自覚して悔い改めに至る代わりに、これらの不快な記憶を忘れ去ろうとした。そこで、パウロとの会談は短縮された。「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」と彼は言った。

ペリクスの行動とピリピの獄吏の行動との間には、なんと大きな相違があったことだろう。パウロがペリクスの囚人であったのと同様に、主のしもべたちは獄吏の囚人であった。彼らが神の力に保護されているという証拠、苦難と屈辱のもとにあって喜び、地震によって地がゆれ動く時に恐れず、キリストのようなゆるしの精神を彼らが持っていることなどが、獄吏の心に罪を悟らせるに至り、彼は、ふるえおののいて罪を告白し、ゆるしを与えられた。ペリクスもふるえた。しかし、彼は悔い改めなかった。獄吏は、喜んで神の霊を彼の心と彼の家庭に迎え入れた。ペリクスは、神の使者に去ることを命じた。一人は神の子となって天国の世嗣となることを選び、もう一人は悪をなす者と運命を共にしたのである。

その後、二年の間、パウロに対して何の処置も取られなかったが、しかし彼は、監禁されたままであった。ペリクスは、幾度か彼を訪れ、彼の話に熱心に耳を傾けた。しかし、彼の、一見友好的な態度の真の動機は、利益を得たいからであった。そして彼は、多額の金を支払えば釈放されることができると、ほのめかすのであった。しかし、パウロは、高貴な品性の持ち主であったので、わいろを使って自由を得ることは、とうていできなかった。彼は、何の犯罪も犯していなかったのであるから、自由を得るためにあえて悪を犯そうと思わなかった。さらに、彼は、身代金を支払いたいと考えたとしても、貧しくて彼自身はとも払えなかった。そして、自分のために、信者たちの同情と寛大さに訴えたくはなかった。また彼は、自分が神の手の中にあるという自覚を持っていた。だから、自分に対する神のみこころに介入したくなかったのである。

ペリクスは、ついに、ユダヤ人に対する重大な罪悪のゆえにローマに召還された。ペリクスは、召還に答えてカイザリヤを去る前に、「ユダヤ人の歓心を買おうと思って」、パウロを監禁したままにしておいた。しかし、ユダヤ人の信任をもう一度得ようとするペリクスの試みは、うまく行かなかった。彼は、恥をこうむって免職された。そして、ポルキオ・フェストが彼の後任として任命を受けて、カイザリヤに司令部を設けた。

パウロが、正義、節制、未来の審判などについて論じた時に、天からの光がペリクスの心に輝いた。それは、彼が自分の罪を認めて、それを捨て去るために、天から与えられた機会であった。しかし、彼

は、神の使者にむかって、「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」と言った。彼は、あわれみの最後の機会を軽視した。その後、彼は、二度と神からの召しを受けなかったのである。

第四〇章 パウロ、カイザルに上訴する

本章は、使徒行伝二五章一節―二節に基づく

「さて、フェストは、任地に着いてから三日の後、カイザリヤからエルサレムに上ったところ、祭司長たちやユダヤ人の重立った者たちが、パウロを訴え出て、彼をエルサレムに呼び出すよう取り計らっていたきたいと、しきりに願った。」彼らは、このように願い出て、エルサレムへ行く途中で待ち伏せして、彼を殺す考えであった。しかし、フェストは、彼の立場の責任を認めていたので、パウロを呼び出すことを、ていねいに断った。彼は次のように言った。「訴えられた者が、訴えた者の前に立つて、告訴に対し弁明する機会を与えられない前に、その人を見放してしまうのは、ローマ人の慣例にはないことである」。カイザリヤに、「自分もすぐ……帰ることになっている……『では、もしあの男に何か不都合なことがあるなら、おまえたちのうちの有力者らが、わたしと一緒に下って行って、訴えるがよからう』」と彼は言った。

これは、ユダヤ人が欲したことではなかった。彼らは、前にカイザリヤで失敗したことを忘れてはいなかった。パウロの沈着な態度と強力な弁論とに比較して、彼ら自身の悪意に満ちた精神と根拠のない告訴は、いかにも見苦しい光景を呈した。彼らは、ふたたび、裁判のためにパウロがエルサレムに送られることを求めたが、フェストは、カイザリヤにおいてパウロを公正に裁判しようと固く決意したのである。神は摂理のうちに、フェストの決心をよいほうに導き、パウロのいのちを延ばされたのであった。

ユダヤ人の指導者たちは、彼らの計略が阻止されたので、直ちに、総督の法廷でパウロを告訴する準備をした。フェストは、数日エルサレムに滞在したあとで、カイザリヤに帰り、「その翌日、裁判の席について、パウロを引き出すように命じた。」「エルサレムから下ってきたユダヤ人たちが、彼を取りかこみ、彼に対してさまざまな重い罪状を申し立てたが、いずれもその証拠をあげることではできなかった。」ユダヤ人は、今回は弁護人なしで、自分たちで告訴することにした。裁判が進行するにつれて、パウロの沈着さと虚心坦懐とは、彼らの供述が偽りであることを明らかに示した。

フェストは、議論している問題が全くユダヤ人の教義に関するものであって、パウロには何一つ告訴に該当するものはなく、パウロは死刑の宣告、いや投獄の宣告にさえ当たらないことを、正しく理解した。しかし、もしパウロが罪に定められず、あるいは、彼らの手に渡されないとするならば、どんなに彼らが怒り狂うかが、フェストにはよくわかった。そこで、フェストは、「ユダヤ人の歡心を買おうと思つて、パウロに向かい、彼がフェストの保護のもとにエルサレムへ行つて、サンヒドリンの裁判を

受けたいかどうかと尋ねた。

パウロは、罪のゆえに神の怒りを招いている人々から、正しい裁判を期待することができないのを知っていた。彼は、預言者エリヤのように、天の光を拒否し、福音に対して心をかたくなにした人々よりは、異邦人の間のほうが、安全であることを知っていた。訴訟にうみ疲れ、彼の活動的な精神は、幾度もの遅延と、未決のままの長期にわたる裁判と監禁とに、耐えられなくなった。そこで、彼は、ローマの市民としての特権を活用して、カイザルに上訴することに決めた。

パウロは、総督の問いに答えて言った。「わたしは今、カイザルの法廷に立っています。わたしはこの法廷で裁判されるべきです。よくご承知のとおり、わたしはユダヤ人たちに、何も悪いことをしてはいません。もしわたしが悪いことをし、死に当るようなことをしているのなら、死を免れようとはしません。しかし、もし彼らの訴えることに、なんの根拠もないとすれば、だれもわたしを彼らに引き渡す権利はありません。わたしはカイザルに上訴します」。

フェストは、ユダヤ人がパウロを殺害しようと陰謀をめぐらしていたことを何も知らなかったのも、カイザルへのこの上訴を聞いて驚いた。しかし、パウロの言葉は、法廷の審議を終結させた。「そこでフェストは、陪席の者たちと協議したうえ答えた、『おまえはカイザルに上訴を申し出た。カイザルのところに行くがよい』」。

こうして、神のしもべは、もう一度、偏見と自己を義とする精神から生じた憎しみのために、異邦人

の保護を求めなければならなかった。預言者エリヤはこの同じ憎しみを避けて、ザレパテ（サレプタ）のやもめの助けを求めなければならなかった。そしてまた、この憎しみのゆえに、福音の使者たちはユダヤ人を離れて、異邦人に彼らの使命を伝えなければならなかった。そして、現代の神の民は、今なお、同じ憎しみに当面しなければならない。キリストの弟子であると自称する多くの人々の中には、ユダヤ人の心の大半を占めていたのと同じ誇りや形式主義や利己主義、同じ圧迫の精神が存在しているのである。将来、キリストの代表者であると主張する人々が、キリストと使徒たちをあしらった祭司やつかさたちと同様の行為をするであろう。やがて、神に忠実なしもべたちが通過しなければならない大いなる危機において、彼らは、同様の心のかたくなさ、同様の残酷な決意、同様の頑強な憎しみに出会わなければならない。

来るべき悪しき日において、良心の命じるところに従って、恐れることなく神に仕えようとする者はすべて、勇氣と堅実さと、神および神のことばに対する知識を持っていなければならない。神に忠実な者は、迫害を受け、その動機は疑われ、その最善の努力は曲解され、その名は悪しき者として除外される。サタンは、あらゆる欺瞞の力を用いて人々の心に働きかけ、理解力をにぶらせ、悪を善と見せかけ、善を悪と見せかけようとする。神の民の信仰が強く純潔であればあるほど、そして、神に従おうとする彼らの決意が固ければ固いほど、サタンは、義人であると主張しながら神の律法をふみにじっている人の怒りを、彼らに対して燃えたたせようとする。ひとたび聖徒たちに伝えられた信仰を固く保ってい

くには、最も堅固な信頼と最も英雄的な意志がなければならない。

神は、神の民が、間もなくやってくる危機に対して準備することを望んでおられる。準備があらうとなかろうと、彼らは、みなそれに当面しなければならない。そして、神の標準にその生活を一致させた者だけが、試練と試みの時に固く立つことができるのである。世俗の統治者たちが、宗教界の指導者たちと連合して、良心の問題について命令を発する時に、真に神を恐れ神に仕える者がだれであるかが、はつきりするのである。暗黒がその極に達するときに、神に似た品性の光が、最も輝かしく照りはえるのである。他のすべてのより頼むものが倒れ去るとき、主に固く信頼する者がだれであるかが、わかる。真理の敵があたり一面にいて、主のしもべたちに災いをもたらそうとしているときに、神は彼らを保護して、幸いをもたらされる。神は、彼らにとって、疲れた地にある大きな岩の陰のようにならるのである。

第四章 アグリッパ王大いに感銘す

本章は使徒行伝二五章一三節 二七節、
二六章に基づく

パウロがカイザルに上訴していたので、フェストは彼をローマに送るよりほかに仕方がなかった。しかし適当な船がみつからないままに、しばらくの時が過ぎた。また他の囚人たちもパウロといっしょに送られることになっていたので、それらの事件の審理のために遅延が生じた。そのためにパウロは、カイザリヤの主立った人たちとヘロデ王家の最後の王であるアグリッパ二世の前で、自分の信仰について申し述べる機会が与えられた。

「数日たった後、アグリッパ王とベルニケとが、フェストに敬意を表するため、カイザリヤにきた。ふたりは、そこに何日間も滞在していたので、フェストは、パウロのことを王に話して言った、『ここに、ペリクスが囚人として残して行ったひとりの男がいる。わたしがエルサレムに行った時、この男のことを、祭司長たちやユダヤ人の長老たちが、わたしに報告し、彼を罪に定めるようにと要求した。』」

フェストは、その囚人パウロがカイザルに訴えたいと言いつまんで話し、パウロがフェストの前で最近受けた裁判の事を告げた。そして、ユダヤ人たちがパウロを告発していたが、それはフェストから見ればなんら告発すべきものではなく、ただ、「彼ら自身の宗教に関し、また、死んでしまったのに生きているとパウロが主張しているイエスなる者に関する問題に過ぎない」と言った。

フェストがそう説明すると、アグリッパは興味をわいてきて、言った、「わたしも、その人の言い分を聞いて見たい」。そこで、彼の希望にそつて、その翌日会うことに取りきめられた。「翌日、アグリッパとベルニケとは、大いに威儀をととのえて、千卒長たちや市の重立った人たちと共に、引見所にはいつてきた。すると、フェストの命によつて、パウロがそこに引き出された。」

来賓たちのために、フェストはこの機会を印象的に見せびらかしたいと思つた。総督や彼が招いた人たちの高価な衣服、兵士たちの剣、隊長たちのきらめくよろいが、この場の光景をきらびやかなものにした。

さて、パウロは、まだ手錠をかけられたまま、集まつた人々の前に立つた。これは何と著しい対照であろう。アグリッパとベルニケは権力と地位を持っていて、そのために世人の支持を受けていた。しかし彼らは神が尊ばれる品性に欠けていた。彼らは神の律法を犯し、心も生活も墮落していた。彼らの行動は天に忌みきらわれていた。

年老いた囚人パウロは、警備の兵士につながれていて、その姿には世人が尊敬を払うようなものは何

もなかった。しかし、神のみ子への信仰のゆえに囚人として留置され、友も富も地位もないように見えるこの男に、全天は関心をよせていた。天使たちが彼につきそっていた。もしもこの光り輝く使者たちの中のひとりの栄光が輝きわたったら、王者のはなやかさも誇りも色あせたであろう。王も廷臣たちも、キリストの墓にいたローマの番人たちのように、地に打ちのめされたであろう。

フェストはみずから居並ぶ人々にパウロを紹介して言った、「アグリッパ王、ならびにご臨席の諸君。ごらんになっているこの人物は、ユダヤ人たちがこぞって、エルサレムにおいても、また、この地においても、これ以上、生かしておくべきでないと叫んで、わたしに訴え出ている者である。しかし、彼は死に当ることは何もしていないと、わたしは見ているのだが、彼自身が皇帝に上訴すると言い出したので、彼をそちらへ送ることに決めた。ところが、彼について、主君に書きおくる確かなものが何もないので、わたしは、彼を諸君の前に、特に、アグリッパ王よ、あなたの前に引き出して、取調べをしたのち、上書すべき材料を得ようと思う。囚人を送るのに、その告訴の理由を示さないということは、不合理だと思えるからである」。

そこでアグリッパ王はパウロに弁明の自由を与えた。使徒はきらびやかなみせびらかしにも、高位高官の聴衆にもるうばいしなかった。彼は世俗の富や地位になんの価値もないことを知っていたからである。この世の見せびらかしや権力は、一瞬たりとも彼の勇気をくじいたり、自制心を失わせたりすることはできなかった。

「アグリッパ王よ、ユダヤ人たちから訴えられているすべての事に関して、きょう、あなたの前で弁明することになったのは、わたしのしあわせに思うところであります。あなたは、ユダヤ人のあらゆる慣例や問題を、よく知り抜いておられるかたですから、わたしの申すことを、寛大なお心で聞いていただきたいのです」とパウロは言った。

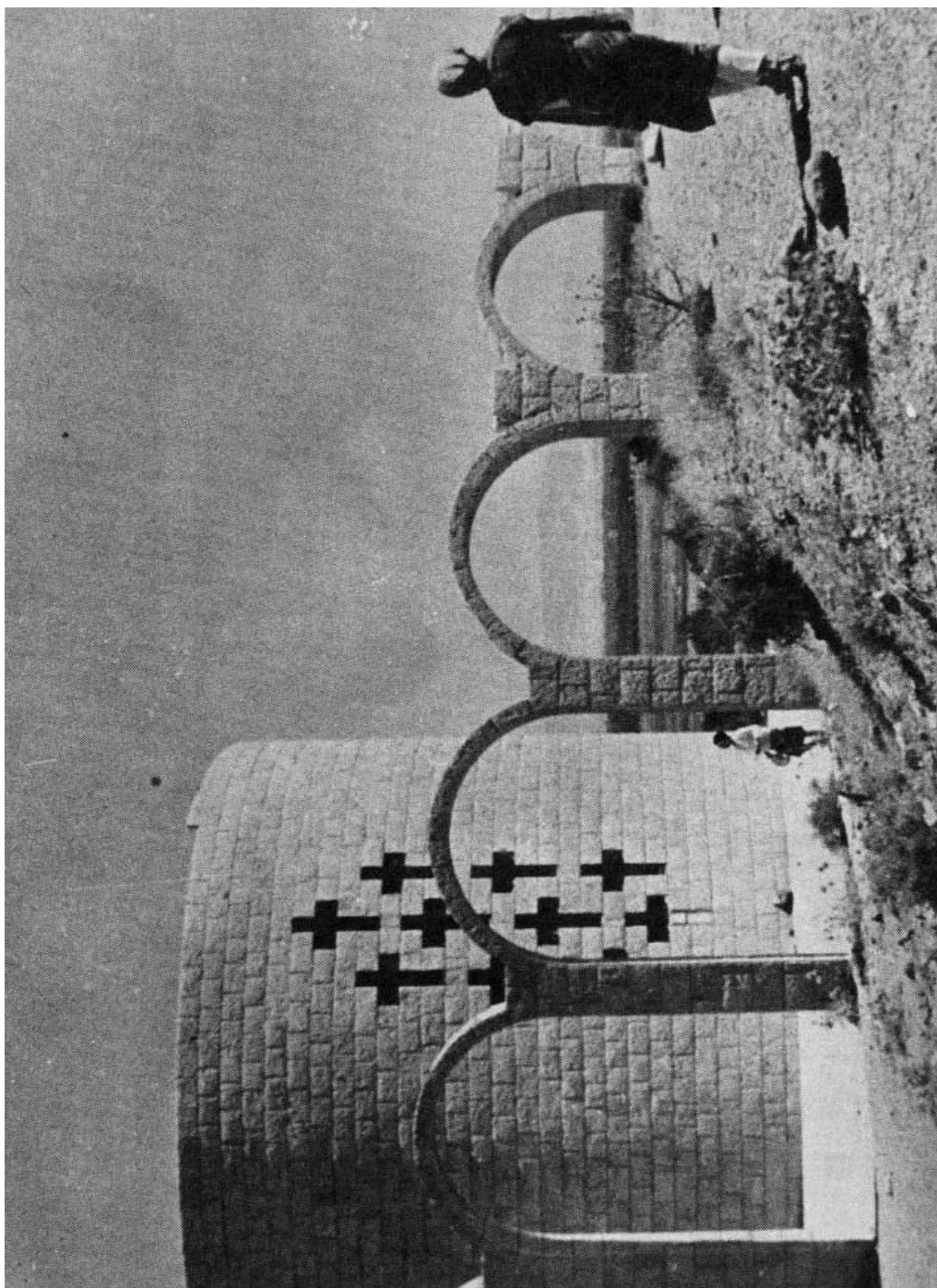
パウロは、以前のかたくなな不信からいかにしてナザレのイエスを世の救い主として信ずる信仰に至ったかの、改宗の物語をした。彼は天来の異象について述べた。その異象は、最初は彼を言いようのない恐怖で満たしたが、のちには、最も大きな慰め、神の栄光のあらわれとなったのである。その栄光のあらわれの中に、彼が軽蔑し、憎んでいたかたが王座にすわっておられた。彼はその時まで、そのかたの弟子たちを殺そうとしていたのである。その時からパウロは人を生まれ変わらせる恵みの力によって、新しい人、真実で熱烈なイエスの信者となったのである。

パウロは、アグリッパの前で、キリストのこの世のご生涯に関係したおもな出来事のあらましを明瞭に力強く述べた。彼は預言に示されたメシヤは、ナザレのイエスとなつてすでに現れたことを証言した。彼は旧約聖書の中にメシヤは庶民の一人として現れるということが明示されていること、また、モーセと預言者たちによって述べられたあらゆる細かいことが、イエスのご生涯に成就されたことを説明した。失われた世を救うために、神の聖なるみ子は、恥をもちとわず十字架に耐え、死と黄泉にうち勝って、天にのぼられたのである。

キリストが死からよみがえられたということが、なぜ信じられないことに思えるのだろうか。パウロは論じた。かつては彼もそう思ったことがあるが、しかし今は自分自身が見たり聞いたりしたことを、どうして信じないでいられようか。ダマスコの入口で彼は、十字架につけられてよみがえられたキリストを本当に見たのである。それはエルサレムの町を歩き、カルバリーで死に、死のなわめを断ち切って、天へのぼられたかたであつた。パウロはケパヤヤコブやヨハネやその他の弟子たちと同じように、イエスを見て、イエスと語り合つた。そのみ声は、よみがえられた救い主の福音をのべ伝えよと彼にお命じになっていた。どうして従わないでいられようか。ダマスコで、エルサレムで、ユダヤ全国で、遠い地方で、彼は十字架につけられたイエスについてあかしし、あらゆる階級の人々に「悔い改めて神に立ち帰り、悔改めにふさわしいわざを行うようにと、」説いた。

「そのために、ユダヤ人は、わたしを宮で引き捕えて殺そうとしたのです。しかし、わたしは今日に至るまで神の加護を受け、このように立って、小さい者にも大きい者にもあかしをなし、預言者たちやモーセが、今後起るべきだと語つたことを、そのまま述べてきました。すなわち、キリストが苦難を受けること、また、死人の中から最初によみがえって、この国民と異邦人との、光を宣べ伝えるに至ることを、あかしたのです」とパウロは言つた。

居並ぶ人々はみな、パウロのすばらしい体験談に魅せられて聞き入っていた。使徒は自分の好きな話題を強調していた。聞いている者たちは、彼の誠実さを疑うことができなかった。しかし、彼の説得力



コーカスのパウロ教会 ダマスコの南西一五キロ、シヘブル・ヒル・アスワドの北麓（標高七七九メートル）に、パウロの回心を記念して建立されたもので、この地点からは緑地に囲まれたダマスコを一望に収めることができる。この教会は一九六五年にロシアの総主教テオドシウス四世によって建立されたものである。

のある雄弁が最高潮に達しているとき、フェストにさえぎられた。フェストは大声で言った、「パウロよ、おまえは気が狂っている。博学が、おまえを狂わせている」。

パウロが答えた、「フェスト閣下よ、わたしは気が狂ってはいません。わたしは、まじめな真実の言葉を語っているだけです。王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対しても、卒直に申し上げているのです。それは、片すみで行われたのではないのですから、一つとして、王が見のがされたことはないと信じます」。それから彼は、アグリッパに面と向かって話しかけた、「アグリッパ王よ、あなたは預言者を信じますか。信じておられると思います」。

アグリッパは深く感動して、その瞬間、自分の周囲の事情や地位の威厳を忘れた。彼は、ただ、聞いた真理だけを意識し、自分の前に立っている謙虚な囚人をただ、神の使者と見て、思わず知らず「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしている」と答えた。

使徒は熱心に答えた、「説くことが少しであろうと、多くであろうと、わたしが神に祈るのは、ただあなただけでなく、きょう、わたしの言葉を聞いた人もみな、わたしのようになって下さることです。このような鎖は別ですが」と言いながら、鎖につながれた両手を上げた。

公平に評すれば、フェストやアグリッパやベルニケが、使徒を拘束している鎖をつけていてもよかつたであろう。みんなは重罪を犯していた。これらの犯罪者たちは、その日、キリストのみ名による救いが与えられていることを聞いていた。少なくとも一人は、提供されているその恵みとゆるしをほとんど

受け入れる気持ちになっていた。しかしアグリッパは提供された恵みをしりぞけ、はりつけにされたあがない主の十字架を拒んだのである。

王の好奇心は満たされた。彼は座席から立ち上がり、面会が終わったことを合図した。列席者たちは解散しながら、口々に言った、「あの人は、死や投獄に当るようなことをしてはいない」。

アグリッパはユダヤ人であったが、パリサイ人の偏屈な熱狂や偏見を持たなかった。彼はフェストに言った、「あの人は、カイザルに上訴していなかったら、ゆるされたであろうに」。しかし、この件は、更に高い法廷に委託されていたので、今は、フェストにもアグリッパにも司法権がなかった。

第四二章 航海と難破

本章は使徒行伝二七章、二八章一節 一〇節に基づく

ついに、パウロはローマへ向かった。「さて、わたしたちが、舟でイタリアに行くことが決まった時、パウロとそのほか数人の囚人とは、近衛隊の百卒長ユリアスに託された。そしてわたしたちは、アジア沿岸の各所に寄港することになっているアドラミテオの舟に乗り込んで、出帆した。テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した。」

紀元一世紀には、海の旅には特別な困難と危険がつきものだった。船員たちは一般に太陽と星の位置によつて航路を定めた。だから太陽や星が出ていないで、あらしの兆候があるときには、船主たちは海へ出ることを恐れた。一年の一時期でも、安全な航海はほとんど不可能であった。

使徒パウロはいま、イタリアへの長い退屈な航海の間、鎖につながれた囚人として、彼の運命にふりかかる苦しい経験を耐え忍ばねばならないことになった。彼の運命の苦難をやわらげた一つの事は、ル

力とアリスタルコと親しく交わることを許されたことであつた。のちに彼は、コロサイ人への手紙の中に、アリスタルコについて「一緒に捕われの身となつてゐる」と述べているが、彼は苦難の中にあるパウロに仕えるために、自ら進んでパウロと共に捕われの身になつたのである（コロサイ四一〇）。航海は順調に始まつた。翌日彼らはシドンの港にとどまつた。ここで百卒長ユリアスは「パウロを親切に取り扱い」、そこにクリスチャンたちがいると聞かされると、パウロが「友人をおとずれてかんた

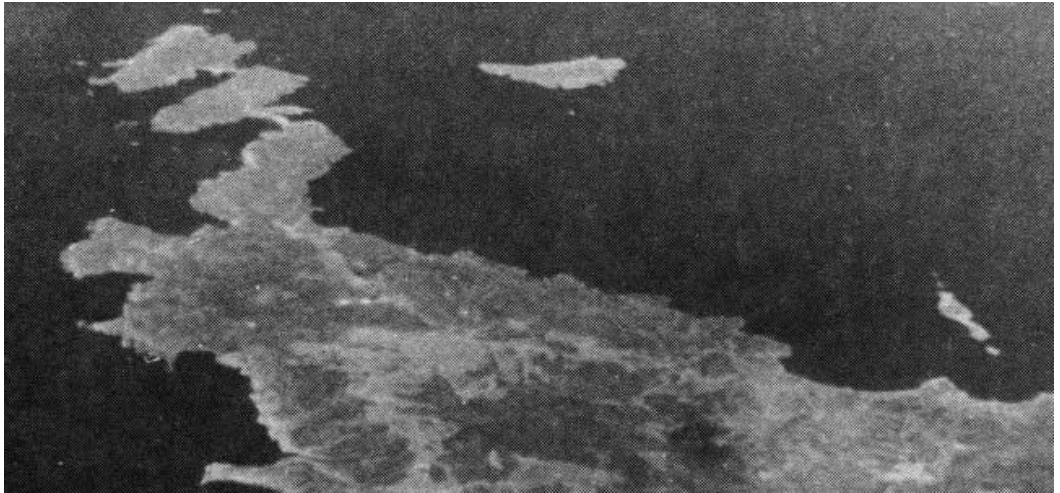
いを受けることを、許した」。健康の弱つていた使徒パウロは、この許可を非常に感謝した。シドンを出帆してすぐ、船は逆風に会い、目指す進路から押し流されて、なかなか進めなかつた。ルキヤ地方のミラで、百卒長はイタリア沿岸へと向かうアレキサンドリヤの大きな船を見つけて、囚人たちをそれに乗りかえさせた。しかしなおも逆風が続いて、船は難航した。「幾日ものあいだ、舟の進みがおそくて、わたしたちは、かろうじてクニドの沖合にきたが、風がわたしたちの行く手をはばむので、サルモネの沖、クレテの島かげを航行し、その岸に沿って進み、かろうじて『良き港』と呼ばれる所に着いた」とルカは書いてゐる。

彼らは、順風になるのを待つためにしばらくのあいだ「良き港」とどまらざるを得なかつた。冬がかけ足で近づいていた。「すでに航海が危険な季節になつたので」、船の責任者たちは、航海に適した時季が終わる前に目的地に着くという望みを、あきらめなければならなかつた。「良き港」とどまるか、冬を過ごすにもっと好適な場所に行くかという問題だけを、今決定しなければならなかつた。

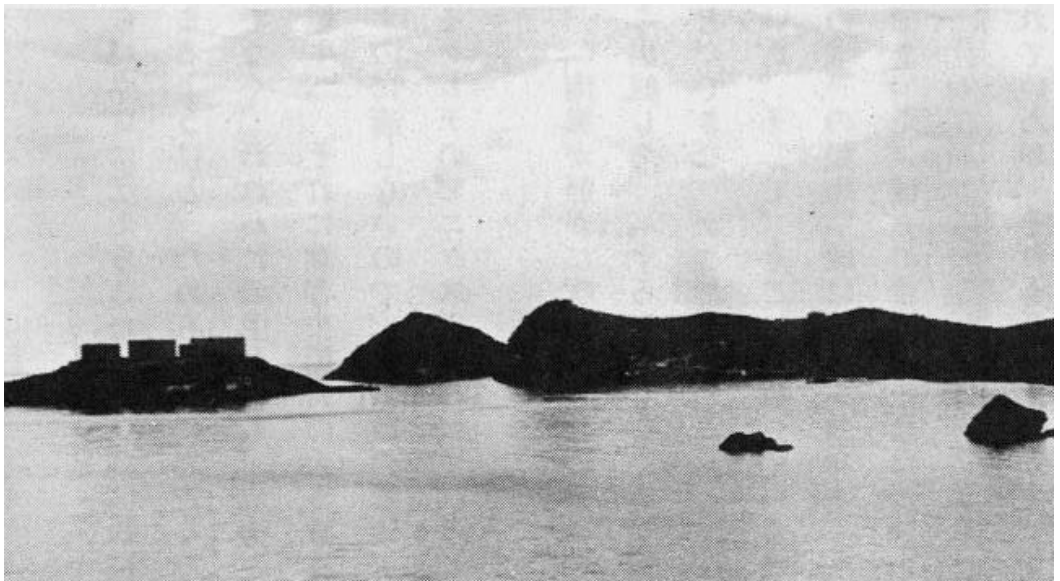
この問題が熱心に論議されてから、最後に百卒長からパウロに伝えられた。パウロは既に水夫や兵士たちの尊敬を得ていたのである。使徒は、ここにとどまるようにと、ためらわずに忠告した。「わたしの見るところでは、この航海では、積荷や船体ばかりでなく、われわれの生命にも、危害と大きな損失が及ぶであろう」とパウロは言った。しかし「船長や船主」、それに乗客や船員の大多数はこの忠告に同意しなかった。彼らが投錨していた港は「冬を過ごすのに適しないので、大多数の者は、ここから出て、できればなんとかして、南西と北西とに面しているクレテのピニクス港に行つて、そこで冬を過ごしたいと主張した」。

百卒長は大多数の意見に従うことに決めた。そこで、「南風が静かに吹いてきたので」、彼らは、すぐに目的の港に着くだろうと期待して、「良き港」から出航した。「すると間もなく……暴風が、島から吹きおろして」きて、「舟が流されて風に逆らうことができな」かった。

嵐に吹き流されて、船はクラウドという小島に近づいた。そして、そこに避難している間に、水夫たちは最悪の事態のために準備した。船が浸水した場合の唯一の脱出手段に用いる救命ボートが引かれていたが、今にもたたきつけられてばらになりそうであった。彼らの最初の仕事はこの小舟を甲板に引き上げることであつた。それから、船を補強して嵐に耐えるようにするために、できるかぎりの予防措置がなされた。小島の陰でほんのわずかの間、守られていたが、それも長くは続かず、すぐさま彼らは再び暴風の猛威にさらされた。



サルモネ岬 クレタ島の東端にあるサルモネ岬を機上から写したもの。パウロは、ローマ行きの航海で、小アジアのクニド沖から強い西風をさけて南に向かい、このクレタのサルモネ岬の沖をまわって島陰に入り、良き港に入港した。



良き港 クレタ島の中央部南港海岸にある海港で、今日カリ・リメネスと呼ぶ。写真は東方の丘から写したもので、西に石灰岩の半島が突き出して西風を防ぎ、湾の入口を二つの小島が守っている。一つの小島には四つの石油タンクがあり、給油地となっている。パウロはローマ行きのとき、この港に入港した。丘の上にはパウロの記念教会が建っている。

嵐は一晚中吹きすさび、用心したにもかかわらず、船は浸水した。「次の日に、人々は積荷を捨てはじめた。夜になっても、風は衰えなかった。嵐に打たれた船は、マストが折れ、帆が裂けて、荒れ狂う疾風の猛威であちこちへ振り回された。嵐に打たれて船がよるめき揺れるたびに、うなるような音を立てている柱やけたなどは、くだけてしまいそうであった。浸水はす早くひろがり、船客や船員たちはポンプにつききりで働いた。船の中の人々はみな一刻の休みすらなかった。「三日目には、船具までも、てずから投げすてた。幾日ものあいだ、太陽も星も見えず、暴風は激しく吹きすさぶので、わたしたちの助かる最後の望みもなくなった」とルカは書いている。

十四日間、彼らは太陽も星もない空の下をただよった。使徒パウロは、自分自身肉体的に苦しみなながらも、暗黒の時に望みの言葉を語り、危急のたびに助けの手をさしのべた。彼は信仰によって、無限の力であられる神のみ腕にすがり、心は神に支えられた。自分自身のために心配することはなかった。ローマでキリストの真理のあかしをするために、神が生かして下さることを知っていた。しかしパウロは、罪深く、墮落して、死の準備もできていない周囲のあわれな魂を切に思いやる気持ちになった。彼らの生命を助けてくださるように熱心に祈ったとき、彼の祈りがきかれたことを示された。

嵐が静まったので、パウロは甲板に立ち上がって言った。「皆さん、あなたがたが、わたしの忠告を聞きいれて、クレテから出なかったら、このような危害や損失を被らなくてすんだはずであった。だが、この際、お勧めする。元気を出しなさい。舟が失われるだけで、あなたがたの中で生命を失うものは、

ひとりもないであろう。昨夜、わたしが仕え、また拜んでいる神からの御使が、わたしのそばに立って言った、「パウロよ、恐れるな。あなたは必ずカイザルの前に立たなければならない。たしかに神は、あなたと同船の者を、ことごとくあなたに賜わっている。」だから、皆さん、元気を出しなさい。万事はわたしに告げられたとおりに行くと、わたしは、神かけて信じている。われわれは、どこかの島に打ちあげられるに相違ない。」

この言葉に、再び希望がよみがえった。船客も船員も、茫然自失の状態から目がさめた。やるべきことはまだたくさんあった。全滅をまぬがれるためには各人が最善をつくさねばならなかった。

黒々とうねる大波に翻弄され続けて十四日目の夜になった時、「真夜中ごろ」、水夫たちは砕ける波の音を聞いて、「どこかの陸地に近づいたように感じた。そこで、水の深さを測ってみたところ、二十ひろであることがわかった。それから少し進んで、もう一度測ってみたら、十五ひろであった。わたしたちが、万一暗礁に乗り上げては大変だと、人々は気づかって、ともから四つのいかりを投げおろし、夜の明けるのを待ちわびていた」とルカは書いている。

夜明けに、嵐の吹きすさぶ海岸線がぼんやり見えてきた。しかし、見なれた陸地の目じるしは何も見えなかった。前途の見通しは暗かったので、異教の水夫たちは、すっかり勇気を失い、「舟から逃げ出そうと思って、へさきからいかりを投げおろすと見せかけ」、すでに救命ボートをおろしていた。するとパウロは、彼らのさもしい計画を見破って、百卒長と兵士たちに、「あの人たちが、舟に残っていない

ければ、あなたがたは助からない」と言った。兵士たちはすぐに、「小舟の綱を断ち切って、その流れで行くままに任せた」。

最も危険な時がまだ待ちうけていた。使徒パウロは再び励ましの言葉を語り、水夫も船客も食事をするようにと勧めて言った、「あなたがたが食事もせず、見張りを続けてから、何も食べないで、きょうが十四日目にあたる。だから、いま食事を取ることを勧めます。それが、あなたがたを救うことになるのだから。たしかに髪の毛ひとつでも、あなたがたの頭から失われることはないであろう」。

「彼はこう言って、パンを取り、みんなの前で神に感謝し、それをさいて食べはじめた。」すると、疲れはて、失望していた二百七十五人の者たちも、パウロがいなかったら自暴自棄になっていたであろうが、使徒パウロと一緒に食物を取りはじめた。「みんなの者は、じゅうぶんに食事をした後、穀物を海に投げすてて舟を軽くした」。

さて、すっかり夜が明けたが、彼らは自分たちがどこにいるのかさっぱりわからなかった。しかし、「砂浜のある入江が見えたので、できれば、それに舟を乗り入れようということになった。そこで、いかりを切り離して海に捨て、同時にかじの綱をゆるめ、風に前の帆をあげて、砂浜にむかって進んだ。ところが、潮流の流れ合う所に突き進んだため、舟を浅瀬に乗りあげてしまって、へさがめり込んで動かなくなり、ともの方は激浪のためにこわされた」。

パウロと他の囚人たちは、こんどは難破より恐ろしい運命におびやかされた。兵士たちは、陸に아가

る努力をしている間は、囚人たちを監視するのが不可能なことを知った。みんな自分の生命を救うことだけが精いっぱいであった。だがもし囚人のだれかが行方不明になれば、その責任を持っていた者たちは、罰として命を取られるのである。だから兵士たちは囚人たちを全部殺してしまいたいと思った。ローマの法律ではこの残虐なやり方が認められていた。この計画は、みんなが一樣に恩義を受けていたパウロがいなかったら、即刻実行されていただろう。百卒長のユリアスは、パウロのおかげで船の全部の人たちの生命が助かったことをみとめ、その上、主が彼と共におられることを確信していたので、パウロに害を加えることを恐れた。そこで彼は、「泳げる者はまず海に飛び込んで陸に行き、その他の者は、板や舟の破片に乗って行くように命じた。こうして、全部の者が上陸して救われたのであった」。点呼してみると、欠けている者はひとりもいなかった。

難破船に乗っていた者たちは、マルタ島の土地の人々に手厚くもてなされた。「降りしきる雨や寒さをしのぐために、火をたいてわたしたち一同をねぎらってくれた」とルカは書いている。パウロは、他の人々を慰めることに尽力した人々の中にいた。「ひとかかえの柴」をたばねて「火にくべたところ、熱気のためにまむしが出てきて、彼の手にかみついた」。これを見ていた人々は恐怖におそわれた。そして、彼の鎖を見て、パウロが囚人だとわかり、人々は互いに言った、「この人は、きっと人殺しに違いない。海からはのがれたが、ディケーの神様が彼を生かしてはおかないのだ」。ところがパウロはまむしを火の中に振り落として、なんの害も被らなかった。人々はまむしの有毒性を知っていたので、パ

ウロが今にも倒れて、苦しみだすだろうと見守っていた。「しかし、長い間うかがっていても、彼の身になんの変ったことも起らないのを見て、彼らは考えを変えて、『この人は神様だ』と言い出した。」

三か月のあいだ船の同乗者たちはマルタ島に滞在したが、パウロと彼の共労者たちはその間、幾度も機会を捕らえて福音を説いた。主はすばらしい方法で彼らに働きかけられた。パウロのために、難破船の同乗者たち全員が手厚くもてなされ、彼らの必要なものはみな支給されて、マルタを出発するときには、航海に必要なものがことごとく惜しみなく用意されたのである。この島に滞在中の主な出来事は、ルカによって次のように簡潔に述べられている。

「さて、その場所の近くに、島の首長、ポプリオという人の所有地があった。彼は、そこにわたしたちを招待して、三日のあいだ親切にもてなしてくれた。たまたま、ポプリオの父が赤痢をわずらい、高熱で床についていた。そこでパウロは、その人のところにはいつて行って祈り、手を彼の上においていやってやった。このことがあってから、ほかに病気をしている島の人たちが、ぞくぞくとやってきて、みないやされた。彼らはわたしたちを非常に尊敬し、出帆の時には、必要な品々を持ってきてくれた。」

第四三章 ローマにて

本章は使徒行伝二八章一一節 三一節、及び、
ピレモンへの手紙に基づく

航海の開始とともに、百卒長と囚人たちはローマに向かって出帆した。西方へ向かう途中、マルタ島に冬ごもりをしていたデオスクリの船飾りのあるアレキサンドリヤの船にこの旅行者たちは乗り込んだ。逆風のために少々遅れたが、無事に航海を終えて、船はイタリア沿岸のポテオリという美しい港に停泊した。

ここに数人のクリスチャンがいた。彼らはパウロに七日間滞在するように頼んだ。この願いは親切な百卒長に許された。イタリアのクリスチャンたちは、ローマ人へ宛てたパウロの手紙を受けていたので、使徒の訪問をしきりに待っていたのである。彼らはパウロが囚人として来るとは思っていなかった。しかし彼はその苦難のゆえに、一層深く彼らから慕われた。ポテオリからローマまでの距離は百四十マイルあり、この海港は首都ローマとの交通が密であったので、ローマのクリスチャンたちはパウロの到来

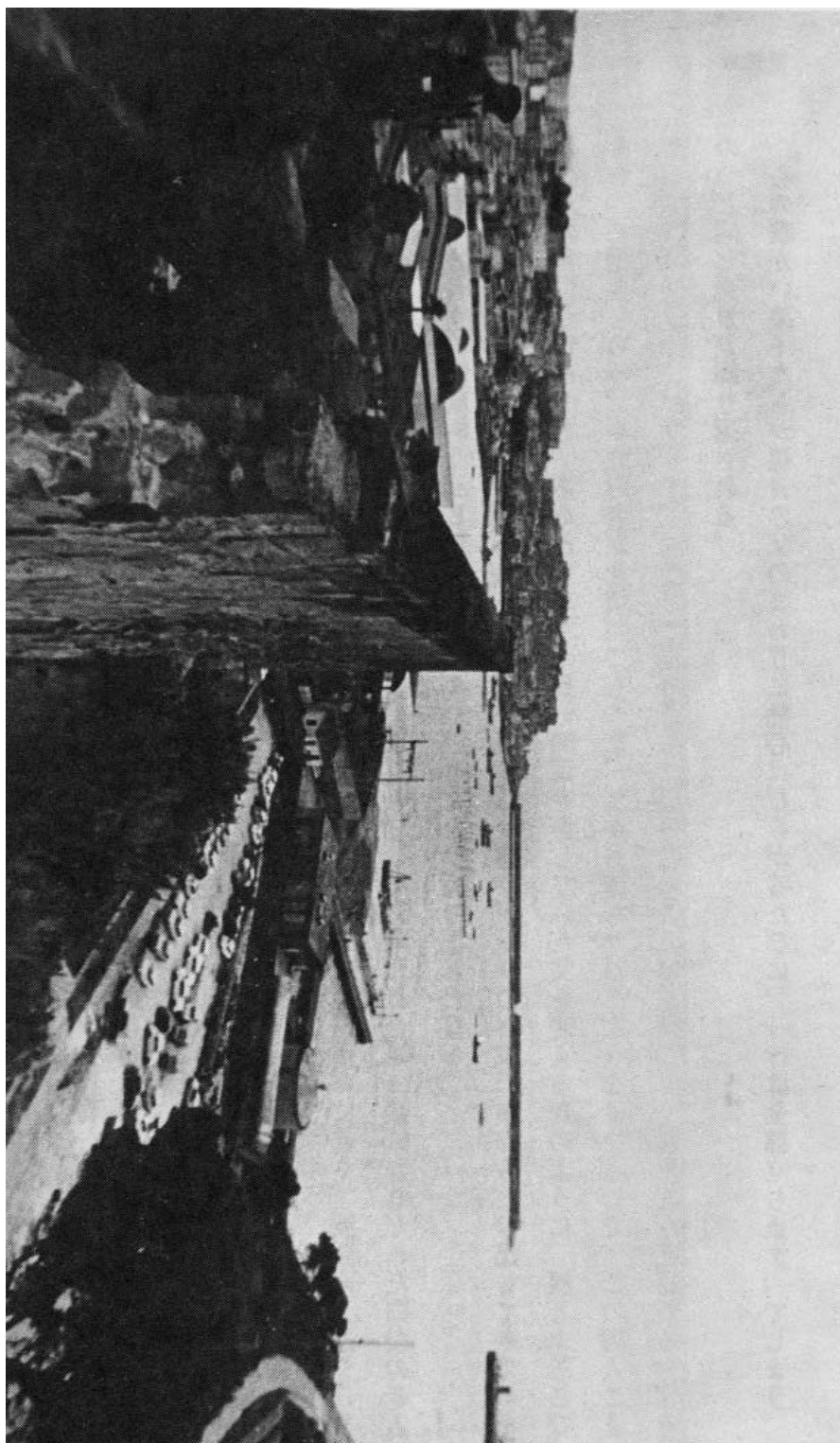
することを聞かされて、中には彼を出迎えに出た者たちもいた。

上陸して八日目に、百卒長と囚人たちはローマに向かって出発した。百卒長ユリアスは、自分の力で与えられることは何でも使徒に与えたが、囚人としての状態を変えてやることや、番兵と鎖でつながれている彼を解き放すことはできなかった。パウロは重い心で、長い間期待していた世界の首都への訪問に出発したのである。彼が予期していたこととは何と事情が違っていることであろう。鎖につながれ、汚名を着せられている身で福音をのべ伝えるとは何とということであろうか。ローマで多くの魂を真理へ導きたいという彼の希望は、当てはずれに終わる運命にあるように思えた。

ついに旅行者たちは、ローマから四十マイルのところにあるアピオ・ポロに着く。彼らが大通りにむらがる群衆をわけて進んで行くと、かたくなな顔つきをした犯罪人と一緒に鎖につながれた白髪の老人は、多くの人々の侮蔑的な流し目を受け、多くの無礼な嘲笑のまとなる。

突然歓喜の叫びがきこえたかと思うと、ひとりの男が通りがかりの群衆の中からとび出してきて、その囚人の首にしがみつки、あたかも息子が長い間留守をしていた父を迎えるかのように、涙とよるこびをもって抱きしめる。多くの者が愛情のこもった、しかも待ちかねたようなまなざしで、この囚人こそ、かつてコリントで、ピリピで、エペソで自分たちにいのちのことばを語ってくれた人だと認めるや、そのつど同じ光景が繰り返される。

心の暖かい弟子たちが福音の父のまわりに熱心にむらがるたびに、一行は全部立ち止まってしまう。



ボテオリの港 ナボリの西北西 1 km の海岸にある町で、今日はボッツオリと呼ばれる。人口 6 万人を数え、鮮魚の集散地である。これは北方に丘から写したボッツオリの港の景観。パウロはここに上陸し、アツピア街道を北上してローマに入った。

兵士たちは遅れるのでいらするが、この楽しい面会を邪魔しようとは思わない。彼らもこの囚人を尊敬し重んじるようになっていたからである。弟子たちは、そのやつれた、苦勞の刻まれている顔に、キリストのみかたたちが反映されているのを見る。彼らは、パウロを忘れたこともなければ、彼を愛する心にも変わりがないということ、また、彼らの生活を生き生きしたものにし、神に対する平和を与えてくれるよろこばしい望みが持てるのは、彼のおかげであるということ、自信をもってパウロに伝える。彼らは、特別に許されさえすれば、町までの道をずっと、愛の熱情に燃えて、パウロを肩にのせて行くであろう。

パウロが兄弟たちに会って「神に感謝し勇み立った」と述べているルカの意味深長な言葉に気がつく者はほとんどいない。パウロの鎖を恥とせず、かえって同情して泣く信者の群れの真中であって、使徒は声高らかに神を讃美した。彼の心にたれこめていた悲しみの雲は一掃された。キリスト者としての彼の生涯は試練と苦難と失望との連続であったが、このとき彼は豊かに報いられたと思った。彼は一層しつかりと足を踏みしめ、よろこびに心はずませて、彼の道を歩みつづけた。彼は過去について不平を言わず、未来を恐れもしなかった。投獄と患難が待ち受けていることを知っていたが、彼はまた、もっと恐ろしい無限のなわめから魂を救うことが彼の仕事だということを知っていて、キリストのために受ける苦しみをよろこんだのである。

ローマで百卒長ユリアスは、囚人たちを皇帝の侍衛の長に引き渡した。ユリアスがパウロについてよ

い報告をしたのと、フェストの手紙のおかげで、パウロは隊長から好意を示され、獄に放り込まれず、自分の借家に住むことを許された。やはり番兵をつけられてはいたが、パウロは自由に友人たちに会い、キリストのみわざの進展のために骨折ることができた。

その数年前にローマから追放されていたユダヤ人が帰ることを許され、今は、数多くのユダヤ人がローマにいた。パウロは、彼の敵がはいりこんできて、この人々の心を自分にそむかせる機会を得る前に、まずこの人々に自分と自分の働きのことを話そうと決心した。そこでローマに着いて三日後に、主だった人々を呼んで、自分が囚人としてローマに来た理由を簡単に率直に説明した。

「兄弟たちよ、わたしは、わが国民に対しても、あるいは先祖伝来の慣例に対しても、何一つそむく行為がなかったのに、エルサレムで囚人としてローマ人たちの手に引き渡された。彼らはわたしを取り調べた結果、なんら死に当る罪状もないので、わたしを釈放しようと思ったのであるが、ユダヤ人たちがこれに反対したため、わたしはやむを得ず、カイザルに上訴するに至ったのである。しかしわたしは、わが同胞を訴えようなどとしていたのではない。こういうわけで、あなたがたに会って語り合いたいと願っていた。事実、わたしは、イスラエルのいだいている希望のゆえに、この鎖につながれているのである」と彼は言った。

パウロは自分がユダヤ人から受けた辱めや、彼らが繰り返し彼を殺そうとしたことなどは、何も言わなかった。彼は用心深く、思いやりのある言葉で語った。人をひきつけたり、同情を求めたりしている

のではなく、真理を弁護し、福音の栄えを保とうとしていたのである。

聞いていた者たちは、これに答えて、パウロの不利になるような文書は公私ともに受け取っていないし、ローマに来たユダヤ人はだれも彼を罪人として訴えた者はいないと言った。そして彼らは、キリストを信じるパウロの信仰の理由を直接に聞きたいと、熱心に頼んで言った、「実は、この宗派については、いたるところで反対のあることが、わたしたちの耳にもはいつている」。

彼らが積極的にそれを望んだので、パウロは彼らに福音の真理を語ることができる日取りを決めさせた。きめられた日に多くの者が集まったので、「朝から晩まで、パウロは語り続け、神の国のことをあかしし、またモーセの律法や預言者の書を引いて、イエスについて彼らの説得につとめた」。彼は自分の経験を話し、簡潔に、誠実に、力強く、旧約聖書から論証を与えた。

使徒は、宗教が、慣習や儀式、信条や理論のうちにあるのではないことを教えた。もしそうだとしたら、生まれながらの人は、この世のことを理解するように、調査することによってそれを理解できるはずである。パウロは、宗教とは実的な救いの力であり、完全に神から来る原則であり、魂に働きかける神の再生力を個人的に経験することであると教えた。

パウロは、モーセがいかにも、イスラエルの民が耳を傾けなければならないあの預言者としてキリストを指し示したかということや、すべての預言者たちが、罪に対する神の偉大な救済として罪人の罪を負って下さる罪のないかた、キリストについて、いかにあかしをしてきたかということを教えた。パウロ

は彼らが型や儀式を重んじているのを誤りであるとは言わなかったが、儀式的な礼拝を厳密に保持しようとして、そのすべての制度の本体であられるキリストを拒んでしまうのだと説明した。

パウロは、自分はまだ改心していなかったときにキリストを知っていたが、それはキリストとの個人的な面識によるのではなく、他の人々と同じように、来るべきメシヤのご品性とみわざについて抱いていた単なる概念によるものだったと述べた。ナザレのイエスがこの概念を成就されなかったので、パウロはイエスを詐欺師として拒んでいた。しかし、今、キリストとその使命についての彼の見解ははるかに霊的であり、高められていた。それは彼が改心させられていたからである。使徒は、自分はキリストを肉によって知らせるのではないと断言した。ヘロデはキリストが人性をとっておられた時にキリストに会っていた。アンナスもキリストに会った。ピラトや祭司たち、役人たちも彼に会った。ローマの兵士たちも彼に会った。しかし彼らは信仰の目でキリストを見たのではない。彼らはあがめられたあがない主としてキリストを見ていなかった。信仰によってキリストを理解すること、キリストについて霊的な知識を持つことは、主が地上におられたときに主と個人的な面識があつたこと以上に望ましいことなのである。今、パウロに許されていたキリストとの交わりは、単なる地上の人間同士の交わり以上に親しいものであり、長続きするものであった。

ナザレのイエスがイスラエルの望みであることについて、パウロが知っていることを語り、見たことをあかししたとき、ほんとうに真理を求めていた人たちは納得した。彼の言葉は少なくともある人々の

心に、決してぬぐい去られることのない印象を与えた。しかし他の者たちは、聖霊の特別な光を受けている人から聖書の明白なあかしを示されても、それを受け入れることを頑固に拒んだ。彼らはパウロの議論に論駁することができなかったが、その結論を受け入れようとしなかった。

パウロがローマに着いてかなりの月日がたってから、エルサレムのユダヤ人たちがこの囚人を直訴しにやってきた。彼らはこれまで何度も自分たちの計画をくじかれてきた。しかも今度はパウロがローマ皇帝の最高法廷によってさばかれることになっていたので、彼らはまたもや敗北を被るような危険は冒したくなかった。ルシヤもペリクスもフェストもアグリッパも、みなパウロの無罪を信ずると宣告した。パウロの敵たちは陰謀によって皇帝を動かす以外に成功の望みはなかった。彼らの計画を練って実行する余裕を見るためには、遅延が彼らの目的を促進することになる。そこで彼らは、使徒を直接告発するのをしばらく見合わせていた。

神の摂理によって、この遅延は福音の促進という結果をもたらした。パウロの責任を持っていた人たちの好意により、彼は便利な家に住むことを許され、この家で友人たちと自由に会い、また福音を聞きにやって来る人たちに福音を示すことができた。こうしてパウロは二年間働きを続けて「はばからず、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えつづけた」。

この期間中も、パウロは多くの土地に建てた諸教会のことを忘れていなかった。使徒は新しく信仰をもった人々を襲う危険を考えて、警告や実際の教訓を手紙に書いて送り、できるだけ彼らの必要を満た

そうと努めた。そして彼は、これらの教会ばかりでなく、彼がまだ訪問していない地方にも、ローマから献身した働き人を送って働かせた。このような働き人は賢い牧者として、パウロが立派に始めた働きを強化した。そしてパウロは彼らと常に連絡を保っていて、教会の状態や危険について知り、すべての教会を賢明に監督することができた。

こうして、一見活動的な働きが絶たれたように見えたが、パウロは、以前のように諸教会を自由に訪問して歩いた年月よりもっと広い、永續性のある感化を及ぼした。主の囚人として、彼は兄弟たちに一層強い愛情をいだいた。キリストのためのつながれの身で書いた言葉は、彼が直接彼らと共にいたとき語った言葉より、もっと熱心な注目と尊敬を集めた。信者たちは、パウロが彼らから引き離される時まで、彼が彼らのために負い続けた責任の重さに気づかなかった。これまで彼らは、パウロのような知恵や機転や不屈の精力に欠けているので責任や重荷を負えないと言いのがれをしてきた。しかし彼らは、今、これまでパウロの個人的な働きを重んじないで、教訓を避け、それを学ぶ経験を持たずにいたので、パウロの警告や勧告や忠告をありがたと思った。そして、パウロの長い投獄中の勇氣と信仰について学び、彼らはますますキリストのみわざに対する忠誠心と熱意をかき立てられた。

ローマにいたパウロの助力者たちの中には、以前の仲間や共労者たちが大ぜいいた。「愛する医者」ルカは、エルサレムへの旅ではパウロに同行し、カイザリヤでの二年間の監禁中も、またローマへの危険な航海中もパウロと共にいたが、今もなおパウロと共にいた。テモテもパウロに仕えて彼を慰めた。

「主にあつて共に僕であり、また忠実に仕えている愛する兄弟」テキコは、使徒のそばに雄々しく立っていた。デマスとマルコも彼と共にいた。アリストアルコとエパfrasはパウロと「一緒に捕われの身」となっていた（コロサイ四ノ七 一四を参照）。

マルコのクリスチャン経験は、信仰を告白した当初のころから次第に深まってきた。彼はキリストの一生と死について綿密に研究するにつれて、救い主の使命、その辛勞と戦いをはっきり把握できるようになった。キリストの手足の傷あとの中に、人類のためにささげて下さった奉仕のしるしと、失われて滅びゆく者を救うために示された自己放棄の深さを認めて、マルコは喜んで主にならつて自己犠牲の道を歩むようになっていた。今彼は捕らわれの身となつたパウロと運命を共にすることによつて、キリストを得ることは無限に益となることであり、世を得て、あがないのためにキリストが血を流された魂を失うことは無限に損となることを、一層よく悟ることができた。彼は激しい試練や逆境に会つてもぐらつかず、最後までパウロの愛する賢い助け手となつた。

デマスはしばらくの間すっかりしていたが、後になつてキリストのみわざを見捨てた。これについてパウロは、「デマスはこの世を愛し、わたしを捨て」たと書いた（テモテ第二・四ノ一〇）。この世の利益のためにデマスは高尚で立派な報酬をすべて手放した。なんと先見の明のない交換であろう。この世の富や名誉だけを持って、たとえどんなにそれが豊かだと誇つてみたところで、デマスはほんとうに貧しかった。一方、マルコはキリストのために苦しむことを選び、天において神の相続人、キリストと

共同の相続人とみなされて永遠の富を持っていた。

パウロがローマで働いた結果、神に心をささげた者の中にオネシモがいた。オネシモは異教徒で奴隷の身であったが、その主人にあたるコロサイの信者ピレモンに不都合なことをしたためにローマに逃げて来ていた。パウロはあわれな逃亡者が困って苦しんでいるのを親切に助けてやり、それから彼の暗い心に真理の光を照らそうと努めた。オネシモはいのちの言葉に耳を傾け、罪を告白して、キリストを信じる信仰へと改心した。

オネシモは信心深く、誠実であつたので、パウロに愛された。パウロを慰めるやさしい心づかいや、福音の働きを進める熱意も、パウロの好むところであつた。パウロは、オネシモが伝道の働きに非常に役に立つ性質をもっているのを認めて、すぐピレモンのところへ帰ってゆるしを請い、そして将来の計画をたてるようにすすめた。使徒はピレモンが失った金額についての責任を負うと約束した。小アジアの諸教会にあてた手紙を持たせて、テキコを出発させようとしていたところであつたので、オネシモと一緒に連れて行かせた。悪い事をした自分から主人の前に出て行くことは、このしもべにとってつらい試みではあつたが、彼は本当に改心していたので、この義務を回避しなかった。

パウロはピレモンあての手紙をオネシモに持たせた。その手紙の中で、使徒はいつものように上手に、真心をこめて、悔い改めている奴隷のために弁護し、これから彼の奉仕を受けたいという願いを表明した。その手紙は友人として、また共労者としてピレモンに愛情をこめたあいさつで始まっている。

「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしは、祈の時にあなたをおぼえて、いつもわたしの神に感謝している。それは、主イエスに対し、また、すべての聖徒に対するあなたの愛と信仰とについて、聞いているからである。どうか、あなたの信仰の交わりが強められて、わたしたちの間でキリストのためになされているすべての良いことが、知られて来るようになってほしい。使徒は、ピレモンが身につけているしっかりした意図や立派な品性は、みなキリストの恵みによるものであることを彼に思い起こさせた。このキリストの恵みだけが、彼を邪悪な者や罪深い者たちとは違うものにしていたのである。同じ恵みが、悪質な犯罪者を神の子とし、役に立つ福音の働き人とすることができた。

パウロはピレモンに、クリスチャンとしての義務を果たすよう勧めることもできたが、そうせずに懇願の言葉を選んだ。「すでに老年になり、今またキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロが、捕われの身で産んだわたしの子供オネシモについて、あなたにお願いする。彼は以前は、あなたにとって無益な者であったが、今は、あなたにも、わたしにも、有益な者になった。」

使徒は、ピレモンがオネシモの改心を認めて、その悔い改めた奴隷を、自分の子供として迎え入れ、
「もはや奴隷としてではなく、奴隷以上のもの、愛する兄弟として」、オネシモが自分から以前の主人と共に住みたいと思うようになるほどの愛情を、彼に示してほしいとピレモンに頼んだ。パウロは、ピレモン自身もそうしたであろうと思われるように、捕らわれの身となっている自分に仕えることのでき

る者として、オネシモを引きとめておきたいと言った。しかし、ピレモンが自発的にこの奴隷を解放しないかぎり、自分に仕えさせようとは思わなかった。

使徒パウロは、主人たちが奴隷たちに厳しい仕打ちをしていることをよく知っていた。また、ピレモンが彼の奴隷の振る舞いにひどく怒っていることも知っていた。パウロは、クリスチャンとしてのピレモンの真情あふれるやさしい気持ちをかき立てるような方法で、彼に手紙を書こうとした。オネシモは改心して信仰にある兄弟となっていたので、この新しい改心者に加えられる罰はパウロ自身に加えられるもののように思われた。

パウロは、この罪を犯した者が罰を受けずにすむように、また、失った特権を再び得ることができるよう、オネシモの負債を支払うことを進んで申し出た。「そこで、もしわたしをあなたの信仰の友と思ってくれるなら、わたし同様に彼を受け入れてほしい。もし、彼があなたに何か不都合なことをしたか、あるいは、何か負債があれば、それをわたしの借りにしておいてほしい。このパウロが手ずからしるす、わたしがそれを返済する」とパウロはピレモンに書き送った。

これは悔い改めた罪びとに対するキリストの愛をあらわすのになんとふさわしい実例であろう。主人のものを横領した奴隷は、それを償うべき何ものも持たなかった。神に仕えるべき年月を横取りしてきた罪びとには、その負債を取り消す方法がない。イエスは、罪びとと神の間にはいつて、わたしが負債を支払います、罪びとを赦してください、彼の代わりにわたしが罰を受けます、と言われる。

パウロは、オネシモの負債を引き受けると申し出てのち、ピレモン自身が使徒に負うところがいかに大きいかを思い起こさせた。神がパウロを、ピレモンの改心に力を貸すものとされたのであるから、ピレモンは自分自身をパウロに負っていることになった。それからパウロは、やさしく熱心に訴えて、ピレモンが惜しみなく聖徒たちを元気づけたように、よろこびとなるこの申し出を聞き入れて、パウロをさわやかな気持ちにさせてほしいと懇願した。「わたしはあなたの従順を堅く信じて、この手紙を書く。あなたは、確かにわたしが言う以上のことをしてくれるだろう」とパウロはつけ加えた。

ピレモンへのパウロの手紙は、福音が主人としもべとの関係に及ぼす影響について教えている。奴隷所有は、ローマ帝国内に行きわたった既定の制度で、パウロが働いていた教会のほとんどどこでも主人と奴隷の姿が見られた。奴隷の数が自由市民の人口を大きくしのいでいるような都市では、しばしば、彼らを服従させるために恐ろしく厳格な法律が必要なものとみなされていた。金持ちのローマ人は、あらゆる身分や民族の、またさまざまな技能を持った奴隷を幾百人もかかえていることがしばしばであった。彼はこうした無力な者たちの魂と肉体を完全に支配し、思いのままにどんな苦しみでも加えることができた。もし彼らのうちの一人でも仕返しや自己防衛のために主人に手を振り上げようものなら、その奴隷の家族全員が残酷に犠牲とされた。どんな小さな間違いや事故や不注意でも、無慈悲に罰せられることがよくあった。

他の者たちより人情味のある主人は、しもべたちにもっと寛大であったが、大多数の金持ち貴族は思

うがままに情欲、激情、欲望にふけり、彼らの奴隷を気まぐれと暴虐の悲惨な犠牲者にした。この制度全体が絶望的に墮落した状態にあった。

既成の社会制度を独断的に、あるいは急にくつがえすことは使徒パウロの仕事ではなかった。これを試みようとするれば、福音の成功が阻まれるであろう。しかし彼は、奴隷制度の根本にある原則、しかも、それが実行されれば奴隷制度全体を揺るがせること必然であろうと思われる原則を教えた。「主の靈のあるところには、自由がある」と彼は言明した（コリント第二・三ノ一七）。奴隷オネシモは改心してキリストのからだの一員となったのであるから、主人と共に神の祝福と福音の特権にあずかる兄弟として、また相続人として愛され、取り扱われなければならなかった。一方、しもべたちは「人にへつらおうとして目先だけの勤めをするのではなく、キリストの僕として心から神の御旨を行い」、自分たちの義務を果たさなければならなかった（エペソ六ノ六）。

キリスト教は、主人と奴隷、王と臣民、福音を説く牧師とキリストの中に罪からのきよめを見いだしている墮落した罪びととの間に、強い一致のきずなをつくる。彼らは同じ血潮に洗われ、同じみ霊によって生かされた。そして彼らはキリスト・イエスにあって一つとされているのである。

第四章 ネロの宮廷

福音はこれまで常に、低い階級の人々のなかで最も大きな成果をあげてきた。「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない」（コリント第一・一ノ二六）。貧しく、友人もいない捕らわれ人のパウロに、ローマ市民の金持ちや貴族階級の注意を引くことができるとは思われなかった。悪習が彼らにあらゆる華麗な誘惑を与え、彼らをみずから進んでやってくる獲物にした。しかし、彼らの圧制で労苦にやつれ、困窮に打ちのめされた犠牲者たちの中から、貧しい奴隷の中からさえも、多くの者たちがパウロの言葉に喜んで耳を傾け、キリストを信じる信仰のうちに、運命の過酷さの中にあつて彼らを励ましてくれる希望と平和を見いだした。

使徒パウロの働きは身分の低い者たちから始まったが、その影響は広がって皇帝の宮廷にまで達した。ローマはこの当時、世界の首都であつた。傲慢な皇帝たちは、地上のほとんどすべての国に法律を与

えていた。王も廷臣たちも謙遜なナザレ人については無知か、憎しみや嘲笑の目を向けていた。それにもかかわらず、二年たらずのうちに福音は、捕らわれ人の貧しい家から宮殿へとその道が開かれた。パウロは悪者として鎖につながれているが「神の言はつながれてはいない」(テモテ第二・二ノ九)。

以前には、使徒パウロは人をひきつける力でキリストを信じる信仰を公衆に宣伝した。そしてしるしや奇跡からも、その聖なる性質について誤解の余地のないことを証言していた。彼は堂々と堅実にギリシャの賢人たちの前に立ち、また彼の知識と雄弁によって、誇り高い哲学の論法を沈黙させた。彼は不撓不屈の勇氣をもつて王や役人たちの前に立ち、正義、節制、未来の審判について論じ、ついに傲慢な支配者たちは、神の日の恐怖をすでに見ているかのようにおそれおののいたのであった。

今、使徒パウロは自分の住居に監禁されている身で、そのような機会を与えられていなかった。そして、彼を尋ねてくる人々にだけしか真理を宣べ伝えることができなかった。彼はモーセやアロンのように、不品行な王の前に行き、「わたしは有る」という偉大なおかたのみ名によって王の残虐や圧制を譴責するようには、神のご命令を受けていなかった。しかし、その第一の唱道者が公の働きから断ち切られたように見えたまさにこの時、福音のために一つの大勝利が与えられた。まさしくその宮廷から、幾人もの人々が教会に加えられたからである。

ローマの宮廷の中ほど、キリスト教と合わない雰囲気を持つているところはほかになかった。ネロは自分の魂から霊的な面ばかりか、人間的な面の最後のわずかなものさえも抹殺して、サタンのような感

じを身につけたようであった。彼の従者や廷臣たちも、一般に皇帝と同様、凶暴で、卑劣な、墮落した品性を持っていた。どう見ても、キリスト教がネロの宮廷でしっかりした立場を得ることは不可能なこのようであった。

しかしこの場合でも、他の多くの場合と同じように、自分の戦いの武器は「神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである」というパウロの主張の真実さを証明した（コリント第二・一〇ノ四）。ネロの宮廷の中でさえ、十字架の勝利があった。不道德な王の墮落した臣下から、神のむすことなる改宗者が出た。これらの人々は、こっそりとはなく公然とクリスチャンであった。彼らは自分たちの信仰を恥としなかった。

中に入ることさえ困難なように見えた場所へ、どんな方法でキリスト教がはいり、確かな地歩を占めるようになったのであろうか。パウロはピリピ人への手紙の中で、ネロの宮廷から信仰へと改宗者を導くことができたのは、パウロ自身が捕らわれていたためであると述べた。彼の苦難が福音の進展を妨げていたと思われてはならないと思って、パウロは彼らにこう断言した、「兄弟たちよ。わたしの身に起った事が、むしろ福音の前進に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい」（ピリピ一ノ一二）。

キリスト教会は、はじめパウロがローマを訪問すると知ったとき、その町に福音の著しい勝利を期待していた。パウロは多くの地に真理を携えて行き、大都市で真理を宣べ伝えていた。この信仰の闘士は

世界の大都市ローマにおいても、立派に魂をキリストに導くのではないだろうか。しかし、パウロが捕らわれ人としてローマに行ったという知らせによって彼らの希望はくじかれた。彼らはかつてこの大中心地に確立された福音がすべての国々に速やかに伝えられて、この地上における支配的な力となることを確信して、待ち望んでいた。それだけに彼らの失望は大きかった。人間の期待ははずれた。しかし神の目的ははずれなかった。

宮廷は、パウロの説教によってではなく、彼の受けた束縛によって、キリスト教へと注目するようになった。彼は捕らわれの身でありながら、罪の奴隷となっていた多くの魂から束縛を断ち切ったのである。こればかりではなかった。「兄弟たちのうち多くの者は、わたしの入獄によって主にある確信を得、恐れることなく、ますます勇敢に、神の言を語るようになった」と彼は言明した（ピリピーノ一四）。

長い間の不正な留置の間中、パウロが示した忍耐と快活と勇氣と信仰は、不断の説教となった。パウロの精神は、この世の精神と全く違って、地上の力よりもっと偉大な力が彼の中にとどまっていることをあかしした。そして彼の模範によって、クリスチャンたちは、みわざ　その公の活動からはパウロはすでに身をひいていたけれども　の唱道者として、より大きな働きへとかりたてられた。このように使徒のなわめの影響力は大きかった。彼の力と有用さが断ち切られたように見え、どうみても何もできそうもない時に、パウロは全く自分がしめ出されたようにみえた地からキリストのために、麦束を集めるように魂を集めたのである。

二年間の捕らわれの身が終わる前にパウロは、「わたしは獄に捕われているのはキリストのためであることが、兵営全体にもそのほかのすべての人々にも明らかにな」ったと言うことができた（ピリピ一ノ一三）。そして、ピリピ人へあいさつを送った人々の中に、特に「カイザルの家の者たち」がいることをパウロは述べている（ピリピ四ノ二一）。

忍耐は勇気と同様、勝利するものである。試練の時に忍耐強いことは、事業をなすときの大胆さと同じほど、魂をキリストに導くことができる。死別や苦しみの時に忍耐と快活さをあらわし、平安で穏やかなゆるがない信仰をもって、死そのものにさえも向かうクリスチャンは、忠実に働いて長い一生になり遂げることができる以上のことを、福音のためにすることができると神のしもべが活動的な働きから後退させられるとき、先を見通すことができないわれわれは、その不可解な摂理を歎くが、そうでなければ決してなされないような働きをなし遂げるために、神は摂理を計画されるのである。

キリストに従う者は、もはや神や真理のために、公然と積極的に働くことができなくなっても、もう奉仕することも報いをいただくこともできないなどと考えてはならない。キリストの真の証人は、決してその務めを解かれることはない。彼らが健康な時でも病の時でも、生きていようが死んでいようが、神はなお彼らをお用いになる。サタンの悪意によってキリストのしもべたちが迫害され、彼らの積極的な働きが妨げられたとき、また、彼らが投獄されたり、死刑や火刑に処せられたとき、それは真理がより大きな勝利を得るためであつた。こうした忠実な者たちが血のあかしを立てるとき、これまで疑いを

持ち、半信半疑であつた者たちが、キリストの信仰を悟つてキリストのために勇敢に証人台に立つた。殉教者たちの灰の中から、神のための豊かな収穫が生じていた。

パウロや共労者たちの熱意と忠誠は、険悪な状況のもとでキリスト教へと改宗した人々の信仰と服従と同様、キリストに仕える者の怠惰と信仰の不足を譴責している。使徒と彼の共労者たちは、きびしい誘惑に打ちのめされ、多くの障害に取り巻かれ、激しい反対にさらされているネロの臣下たちを、キリストを信じる信仰へ悔い改めさせることはむだだと論じ合うこともできたかもしれない。たとえ彼らが真理を受け入れたとしても、彼らはどうして信仰に従つていけるであろうか。しかしパウロは、このよなことを理由にしなかつた。彼は信仰をもつてこれらの魂に福音を紹介した。そして聞いた者たちの中に、なんとしても従おうと決意した者たちがいたのである。障害や危険があるにもかかわらず、彼らは光を受け入れて、その光を他の人々にも輝かすように、神により頼んだのである。

カイザルの宮廷で改宗者が真理に導かれたばかりでなく、それらの人たちは改宗後も宮廷にとどまつた。彼らはその環境に適しなくなつたからという理由で、責任の地位を勝手に捨ててもよいとは思わなかつた。彼らは宮廷で真理に導かれたので、宮廷にとどまり、自分たちの生活と品性が変えられたことを示し、人を一変させる新しい信仰の力をあかしした。

自分たちの環境はキリストのためにあかしするにふさわしくないと、言いわけしなくなる人がいるならば、カイザルの宮廷で、皇帝の墮落や王室の不品行を見ている弟子たちの立場を考えてみるがよい。

宗教的な生活にとってこれほど好ましくない環境を、また、これらの人々の置かれている立場ほど大きな犠牲と反対を伴う環境を、ほかに想像することはできないであろう。さまざまな困難と危険のただ中にあつてもなお、彼らは忠誠を保ちつづけていた。うち勝ちがたいようにみえる障害のためにクリスチヤンは、キリストのうちにある真理に従うことのできない自分に言いわけをしようとするかもしれない。しかし、取り調べに耐える弁解をすることはできない。もし、これができるとすれば、彼は、神がその子らに、応じることのできないような救いの条件をお作りになったのだから、神は不公平だと証言するであろう。

神に仕えようと心に決めている人は、神のためにあかしする機会を見つけるであろう。まず神の国と神の義を求めようとしている者には、困難などはなんら妨げる力のないものである。彼は祈りとみことばの研究から与えられる力によつて徳を求め、悪を捨てる。罪びとたちの反対に耐えたおかた、信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つ、信者は侮辱と嘲笑に勇敢に立ち向かうのである。それぞれの事情に応じて十分な助けと恵みが、真実なことばをお語りになるかたによつて約束されている。彼は助けを求めてくる魂を、その変わることをないみ腕で抱擁される。このかたに任せていれば、われわれは「わたしが恐れるときは、あなたに寄り頼みます」と言つて、安心して休むことができる（詩篇五六ノ三）。彼に信頼するすべての者に、神はみ約束を成就して下さるのである。

救い主はご自身の模範によつて、弟子たちが世にありながら世のものにならないでいられることを、

お示しになった。主は世の欺瞞的な快樂を味わったり、世の風習に支配されたり、世の習慣に従ったりするために来られたのではなく、父のみこころを行うために、また失われた者を探して救うためにおいてになった。この目的を目の前におくとき、クリスチャンはどんな環境にも汚されないことができる。身分が高かろうと低かろうと、環境がどうであろうと、彼は義務を忠実に果たすことによって、真の宗教の力をあらわすのである。

試みから逃れるのではなく、試みのただ中にいてクリスチャンの品性は磨かれる。拒絶や反対にさらされると、キリストの弟子はますます用心するようになり、一層熱心に偉大な助け主に祈るようになる。神の恵みによりきびしい試みに耐えると、忍耐強く、用心深く、不屈になり、また、神を信じる信仰が深まり、長続きするようになる。クリスチャン信仰の勝利とは、キリストに従う者が、苦しみを受けるが強められ、服従するが勝利し、たえず死に渡されるが生かされ、十字架を負うが、栄光の冠を受ける、まさに、このことである。

第四十五章 ローマからの手紙

本章はコロサイ人への手紙、及びピリピ人への手紙に基づく

使徒パウロは、彼のクリスチャン経験の初期に、イエスに従う者たちについての神のみこころを学ぶ機会が特別に与えられた。彼は、「第三の天にまで引き上げられ」、「パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いた」。彼は「主のまぼろしと啓示」が豊かに与えられたことを知った。福音の真理の原則に対する彼の理解力は「あの大使徒たち」と同じであった（コリント第二・一二ノ二、四、一、一一）。パウロは「人知をはるかに越えたキリストの愛」の「広さ、長さ、高さ、深さを」明瞭に、十分理解していた（エペソ三ノ一九、一八）。

パウロは幻の中で見たものを、すべて語ることはできなかった。聞いている者たちの中には、彼の言葉を誤用するかもしれない人々がいたからである。しかし彼に示されたことは、彼を指導者、賢明な教師として働くことができるようにさせ、また、彼がのちに教会に送ったメッセージの形を作ってくれた。

幻の中で受けた印象は常に彼を離れず、それによって彼はクリスチャン品性の正しい模範を示すことができた。パウロが口頭により、また書簡によって伝えた使命は、それ以来、神の教会を助け、力づけてきた。この使命は今日の信者に、教会をおびやかす危険と、彼らが見分けなければならない誤った教理のことを、明瞭に語っている。

パウロは勧告や訓戒の手紙を人々に書き送ったが、パウロの願いは、彼らが「もはや子供ではないので……様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく」、「神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至る」ようにということであつた。パウロは、異教徒の社会に住むキリストの信徒たちに勧めている、「異邦人がむなしい心で歩いているように歩いてはならない。彼らの知力は暗くなり……心の硬化とにより、神のいのちから遠く離れ」ている。「賢くない者のようにではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい」（エペソ四ノ一四、一三、一七、一八、五ノ一五、一六）。彼は、「教会を愛してそのためにご自身をささげられた」キリストが「しみも、しわも、そのたぐいのものがいつさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎え」て下さる時を待ち望むようにと、信者たちを励ました（エペソ五ノ二五、二七）。

人の力でなく神の力によって書かれたこれらのメッセージは、すべての者が学ばなければならない教訓を与えるものであり、たびたび繰り返されて益となるものである。これらのメッセージの中に、実際

的な信仰が概説され、どの教会でも従わなければならない原則が示され、また永遠のいのちへ至る道が明らかにされている。

「コロサイにいる、キリストにある聖徒たち、忠実な兄弟たちへ」あてたパウロの手紙は、彼が捕らわれの身でローマにいたときに書かれたが、その手紙の中で彼は、コロサイにいる兄弟たちが、信仰を堅実に持ちつづけていることに対する彼の喜びについて述べている。この知らせをもたらしてくれたのはエパfrasで、彼は「あなたがたが御霊によっていただいている愛を、わたしたちに知らせてくれた」と使徒は書いた。更に彼は、「そういうわけで、これらの事を耳にして以来、わたしたちも絶えずあなたがたのために祈り求めているのは、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力とをもって、神の御旨を深く知り、主のみこころになつた生活をして真に主を喜ばせ、あらゆる良いわざを行つて実を結び、神を知る知識をいよいよ増し加えるに至ることである。更にまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがつて賜わるすべての力によつて強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍ぶことであると述べた。こうしてパウロは、コロサイの信者たちに彼の願いを書きあらわした。キリストに従う者の前に示されたこれらの言葉は、実に高い理想をもっている。それらはクリスチャン生活のすばらしい可能性を示し、神の子らが受ける祝福には限りがないことを明らかにしている。神を知る知識をいよいよ増し加えることにより、彼らは力から力に進み、クリスチャン経験の高みから高みへ進み、ついに「神の栄光の勢い」によつて、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて」いただくのである。



コロサイ教会の卓石 コロサイにはじしモンの教会といわれる家の教会があった。今日はイスラム教の会堂になっているが、その内庭にアカンサスの浮彫のあるコリント式円柱二本の上に平石を置いてあり、これが唯一のコロサイ教会の記念物である。

使徒は、神はキリストによつて万物を創造され、人々のあがないを計画されたのであるとして、キリストを兄弟たちの前であがめた。宇宙にある諸世界を支え、また、森羅万象をことごとく規則的に配列し、たゆまず活動させておられる手は、彼らのために十字架にはりつけにされた手であると彼は言明した。「万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあつて造られたからである。これらいつさいのものは、御子によつて造られ、御子のために造られたのである」とパウロは書いた。「あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していた。しかし今では、御子はその肉のからだにより、その死をおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである。」

神のみ子は、墮落した者たちを救い上げるために身をかがめられた。このために、罪のない天の世界をあとにし、み子を愛する九十九人をあとに残して、彼は、「われわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために碎かれ」るためにこの地上に来られた（イザヤ書五三ノ五）。み子はすべての点で兄弟たちと同じようにされた。彼はわれわれと同じように肉体をとられた。飢え、渇き、疲れることがどんなことであるかをご存じであつた。食物によつて養われ、睡眠によつて元気を回復された。み子はこの地上では旅人であり、寄留者であつた。この世にあつたが、この世のものではなかつた。み子は、現代の人々が誘惑され、試みられるのと同じように、誘惑や試みに会われたが、なお罪を犯さない生涯

を送られた。優しく、憐れみ深く、同情深く常に他の人々を思いやられて、神のご品性をあらわされた。

「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。……（それは）……めぐみとまこととに満ちていた」

（ヨハネ一ノ一四）

異教の習慣に取り巻かれ、その影響下にあつてコロサイの信者たちは、福音の単純さから引き離される危険にさらされていた。そしてパウロはこれについて警告を与え、彼らにキリストこそ唯一の安全な導き手であると言った。「わたしが、あなたがたとラオデキヤにいる人たちのため、また、直接にはまだ会つたことのない人々のために、どんなに苦闘しているか、わかつてもらいたい。それは彼らが、心を励まされ、愛によつて結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知るに至るためである。キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている。」

「わたしがこう言うのは、あなたがたが、だれにも巧みな言葉で迷わされることのないためである。

……このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのだから、彼にあつて歩きなさい。また、彼に根ざし、彼にあつて建てられ、そして教えられたように、信仰が確立されて、あふれるばかり感謝しなさい。あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとつて宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあつて、それに満たされているのである。彼はすべての支配と権威とのかしらで」ある。

キリストは人を惑わす者たちが現れることを預言しておられた。彼らの感化を受けて「不法がはびこり、多くの人の愛が冷える」のである（マタイ二四ノ一二）。主は教会が敵の迫害からよりも、もっと、この悪からの危険にさらされるであろうと弟子たちに警告しておられた。パウロは繰り返し、こうした誤った教師たちに注意するよう信者たちに警告した。何よりもまず、この危険から彼らは身を守らなければならない。誤った教師たちを受け入れることにより、彼らは誤った道を進み、その過ちにより敵は霊的な知覚を鈍らせ、福音の信仰を新しく受け入れたばかりの人々の確信をぐらつかせるのである。キリストが標準であられ、彼らはそれによって、紹介される教理をテストしなければならなかった。キリストの教えと一致しないものは、すべて拒まなければならなかった。キリストは罪のために十字架におかかりになり、死からよみがえられて、昇天された。これこそ彼らが学び、そして教えなければならない救いの科学であった。

キリスト教会を取り巻くさまざまな危険について神が警告されたことばは、今日われわれも聞かなければならない。弟子たちの時代に、人々は伝統や哲学によって聖書を信じる信仰を破壊させようとしたが、今日は、高等批評、進化論、心霊術、神知学、汎神論など心を楽しみます意見によって、義の敵は魂を禁じられた道へ導こうとしている。多くの人たちにとって、聖書は油のないランプのようなものである。なぜなら、彼らの心は誤解と混乱しか招かないような、推論的信念に向けられているからである。分析し、推測し、組み立て直す「高等批評」の作業が、神の啓示としての聖書についての信仰を破壊し

ている。高等批評は、神のみことばから、人の生活を支配し、高め、靈感を与える力を奪っている。心霊術によって多くの人々は、欲望が最高の律法であり、放縦が自由であり、人は自分にだけ責任があるのだと信じるよう教え込まれている。

キリストに従う者は、使徒がコロサイの信者たちに警告した「巧みな言葉」に出会うであろう。また、心靈主義的な聖書解釈に出会うであろう。しかし、それらを受け入れてはならない。キリストに従う者の声は、聖書の永遠の真理を明確に語らなければならない。目をキリストに向け、キリストの教えに一致しない考えをことごとく捨てて、定められている道を着実に進んで行かなければならない。神の真理が彼の黙想、瞑想の主題でなければならない。聖書を、直接彼に語りかける神の声と思わなければならない。こうして彼は、聖なる知恵を見いだすのである。

キリストの中にあらわされているような神についての知識は、救われる者たちがみな持っていないければならない知識である。これこそ、品性を変える作用をする知識である。生活の中に受け入れられると、それはキリストのみかたちに魂を造りかえるのである。これこそ、神が子らに受けさせようと招いておられる知識であって、これ以外はすべてむなしく、価値のないものである。

どの時代でも、どこでも、品性を築くための真の基礎は同じであって、それは神のみことばに包含されている原則である。唯一の安全で確かな規則は、神が言われることを行うことである。「主のさとしは正しくて」、「これらの事を行う者はとこしえに動かされることはない」（詩篇一九ノ八、一五ノ

五)。使徒たちは、当時のいろいろの誤った学説に神のみことばで立ち向かい、「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない」と言った（コリント第一・三ノ一）。

コロサイの信者たちは、改宗してバプテスマを受けたとき、これまで彼らの生活の一部となっていたさまざまな信仰や慣習を捨てて、キリストに心から忠誠をつくすことを誓った。パウロは手紙の中でこの事を彼らに思い出させ、その誓いを守るために、彼らを支配しようとしている悪に立ち向かうよう、絶えず努力をしなければならぬことを忘れないようにと勧めた。「このように、あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。あなたがたはすでに死んだものであって、あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである。」

「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」（コリント第二・五ノ一七）。人はキリストの力によって、罪深い習慣の鎖を断ち切る。彼らは利己心を捨てる。不敬な者は敬虔になり、飲酒家は謹厳になり、放蕩者は純潔になる。サタンに似ていた人々が神のかたちが変わってくる。この変化はそれ自体が奇跡中の奇跡である。みことばによって起こる変化、それはみことばの最も深い奥義の一つである。われわれはそれを理解することができない。ただ、聖書に述べられているとおり、それが「あなたがたのうちにいますキ

リストであり、栄光の望みである」と信じることができるだけである。

神のみ霊が思いと心を支配すると、改心した人は新しい歌をうたいだす。それは神のみ約束が彼の経験の中で成就されたからであり、彼の不義は許され、罪がおおわれたからである。彼は、神の律法を犯したことを神に対して悔い改め、人を義とするために死なれたキリストを信じたのである。彼は「信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得」たのである（ローマ五ノ一）。

しかし、この経験が自分の経験であるからといって、クリスチャンは自分のためになし遂げられたことに満足して、手をこまねいてはならない。霊の王国に入ることを決意した人は、生まれ変わっていない力と熱情が、やみの王国の勢力に後押しされて、こぞって彼に反対することを知るであろう。彼は毎日、献身を新たにしてい、悪と戦わねばならない。古い習慣、罪を犯そうとする生来の傾向が、支配力をふるおうとするであろうから、これらに対していつも油断なく見張り、勝利を得るためにキリストの力によって戦わねばならない。

パウロはコロサイの人々にこう書いた、「だから、地上の肢体……を殺してしまいなさい。……あなたがたも、以前これらのうちに日を過ごしていた時には、これらのことをして歩いていた。しかし今は、これらいつさいのことを捨て、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を、捨ててしまいなさい。……だから、あなたがたは、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者であるから、あわれみ

の心、慈愛、謙そん、柔和、寛容を身に着けなさい。互に忍びあい、もし互に責むべきことがあれば、ゆるし合いなさい。主もあなたがたをゆるして下さったのだから、そのように、あなたがたもゆるし合いなさい。これらいつさいのものの上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。あなたがたが召されて一体となったのは、このためでもある。いつも感謝していなさい。」

コロサイ人への手紙は、キリストの奉仕に携わる者たちにとって最も価値のある教訓に満ちている。その教訓は、救い主を正しくあらわす者の生活に見られる、目的の単純さと目標の高尚さを示している。信者は自分の向上に妨げとなるものや、その狭い道から他の人の足をそらすものをすべて断ち切り、日常の生活において慈悲、親切、謙遜、柔和、寛容、キリストの愛をあらわすのである。

もつと高く、もつと純潔で、もつと崇高な生活の力が、われわれに大いに必要である。われわれは世俗のことに心を用いすぎ、天の国について考えることがあまりにも少ない。

クリスチャンは、神が彼のために定められた理想に到達しようとする努力において、どんなことにも絶望してはならない。キリストの恵みと力によって、道徳的、霊的完全さがすべての者に約束されている。イエスは力のみなもと、いのちの泉である。イエスはわれわれをみことばに導き、いのちの木から、罪に悩む魂をいやす葉をわれわれに提供される。また、われわれを神のみ座に導き、われわれの口に祈りを入れられる。それによってわれわれは、神ご自身と親しく接触するのである。イエスはわれわれの

ために、強力な天の軍勢を動員される。一步一步、われわれは主の生きた力に触れるのである。

神は「あらゆる霊的な知恵と理解力とをもって、神の御旨を深く知り」たいと思っている者たちの前進を制限なさることはない。祈り、警戒し、知恵と理解力を発達させることによって、彼らは、「神の栄光の勢いにしたがって賜わるすべての力によって強くされ」るのである。こうして彼らは、他の人々のために働く準備をする。きよめられ、聖別された人々を、主の助け手となさることが救い主の目的である。この大いなる特権にあずかり、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて下さった」神に感謝したいものである。「神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった」。

ピリピ人へのパウロの手紙は、コロサイ人への手紙のように、彼がローマで捕らわれの身であったときに書かれた。ピリピの教会はエパフロデトをつかわし、パウロに贈り物を届けていたが、パウロはエパフロデトを「わたしの同労者で戦友である兄弟、また、あなたがたの使者としてわたしの窮乏を補ってくれた」人と呼んでいる。エパフロデトは、ローマにいた間に「ひん死の病気にかったが、神は彼をあわれんで下さった。彼ばかりではなく、わたしをもあわれんで下さったので、わたしは悲しみに悲しみを重ねないですんだのである」とパウロは書いた。エパフロデトが病気だと聞いて、ピリピの信者たちは彼の身を案じたので、彼は信者たちのもとへ帰る決心をした。「彼は、あなたがた一同にしきりに会いたがっているから」、また「その上、自分の病気のことがあなたがたに聞えたので、彼は心苦し

く思っている。…そこで、大急ぎで彼を送り返す。これで、あなたがたは彼と再び会って喜び、わたしもまた、心配を和らげることができるよう。こういうわけだから、大いに喜んで、主にあって彼を迎えてほしい。また、こうした人々は尊重せねばならない。彼は、わたしに対してあなたがたが奉仕のできなかった分を補おうとして、キリストのわざのために命をかけ、死ぬばかりになったのである」とパウロは書いた。

エパフロデトに託してパウロは、ピリピの信者たちに手紙を送ったが、その中で彼らからの贈り物のお礼を述べている。すべての教会の中で、ピリピの教会が一番惜しみなくパウロの必要を満たしてくれていた。「ピリピの人たちよ。あなたがたも知っているとおりに、わたしが福音を宣伝し始めたころ、マケドニアから出かけて行った時、物のやりとりをしてわたしの働きに参加した教会は、あなたがたのほかに全く無かった。またテサロニケでも、一再ならず、物を送ってわたしの欠乏を補ってくれた。わたしは、贈り物を求めているのではない。わたしの求めているのは、あなたがたの勘定をふやしていく果実なのである。わたしは、すべての物を受けてあり余るほどである。エパフロデトから、あなたがたの贈り物をいただいて、飽き足りている。それは、かんばしいかおりであり、神の喜んで受けて下さる供え物である」とパウロは手紙の中で述べた。

「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈るとき、いつも

喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している。そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。わたしが、あなたがた一同のために、そう考えるのは当然である。それは、わたしが獄に捕われている時にも、福音を弁明し立証する時にも、あなたがたをみな、共に恵みにあずかる者として、わたしの心に深く留めているからである。わたしが……どんなに深くあなたがた一同を思っていることか、それを証明して下さるかたは神である。わたしはこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るように。」

神の恵みは、捕らわれの身であつたパウロを支えて、試練の中で喜んでいることができるようにした。パウロはこの監禁が福音をひろめる結果になったと、信仰と確信に満ちてピリピの兄弟に書いている。「さて、兄弟たちよ。わたしの身に起つた事が、むしろ福音の前進に役立つようになったことを、あなたがたに知ってもらいたい。すなわち、わたしが獄に捕われているのはキリストのためであることが、兵営全体にもそのほかのすべての人々にも明らかにになり、そして兄弟たちのうちの多くの者は、わたしの入獄によって主にある確信を得、恐れることなく、ますます勇敢に、神の言を語るようになった」と

パウロは述べた。

パウロのこの経験の中に、われわれのための教訓がある。それは神の働かれる方法を示しているからである。主は、われわれには失敗であり敗北だと思われることから、勝利をもたらすことがおできになる。われわれは、神を忘れ、見えないものを信仰の眼で見上げることがせず、目に見えるものを見つめるといふ危険がある。不幸や災難に見舞われると、すぐさま神は無視しておられるとか残酷だと言つて神をとがめる。神が、ある方面でのわれわれの有用さを断ち切ることが好ましいとお考えになることがあるが、われわれは、こうして神がわれわれの益となるよう働いておられることを考えてみもせずに嘆く。われわれは、こらしめが神の偉大なご計画の一部であり、苦悩のむちを受けてクリスチャンは、時には活発な奉仕に携わっている時よりもっと、主のために多くの事をするができるということをおぼえる必要がある。

クリスチャン生活の模範として、パウロはピリピ人にキリストを指し示した。「キリストは、神の私たちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」

パウロは続けた、「わたしの愛する者たちよ。そういうわけだから、あなたがたがいつも従順であつたように、わたしが一緒にいる時だけでなく、いない今は、いっそう従順でいて、恐れおののいて自分

の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである。すべてのことを、つぶやかず疑わないうでしなさい。それは、あなたがたが責められるところのない純真な者となり、曲った邪悪な時代のただ中であって、傷のない神の子となるためである。あなたがたは、いのちの言葉を堅く持って、彼らの間で星のようにこの世に輝いている。このようにして、キリストの日に、わたしは自分の走ったことがむだでなく、労したこともむだではなかったと誇ることができる。」

これらの言葉は、努力しているすべての魂に役立つようにと記された。パウロは理想の標準をにかけて、それに到達する方法を教えている。「自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけ……るのは神で」あると彼は言っている。

救いを得る仕事は協同組合のようなもの、すなわち、共同作業である。神と悔い改めた罪人との間に協力がなければならぬ。これは品性における正しい原則を形成するのに不可欠である。人は完全を目指すにあたって、妨げとなることを克服するよう、ひたすら努力しなければならない。しかし、これを成功させるために全く神により頼むのである。人間の努力だけでは不十分である。神の力に助けられなければ全く効果がない。神が働かれ、また、人も働くのである。誘惑に抵抗するのは人の仕事であり、そのための力を神からいただくのである。一方には無限の知恵と憐れみと力があるが、他方には、弱さ、罪深さ、全くの無力さがある。

神はわれわれが自己にうち勝つことをお望みになっている。しかし、神は、われわれの同意と協力がなければ、われわれを助けて下さることができない。聖霊は人に与えられた力と能力を用いて働かれる。われわれは自分では、意志と願望と性向とを神のみ旨に一致させることができない。しかし、もしわれわれが喜んでそうするものになりたいと望むなら、救い主はわれわれのためにこれをなし遂げ、「神の知恵に逆らって立てられたあらゆる障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させ」て下さる（コリント第二・一〇ノ五）。

健全で均齊のとれた品性を築きたいと思う者、よく釣り合いのとれたクリスチャンになりたいと思う者は、すべてをささげて、キリストのために全力をつくさなければならぬ。なぜなら、あがない主は、分割された奉仕はお受け入れにならないからである。日毎に服従の意味を学ばなければならない。神のみことばを研究し、その意味を学び、その教えに従わなければならない。こうして、クリスチャンとしての卓越した標準に到達できるのである。神は毎日共に働いて下さり、最後の試みの時に耐えられるような品性を完成させて下さる。こうして信者は、福音が墮落した人間にできることを示し、人々や天使たちの前で、崇高な試みを日毎になし遂げていくのである。

「わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである」とパウロは書いた。

パウロは多くの事をした。キリストに忠誠をささげて以来、彼の生涯はたゆみない奉仕に満たされていた。町から町へ、国から国へと旅を続け、十字架の物語を語り、福音へと改宗者を導き、教会を設立した。これらの諸教会のことを彼は絶えず心にかけ、指導の手紙を数多く書き送った。時々パウロは自分の手仕事に従事して生活費をかせいだ。しかし、どんなに仕事に忙殺されても、パウロは、上に召して下さる神の賞与を得ようと努めるという、一つの大きな目的を見失わなかった。ダマスコの入口でご自身をあらわして下さったかたに忠誠をつくすという、一つの志を固く守り通した。どんな力も彼をこの目的からそらすことはできなかった。カルバリーの十字架をあがめること、これこそパウロの言葉と行動を起こさせる動因、彼を全く夢中にさせる動機であつた。

辛苦と困難に直面しながらパウロを前進させたその偉大な目標こそ、すべてのクリスチャンの働き人を導き、神の奉仕に自分のすべてをささげさせるものである。働き人の注意を救い主からそらすために、世的な誘惑がふりかかるであろう。しかしクリスチャンの働き人は、ひたすら目標に向かって進み、神のみ顔を見る望みは、その望みを達成するために必要な努力と犠牲のすべてに値するものであることを、この世に、天使たちに、また人々に示さなければならない。

パウロは捕らわれの身であつたが、失望しなかった。それどころか、彼がローマから諸教会に書き送った書簡には、勝利の調べが鳴り響いている。「主にあっていつも喜びなさい」と彼はピリピ人に書いた。「繰り返し言うが、喜びなさい。……何事も思い煩つてはならない。ただ、事ごとに、感謝をも

って祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。」

「わたしの神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう。…主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように。」

第四十六章 自由の身になって

ローマにおけるパウロの働きは祝福されて、多くの魂を改心に導き、信者たちを力づけ、励ました。その反面、暗雲が次第につのり、パウロの安全ばかりでなく、教会の繁栄をもおびやかすようになった。ローマに着いたときから、パウロは近衛兵の隊長の監督下におかれていた。公正で、高潔な人で、この人の寛容さのおかげでパウロは比較的自由に、福音の働きを続けさせてもらったのである。しかし、二年間の囚われの期間が終わる前に、この隊長は別の役人と交代させられて、使徒はその役人には特別な好意を期待できなかった。

ユダヤ人たちは今や、これまでより一層活発にパウロ反対の運動を続け、ネロが第二の妻にした放とうな女を有力な後援者にすることができた。この女はユダヤ教の改宗者だったので、キリスト教の戦士の殺害計画を手助けするのに、彼女のすべての影響力を貸した。

パウロはカイザル（皇帝）に上訴していたが、カイザルの公正を望むことはほとんどできなかった。

ネロは前任者のだれよりも不品行で、性質が浅薄で、同時に狂暴な残忍性があつた。これ以上専制的な統治者に政権をゆだねようとしてもできなかったであろう。彼の統治の第一年には、正当な帝位継承者である腹違いの弟の毒殺という汚点がつけられた。ネロは、悪徳と罪惡の一つの深みから次の深みへと墮落をつづけ、ついには自分の母親を、ついで自分の妻を殺してしまった。彼はあますところなく非道を行い、悪徳行為に身を落とした。彼は高潔な人々の心に、嫌惡と輕べつ心を起こさせるだけであつた。

ネロの宮廷で行われた不正の数々は、あまりにも下劣な、また、あまりにも恐ろしいもので、到底、言葉には言い表せないほどである。彼の破廉恥な邪惡さは、無理やり罪の共犯者にさせられた多くの人にも、いや気を起こさせ、胸を悪くさせた。彼が次にはどんな極惡非道を持ち出すかと、彼らは絶えず戦々恐々としていた。ネロのこのような犯罪にもかかわらず、臣下の忠誠はゆるぎなかった。ネロは文明世界全体の絶對的な統治者として認められていた。そればかりか、彼は神の榮譽を受ける者とされ、神としてあがめられた。

人間的な判断からすれば、パウロがこのような裁判官から有罪を宣告されることは確實だつた。しかし使徒は、自分が神に忠誠をつくしているかぎり、恐れるものは何もないと思つた。過去においてパウロを保護してくださつた方は、今もなお、ユダヤ人の惡意と皇帝の權力から彼を守ることがおできになつた。

実際、神は、ご自分のしもべを守られた。パウロの審問にあたって、彼に対する告訴は支持されなかった。そして一般の予期に反して、ネロは自分の性格とは全くかけ離れた正義を尊重し、囚人に無罪を宣告した。パウロのなわめは解かれ、彼は再び自由の身となった。

もし彼の裁判がもう少しばく延期されるか、またはなんらかの理由で翌年までローマに引き止められていたなら、彼は多分その時起きた迫害によって殺されていたであろう。パウロが捕らわれている間に、キリスト教への改宗者が非常に多くなったので、官憲の注意をひき、また敵意をひき起こした。特に宮中から改宗者が出たために、皇帝の怒りにふれ、皇帝はすぐさま、キリスト教徒を彼の無情な残虐行為の対象とする口実を見つけた。

ちょうどこのころ、ローマに大火が起こり、市のほとんど半分が焼けた。この大火はネロ自身が火をつけたのだというわさが流れたが、彼はこの嫌疑を避けるために、家のない者や困っている者たちを助けることによって、非常な寛大さをよそおった。しかし彼は、その罪を犯したとして非難された。人が興奮し、怒ったので、ネロは身の疑いを晴らすために、また、自分が恐れ憎んでいる階級を町から一掃するために、この非難をキリスト教徒に向けた。彼のたくらみは成功し、キリストに従う幾千の男、女、子供たちが、残酷にも殺された。

パウロはこの恐ろしい迫害から助かった。彼は、釈放されるとすぐローマを去っていたからである。この最後の自由の期間を、彼は勤勉に利用して、諸教会のために働いた。彼は、ギリシヤ人の教会と東

方の諸教会とを一層しっかりと結びつけようと努め、また、信仰を墮落させようとしのび寄ってくる誤った教理に対して、信者たちの心を強めることに努めた。

パウロは試練と不安を耐え抜いたが、そのために体力が次第にそこなわれていた。年令から来る種々の疾患がふりかかってきた。彼は今、自分が最後の仕事をしているというを感じた。そして、働く時間が短くなるにつれて、彼の努力はますます熱心なものとなった。彼の熱意には限界がないように見えた。断固たる目的を持ち、敏速に行動し、強い信仰を抱いて、彼は多くの土地を教会から教会へと旅し、信者たちが忠実に働いて魂をイエスに導くように、また、既にその時でさえ彼らが体験しはじめていた試みの時に、彼らがキリストのために忠実なあかしを立てて、福音に固くとどまることができるように、力のかぎりあらゆる手段をつくして、信徒たちの手を強めることに努力した。

第四十七章 最後の逮捕

ローマで釈放されてのちの、パウロの諸教会における働きは、敵の目に留まらずにはいなかった。ネロのもとに迫害が起きて以来、クリスチャンはどこへ行っても禁止された宗派であった。しばらくすると、信じようとしないうダヤ人たちは、ローマの大火を扇動したという罪を、パウロに負わせようと考へついた。彼らの中のだれひとり、パウロにその罪があるなどとは一瞬たりとも考えたことはなかった。しかし少しでも、もっともらしく見えさえすれば、このような告発によってパウロの運命が定まることを、彼らは知っていた。彼らの活動によって、パウロは再び捕らえられ、最後の投獄へと追いたてられた。

ローマへの二度目の船旅には、パウロは以前の仲間数人を伴っていた。他の者たちも、彼と運命を共にしたいとせつに望んだが、パウロは、彼らの生命を危険にさらさせることを許さなかった。彼の前途の予想は、前回の投獄の時よりずっと不利なものであった。ネロのもとに行われた迫害のために、ロー

マにいたクリスチャンの数はひどく減ってしまっていた。何千もの人々が信仰のために殉教し、多くの者が町を去っていて、残った人々は非常に意気消沈し、おびえていた。

ローマに着くと、パウロは陰気な地下牢に入れられた。彼は、人生行路が終わるまで、そこにどまることになった。都市と国家に対する、最も卑劣で最も恐るべき罪惡を扇動したという告発を受けて、パウロは天下ののろいのまどであった。

使徒パウロの重荷を分かち合っていた少数の友人たちは、今、ある者は彼を見捨てて、また他の者は諸教会への任務を帯びて、彼のもとを去りはじめた。最初に去った者はフゲロとヘルモゲネであった。それからデマスが、困難と危険の雲行きが濃くなっていくのにろうばいして、迫害されている使徒を見捨てた。クレスケンスはパウロに遣わされてガラテヤの教会へ行き、テトスはダルマテヤに、テキコはエペソに行った。パウロはこの経験をテモテに書き送り、「ただルカだけが、わたしのもとにいる」と述べた（テモテ第二・四ノ一）。使徒パウロは、老齡と辛苦と病氣とのために弱り、ローマのしめつた暗い地下牢に閉じこめられていたこの時ほど、兄弟たちの奉仕を必要としたときはなかった。愛する弟子であり忠実な友であったルカの奉仕は、パウロにとって大きな慰めであり、彼のおかげでパウロは、兄弟たちや外の世界と連絡をとることができた。

この試みの時にパウロの心は、オネシポロがしばしば訪ねてくれたことで励まされた。心の温かいこのエペソ人は、力の限りをつくして、獄中の使徒の重荷を軽くした。オネシポロ自身は自由であったが、

彼の愛する師は真理のためにつながれていた。だから彼は、パウロの運命をもっと耐えやすいものにするためには、どんな努力も惜しまなかった。

使徒は、彼の書いた最後の手紙の中で、この忠実な弟子についてこう語っている。「どうか、主が、オネシポロの家にあわれみをたれて下さるように。彼はたびたび、わたしを慰めてくれ、またわたしの鎖を恥とも思わないで、ローマに着いた時には、熱心にわたしを捜しまわった末、尋ね出してくれたのである。どうか、主がかの日に、あわれみを彼に賜わるように」(テモテ第二・一ノ一六―一八)。

愛と同情への欲求は、神ご自身によつて人の心に植えつけられる。キリストは、ゲツセマネの園での苦悩の時、弟子たちの同情を切望された。そしてパウロも、困難や苦しみなどは気にかけないように見えたが、同情や交わりをせつに求めていた。オネシポロの訪問は、パウロが孤独で見捨てられていた時にも彼がパウロに誠実だったことをあかしするものであり、他の人々のために奉仕の生涯をささげてきた使徒を、よろこばせ、励ましたのである。

第四十八章 皇帝ネロの前に立つパウロ

パウロが、裁判を受けるためにネロ皇帝の前に出頭するよう命じられたとき、それは確実に死が近づいたことを予期させた。彼に負わされている罪の重大性と、クリスチャンに対する一般の憎悪心とから、好結果を期待できる理由はほとんどなかった。

ギリシヤ人やローマ人の間では、告発された者は、法廷で自分のために嘆願してくれる弁護者を雇う特権が与えられるのが常であった。議論によつて、感動させるような雄弁によつて、あるいは、嘆願、祈り、涙によつて、そのような弁護者はしばしば、囚人に有利な決定を獲得し、あるいはこの事がうまく行かなかつた場合でも、判決の厳しさを和らげることに成功したのである。しかしパウロがネロの前に引き出されたとき、あえて彼に助言したり、彼を弁護したりしようとする者はだれもいなかった。彼に対する告発や、彼が自ら弁明した議論を、記録にとどめてくれるような友達さえそばにはいなかった。

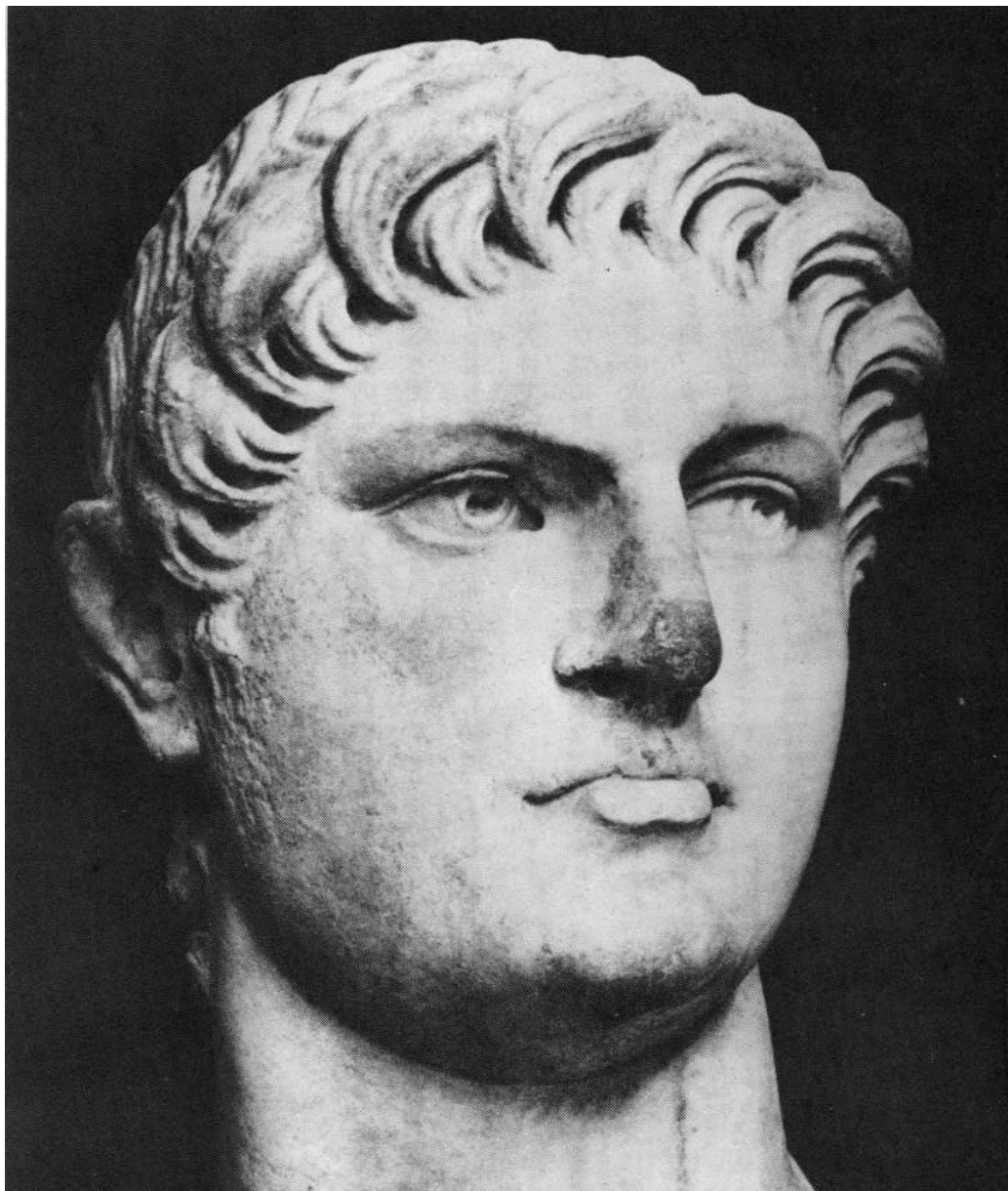
ローマのクリスチャンの中には、この試練の時に彼の弁護を申し出る者はひとりもなかった。

この事件の唯一の確かな記録は、パウロ自身によつて、テモテへの第二の手紙の中に残されている。

「わたしの第一回の弁明の際には、わたしに味方をする者はひとりもなく、みなわたしを捨てて行つた。どうか、彼らが、そのために責められることがないように。しかし、わたしが御言を余すところなく宣傳伝えて、すべての異邦人に聞かせるように、主はわたしを助け、力づけて下さつた。そして、わたしは、ししの口から救い出されたのである」（テモテ第二・四ノ一六、一七）。

ネロの前に立つパウロ。これはなんと著しい対照であろう。自らの信仰のために答弁しようとしている神の人パウロの前にいる、この傲慢な君主は、地上の権力と権威と富の絶頂に達していたが、同時に、罪と不義の最低の深みへ落ちていた。力と偉大さにおいて、彼に並ぶ者はなかった。彼の権威を疑う者や、彼の意志に逆らう者は、だれもいなかった。王たちは彼の足もとに自分たちの冠を脱いだ。強力な陸軍は彼の命令で行進し、彼の海軍軍旗は勝利を预示するものであつた。彼の像が法廷に建てられ、元老院議員の布告や裁判官の判決は、王の意志をただそのまま繰り返したものにすぎなかった。幾百万の人々が彼の命令に服して頭を下げた。ネロの名は世界を震え上がらせた。彼の不快を招くことは、財産、自由、生命を失うことであり、彼の不きげんは疫病よりもつと恐ろしいものであつた。

金はなく、友もなく、弁護者もなく、年老いた囚人パウロはネロの前に立つた。皇帝の顔つきには、内面の荒れ狂う激情の恥ずべき記録が現れていたが、被告の顔には、神と共にある平和な心が現れてい



皇帝ネロ（37～68 在位54～68）暴君として悪名高いが、この像も、わがままで自制心を欠き、自ら破滅した彼の面影を伝えている。

た。パウロの経験は、貧困と克己と苦悩の経験であった。敵は絶えず、偽り、非難、悪口を並べてパウロをおどそうとしたが、それにもかかわらずパウロは、恐れなく十字架の旗を高く掲げてきたのである。パウロは主のように、家のない放浪者であり、主と同様、人類を祝福するために生きてきた。気まぐれで激情的で放縦な暴君ネロが、この神の子の品性と動機をどうして理解し、あるいはその真価を認められようか。

広い法廷には、気のはやる、落ち着きのない群衆が集まっていて、行なわれることをもれなく見聞きしようと、前方へと押し合いへし合いしていた。そこには身分の高い者も低い者もいた。金持ちも貧乏人も、教養のある者も無学な者も、高慢な者も謙遜な者もいたが、みな同じように、人生と救いについての真の知識に欠けていた。

ユダヤ人はパウロに対して、騒乱扇動や異端など古くからの告発を持ち出し、また、ユダヤ人もローマ人も、ローマ市の火事をそそのかしたのは彼であると訴えた。パウロは、自分に対してこれらの告発がなされている間、少しも取りみださず平静であつた。人々や裁判官は、驚いて彼を見つめた。彼らは多くの裁判に出席し、多くの犯罪者を見てきていたが、自分たちの目の前にいる囚人のように神々しい冷静さを帯びた人物は見たことがなかった。裁判官たちの鋭い目は、囚人たちの顔つきを読みとることになれていたが、パウロの顔には何のやましい証拠も読みとれなかった。パウロが自分のために弁護することを許されたとき、一同は熱心な興味をもって耳を傾けた。

もうひとたびパウロは、不思議そうな群衆の前に十字架の旗を掲げる機会を得る。ユダヤ人、ギリシヤ人、ローマ人、また各地からの他国人などから成る、目の前の群衆を見つめるとき、パウロの心は、彼らを救いたいという熱烈な願いにかきたてられる。パウロは、その場の状況、自分をとり巻いている危険、もう間近に思える恐ろしい運命を忘れる。彼は、罪人のために神のみ前で懇願しておられるイエスだけを見る。人間の雄弁と力以上のものをもって、パウロは福音の真理を示す。彼は、墮落した人類のためにささげられた犠牲を、聴衆に指し示す。また、人類のあがないのために無限の値が支払われたことを語る。人が神のみ座にあずかるための準備がなされた。天の使者たちによって、地は天とつながられ、人々の行為はすべて、良いものも悪いものも、正義であられる神の目には明らかである。

真理の唱道者はこのように訴える。信仰のない者たちに囲まれた信仰者、不忠実な者たちの間の忠実な者として、パウロは神の代理人として立つ。彼の声は天からの声のようである。言葉にも顔の表情にも、恐れや悲しみや失望の色はない。無罪を強く確信し、真理の武具を着て、パウロは自分が神の子であることをよるこぶ。彼の言葉は、戦場の勝ちどきより大きな、勝利の叫びのようである。パウロは、自分が生涯をささげてきた大目的を、決して失敗することのない唯一のものだと言明する。たとえば彼が滅びても、福音は滅びない。神は生きておられる。そして神の真理は勝利するのである。

その日彼を見つめていた多くの人々には「彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた」（使徒行伝六ノ一五）。

一同はそれまでこのような言葉を聞いたことがなかった。これらの言葉は心の琴線にふれて、最もかたくなな者たちの心をもゆり動かした。明瞭で説得力のある真理は、誤りをくつがえした。光は多くの人々の心を照らし、彼らはその後よろこんでその光に従った。その日に語られた数々の真理は、国々をゆり動かし、各時代を生き続けて、それらを語った唇が殉教者の墓の中で沈黙してしまっても、人々の心に感化を及ぼすのであった。

ネロは、この機会に聞いたような真理を、それまで聞いたことがなかった。自分自身の生活の途方もない罪が、これほど彼に示されたことは、それまでなかった。天の光が、罪にけがれた彼の魂のへやにさし込み、彼は、この世の支配者である自分も、最後には罪を責められ、自分の行為にふさわしい報いが与えられるさばきの場に立つことを思つて、恐怖にうちふるえた。彼は使徒の神を恐れ、だれも告発を裏づけることのできなかつたパウロに、あえて宣告をくだすことを恐れた。畏怖の念によつてネロの残忍な精神は一時抑制された。

一瞬間、不義でかたくななネロに天が開かれ、その平安と純潔が望ましいものに思われた。その瞬間にあわれみの招きが、彼にさえも差しのべられた。しかし、神のゆるしを受けることができるという考えが、ネロの心に受け入れられたのは、ほんの一瞬のことであつた。それからパウロを牢に連れ戻すようにと命令が出された。そして、神の使者に対して戸が閉ざされたとき、ローマの皇帝には、悔い改めのとびらが永久に閉ざされたのであった。天からの光線は、彼を包んでいた暗黒を再び貫き通すことは

なかった。彼は、まもなく、報いとしての神のさばきを受けるのであった。

こののち間もなく、ネロはギリシヤへの悪名高い遠征に出帆し、そこで、卑劣で品位を落とす軽薄な行動によって、自分自身と王国とに恥辱をもたらした。彼は非常に華麗なさまでローマに帰り、廷臣に取りまかれて、不快を催させるような放とうにふけた。このばか騒ぎの最中に、通りに騒々しい声が聞こえた。原因を知るために使者がつかわれたが、恐ろしい報告をもつて帰ってきた。軍の統率者であるガルバが、急速にローマへと進軍しつつある、市内では既に反乱が起きた、町の通りは怒り狂った群衆でいっぱいになり、彼らは皇帝とその一味を殺してやるとおどしながら、宮殿へと押し寄せてきている、というのだった。

この危機の時にあたって、ネロは、信仰深いパウロのように、より頼むことのできる力強くあわれみ深い神を持っていなかった。群衆の手にかかって耐えなければならぬ苦しみと、おそらく受ける拷問とを恐れて、この哀れな暴君は、自分の手で自分の命を絶とうと思った。しかし、そのきわどい時に、彼は勇気がくじけた。男らしさを全く失ったネロは、不名誉にも町から逃げ出し、数マイル離れた田舎の邸宅に身をひそめようとした。しかしこれもむだであった。ネロの隠れ家はすぐに見つけられた。追跡の騎兵が近づいたとき、ネロは奴隷を呼び出し、彼の手を借りて自分自身に致命傷を負わせた。こうして暴君ネロは、三二才の若さで死んだのであった。

第四十九章 パウロの最後の手紙

本章はテモテへの第二の手紙に基づく

ローマ皇帝の法廷から、パウロは自分の独房に帰ってきた。彼は自分がほんの一時的な執行猶予を得たことを悟った。彼は、敵が、彼の死を達成するまでは休まらないことを知っていた。しかし彼はまた、しばらくのあいだ真理が勝利したことも知っていた。彼に聞き入っていた大勢の群衆に、十字架にかけられ、よみがえられた救い主を宣べ伝えたことは、それだけで勝利であつた。その日、一つの働きが始まつたのである。その働きは、発展し、強くなり、ネロやその他のいかなるキリストの敵がそのじやまをしたり、破壊しようとしたりしても、できないのであつた。

くる日もくる日も、陰うつな独房に座り、ネロの一言で、あるいは一度うなずくだけで、自分のいちがさがげられることを知って、パウロはテモテのことを思い、彼を呼びにやろうと決めた。テモテにはエペソの教会の世話がゆだねられていた。それでパウロがローマへ最後にやって来たときにも、テモ

テは後に残されていたのであった。パウロとテモテは並々ならぬ深い、強い愛情で結ばれていた。テモテは改心して以来、パウロとともに骨折りと苦難を分かち合い、このふたりの間の友情はますます強く、深く、きよいものとなり、テモテは、愛し尊敬する父親に対する息子のように、年老い、やつれた使徒に對した。孤独と寂しさの中で、パウロがテモテに会いたいと願ったのも、当然であつた。

最も好都合な事情のもとでも、テモテが小アジアからローマに着くには数か月かかったにちがいない。パウロは自分のいのちが不確実なことを知っていたので、テモテの会いに来るのが遅すぎることにならないかと恐れた。彼には、大きな責任がゆだねられているこの青年に与えたい、大切な勧告と教えがあつた。そこで、テモテには遅れず来るよう勧める一方、パウロは、言わずに終わることのないように、死に臨んでのあかしを書いた。パウロの魂は、福音による彼の息子と、息子にゆだねられている教会への、愛情に満ちた心づかいでいっぱい、彼はテモテに、その聖なる任務を忠実に果たすことの重要性をしっかりと教えたいと思つた。

パウロはいさつの言葉で手紙を始めた。「父なる神とわたしたちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とが、あなたにあるように。わたしは、日夜、祈の中で、絶えずあなたのことを思い出しては、きよい良心をもって先祖以来つかえている神に感謝している。」

それから使徒はテモテに、堅固な信仰を持つようにと勧めた。「こういうわけで、あなたに注意したい。わたしの按手によって内にいただいた神の賜物を、再び燃え立たせなさい。というのは、神がわたし

たちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。だから、あなたは、わたしたちの主のあかしをすることや、わたしが主の囚人であることを、決して恥ずかしく思ってはならない。むしろ、神の力にささえられて、福音のために、わたしと苦しみを共にしてほしい」。パウロはテモテに、彼自身が、「福音によっていのちと不死とを明らかに示された」かたの力を宣べ伝えるために、「聖なる招きをもって」召されたということを、覚えていてほしいと述べ、「わたしは、この福音のために立てられて、その宣教師、使徒、教師になった。そのためにまた、わたしはこのような苦しみを受けているが、それを恥としない。なぜなら、わたしは自分の信じてきたかたを知っており、またそのかたは、わたしにゆだねられているものを、かの日に至るまで守って下さることができると、確信しているからである」と言明した。

パウロは長い奉仕の期間をとおして、救い主への忠誠がぐらついたことは決してなかった。どこにしようとも、むずかしい顔をしたパリサイ人や、あるいはローマの役人たちの前であろうと、ルステラでの怒り狂う群衆や、マケドニアの獄屋での囚人たちの前であろうと、難破船の上であわてふためいている水夫たちを説得している時であろうと、ネロの前にただひとり立って弁明している時であろうと

パウロは自分の擁護する主義を決して恥としなかった。パウロのクリスチャン生活の一大目的は、かつてはその名を軽蔑していたかたに仕えることであつた。どんな反対や迫害も、彼をこの目的から引き離すことはできなかった。努力によって強められ、犠牲によって純粋にされた信仰は、彼を支え、そし

て強めた。

「そこで、わたしの子よ。あなたはキリスト・イエスにある恵みによって、強くなりなさい。そして、あなたが多くの証人の前でわたしから聞いたことを、さらにほかの者たちにも教えることのできるような忠実な人々に、ゆだねなさい。キリスト・イエスの良い兵卒として、わたしと苦しみと共にしてほしい」。

神の本当の牧師は、困難や責任を回避しない。彼は、神の力を心から求める人々を決して失望させることのない源であられる神から、誘惑に立ち向かってそれに勝利できるように、また、神から与えられた義務を果たすことができるように、力を引き出すのである。彼の受ける恵みの力は、神とみ子を知る彼の力量をひろげる。彼は主に受け入れられる奉仕をしたいと切望して出て行く。そしてクリスチャンの道を進むにつれて、彼は「キリスト・イエスにある恵みによって、強くな」るのである。この恵みによつて彼は、聞いた事を忠実にあかしすることができるようになる。彼は神から受けた知識を軽蔑したり、おろそかにしたりしないで、この知識を忠実な人々にゆだね、次には彼らが他の人々へ伝えるのである。

このテモテへのパウロの最後の手紙の中で、パウロはこの若い働き人の前に高い理想をかがげ、キリストに仕える者として彼にゆだねられている義務を指し示した。「あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい」と使徒は書いた。「あなたは若い時の情欲を避けなさい。そして、きよい心をもって主を呼び求める人々と共に、

義と信仰と愛と平和とを追い求めなさい。愚かで無知な論議をやめなさい。それは、あなたが知っているとおりの、ただ争いに終るだけである。主の僕たる者は争ってはならない。だれに対しても親切であつて、よく教え、よく忍び、反対する者を柔和な心で教え導くべきである。おそらく神は、彼らに悔改めの心を与えて、真理を知らせゝて下さるであらう。

使徒は、教会に入りこもうとしている偽教師について、テモテに警告した。「このことは知っておかねばならない。終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者……信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであらう。こうした人々を避けなさい」。

彼はさらに続けた。「悪人と詐欺師とは人を惑わし人に惑わされて、悪から悪へと落ちていく。しかし、あなたは、自分が学んで確信しているところに、いつもとどまっていなさい。あなたは、それをだれから学んだか知っており、また幼い時から、聖書に親しみ、それが、……救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであつて、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによつて、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるのである。」神は、この世にある悪との戦いに勝つための手段を、豊かに与えておいでになる。聖書は、われわれが戦いのために身支度をすることができる兵器庫である。われわれは真理の帯を腰にしめなければならない。正義の胸当をつけなければならない。

らない。信仰のたてを手に持ち、救いのかぶとを深くかぶり、み霊の剣、すなわち神のことばでもって、罪の障害やもつれを切り開いて行かなければならない。

パウロは教会の前には厳しい危難の時があることを知っていた。彼は、教会の責任をゆだねられている人々が、忠実に熱心に仕事をしなければならないことを知っていたので、テモテにこう書き送った。「神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」

テモテのような熱心で忠実な者に、改めてこのような厳粛な訓告がなされていることは、福音伝道の働きの重要性和責任の重さを、はっきり証明するものである。パウロはテモテを神の法廷に呼び出し、人の言いならわしや習慣ではなくみことばを宣べ伝えるように、大会衆の前でも、個人的な集まりでも、道ばたでも炉ばたでも、友人にも敵にも、安全なときも、困難や危険、非難や損害にさらされているときも、機会があるときにはいつでも神のためにあかしをたてるように、と命じる。

テモテの性質が穏やかで従順なために、彼の働きの大事な部分を避けるのではないかと案じて、パウロは彼に、罪は忠実に譴責するように、また、ひどい悪事を行っている者は厳しく譴責するようにと、熱心に説いた。しかもテモテはこれを、「あくまでも寛容な心でよく教え」なければならなかった。彼はキリストの忍耐と愛をあらわし、みことばの真理によって自分の譴責を説明し主張するのであった。

罪を憎んで譴責しながら、同時に罪人をあわれみ、やさしさを示すということは、むずかしいことである。われわれが、心と生活を聖潔の域に到達させようと熱心に努力すればするほど、罪に対するわれわれの知覚は鋭敏になり、正しいものからの逸脱を認めぬ気持ちがいよいよ強まってくる。われわれは、不正な行いをする者に過度に厳しくならぬよう注意しなければならないが、しかしまた、罪のはなはだしい罪深さというものを見落とすことのないよう、気をつけなければならない。過ちを犯している者に、キリストのような忍耐と愛を示すことは必要であるが、過ちに寛大すぎると、譴責を受けるほどでもないと思ひ込ませてしまい、その譴責を不必要なもの、不当なものとして拒むようにさせてしまう危険がある。

福音を伝える牧師たちは時々、誤りに陥った者たちに対して寛容なあまり、罪を黙認し、みずから罪に関係することさえして、大きな害を及ぼすことがある。こうして彼らは、神がとがめておられることをゆるしたり、弁解したりするようになり、しばらくすると、神が譴責するようにと命じておられるその人々をほめるまでに盲目となってしまう。神がとがめておられる人々に、罪深い寛大さを示すことによって、自分の霊的な知覚力を鈍らせている者は、やがて、神が是認される人々に対して厳しい、苛酷な態度をとることによって、さらに大きな罪を犯してしまうであろう。

クリスチャンだと自称し、また他人を教える資格があると自負している多くの者たちが、人間の知恵を誇り、聖霊の感化を輕蔑し、神のみことばの真理をきらうために、神の要求から離れて行くであろう。

パウロはテモテに言った。「人々が健全な教に耐えられなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、作り話の方にそれていく時が来るであろう」。

使徒パウロはここで、公然と不信仰な人たちのことを言っているのではなく、自分の好みを頼りにして、そのために自我の奴隷になっている、口先だけのクリスチャンのことを言っているのである。このような人たちは、自分たちの罪を責めたり、快楽を愛する生活を非難したりすることのない教えだけに、喜んで耳を傾ける。彼らはキリストの忠実なしもべたちのはつきりした言葉に腹をたて、自分たちをほめたりへつらったりする教師たちを好む。また、牧師をもつて任じている者たちの中には、神のみことばの代わりに人々の意見を説教する者たちがいる。彼らは義務に不忠実で、彼らに靈的指導を求める人を惑わしているのである。

神は聖なる律法の教えの中で、完全な生活の規則を与えておられる。そして神は、この律法は世の終わりまで、一点一画も変えられることなく人間に要求されるものであると宣言された。キリストは律法を大いなるものとし、かつ光栄あるものとするために来られた。律法が神への愛と人への愛という広い土台に基づいていること、そして、人間の義務はすべて律法の教えに従うということに尽きることを、キリストはお教えになった。キリストはご自身の生活において、神の律法に従う模範をお与えになった。山上の垂訓の中で主は、神の律法の要求が、いかに外面的な行為を越えて広く及ぶものであり、心の中

の思いや意図を含むものであるかをお示しになった。

律法は、これに従えば、人々を導き、「不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎み深く、正しく、信心深く……生活」するようにさせる（テトス二ノ一二）。しかしすべての正義の敵は、この世を捕虜にし、人々を律法に従わないようにさせてきた。パウロが予見したように、多くの者が神のみことばの明瞭で徹底した真理に背を向けて、自分たちの好む作り話をしてくれる教師たちを選んできた。牧師や一般信徒を含めて、多くの者たちが神の十戒をふみにじっている。こうして世界の創造主が侮辱され、そしてサタンは自分の策略の成功を勝ち誇って笑うのである。

神の律法に対する軽蔑がひどくなるにつれて、宗教に対する嫌悪が増し、人はますます高慢になり、快樂を愛し、両親にそむき、放縱になる。そして、思慮深い人々はいたるところで、こうした驚くべき悪をどうしたら正すことができるだろうかと、心配してたずねている。答えは、テモテに与えたパウロの勧告の中に見いだされる。「御言を宣べ伝えなさい」。聖書には、唯一の安全な行動原理が示されている。聖書は神のみことばの写しであり、神の知恵の表現である。聖書は人生の大問題を人間に理解させる。そして聖書は、その教えに耳を傾けるすべての人にとって、誤りのない指導書となり、見当違いの努力を払って人生をむだにすることのないようにさせるのである。

神はすでにみこころをお知らせになった。だから、人が、すでに神のみ口から出たことに疑問を持つのは愚かなことである。無限の知恵を持つおかたが語られたあとに、人間が解決しなければならないよ

うな疑わしい問題や、調整しなければならぬあいまいな可能性など、あるはずがない。人間に求められているのは、すでにあらわされている神のみこころに、率直に熱心に協力することだけである。従順は良心のみならず、理性の最高の命令でもある。

パウロはさらに勧めた、「あなたは、何事にも憤み、苦難を忍び、伝道者のわざをなし、自分の務を全うしなさい」。パウロは自分の行程を走り終えようとしていた。そこで彼は、テモテが自分に代わってくれて、敵がさまざまな方法で、教会員を単純な福音からそれさせようとして用いる作り話や異説から、教会を守ってくれるようにと願った。彼は、テモテが、神のためになすべき働きに自分のすべてをささげるにあたって妨げとなる、この世的な仕事やかかわりあいから、いつさい身をひくようにと忠告した。そして、信仰のゆえに出会わねばならない反対、非難、迫害に、喜んで耐えるように、また、キリストが犠牲となって亡くなられたその人々の、益となることを行うために、できる範囲であらゆる手段を尽くすことによって、自分の務めを十分に吟味するようにと、パウロは勧めた。

パウロの生涯は、彼の説いた真理を例証するものであった。そしてここに彼の力があつた。彼の心は、深い不動の責任感で満ちていた。そして彼は、正義とあわれみと真理の源泉であられる神と密接に交わりながら働いた。彼はキリストの十字架を、成功の唯一の保証として、しっかりとつかんでいた。救い主への愛は、キリストへの奉仕においてパウロが、この世の敵意や、敵たちの反対をも押しのけて進んだときに、自己との戦いや悪との苦闘の中で、彼を絶えず支えた動因であつた。

この危難の時代に教会に必要なものは、パウロのように、自分自身を有用なものに教育し、神の事柄に深い体験を持ち、まじめで熱意に満たされている働き人の軍隊である。きよめられた、献身的な人々が必要とされている。それは、試練や責任を避けない人々であり、勇敢で真実な人々であり、「栄光の望み」であられるキリストが心の中に形づくられている人々であり、きよい火に触れたくちびるで「御言を宣べ伝え」る人々である。このような働き人が欠乏しているために神のみわざは衰退し、致命的な誤りが猛毒のように、道徳を腐敗させ、人類の多くの希望を挫折させている。

忠実な、労苦にやつれた指導者たちが、真理のために命をささげているとき、だれが進み出て、彼らの代わりをつとめるのであろうか。青年たちは父たちの手から、その聖なる責任を受け取るであらうか。彼らは、信仰者の死によって欠員となる場所を、補充する用意をしているだろうか。若い者たちをそのかす、利己主義や野心への誘惑のただ中であって、パウロの教訓はかえりみられ、義務への召しは聞かれるであらうか。

パウロは手紙を、それぞれの人への個人的な伝言で結び、できれば冬になる前に、急いで来てくれるようにと、もう一度テモテに頼んだ。ある友人たちには見捨てられ、またある友人たちは去らざるを得なかった。そのための寂しさを彼は語った。そして、エペソの教会がテモテの働きを必要としていることを気づかって、テモテがためらうことのないように、すでにその補いとしてテキコをつかわしたと、パウロは述べた。

ネロの前での裁判の様子や、兄弟たちが自分を捨てて行ったことや、契約を守られる神の恵みの支えについて語ったのち、パウロは、羊飼いたちが打ちのめされても、なおご自身の羊の群れの世話をなさる大牧者の保護のもとに、愛するテモテをゆだねることで手紙を終えた。

第五〇章 義の冠が待つ

ネロの前で行われたパウロの最後の裁判のとき、皇帝は使徒の力強い言葉に強い感銘を受けたので、告発されているこの神のしもべを無罪にすることも有罪にすることもせず、裁判の判決を延ばしていた。しかし、パウロに対する皇帝の敵意はすぐさまよみがえった。ネロは宮廷内においてさえキリスト教の普及を阻止できなかったことに激昂して、もっともらしい口実が見つかりしだい、使徒を死刑にするよう決めた。間もなくネロは、パウロを殉教させる宣告を下した。ローマ市民である彼を拷問にかけるわけにはいかなかったので、斬首の刑が宣告された。

パウロはひそかに処刑の場に連れて行かれた。見物人はほとんどだれもその場に出ることを許されなかった。というのは、迫害者たちは、パウロの感化力が広範囲にわたっていることに驚いていたので、彼の死の光景が人々をキリスト教に改宗させるのではないかと恐れたからである。しかし、彼に付き添

っていた冷淡な兵士たちでさえ、彼の言葉に聞き入り、彼が死を目の前にして明るく、喜ばしそうにさえしているのを見て驚いた。彼の殉教を目撃したある者たちにとって、自分の殺害者たちに対するパウロのゆるしの精神と、キリストに対する最後までゆるぎない信頼心とは、いのちからいのちに至るかおりとなった。パウロが説いた救い主を受け入れ、間もなく自分たちの信仰をみずからの血で恐れることなく証明した者が、ひとりならずあった。

パウロの生涯は、その最後の時まで、コリント人への彼の言葉の真実性を証明した。「『やみの中から光が照りいでよ』と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであつて、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである」(コリント第二・四ノ六・一〇)。パウロは、彼自身によって、満ち足りていたのではなく、彼の魂を満たし、すべての思いをキリストのみこころに従わせる、聖霊の存在と働きによって満ち足りていた。「あなたは全き平安をもつてこころざしの堅固なものを守られる。彼はあなたに信頼しているからである」と預言者イザヤは言っている(イザヤ書二六ノ三)。パウロの顔にあらわれていた天来の平安が、多くの魂を福音に導いたのであった。



トレフォンタネ教会 ローマの南5 km、オスティア街道を少し離れた地に、5世紀ごろ建てられたサン・パオロ・アッレ・トレフォンタネ教会で、パウロが斬首刑になったとき頭が3度飛んだという伝承に基づいて建てられたもの。そのために「トレ・フォンタネ」の名がある。現在の教会は、1599年に再築されたもので、美しい切妻の正面をもっている。

パウロは天の雰囲気を持っていた。彼と交わった人々はみな、彼がキリストとつながっていることを感じた。彼自身の生活が彼の宣べ伝える真理を例証していたため、彼の説教には説得力があった。ここに真理の力がある。きよい生活の、気取らない無意識の感化は、キリスト教のために与えることのできる最も説得力のある説教である。議論は、たとえそれが相手に反論の余地を与えないものであっても、なお反対しか引き起こさないことがある。しかし敬虔な模範は、完全には抵抗できない力を持っている。

使徒パウロは、自分の身に迫っている苦難を忘れて、後に残して行こうとしている人々が偏見や憎しみや迫害に立ち向かわねばならないことを気づかった。彼は、処刑の場に付き添ってきた数人のクリスチャンに、義のために迫害される人々に与えられている約束をくり返して、彼らを力づけ、励まそうと努めた。試練に耐えぬく忠実な子らについて主がお語りになった事で、果たされないものは何もないと、パウロは彼らに保証した。ほんのしばらくの間は、彼らは多くの誘惑に会ってつらい思いをするであろう。また、この世での慰めもないかもしれない。しかし彼らは、神の誠実さを保証することばで心を励まして、こう言うことができる、「わたしは自分の信じてきたかたを知っており、またそのかたは、わたしにゆだねられているものを、かの日に至るまで守って下さることができると、確信している」(テモテ第二・一ノ一二)。やがて試練と苦しみの夜は終わり、平和で全き日の喜びの朝が明けるであろう。

使徒パウロは、不安と恐れを抱いてではなく、喜ばしい望みとあこがれの期待を持って、大いなるかたをながめた。殉教の場に立っている彼には、執行人の刀も、間もなく自分の血を受けようとしてい

る大地も目に入らない。彼は、夏の日の静かな青い空を見上げ、そのかなたの永遠の神のみ座を仰ぐ。

この信仰の人は、天と地をつなぎ、また有限な人間を無限の神につないで下さったキリストを表わす、ヤコブの幻のはしごを見上げる。自分を支え慰めて下さるおかた、そして、自分がいのちをささげようとしているそのおかたを、父祖たちや預言者たちがどんなに深く信頼していたかを思い起こして、彼の信仰は強められる。各時代にわたって信仰のあかしを立ててきたこれらの聖徒たちから、パウロは、神が真実であられるという保証を聞く。パウロの仲間の使徒たちは、キリストの福音を宣べ伝えに出て行き、宗教的偏狭さや異教の迷信、迫害、軽蔑に会ったが、不信心の暗い迷路の真ただ中に、十字架の光を高く掲げることができれば、自分たちのいのちは惜しいとは思わなかった。これらの人々が、イエスを神のみ子、世の救い主としてあかししているのを、パウロは聞く。拷問台や火あぶりの柱、土牢から、地のほら穴から、殉教者の勝利の叫びがパウロの耳に聞こえてくる。彼は、忠実な人々が、たとえ欠乏しても、悩まされ苦しめられても、なお恐れなく厳粛に信仰をあかしし、「わたしは自分の信じてきたかたを知ってゐると言うのを聞く。信仰のために自分のいのちをささげる人々は、自分たちの信じてきたおかたこそ完全に救うことができるのであると、世に向かって宣言しているのである。

キリストの犠牲によってあがなわれ、その血によって罪からきよめられ、その義を着せられて、パウロは、自分の魂はあがない主の御目に尊いものだというあかしを持っている。彼の生命はキリストと共に神のうちに隠され、彼は、死を征服されたかたはご自分にゆだねられたものを守ることがおできにな

ると確信している。彼の心は、「わたしはその人々を終りの日によみがえらせるであろう」という救い主の約束をつかんでいる（ヨハネ六ノ四〇）。彼の思いと望みは、主の再臨に集中している。そして、執行人の剣がふり下ろされて、死の影が殉教者のまわりを取り巻くとき、わき上がる最後の思いは、大いなるよみがえりのときの最初の思いと同じく、いのちを与えて下さるおかたにお会いし、そのかたが、祝福された者の喜びに自分を入れて下さるということである。

年老いたパウロが、神のみことばとイエス・キリストのあかしのための証人として血を流してから、ほとんど二十世紀が過ぎた。この聖なる人の一生の最後の場面を、将来の世代のために忠実に記録した人はなかった。しかし天来の靈感は、死に臨んだ彼のあかしを、われわれのために保存してきた。彼の声はラツパのひびきのようにその後の各時代に鳴りわたり、彼の勇氣はキリストの幾千の証人を奮い立たせ、悲しみに沈んだ幾千の人々の心に、彼自身の勝利の喜びを反響させている。「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう」（テモテ第二・四ノ六 八）。

第五章 忠実な羊飼

本章はペテロの第一の手紙に基づく

使徒行伝には使徒ペテロの後期の働きについては、ほとんど記されていない。ペンテコステの聖霊の降下続く活発な伝道の期間、ペテロは、年毎の祭にエルサレムに参拝しにやってくるユダヤ人たちに接しようと、ほかの者たちに混じってたゆまぬ努力を続けていた。

十字架の使命者たちがエルサレムやその他の場所を訪問し、信者の数が増えるにつれて、ペテロの持っていた才能は、初期のキリスト教会にとって測り知れない価値を持つものであることがわかった。ナザレのイエスについての彼のあかしは、広く遠く影響を及ぼした。彼の上には二重の責任が負わされていた。彼は未信者たちの前で積極的にメシヤについてあかしを立て、彼らを改心させるよう熱心に働くとともに、信者たちに特別に働きかけて、キリストに対する彼らの信仰を強めた。

ペテロは、自己放棄へと導かれて、完全に神の力により頼むようになったときはじめて、大牧者のも

とで働く羊飼いとしての召しを受けた。キリストは、ペテロがキリストを拒む前に、「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」と、ペテロに言っておられた（ルカ二二ノ三二）。このみことばは、この使徒がやがて、信仰に導かれるはずの人々のためになさねばならない、広範で効果的な働きのことを意味していた。ペテロ自身の罪と苦しみと悔い改めの経験が、この働きのために、彼を準備させたのであった。彼は自分の弱さを知るまで、キリストにより頼むことの必要を悟ることができなかつた。誘惑の嵐のただ中で彼は、人は自己を全く放棄して救い主により頼むときにはじめて、安全に歩むことができるということを理解するようになっていた。

キリストと弟子たちが最後に海辺で会ったとき、ペテロは、「わたしを愛するか」と三度くり返して問われ、ためされて、十二使徒の座にもどされた（ヨハネ二一ノ一五 一七）。彼の働きは既に定められていた。彼は主の羊たちを養うのであった。悔い改め、受け入れられた今、彼は、囲いの外の人々を救う努力をしなければならぬばかりか、羊たちの牧者にならなければならなかつた。

キリストはペテロに、奉仕の条件をたった一つだけ言われた、「わたしを愛するか」。これが最も大切な資格である。ペテロに他のものが全部備わっていたとしても、もしキリストを愛する愛がなければ、神の羊たちを牧する忠実な羊飼いになることはできなかった。知識、博愛、雄弁、熱情、これらすべてはよい働きに欠くことのできないものであるが、心にキリストへの愛がなければ、キリスト教の牧師の仕事は失敗である。

キリストへの愛は気まぐれな感情ではなく、生きた原則であり、心の中にある変わることのない力としてあらわれるものである。羊飼いの品性と品行が、彼の主張する真理をよく示しているならば、主はその働きを承認する印を押して下さる。羊飼いと羊の群れは、キリストにある共通の望みによって結ばれ、一つになる。

救い主がペテロを取り扱われた方法は、ペテロと彼の仲間たちにとって一つの教訓を含んでいた。ペテロは主を拒んだが、主が彼に対して抱いておられた愛は、決してゆるがなかった。そしてこの使徒が、みことばを他の人々に伝える働きに携わるようになったとき、彼は罪を犯す者に、忍耐と同情とゆるしの愛をもって接しなければならなかった。彼は自分自身の弱さと失敗を思い起こして、キリストが彼を取り扱われたように、優しく心を配って、羊や小羊たちを扱わねばならなかった。

人間は、自分自身が悪に染まってしまっているので、誘惑に陥っている者や過ちを犯している者にとわりのない扱いをしがちである。人間には人の心が読めず、心のあがきや痛みを知らない。彼らは、愛の譴責について、いやすために傷つける打撃について、また、希望を告げる警告について、学ぶ必要がある。

ペテロは働きの初めから終わりまでずっと、自分の手にゆだねられた羊の群れを忠実に見守り続け、こうして、救い主から与えられた責任にふさわしい者であることを証明した。彼は絶えずナザレのイエスを、イスラエルの望み、人類の救い主としてあがめた。彼は自分自身の生涯を、大教師の訓練のもと



よき羊飼い なんの支えも持たない直立の羊飼い像は珍しいが、これはその一つ。キリスト教時代の初期のもの。ゆったりとした感じの服がおもしろい。ラテラン博物館蔵。

においた。また、力のかぎりあらゆる手段を用いて、信者たちを活動的な奉仕のために教育しようとした。ペテロの敬虔な模範とたゆまぬ活動は、有望な多くの若者たちを励まし、彼らを伝道の働きに献身させた。時がたつに従い、教育者として、また指導者としての使徒の感化は強まった。そして彼は、ユダヤ人のための特別な働きの手は決してゆるめなかったが、一方では多くの地方にあかしを立て、福音を信じる多くの群れの信仰を強めた。

ペテロは、その働きの晩年において、靈感を受けて、「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジャおよびビテニヤに離散し」ている信者たちに手紙を書いた。彼の手紙は、試練や苦難に耐えている者たちの勇気を奮い起こさせ、信仰を強め、また、多くの誘惑の中で神とのつながりを失う危険に陥っている者たちを、再び良い働きに励ませる手段となった。これらの手紙は、キリストの苦難と慰めを十分に受けてきた者、また、その全存在が恵みによって変えられ、永遠のいのちという確かでゆるぎない望みを持っている者によって書かれたという印象を与える。

この年老いた神のしもべは、彼の第一の手紙の最初に、主にさんびと感謝をささげている。「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しばむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのである。あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、信仰により神の御

力に守られているのである」と彼は言った。

新しくされた地で確かに資産を受け継ぐというこの望みを抱いて、初期のクリスチャンたちは、厳しい試練や苦難に会っている時でさえも、喜んでいた。「今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいて。こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変わるであろう。あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども……言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである」と、ペテロは書いた。

使徒の言葉は、あらゆる時代の信者たちを教えるために書かれた。そしてこれは、「万物の終りが近づいている」時に生存している者にとって、特別な意味を持っている。彼の励ましと警告、信仰と勇気の言葉は、「最後までしっかりと」信仰を持ち続けようとする、すべての者に必要である（ヘブル三ノ一四）。

使徒ペテロは信者たちに、禁じられた話題へと心がさまよわないように、あるいは、つまらぬことにその力が浪費されないようにすることが、いかに大切かを教えようと努めた。サタンの策略のとりこにならないようにしようと思う者は、魂の通路をよく見張っていなければならない。思いを不純にするようなものを読んだり、見たり、聞いたりしないようにしなければならない。魂の敵がほのめかすような

問題に、手当たり次第にとびついたりしないよう、心を引きしめていなければならない。心は忠実に見張られていなければならない。でないと、外部の悪が内部の悪を目覚めさせて、魂を暗黒の中にさまよわせるであろう。「心の腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリストの現れる時に与えられる恵みを、いささかも疑わずに待ち望んでいなさい。……無知であつた時代の欲情に従わず、むしろ、あなたがたを召して下さつた聖なるかたにならつて、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』と書いてあるからである」。

「地上に宿っている間を、おそのの心をもつて過ごすべきである。あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によつたのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によつたのである。キリストは、天地が造られる前から、あらかじめ知られていたのであるが、この終りの時に至つて、あなたがたのために現れたのである。あなたがたは、このキリストによつて、彼を死人の中からよみがえらせて、栄光をお与えになつた神を信じる者となつたのであり、したがつて、あなたがたの信仰と望みとは、神にかかつていのである」。

もし銀や金で人々の救いを買うことができたとすれば、「銀はわたしのもの、金もわたしのものである」と言われるかたは、いともたやすく人々の救いを成就されたであろう（ハガイ書二ノ八）。しかし、

罪人は、神のみ子の尊い血によつてのみあがなわれることができた。救いの計画は犠牲の中にあつた。使徒パウロは「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによつて富む者になるためである」と書いている（コリント第二・八ノ九）。キリストはあらゆる罪からわれわれをあがなうために、ご自身をお与えになつた。そして救いの最高の祝福として「神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」（ローマ六ノ二三）。

「あなたがたは、真理に従ふことによつて、たましいをきよめ、偽りのない兄弟愛をいだくに至つたのであるから、互に心から熱く愛し合いなさい」と、ペテロは続けた。神のみことば、すなわち真理は、主がみ霊と力をあらわされる通路である。みことばに従ふことによつて、要求されている実、すなわち「偽りのない兄弟愛」という実を結ぶ。この愛は天から生まれ、高尚な動機や無我の行動へと至る。

真理が生活の中の不動の原則になるとき、魂は「朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変ることのない生ける御言によ」つて「新たに生れ」る。この新生は、キリストを神のことばとして受け入れた結果である。聖霊によつて神の真理が心に刻まれると、新しい思いが喚起され、これまで眠っていた力が呼びさまされて神と協力する。

ペテロと仲間の弟子たちの場合もそうであつた。キリストは、真理をこの世にあらわされるかたであつた。キリストによつて、朽ちない種、神のみことばが人々の心にまかれた。しかし、この大教

師の最も大切な教訓の多くが、語られた当時はその人々に理解されなかった。キリストの昇天後、聖霊がキリストの教えを弟子たちに思い出させたとき、彼らの眠っていた意識が目覚めさせられた。これらの真理の意味が新しい啓示として彼らの心にひらめき、純粹で混ぜ物のない真理が定着した。そのときキリストのご生涯のすばらしい経験が彼らのものとなった。みことばは、主の任命されたその人々を通してあかしされ、彼らはその力強い真理を宣べ伝えた。「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。……（それは）……めぐみとまことに満ちていた」。「わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた」（ヨハネ一ノ一四、一六）。

使徒ペテロは、聖書を学ぶように、そしてそれを正しく理解して、永遠のために確かな働きをするようにと、信者たちを励ました。ペテロは、最後に勝利者となる者はみな、当惑や試みの場を経験することを知っていた。しかし彼はまた、聖書を理解していれば、試みられる者は、心を慰め、偉大なるかたへの信仰を強める、いくつもの約束を思い出すことができることを知っていた。

「『人はみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ている。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る』。これが、あなたがたに宣べ伝えられた御言葉である。だから、あらゆる悪意、あらゆる偽り、偽善、そねみ、いつさいの悪口を捨てて、今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救に入るようになるためである。あなたがたは、主が恵み深いかたであることを、すでに味わい知ったはずである。」

ペテロが手紙をあてた信者たちの多くは、異教徒たちの中に住んでいた。そして彼らが、その信仰の高い召しに忠実であり続けるかどうかにかかっていた。使徒ペテロは、キリスト・イエスに従う者としての特権を彼らに力説した。「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによつて、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。あなたがたは、以前は神の民でなかったが、いまは神の民であり、以前は、あわれみを受けたことのない者であつたが、いまは、あわれみを受けた者となっている。」

「愛する者たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたは、この世の旅人であり寄留者であるから、たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい。異邦人の中にあつて、りっぱな行いをしなさい。そうすれば、彼らは、あなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのりっぱなわざを見て、かえつて、おとずれの日に神をあがめるようになるう。」

使徒ペテロは、信者たちが公の権威に対してとるべき態度を明瞭簡潔に述べた。「あなたがたは、すべて人の立てた制度に、主のゆえに従いなさい。主権者としての王であろうと、あるいは、悪を行う者を罰し善を行う者を賞するために、王からつかわされた長官であろうと、これに従いなさい。善を行うことによつて、愚かな人々の無知な発言を封じるのは、神の御旨なのである。自由人にふさわしく行動しなさい。ただし、自由をば悪を行う口実として用いず、神の僕にふさわしく行動しなさい。すべての人をうやまい、兄弟たちを愛し、神をおそれ、王を尊びなさい。」

しもべたちは主人に仕えるようにと教えられた。「心からのおそれをもって、主人に仕えなさい。善良で寛容な主人だけにでなく、気むずかしい主人にも、そうしなさい。もしだれかが、不当な苦しみを受けても、神を仰いでその苦痛を耐え忍ぶなら、それはよみせられることである。悪いことをして打ちたたかれ、それを忍んだとしても、なんの手柄になるのか。しかし善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いつさいをゆだねておられた。さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。あなたがたは、羊のようにさ迷っていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもとに、たち帰ったのである」。

ペテロは信仰を持つ女性たちに、行いは清く、服装と態度は慎み深くあるようにと勧告した。「あなたがたは、髪を編み、金の飾りをつけ、服装をととのえるような外面の飾りではなく、かくれた内なる人、柔和で、しとやかな霊という朽ちることのない飾りを、身につけるべきである。これこそ、神のまえに、きわめて尊いものである」。

この教訓はどの時代の信徒にもあてはまる。「あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである」

（マタイ七ノ二〇）。柔和でしとやかな内面の飾りは極めて貴重なものである。真のクリスチャン生活において、外面の飾りは常に内面の平和ときよさとに調和している。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と、キリストは言われた（マタイ一六ノ二四）。自己否定と犠牲がクリスチャン生活の特色となる。好みが変わったことの証拠は、主にあがなわれた者たちのために与えられた道を歩むすべての者の服装に見られるようになる。

美を愛し、それを望むのは正しいことである。しかし神は、われわれが、まず最高の美、すなわち朽ちることのない美を、愛し求めるよう望んでおられる。どんな外面の飾りも、価値や美しさにおいて、「柔和で、しとやかな霊」、この世のすべての聖なる者たちが着る「純白で、汚れのない麻布の衣」と比べることのできるものは何もない（黙示録一九ノ一四）。この衣装は彼らを、この世においては美しく、愛される者とし、きたるべき世では、彼らが神の宮殿に入るためのしるしとなる。神は約束しておられる、「彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である」（黙示録三ノ四）。

使徒ペテロは、予言のまぼろしを受けて、キリストの教会が入ろうとしていた危難の時代を見やり、試練や苦しみに直面してもぐらつかないようにと信者たちを励ました。「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむこと」がないようにと、彼は書いた。

試練は、神の子らをこの世の不純なものからきよめるために、キリストの学校において与えられる教育の一部である。試みの経験がやってくるのは、神がその子らを導いておられるからである。試練や障害は、神がお選びになった訓練方法であり、神が指定された成功の条件である。人々の心を読み取られる神は、彼ら自身を知る以上に彼らの弱さをよく知っておられる。神は、ある者たちが、正しく指導されればみわざの進展に用いられることのできる資質を持っているのを見られる。み摂理のうちに、神は、これらの人々を違った立場や様々な環境に置き、自分では気づかない、隠れた欠点を発見できるようにさせて下さる。神は彼らに、これらの欠点にうち勝ち、献身するにふさわしい者となるような機会を与えて下さる。しばしば神は苦しみの火を燃えさせて、彼らがきよめられるようにして下さるのである。

神の選民に対する神の思いやりは尽きることがない。神が、神の子らの上にふりかかるのをお許しになる苦しみはみな、彼らの現在の、また永遠の利益のために、欠くことのできないものばかりである。キリストが地上でのご奉仕のあいだ宮をきよめられたように、神は教会をきよめられる。神が民たちをためし、試みるためにもたらされるものはすべて、彼らが、十字架の勝利を進展させるために、より敬虔になり、更に強くなるためである。

ペテロの経験において、キリストのお働きの中に十字架を見たくない時があった。救い主が弟子たちに、ご自身に迫る苦難と死を知らせられたとき、ペテロは「主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません」と叫んだ（マタイ一六ノ一二）。キリストと苦しみを共にすることを恐れ

る自己憐憫の気持ちから、ペテロはとつさにいさめようとした。この弟子にとって、この世のキリストの道が苦悩と屈辱の中にあることは、つらい教えであり、なかなか悟ることのできない教訓であった。しかし彼は、炉の火の真ただ中でこの教訓を学ぶのであった。かつての活動的な姿が、長年の重荷と労苦のために腰をかがめている今、彼は、「愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかつて来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よるこびにあふれるためである」と書くことができた。

キリストの羊の群れを飼う羊飼としての責任について、ペテロは教会長老たちに次のように書き送った。「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。そうすれば、大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠を受けるであろう。」

羊飼いの地位を占める者は、主の群れを注意深く見守らねばならない。それは、独裁的な監視ではなくて、励まし、強め、高めるよう導くものでなければならぬ。牧師の務めには、説教すること以上の意味がある。それは熱心な、個人的な働きである。地上の教会はまちがいの多い人々から成り立っている。彼らは、忍耐強く、労を惜しまず努力することによって訓練されて、この世において受け入れられ

る働きをなし、そして来世において栄光と朽ちぬものとを与えられるようにしなければならない。神の民に対してへつらうのではなく、彼らを苛酷に取り扱うのでもなくて、いのちのパンで彼らを養う牧師たち すなわち忠実な羊飼いが求められている。こうした羊飼いは、自分たちの生活の中で、聖霊の改心させる力を日ごとに感じ、自分たちが働きかける人々に対して強い無我の愛を抱くのである。

羊飼いは教会の中で、仲たがい、辛辣、ねたみ、嫉妬に対処するよう求められるとき、それを上手にさばく仕事が彼に負わされている。彼は、物事をきちんと整えるために、キリストのみ霊によって働かねばならない。牧師は説教壇から働きかけるばかりでなく、個人的に働きかけて、忠実に警告を与え、罪を譴責し、不正を正さなければならない。強情な人は教えに対して異議を申し立てるかもしれない。そして神のしもべは誤解され非難されるかもしれない。そのときには次のことばを思い出そう。「上からの知恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い。義の実は、平和を造り出す人たちによって、平和のうちにまかれるものである」（ヤコブ三ノ一七、一八）。

福音を伝える牧師の仕事は、「神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示す」ことである（エペソ三ノ九）。もしこの働きに携わる者が、最も自己犠牲の少ないことを選んで、説教に満足し、個人的な伝道の働きをだれか他の人に任せてしまうようなら、彼の働きは神に受け入れられるものとはならない。キリストが身代わりとなられた魂は、正しく導かれた個人的な接

触がないために滅びようとしている。牧師職に携わりながら、群れの世話に求められる個人的な働きに
尽くそうとしない者は、その召しを誤解しているのである。

真の羊飼いの精神は、自分自身を忘れる精神である。彼は神のみわざに携わるために、自我を見失う。
みことばを説教し、人々の家庭で個人的な伝道をすることにより、彼は人々の必要や、悲しみや、試み
を学ぶ。そして、重荷を負って下さる偉大な主と協力して、彼らの苦しみを共にし、失望を慰め、魂の
飢えを和らげ、彼らの心を神へと導く。この仕事をする牧師には天の使いが伴い、そして彼自身、救い
に至る知恵を与える真理を教えられ、啓発されるのである。

教会で責任ある地位を占めている人々への教えに関連して、使徒ペテロは、教会で交わる人々みんな
が従わなければならない一般的な原則のあらましを述べた。群れの若い者たちは、長老たちの模範にな
らって、キリストのような謙遜な態度を身につけるように勧められた。「同じように、若い人たちよ。

長老たちに従いなさい。また、みな互に謙遜を身につけなさい。神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる
者に恵みを賜うからである。だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時
が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。神はあなたがたをかえりみていて下さるのである
から、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい。身を慎み、目をさましていなさい。あな
たがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。こ
の悪魔にむかい、信仰にかたく立って、抵抗しなさい。」

こうしてペテロは、教会にやってきた特別な試練の時に、信者たちに手紙を書き送った。多くの人は既にキリストの苦難にあずかる者となっていた。そして、まもなく教会は、きびしい迫害の時代を経験するのであった。わずか数年のうちに、教会の教師や指導者の立場にあった人々の多くが、福音のために命を捨てるのであった。まもなく恐ろしいおおかみたちは侵入してきて、容赦なく群れのいのちを奪うのであった。しかし、これらのことはいずれも、希望の中心をキリストに置いている人々を失望させることはできなかった。ペテロは、励ましと勇気づけの言葉で、信者たちの心を現在の試練や未来の苦難の光景から、「朽ちず汚れず、しぼむことのない資産」へと向けさせた。彼は熱烈な祈りをささげた。「あなたがたをキリストにある永遠の栄光に招き入れて下さったあふるる恵みの神は、しばらくの苦しみの後、あなたがたをいやし、強め、力づけ、不動のものとして下さるであろう。どうか、力が世限りなく、神にあるように、アアメン。」

第五二章 最後まで忠実に

本章はペテロ第二の手紙に基づく

ペテロと「同じ尊い信仰」をさずかった人々へあてたペテロの第二の手紙の中で、使徒はクリスチャンの品性を成長させるための神のご計画を明らかにした。彼はこう書いている。

「神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。いのちと信心とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによって、わたしたちを召されたかたを知る知識によるのである。また、それらのものによって、尊く、大いなる約束が、わたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである。」

「それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。これらのもの

があなたがたに備わって、いよいよ豊かになるならば、わたしたちの主イエス・キリストを知る知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ばない者となることはないであろう。」

これらの言葉は教訓に満ちていて、勝利の基調をなす。使徒は、信者にクリスチャンの進歩のはしごを紹介しているが、そのひとつひとつの階段は神を知る知識の進歩をあらわし、このはしごを登るのに行き詰まりはない。信仰、徳、知識、節制、忍耐、信心、兄弟愛、愛は、はしごの階段である。この階段を一段一段登って、われわれに対するキリストの理想の高さに達する時に、われわれは救われるのである。こうしてキリストはわれわれの知恵となり、義と聖とあがないとになれる。

神はその民を栄光と徳に招いておられる。そしてこれらは神と真実につながっている人々すべての生活にあらわれる。天の賜物にあずかる者となったら、彼らは「信仰により神の御力に守られて、」完全を目指して進まなければならない（ペテロ第一・一ノ五）。神の徳をその子らにお与えになることは、神の栄光である。神は人々が最高の標準に達するのをご覧になりたいと望んでおられる。そして、信仰によつてキリストの力をつかみ、主の確かなみ約束に訴えてそれを自分のものとして求め、拒まれないようにしきりに聖霊の力を求めるならば、彼らはキリストにあつてそれに満たされるのである。

福音の信仰を受けたら、信者が次にする仕事は品性に徳を加えることである。こうして心をきよめ、神についての知識を受けるにふさわしい心にするのである。この知識は、すべての真の教育と真の奉仕の基礎である。これが、誘惑を防ぐ唯一のたしかな防衛手段である。そして、これだけが、人を品性に

おいて神に似たものとすることができる。神とみ子イエス・キリストを知ることによって、信者には、「いのちと信心とにかかわるすべてのこと」が与えられる。神の義をいただきたいと心から願う人には、よい賜物が惜しみなく与えられる。

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわれたイエス・キリストとを知ることあります」と、キリストは言われた（ヨハネ一七ノ三）。また預言者エレミヤは言った、「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあつて、わたしを知っていること、わたしが主であつて、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることがそれである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる」（エレミヤ書九ノ二三、二四）。この知識を得る者が、霊的にどれほど深く高く到達するかは、人間の心ではほとんど悟ることができない。

だれでも自分の活動範囲内で、クリスチャン品性の完成を目指して、果たせないことはない。いのちと信心とにかかわるすべてのことを信者たちが受けられるように、キリストの犠牲によって準備がなされた。神はわれわれが完全な標準に到達するように求めておられ、キリストのご品性の模範をわれわれに示しておられる。救い主は、悪に抵抗した生活を貫き通して完全なものとされたご自身の人性によって、人間が神と協力すれば、この世において品性の完成に到達できることをお示しになった。これは、われわれも完全な勝利を得ることができるという神からの保証である。

キリストのようになる、すなわち、律法のあらゆる原則に従うというすばらしい可能性が、信者の前に提供されている。しかし、人は自分でこの状態に到達することは全くできない。人は救われる前にきよくならねばならないと神のみことばは言明しているが、このきよさは、彼が真理のみ霊の訓練や抑制する感化力に身を低くして従うときに、神の恵みが働いて生じるものである。キリストの義のかおりによつてはじめて、人は完全に従順になることができる。キリストの義は従順な行為の一つ一つを神の香気で満たす。クリスチャンの役割は、一つ一つの罪に辛抱強くうち勝つことである。彼は罪に悩む自分の魂の乱れをいやしていただくように、救い主に絶えず祈らなければならない。彼にはうち勝つ知恵も力もない。これは主のもので、主は、謙遜に悔いて助けを求めてくる者たちにこれらを授けて下さる。

清くないものから清いものに変える働きは、継続的なものである。毎日、神は人のきよめのために働いて下さる。だから人は、神に協力して、辛抱強く、正しい習慣を養う努力をしなければならない。人は恵みに恵みを加えなければならない。こうして寄せ算で働くとき、神は彼のために掛け算で働いて下さる。われわれの救い主は、悔いる心を持つ者の祈りを聞き、それに答える準備がいつでもできておられる。そして恵みと平安が、忠実な者たちの上に増し加えられるのである。主は、彼らを悩ます悪との戦いに必要な祝福を、喜んで彼らに与えて下さる。

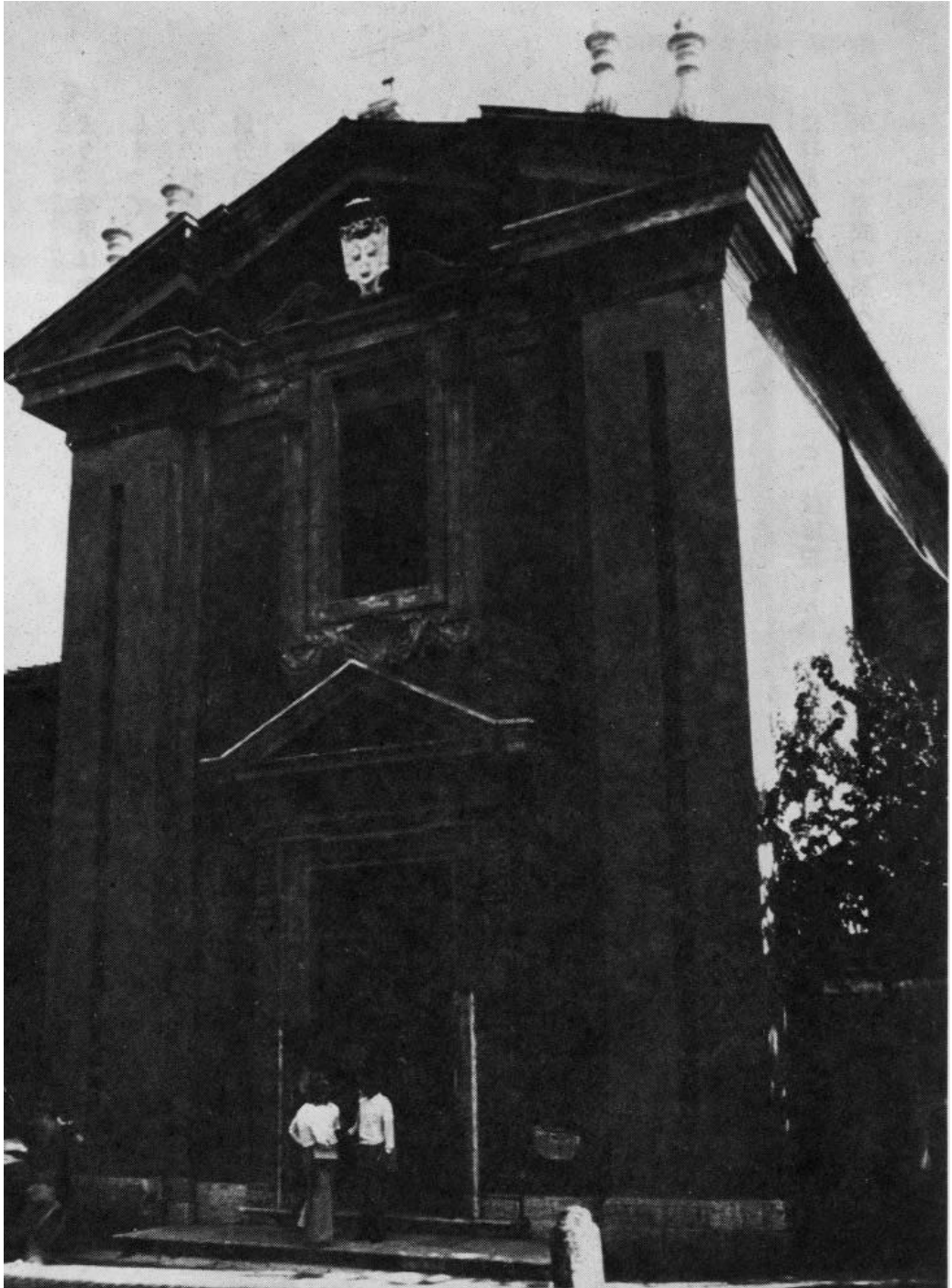
クリスチャンの進歩のはしごを登ろうとしている人々がいる。しかし、彼らは、上に進んで行くにしたがって、人間の力に頼りはじめ、やがて、信仰の創始者であり完成者であられるイエスを見失ってし

まう。結果は失敗である。つまり、これまでに得たものをすべて失ってしまうのである。途中で疲れてしまつて、これまで彼らが心と生活の中で育ててきたクリスチャンの恵みを、魂の敵に盗ませている人の状態は、まことに歎かわしい。「これらのものを備えていない者は、盲人であり、近視の者であり、自分の以前の罪がきよめられたことを忘れている者である」とペテロは説明している。

使徒ペテロは神のことに長い経験を積んできた。神の救いの力を信じる信仰は年とともに強まった。

そして彼は、信仰によつて前進し、はしごを一段ずつ登つて、天の入口にまで達している最上段を目指して上へと絶えず前進する者の前には、失敗の可能性がないのだということを、疑いなく証明するまでになつていた。

長年にわたつてペテロは、絶えず恵みと真理の知識に成長する必要があることを信者たちに力説してきた。そして今、信仰のためにまもなく殉教の苦しみを受けることを知つて、彼は再び、信じる者はだれでも到達することのできるこの尊い特権に注意を引いた。信仰を十分に確信している年老いた使徒は、クリスチャン生活における確固とした目的を兄弟たちに説いた。「それだから、ますます励んで、あなたがたの受けた召しと選びとを、確かなものにしなさい。そうすれば、決してあやまちに陥ることはない。こうして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの永遠の国に入る恵みが、あなたがたに豊かに与えられるからである」と、彼は説いた。なんといい保証であろう。信仰によつてクリスチャン完成の高みへ進んでいるとき、信者の前途にある希望は、なんと輝かしいものであろう。



クオヴァディス教会 ローマの南城壁にある聖セバスティアノ門を出て、旧アッピア街道を南に 800m 進んだ左側に建っている。2 世紀の外典「ペテロ行伝」に基づいて潤色したシェンキエヴィチの作品「クオヴァディス」によってなじみが深い。ローマを去ろうとした老使徒ペテロが、ここで主の幻に接し、ローマに引き返したという。

使徒は続けて言った、「それだから、あなたがたは既にこれらのことを知っており、また、いま持っている真理に堅く立ってはいるが、わたしは、これらのことをいつも、あなたがたに思い起させたいのである。わたしがこの幕屋にいる間、あなたがたに思い起させて、奮い立たせることが適當と思う。それは、わたしたちの主イエス・キリストもわたしに示して下さったように、わたしのこの幕屋を脱ぎ去る時が間近であることを知っているからである。わたしが世を去った後にも、これらのことを、あなたがたにいつも思い出させるように努めよう」。

使徒には、人類に関する神の目的について語る資格が十分にあった。なぜなら、キリストがこの世で働いておられたとき、ペテロは神の国に関することをいろいろと見聞きしていたからである。「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話をういることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごそかな栄光の中から次のようなみ声がかかったのである、『これはわたしの愛する子、わたしの心になう者である』。わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである」と、彼は信者たちに言った。

この証拠は、信者たちの望みの確かさを確信させるものであったが、さらにいっそう説得力のある証拠が、預言のあかしの中にあった。これによつてすべての人々の信仰が強められ、堅固で不動のものとされるのであった。「こうして、預言の言葉は、わたしたちにいっそう確実なものになった。あなたが

たも、夜が明け、明星がのぼって、あなたがたの心の中を照すまで、この預言の言葉を暗やみに輝くともしびとして、それに目をとめているがよい。聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によつて語つたものだからである」と、ペテロは言つた。

悩みの時の安全な指針として「預言の言葉」の「確實」さを強調する一方、使徒は厳肅に、誤つた預言の光について教会に警告した。そのにせの預言は、「にせの教師」たちによつて掲げられるもので、彼らは「異端をひそかに持ち込み、……主を否定し」た。こうしたにせ教師たちが教会に起こり、信仰のある兄弟たちの多くから正しいと思われるが、使徒は彼らをたとえて、「水のない井戸、突風に吹きはられる霧であつて、彼らには暗やみが用意されている」と言つた。「彼らの後の状態は初めよりも、もつと悪くなる。義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒めにそむくよりは、むしろ義の道をしらなかつた方がよい」と、ペテロは言つた。

ペテロは、靈感を受けて、世の終わりに至るまで各時代を見通し、キリスト再臨の直前に、世の中に現れる状態を書きしるした。「終りの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、『主の来臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであつて、変つてはいない』と言うであろう」と、彼は書いた。しかし、「人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、……突如として滅びが彼らをおそつて来る」（テサロ

ニケ第一・五ノ三）。しかし、だれもがみな敵のわなにかかるわけではない。世のすべてのものの終わりが近づく時に、時のしるしを見分けることのできる忠実な者たちがいるであろう。信仰を告白している多くの者たちが、その行いによつて信仰を否定している一方では、最後まで耐え忍ぶ残りの民がいるのである。

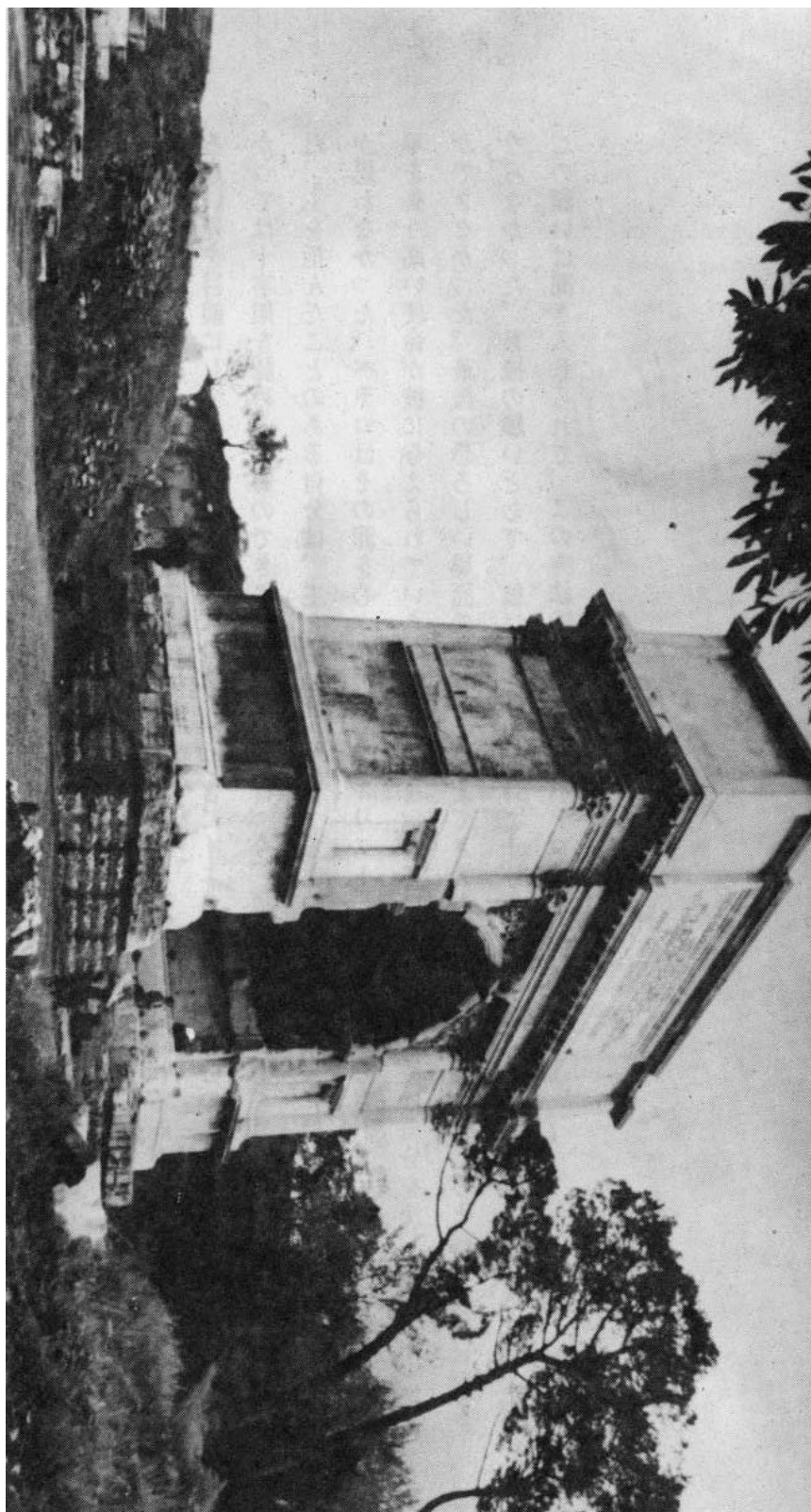
ペテロはキリストご再臨の望みを、心に生き生きと持ち続けていた。そして彼は、「行つて、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」との救い主のみ約束が確かに成就することを教会に保証した（ヨハネ一四ノ三）。試練を受けている忠実な者たちにはご再臨が遅れているように思えるかもしれないが、使徒は彼らにはつきり述べた。「ある人々がおそいと思つているように、主は約束の実行をおそしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである。しかし、主の日は盗人のように襲つて来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであらう。」

「このように、これらはみなくずれ落ちていくものであるから、神の日の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがたは、極力、きよく信心深い行いをしていなければならない。その日には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう。しかし、わたしたちは、神の約束に従つて、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。」

「愛する者たちよ。それだから、この日を待っているあなたがたは、しみもなくきずもなく、安らかな心で、神のみまえに出られるように励みなさい。また、わたしたちの主の寛容は救のためであると思いなさい。このことは、わたしたちの愛する兄弟パウロが、彼に与えられた知恵によつて、あなたがたに書きおくつたとおりである。……愛する者たちよ。それだから、あなたがたはかねてから心がけているように、非道の者の惑わしに誘い込まれて、あなたがた自身の確信を失うことのないように心がけなさい。そして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい。」

神のみ摂理に導かれて、ペテロは彼の働きをローマで終えることになった。このローマで、ちょうどパウロが最後に逮捕されたころ、ペテロ投獄の命令が、ネロ皇帝から出された。こうして二人の老練な使徒たちは、長い間、遠く離れて働いていたが、この世界の中心都市において、キリストのために最後のあかしをたてることになった。そして、この地に、聖徒や殉教者たちの大きな収穫を生む種として、彼らの血を流すことになった。

ペテロは、キリストを拒んで後、また元の地位につけられて以来、ひるまず、危険をものともせず、気高い勇気を示して、十字架にかけられ、よみがえられて、昇天された救い主を宣べ伝えてきた。彼は独房に横になっているとき、キリストが彼に語りかけられたみことばを思い出した。「よくよくあなたに言っておく。あなたが若かった時には、自分で帯をしめて、思いのままに歩きまわっていた。しかし



ティトゥスの凱旋門 ローマの広場の一角、コロセオの近くの小高い丘に建てられた凱旋門で、エルサレム占領（70年）をもって終結したユダヤ戦争におけるティトゥス帝とヴェスパシアヌス帝との戦功を記念して建立。ユダヤ人はこの門をくぐらない習慣を守っている。門の内側にはエルサレムの神殿の聖器が浮彫されている。

年をとってから、自分の手をのばすことになる。そして、ほかの人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行くであろう」（ヨハネ二一ノ一八）。このようにキリストは、ペテロの死に方をこの弟子にお教えになっていた。また、十字架の上に両手をひろげることさえも予言しておられたのである。

ペテロはユダヤ人であり外国人として、むちで打たれて十字架につけられる刑が宣告された。この恐ろしい死を目前にして、使徒は、イエスの裁判のときにイエスを拒んだ自分の大きな罪を思い出した。かつては十字架を認める準備のできていなかった彼は、今、福音のために命をささげること喜び、ただ、主を拒んだことのある自分は、主と同じ死に方をするという大きな榮譽には値しないということしか思わなかった。ペテロはその罪を心から悔いて、キリストにより既にゆるされていた。羊と群れの小羊を養う高い使命が彼に与えられていたことがそれを示している。しかし彼は自分を決してゆるすことができなかった。最後の恐ろしい場面の苦しみを考えてさえも、彼のはげしい悲しみと後悔の念は軽くなかった。最後の願いとして、彼は頭を下に向けて十字架に釘づけされるようにと執行人に頼んだ。この願いは聞き入れられて、この方法で偉大な使徒ペテロは死んだ。

第五三章 愛された弟子

ヨハネは、ほかの使徒たちより、イエスがとりわけ「愛しておられた弟子」である（ヨハネ二一ノ二〇）。ヨハネはキリストとの友情を、最高にたのしく味わったように見える。たしかに彼は、救い主の信頼と愛のしるしを豊かに受けたのである。彼は、変貌の山でのキリストの栄光と、ゲッセマネでのキリストの苦悩を目撃することを許された三人のうちの一人であった。また、キリストが十字架にかけられた最後の苦しみの時に、キリストが母の世話をお託しになったのも、ほかならぬヨハネにであった。

愛弟子に対する救い主の愛情は、力いっぱい、燃えるような献身で報いられた。ヨハネは、ぶどうのつるが堂々とした柱にからむように、キリストにぴったりとついて離れなかった。主のために彼は法廷の危険を物としなかったし、十字架を離れずにいた。またキリストがよみがえられたという知らせに、すぐさま墓へ急ぎ、その熱意においては性急なペテロにさえもまさっていた。

ヨハネの生活と品性にあらわれていたキリストへのひたむきな愛と無我の献身は、キリスト教会に口で言いあらわせない価値のある教訓を与えている。

ヨハネは、のちの経験にあらわれているような美しい品性を生まれつき持っていたのではなかった。彼には生まれつきのひどい欠点があった。高慢で、身勝手に、名誉欲が強かったばかりでなく、激しい性質で、侮辱されると憤慨した。彼とその兄弟たちは「雷の子」と呼ばれていた。短気、復讐心、批判的精神といったようなものがすべてこの愛された弟子の中にあった。しかしこうしたすべてのものの下に、天来の教師イエスは、熱心で、誠実で、愛すべき心を認められた。イエスは彼の身勝手を譴責され、彼の野心をくじいて、信仰を試めされた。しかしイエスは、ヨハネの魂が求めていたもの、すなわち、聖潔の美、愛の改変力を彼にお示しになった。

ヨハネの性格の中にある欠点が、救い主と個人的に交わるうちに数回、強く前面にあらわれた。ある時キリストは、サマリヤ人の村に行くに先立って使者たちをおつかわしになり、キリストと弟子たちのために飲み物を用意してほしいと村人にお求めになった。しかし救い主は町に近づかれたとき、そこに立ち寄らずエルサレムへ向かうほうがよいかもしれないというようなご様子であった。このためにサマリヤ人たちは憤慨して、しばらく彼らと共に過ごされるよう勧めずに、彼らがいつも一般の旅行者たちにしていたもてなしを差し控えた。イエスは人の前に無理に出ることはなさらなかったで、サマリヤ人たちは、もし彼らがイエスを客人として招いていたら彼らに与えられていたはずの祝福を失った。

弟子たちは、キリストがお立ち寄りになってサマリヤ人を祝福なさろうとしていたことを知っていた。そして、村人が主に示した冷淡さと、嫉妬と、不遜さに弟子たちは驚き、憤慨した。ヤコブとヨハネは特に気を荒立てた。彼らが深く尊敬している方がこのようなあしらいを受けたことは、直ちに罰せず見過ごしにすることが到底できないほど不当であるように彼らには思えた。「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか」と、彼らは、預言者エリヤのところにつかわされたサマリヤの長とその部下たちが焼き尽くされたことを引用して、熱心に言った。二人はイエスが、彼らの言葉に胸をいためられたのを見て驚いた。そして、イエスの譴責が耳もとに落ちてきたときに彼らはもつと驚いた、「あなたがたは自分たちがどのような霊的狀態にあるのかを知らないのです。人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすためではなくそれを救うためです」(ルカ九ノ五四 五六・新改訳聖書、註参照(異本))。

強制的にキリストを受け入れさせることは、キリストの使命にはない。それはサタンであり、良心を強制しようとするのはサタンの霊に踊らされている人々である。悪天使と同盟する人々が時々、正義に対する熱意をよそおい、自分たちの宗教的な考えに改心させようと仲間を苦しめている。しかしキリストは常にあわれみを示され、愛をお示しになって導こうとしておられる。キリストは人の心に競争相手を認めることも、生半可な奉仕を受け入れることもおできにならない。ただ、主は自発的な奉仕、愛に強いられて気持ちよく服従する心を望まれる。

また別の時にヤコブとヨハネは、キリストの王国で名誉ある最高の地位が与えられるようにと、母親から懇願してもらった。キリストが神の国の本質について繰り返し指導しておられたにもかかわらず、この若い弟子たちは、人々の願いに従って王座と王の力を獲得される方として、いまだにメシヤに希望を抱いていた。母親は、息子たちのためにこの王国で名誉ある地位を切望していたので、「わたしのこのふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはおあなたの右に、ひとりは左にすわれるように、お言葉をください」と、頼んだ。

しかしイエスは答えられた、「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかっていない。わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか」。彼らは主の神秘的なみ言葉が試練と苦しみを指していることを思い出したが、なお、自信をもって「できます」と答えた。彼らは、主にふりかかろうとしていることをすべて共に受けることによって彼らの忠誠を証明すれば、最高の名誉だと思った。

「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになるう。」イエスは、左右に二人の悪人を仲間とし、王座の代わりに十字架を前にして、こう言われたのである。ヤコブとヨハネは主の苦しみを共にすることになっていた。一人は剣による死がつかの間にやって来る運命にあった。またほかの一人は、弟子たちのだれよりも長く主に従って働き、非難され、迫害された。「しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、わたしの父によって備えられている人々だけに許されることである」と、イエスは続けられた（マタイ二〇ノ二一・二三）。

イエスはこの二人の弟子たちの願いを思いつかせた動機を理解されて、彼らの高慢と野心をおしかりになった。「異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない。それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」(マタイ二〇ノ二五 二八)。

神の国ではえこひいきで地位は得られない。それは働いて得るものではなく、気まぐれにさずけられて受けるものでもない。それは品性の実である。王冠と王座は、達成された一つの状態のしるし、すなわち主イエス・キリストの恵みによって、自我を征服したしるしである。

ずっと後になって、ヨハネがキリストの苦難を親しく知るようになり、キリストに共感するようになったとき、主イエスはヨハネに、神の国に近い状態のことをお示しになった。「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である」と、キリストは言われた(黙示黙三ノ一一)。キリストの一番近くに立つ者は、キリストの自己犠牲的な愛の精神を最も深く感受した者である。それは、「高ぶらない、誇らない……自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない」愛である(コリント第一・一三ノ四、五)。すなわち主イエスを動かしたように、この弟子を動かして、人類の救いのためにすべてを与え、

死にいたるまで生き、働き、犠牲を払う愛である。

また別の時にヤコブとヨハネが、伝道の仕事を始めたばかりのころ、ある人に会った。その人は、キリストに従う者として認められていないのに、キリストのみ名によって悪魔を追い出していた。弟子たちはその男に仕事を禁じた。そしてこうすることが正しいと思った。しかしこの問題をキリストの前に出したとき、キリストは彼らをしかつて、言われた、「やめさせないがよい。だれでもわたしの名で力あるわざを行いながら、すぐそのあとで、わたしをそしめることはできない」(マルコ九ノ三九)。どんな方法でもキリストに親しみを示した者を拒絶すべきではなかった。弟子たちは狭い、排他的な精神にふけることなく、彼らが主の中に見てきたような広大な同情を示さなければならぬ。ヤコブとヨハネはこの男をしかつて、主の名誉を心にかけていると思っていた。しかし彼らは、自分たちのために嫉妬しているのだということがわかりはじめた。ヤコブとヨハネは自分たちの誤りを認めて、主の叱責を受け入れた。

キリストの教えは、恵みに成長し、みわざにふさわしいものとなるために欠くことのできない柔和と謙遜と愛を説くもので、ヨハネに最も貴重なものとなった。彼は一つ一つの教えを大事にして、絶えず自分の生活を聖なる模範に一致させる努力をした。ヨハネはキリストの栄光を見分けはじめていた。彼がこれまで追い求めるよう教えられてきた世的なはなやかさや権威ではなく、「父のひとり子としての栄光であつて、めぐみとまこととに満ちて」いるものであつた(ヨハネ一ノ一四)。

キリストに対するヨハネの愛情の深さと熱烈さは、ヨハネに対するキリストの愛を引き起こしたのではなく、かえってヨハネに対するキリストの愛の結果生じたものである。ヨハネはイエスのようになりたいと望んだ。そして、キリストの愛の人間を変える感化力のもとに、彼は柔和で謙遜になった。自己はイエスの中に隠された。ヨハネは仲間たちのだれよりも、その不思議ないのちの力に服従した。「このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見」と、彼は言っている。「わたしたちすべての者は、その満ち満ちているものの中から受けて、めぐみにめぐみを加えられた」（ヨハネ第一・一ノ二、ヨハネ一ノ一六）。ヨハネは体験的な知識によって救い主を知った。主の教えが彼の魂に刻みつけられた。彼が救い主の恵みをあかししたとき、彼の単純な言葉は、全身に満ちた愛により雄弁になった。

ヨハネは、キリストに抱いていた深い愛により、いつもキリストのそば近くにいたいと願った。救い主は十二人の弟子たちみんなを愛されたが、ヨハネの気持ちは最も受容性に富んでいた。彼は他のだれよりも若かった。そして、だれよりも、子供のような打ち解けた信頼からイエスに心を開いた。こうして彼はキリストと更に共鳴するようになり、彼を通して救い主の最も深い霊的教えが人々に伝えられた。イエスは天の父を代表する人々を愛される。そしてヨハネはほかの弟子たちにできなかった天の父の愛について語ることができた。彼は神の特質を自分の品性にあらわし、自分の魂の中で感じていた事を仲間を示した。主の栄光が彼の顔にあらわされた。彼を変えた神聖な美しさが、キリストのような輝き

をもつて彼の顔から輝き出た。ヨハネは敬慕と愛を抱いて救い主を見つめているうちに、キリストに似た者となった。そしてキリストと交わることが彼の一つの望みとなり、ついには彼の性格のうちに主のご品性が反映するようになった。

「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい。…愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである」（ヨハネ第一・三ノ一、二）。

第五十四章 忠実な証人

本章はヨハネの手紙に基づく

キリストの昇天後、ヨハネは主のための忠実で熱心な働き人として目立った存在となった。ほかの弟子たちと共に、彼はペンテコステの日に聖霊の降下を受け、新しい熱意と力とで人々にいのちのちのことは語り続け、彼らの思いを見えない神に向けさせようとした。彼は非常にまじめで熱心な、力に満ちた説教者であった。彼は美しい言葉で、また、音楽的な声でキリストのことばと働きを語り、聞く人々に感銘を与えた。彼は、簡潔な言葉と、語る真理の崇高な力と、彼の説教を個性的にしている熱情とにより、すべての階級の人々に近づくことができた。

使徒ヨハネの生活は、彼の教えと調和していた。彼は心の中で育ったキリストへの愛に導かれて、同胞のために、また特にキリスト教会の兄弟たちのために、熱心な、たゆまない働きを進めた。

キリストは最初の弟子たちに、キリストが彼らを愛されたように、互いに愛し合いなさいと命じてお

られた。こうして彼らは、うちにキリストの形ができたことを、すなわち、栄光の望みを世にあかししなければならなかった。「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と、キリストは言われた（ヨハネ一三ノ三四）。これらのことばが語られたとき、弟子たちはそれを理解できなかった。しかし彼らは、キリストの苦しみを目撃してのち、キリストの十字架の死と復活と昇天を目撃してのち、そして聖霊がペンテコステの日に彼らの上に注がれてのち、神の愛と、お互いに持たねばならないその愛の性質についての概念を一層はつきり持つようになった。それからヨハネは仲間の弟子たちに次のように言うことができた。

「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。」

聖霊の降下ののち、弟子たちが生ける救い主を宣べ伝えに出て行ったとき、彼らの一つの願いは人々の魂の救いであつた。彼らは聖徒たちの交わりのすばらしさに恵まれた。弟子たちはやさしく、思いやりがあり、自制し、真理のためには喜んで犠牲を払った。毎日、互いに交わるうちに、キリストが彼らに申しつけられた愛をあらわすようになった。私心のない言葉と行為によって、彼らは他の人々の心にこの愛をともしよう努めた。

このような愛を信者たちは常に抱いていなければならなかった。また更に、新しい戒めに心から従う

よう前進しなければならなかった。こうして彼らは、キリストと一致すれば、主のすべての要求を満たすことができるようになるのである。彼らの生活は、ご自身の義によつて彼らを義として下さる救い主の力を表現しなければならなかった。

しかし、少しずつ変化が起こった。信者たちは他人の欠点を探し始めた。失敗をいつまでも責めて、思いやりのない批判しか念頭におかず、救い主とその愛を見失った。彼らは外面的な儀式についてますます厳格になり、信仰の実践より理論についてやかましくなった。他人をさばくことに躍起になって、自分たちの誤りを見のがした。キリストが要求されていた兄弟愛を失い、何よりもみじめなことに、彼らは自分たちの損失に気づかなかつた。幸福と喜びが彼らの生活から出て行こうとしていることに気づかず、また、神の愛を心から閉め出して、やがて暗黒の中を歩き出すことに気づかなかつた。

ヨハネは教会内に兄弟愛が欠けてきていることを悟り、この愛が絶えず必要なことを信者たちに説き勧めた。教会へ宛てた彼の手紙にはこの思いが満ちている。「愛する者たちよ。わたしたちは互に愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生れた者であつて、神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によつてわたしたちを生きるようにして下さった。それによつて、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さつて、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。愛する者たち

よ。神がこのようにわたしたちを愛して下さいだったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである」と、ヨハネは書いています。

この愛が信者たちによってあらわされなければならない特別の意味について、使徒ヨハネは書いています、「新しい戒めを、あなたがたに書きおくるのである。そして、それは、彼にとってもあなたがたにとっても、真理なのである。なぜなら、やみは過ぎ去り、まことの光がすでに輝いているからである。

『光の中にいる』』と言いながら、その兄弟を憎む者は、今なお、やみの中にいるのである。兄弟を愛する者は、光におるのであって、つまずくことはない。兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩くのであって、自分ではどこへ行くのかわからない。やみが彼の目を見えなくしたからである。」「わたしたちは互に愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。」「愛さない者は、死のうちにとどまっている。あなたがたが知っているとおり、すべて兄弟を憎む者は人殺しであり、人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめてはいない。主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。」

キリストの教会を最も危うくするものは、この世の反対ではない。教会を最も深刻な不幸に陥れるものは、信者たちの心に隠された悪であり、それは最も確実に神のみわざの進展を遅らせる。ねたみ、疑い、あらさがし、悪意ほど靈性を弱めるものはない。一方、神の教会を構成しているいろいろな性質の

人たちの間における調和と一致は、神がみ子をこの世におつかわしになったことを最も確かにあかしするものである。このようなあかしをたてることが、キリストに従う者たちの特権である。しかしこれを行うためには、彼らはみずからキリストの戒めに服さなければならない。品性がキリストの品性に、また、意志がキリストの意志に調和しなければならない。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と、キリストは言われた（ヨハネ一三ノ三四）。何とすばらしいことばであろう。しかし、何と実行されていないことばであろう。今日神の教会には兄弟愛がはなはだ不足している。救い主を愛していると公言する者たちの多くが、互いに愛し合っていない。

未信者たちは、クリスチャンと自称する人たちの信仰が、彼らの生活にきよめの力を及ぼしているかどうかを見守っている。だが、彼らはすぐに品性の欠点や行為の矛盾をみつける。ごらんなさい、この人たちはキリストのみ旗のもとに立ちながら、互いに憎み合っていると、クリスチャンは敵に言わせないようにしよう。クリスチャンはみな一つの家族で、みな同じ天父の子供たちであり、同じように祝福された不死の望みを抱いているのである。互いを結び合わせている絆は固く愛情のこもったものである。

神の愛は、キリストがお示しになった同じやさしい同情を示すようわれわれに求めるとき、人の心に最も感動的な訴えをする。兄弟に対して無我の愛を持つ人だけが、神のために真実の愛を持っている。ほんとうのクリスチャンは、危険や欠乏の中にいる魂に、警告や保護を与えもせずにその人を去らせた

いと思わない。彼は、魂が更に不幸や失望に陥っているのに、あるいはサタンの戦場に倒れているのに、身を誤ったその人たちから超然としてゐることはできない。

キリストのやさしい、心をとらえる愛を経験したことのない人たちは、ほかの人々をいのちの泉に導くことはできない。心のうちにあるキリストの愛は、強く迫る力であり、それは会話をとおし、やさしい同情に満ちた精神をとおし、彼らが交わっている人々の生活の向上をとおしてキリストをあらわすように彼らを導く。クリスチャンの働き人が仕事の成果をあげるには、キリストを知らなければならぬ。そして、キリストを知るには、キリストの愛を知らなければならぬ。天では、働き人としてふさわしいかどうかは、キリストが愛されたように愛し、キリストが働かれたように働く彼らの能力によつて量られる。

「わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもつて愛し合おうではないか」と使徒ヨハネは書いている。人を助け、人を恵みたいという衝動が絶えず心からわき出るときに、クリスチャン品性は完成する。信者の魂をとりまくこの愛の雰囲気、彼をいのちからのいのちに至らせるかおりとし、その働きを神に祝福されるものとするのである。

神に対する最高の愛、互いの無我の愛、これこそ、天父がさずけて下さる最上の贈物である。この愛は衝動ではなく、きよい原則、永遠の力である。献身してゐない心は愛を起こすことも、生じることもしできない。イエスに支配されている心にだけ愛は見いだされる。「わたしたちが愛し合うのは、神がま

ずわたしたちを愛して下さったからである。」神の恵みによって新たにされた心にとって、愛は行動の主原則である。愛は性質を修正し、衝動を支配し、感情を制御し、愛情を高める。心に抱かれたこの愛は、人生を麗しくし、清澄にする感化を周囲に与える。

ヨハネは、愛の精神を実行するときにやってくる高尚な特権を信者に理解させようとした。このあがないの力は、心を満たして、他のすべての動機を支配し、その人を世の墮落した感化の及ばないところに高める。そしてこの愛が十分に力を発揮できるようになり、また、人生における原動力になったとき、神と、彼らに対する神の取り扱いとに対する信頼と確信は完全になる。そうして彼らは、現在と永遠の幸福のために必要なものをすべて神から受けることができることを知って、信仰の確信に満ちて神のもとに來ることができた。「わたしたちもこの世にあつて彼のように生きているので、さばきの日に確信を持つて立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである。愛には恐れがない。完全な愛は恐れをとり除く」と、ヨハネは書いた。「わたしたちが何事でも神の御旨に従つて願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。そして……なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである。」

「もし、罪を犯す者があれば、父のみもとは、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる。彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。」「もし、わたしたちが自分の罪を告白する

ならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。神からあわれみをいただく条件は単純で理にかなっている。主はゆるしをお与えになるために、何か苛酷なことをするようにはお求めにならない。われわれは天の神にわれわれの魂をゆだね、あるいは罪を償うために長い退屈な巡礼をしたり、苦行をする必要はない。罪を「言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」(箴言二八ノ一三)。

天の法廷で、キリストは教会のために弁護しておられる。すなわち、キリストが血のあがないの値を支払われた人々のために弁護しておられるのである。どんなに世紀や時代を重ねても、キリストのあがないの犠牲は効力を減じない。生も死も、高いものも深いものも、キリスト・イエスにおける神の愛からわれわれを引き離すことはできない。それはわれわれがしっかりとキリストをつかんでいるからではなく、キリストがわれわれをしつかりつかんでいるからである。もし救いがわれわれ自身の努力にかかっているとすれば、われわれは救われることができない。しかし救いは、すべての約束を支持しておられる方にかかっているのである。キリストをとらえるわれわれの力は弱いように見えるかもしれないが、キリストの愛は兄の愛のようで、主と結ばれているかぎり、だれも主のみ手からわれわれを引き離すことはできない。

歳月が流れて、信者の数が増えるにしたがい、ヨハネはますます誠実に、熱心に兄弟たちのために働いた。時代は教会にとって非常に危険なときであった。サタンの欺瞞は至るところにあった。サタンの

使者たちは中傷や偽りによって、キリストの教えに反対しようとした。その結果、教会は不和と異端におびやかされていた。キリストに信仰を告白した者たちの中には、神の愛が神の律法に対する服従から彼らを解放したと主張する者もいた。一方、多くの者たちは、ユダヤの習慣や儀式を守る必要がある、また、救いには、キリストの血を信じることなく、ただ律法を遵守するだけで十分であると教えた。ある者たちは、キリストを立派な人だとしていたが、キリストの神性を否定した。神のみわざに忠実なふりをしていた者たちは欺瞞者であって、実際にはキリストとその福音を否定した。罪を犯す生活をしながら彼らは教会に異端を持ち込んだ。こうして多くの者たちが懷疑と欺瞞の迷路に連れ込まれた。

ヨハネはこうした悪意ある誤りが教会に忍びこんで来るのを見て、悲しみでいっぱいになった。彼は教会が危険にさらされていることを悟って、すぐさまこの急場に果断な処置をとった。ヨハネの手紙は愛の精神を漂わせている。それは、まるで彼が愛の中にペンをどっぷり浸して書いたように思える。しかしヨハネは、神の律法を犯しながら、なお罪のない生活をしていると主張する人々と接触するにあたって、その人たちの恐ろしい欺瞞を、ためらうことなく忠告した。

福音事業の協力者で、評判がよく、広く感化を与えている一人の婦人に、ヨハネは次のように書き送った、「イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白しないで人を惑わす者が、多く世にはいつてきた……そういう者は、惑わす者であり、反キリストである。よく注意して、わたしたちの働いて得た成果を失うことがなく、豊かな報いを受けられるようにしなさい。すべてキリストの教をとおり過

ごして、それにとどまらない者は、神を持っていないのである。その教にとどまっている者は、父を持ち、また御子をも持つ。この教を持たずにあなたがたのところに来る者があれば、その人を家に入れることも、あいさつすることもしてはいけない。そのような人にあいさつする者は、その悪い行いにあずかることになるからである。」

われわれは、キリストのうちにとどまっていると主張しながら、神の律法を犯す生活をしている人々に対して、愛されたヨハネと同じ判断をする権威を認められている。初代の教会の繁栄をおびやかしたような悪が、この終わりの時代にも存在する。ゆえに、こうした点についての使徒ヨハネの教えを、慎重に心にとめていなければならない。「愛がなければならない」は、どこでも聞かれる叫びである。特に、きよめられたと言っている人たちから聞かれる。しかし、真の愛は純粹であって、告白されていない罪をおおい隠すことはできない。キリストが身代わりとなられた魂を愛しているかぎり、悪と妥協しないようにしなければならない。われわれは反逆者と手を結んで、これを愛と呼ぶべきではない。神は現代の世界にいる神の民たちに、ヨハネが魂を破壊する過ちに反対して立ったように、正義のために断固として立つよう要求されている。

われわれはクリスチャンの親切を示さなければならないが、罰や罪人をそれとはつきり言う権威も与えられている、そして、これは真の愛と矛盾しないと、使徒ヨハネは教えている。「すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために

現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である」と、ヨハネは述べている。

キリストの証人として、ヨハネは論争やうんざりさせる口論をしなかった。彼は自分の知っていること、自分が見たり、聞いたりしたことを話した。彼はキリストと親しい交わりをし、キリストの教えを聞いて、キリストの立派な奇跡を目撃してきた。ヨハネほどにキリストのご品性の美しさを見ることができた人はほとんどいない。彼にとって暗黒は過ぎ去っていた。彼の上にまことの光が輝いていた。救い主のご生涯と死に関する彼のあかしは、明瞭で力のこもったものであった。救い主に対する愛が豊かにあふれる心から彼は話したので、だれも彼の言葉をとめることはできなかった。

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について……すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである」と、ヨハネは言った。

それゆえに、まことのクリスチャンはみな、自分自身の経験を通して、「神がまことであることを、たしかに認め」ることができる（ヨハネ三ノ三三）。クリスチャンは、キリストのみ力について、見たり聞いたり感じたことをあかしすることができるのである。

第五十五章 恵みによって変えられた人

弟子ヨハネの生涯に、真のきよめとは何かということが例示されている。キリストと親密に交わった数年間に、ヨハネはしばしば救い主から戒めと注意を受けた。そして彼はこうした叱責を受け入れた。聖なるかたのご品性が現されたとき、彼は自分の欠点を認め、その啓示によって謙遜にされた。毎日彼は自分の激しい気性とくらべて、イエスの柔和と寛容を見、謙遜と忍耐の教訓を聞いた。毎日彼の心はキリストに引きつけられ、ついには主に対する愛によって自己がかき消されていった。ヨハネが神のみの日常生活の中に力とやさしさ、威厳と柔和、強さと忍耐を見たとき、彼の心はただ、感嘆するばかりであった。彼は自分の憤慨しやすい、野心的な性質をキリストの形成する力にゆだねたので、天来の愛が彼のうちに働いて、品性を一変させたのである。

ヨハネの生涯において達成されたきよめと著しい対照を示して、仲間の弟子ユダの経験がある。同僚

と同じく、ユダもキリストの弟子であると告白していたが、彼の敬神はほんの形だけのものだった。ユダはキリストのご品性の美しさを感じなかった。そしてしばしば救い主のことばを聞いているとき、彼に改心の気持ちがあらわれたのだが、彼は謙遜な心になり、罪を告白しようとしなかった。ユダは聖なる感化を拒んで、彼が愛を告白したはずの主の名を汚した。ヨハネは自分の欠点と真剣に戦ったが、ユダは良心を汚し、誘惑に負けて、悪の習慣を更にしっかりと身につけてしまった。キリストが教えた真理を実行することは、彼の願望と目的に一致しなかった。そして、彼は天来の知恵を受けるために、自分の考えを捨てるように自分を動かすことができなかった。ユダは光の中を歩くことをせず、闇の中を歩くことを選んだ。悪い願い、強欲、復讐心、暗く陰気な思いが彼の心をとらえ、ついにサタンに全く支配されるまでになった。

ヨハネとユダは、キリストの弟子だと告白した人たちを代表している。この二人の弟子は、同じようにキリストの模範を学び、それに従う機会を持っていた。二人ともイエスと密接に交わり、主の教えを聞く特権を与えられていた。二人はそれぞれ性格に大きな欠点があったがまた、二人とも、性格を変える聖なる恵みに接することができた。しかし、一人が謙遜にイエスのことを学んでいる間に、もう一人はみことばを実行せずただ聞くだけであった。一人が日ごとに自己に死に、罪に勝利して、真理によってきよめられていたのに、他方は、恵みの変える力を拒み、利己的な願いにふけり、サタンのとりこにされた。

ヨハネの生涯に見られるような性格の変化は、常にキリストと交わっていたために与えられたものである。人にはそれぞれ性格に目立つ欠点があるかもしれない。しかしその人が、キリストの真の弟子になると、神の恵みの力により変えられ、きよめられるのである。彼は主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、崇拜する主と同じ姿に変えられていく。

ヨハネは聖潔の教師であつた。そして教会へ宛てた手紙の中で、クリスチャンの行いについてまちがうことのない原則を書き記した。「彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする」と、彼は書いた。『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」（ヨハネ第一・三ノ三、二ノ六）。クリスチャンは心と生活がきよくなければならないと、ヨハネは教えた。口先だけのむなしい言葉に満足してはならない。神が天において神聖であられるように、墮落した人間はキリストに対する信仰によって、そのいるところできよくなければならない。

「神のみこころは、あなたがたが清くなることである」と使徒パウロは書いた（テサロニケ第一・四ノ三）。教会のきよめは、神の民に対して神がなされるすべてのわざの目的である。神は彼らがきよくなるように、永遠の昔から彼らを選んでおられた。神は彼らのためにみ子のいのちを犠牲にされた。それは彼らが真理に従順に従うことによってきよめられ、自己の偏狭さをすべて脱ぎ捨てるためである。神は彼らに個人的な働き、個人的屈服を要求される。彼らが神のかたちに似たものとされ、み霊によつ

て支配されるときはじめて、神は信仰を告白する著たちによってあがめられることができる。そして後、救い主の証人として彼らは、彼らのためになされた神の恵みを知らせることができる。

真のきよめは愛の原則から出た働きによってあらわれる。「神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます」(ヨハネ第一・四ノ一六)。キリストが心に住む人の生活は、敬神の心を行いにあらずであらう。品性はきよめられ、高められ、気高くされ、あがめられるであらう。純粹な教えは正義の働きとよく混じり合い、天来の教えは聖なる実践と調和するのである。

きよめの祝福を受けようとする人たちは、まず自己犠牲の意味を学ばなければならない。キリストの十字架は、「永遠の重い栄光」のかかる支柱である。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と、キリストは言われる(コリント第二・四ノ一七、マタイ一六ノ二四)。神に対するわれわれの愛を示すものは、同胞に対するわれわれの愛のこおりである。魂に休息をもたらすのは、奉仕における忍耐である。謙遜に、勤勉に、忠実に働いてこそ、イスラエルの幸福は増し加えられる。神はキリストの道に自発的に従いたいと思う者を支え、強めて下さるのである。

きよめは、一瞬、一時間、一日だけの働きではなく、一生の働きである。それは感情の幸福な高揚によって得られるのではなく、絶えず罪に死に、絶えずキリストのために生きることの結果である。弱々しい、時たまの努力では、間違いを直すことも、品性を改善することもできない。長い、忍耐強い努力

と、苦しい訓練と、断固たる戦いによつてのみ、われわれは勝利することができる。われわれは次の日の戦いがどんなにきびしいものになるかを知らない。サタンが支配しているかぎり、われわれは自我を静めて、絶えずつきまとう罪にうち勝たねばならない。生きているかぎり、留まる場所もなければ、完全により遂げたと言えるところもない。きよめは生涯の服従から生じるものである。

使徒や預言者たちの中には、だれも罪がないと主張した者はいない。神に最も近く生きた人々、知つていて悪い行いをするよりはいいのちを犠牲にしようとする人々、神が聖なる光と権能をもつて賞賛した人々は、自分たちの性質の罪深さを告白してきた。彼らは自分自身に信頼せず、自分の義を主張せず、キリストの義を深く信頼した。

キリストを見る者たちはみな、このようになる。イエスに近づけば近づくほど、そして、キリストのご品性の純潔さが更にはつきり認められるようになるほど、ますます罪のひどい罪深さを明らかに見るようになり、われわれ自身を高める気持ちはずますます消えていく。魂は神を求めて絶えず手を伸ばし、罪の悲痛な告白を絶えず、まじめにささげて、神の目前に心を謙虚にする。クリスチャン経験において、一歩進むごとに、われわれの悔い改めは深まる。われわれはキリストによる以外に満足はないことを知り、使徒パウロの告白をわれわれもするのである。「わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。」「わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇とするものは、断じてあつてはならない。この十字架につけられて、こ

の世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである」(ローマ七ノ一八、ガラテヤ六ノ一四)。

記録天使に神の民の聖なる苦闘と戦いの歴史を書いてもらおう。神の民らの祈りと涙を綴ってもらおう。そして、「わたしに罪はない、わたしはきよい」と、人の口から断言して神のみ名を汚さないようにしよう。きよめられたくちびるは、そのように傲慢な言葉を決して発することはしない。

使徒パウロは第三の天にあげられて、言葉にあらわせなかったことを見たり、聞かされていたが、なお、彼はたかぶらずに言った、「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである」(ピリピ三ノ一二)。天使たちには、信仰のよき戦いを戦いぬいたパウロの勝利について書いてもらおう。天に向けられたパウロの着実な歩みと、賞を目指して、ほかのことをすべて無価値なものと思わしている彼を天の住民たちに喜んでもらおう。天使たちはパウロの勝利を喜んで語るが、パウロは自分の成果を誇らない。パウロの態度は、キリストに従う者がみな、不死の冠を得るために戦いながらひたすら前進するときにとらねばならない態度である。

きよらかさを声高く公言したい気持ちになる人たちには、神の律法の鏡の中を見させよう。遠大な律法の要求と、心の中の思いや意図を見分ける律法の働きを知ったなら、彼らは罪のないことを誇ることはないであろう。ヨハネは自分自身を兄弟たちから離れたものとしなくて、こう言っている、「もし、

罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない」。「もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにない」。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(ヨハネ第一・一ノ八、一〇、九)。

きよいと自称する者、彼らのすべてを主のものだと断言する者、神のみ約束を受ける権利があると主張する者、そう言いながら神の律法に従うことを拒んでいる者たちがいる。こうした律法の違反者たちは、神の子らに約束されている事を何でも要求するが、これは彼らの側の推量に過ぎない。なぜならヨハネは、神に対する真の愛は十戒のすべてを守ることにあらわされる、と述べているからである。真理の理論を信じ、キリストに信仰の告白をし、イエスが詐欺師ではないことや、聖書の宗教は巧妙に考案された作り話ではないことを信じるだけでは十分でない。「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである。それによって、わたしたちが彼にあることを知るのである」と、ヨハネは書いた。「神の戒めを守る人は、神におり、神もまたその人にいます」(ヨハネ第一・二ノ四、五、三ノ二四)。

ヨハネは、従順によって救いを得るべきだと教えているのではなく、従順が信仰と愛の実であると教えた。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの

罪がない。すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である」と、彼は言った（ヨハネ第一・三ノ五、六）。もしわれわれがキリストにおり、神の愛が心に宿っているならば、われわれの感情、思想、行動は神のみこころに一致し、きよめられた心は、神の律法の教えに調和する。

神の戒めに従おうと努めながら、喜びや平安のない人が多い。彼らの経験に喜びや平安が欠けているのは、信仰を働かさないからである。彼らはあたかも、塩の土地や焼けつく荒野を歩いているかのような。彼らは多くのことを求めることができるのに、ほとんど求めない。神の約束には制限がないのである。このような人たちは、真理に従うことによって与えられるきよめを正しく示していない。主はご自分のむすこ、娘たちのすべてを幸福で、平和にみち、従順なものにさせて下さる。信者は信仰を働かせることによって、これらの祝福を受けるようになる。信仰によって、品性の欠陥がすべて補われるのであり、すべての不潔なものがきよめられ、欠点がなおされ、長所がのばされるのである。

祈りは、罪との戦いとクリスチャン品性の発達における成功の手段として、天が定めたものである。

信仰の祈りにこたえて与えられる神の力は、願い求めるすべてのことを嘆願者の心の中に成就する。われわれは、罪のゆるしを、聖霊を、キリストのような性質を、主の働きをなすための知恵と力を、また主が約束された賜物を、求めることができる。そして、それらは「与えられる」と約束されているのである。

モーセが神の栄光の住居となるはずのすばらしい建物の型を見たのは、神と共に山の中にいたときであつた。われわれが人類に対する神の輝かしい理想を黙想するのは、神のおられる山、ひそかな神との交わりの場所である。各時代にわたり、天との交わりを通して、神はその子らの心に恵みの教理を少しずつ明らかにされ、子らのための目的を実行されてきた。真理をおさずけになる神の方法は、「主はあしたの光のように必ず現れいであつた」ということばに説明されている（ホセア書六ノ三）。神が光をそぐことのできる場所に身を置く者は、いわば夜明けの薄暗さから真昼の豊かな光の中に進むのである。

真のきよめは完全な愛、完全な従順、神のみこころへの完全な一致を意味する。われわれは真理に従ふことによつて神へときよめられる。われわれの良心は、死んだ働きから生きた神に仕えるためにきよめられなければならない。われわれはまだ完全ではない。しかし利己心と罪のもつれから切り離されて、完全へと進むことはわれわれの特権である。大きな可能性、高くきよらかな完成がすべての者の手の届くところに置かれている。

この現代の世において、多くの者たちがきよい生活にもっと大きな進歩を見せない理由は、彼らがしよつと思ふ程度にしか神のみこころを解釈していないからである。自分たちの望み通りにしていながら、彼らは神のみこころに従っているとうぬぼれている。このような人々は自己との戦いが無い。また、その他、快楽や安楽を求める利己的な願ひとの戦いに一時の間、うまく成功している者たちもいる。彼らは誠実で熱心であるが、長びく努力、日ごとの死、絶え間ない不安に疲れてくる。怠惰が心を奪ひ、自

己に死ぬことが拒絶されているようである。そして、彼らはものうい目を閉じ、誘惑の力に抵抗せずに、それに屈してしまう。

神のみことばに示されている命令には、悪と妥協するための余地がない。神のみ子は、すべての人たちをご自身のもとに引き寄せることがおできになることを証明された。主はこの世を寝かしつけるために来られたのではなく、神の都の門にたどり着こうとする者がみな通らねばならない狭い道を示すために来られた。主の子らは主が導かれる道をたどらなければならない。どんなに気楽さや自己放縦を犠牲にしても、どんなに労働や苦難をかけても、彼らは自己との絶えまない戦いを続けなければならない。

人が神にささげることのできる最高の讃美は、神がお用いになることのできる聖別された水路となることである。時は永遠に向かつて急速に進んでいる。神のものを自分でとっておいてはならない。祝福がなければさすけられないが、拒めば必ず損失をこうむるものを神から拒んではならない。神は全心を求めておられる。それを神にささげなさい。それは、神に創造されて、あがなわれたものだから、神のものである。神はあなたの知性を求めておられる。それを神にささげなさい。それは神のものである。

神はあなたの金銭を求めておられる。それを神にささげなさい。それは神のものである。「あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ」(コリント第一・六ノ一九、二〇)。神はきよめられた心に忠誠の誓いを求めておられる。その心は、愛によって働く信仰を实践することにより、神に奉仕するために準備されているものである。神はわれわれの

前に最高の理想、完全さえも掲げてくださる。神はご臨在によって絶対に、また完全にわれわれのものとなつて下さると同様に、われわれにもこの世において完全に神のものとなるよう求めておられる。

あなたがたに関する「神のみこころは、あなたがたが清くなることである」(テサロニケ第一・四ノ三)。あなたがたもそう願っているだろうか。あなたがたの罪は山のようになっているかもしれないが、十字架につけられ、よみがえられた救い主のいさおしにすがって、へりくだり、罪を告白するならば、神はあなたがたをゆるし、あらゆる不義からきよめて下さる。神は神のおきてに全く一致するよう要求なさっている。このおきては、もつときよくなれ、もつときよくなれと語りかける神のみ声のこだまである。キリストの恵みに満たされるよう望みなさい。キリストの義を求める切なる願いで心を満たそう。神のみことばが宣べる義は平和をつくり出し、としえの平穏と信頼をもたらすのである。

あなたは神を慕うにつれて、その恵みの無尽蔵の富をますます知るようになる。この富について瞑想すると、この富があなたの手にはいり、キリストの犠牲の功績と、その義の擁護と、その知恵の豊かさ、そしてあなたを天父の前に「しみもなくきずもな」い者として差し出して下さるみ力とが明らかになる(ペテロ第二・三ノ一四)。

第五十六章 パトモス島に流される

キリスト教会が組織されて以来、半世紀以上たった。その間、福音の使命は絶えず反対されてきた。

敵はその努力をゆるめず、ついにローマ皇帝の権力を得てキリスト教徒に反対することに成功していた。

引き続いて起こった恐ろしい迫害のとき、使徒ヨハネは、信者たちの信仰を固め、強めることに力をつくした。彼は相手が論駁できないあかしを持っていた。そしてそれは、兄弟たちが彼らにふりかかる試練に勇気をもって忠実に立ち向かう助けになった。クリスチャンたちが、いやおうなしに直面した激しい反対のもとで、信仰をぐらつかせているような時、年老いた、信頼できるイエスのしもべヨハネは、十字架にかけられて、よみがえられた救い主の話を、力強く雄弁に繰り返した。彼はゆるぎない信仰を持ち、そのくちびるからはいつも同じ喜びの使命が語られた。「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について……すなわち、

わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる」(ヨハネ第一・一ノ一 三)。

ヨハネは非常に長生きした。彼はエルサレムの滅亡と、堂々とした神殿の荒廃を目撃した。救い主と親しくつながっていた弟子たちの最後の生き残りとしての彼の言葉には、イエスがメシヤであり、世のあがない主であるという事を説くにあたって大きな影響力があった。だれも彼の誠実さを疑うことはできなかった。そして、彼の教えによって多くの者が不信心から真理へ導かれた。

ユダヤ人の役人たちは、キリストのみわざにゆるぎない忠誠をつくしているヨハネに、はげしい憎しみをいだいていた。ヨハネのあかしが人々の耳に鳴り続けているかぎり、クリスチャンに反対する自分たちの努力は何の役にも立たないと、彼らは言った。イエスの奇跡や教えが忘れられるためには、その勇敢な証人の声を黙らせなければならない。

そのためにヨハネは、信仰を試みられるためにローマに呼び出された。その当局者たちの前で、使徒の教理は誤って述べられた。偽りの証人たちは、扇動的な異端を教えているとして彼を告訴した。こうした告訴によって敵はこの弟子を死刑にさせたいと願った。

ヨハネは明瞭に、説得力を持って弁明した。しかも非常に単純、率直であつたので、彼の言葉には力強い効果があつた。聞く者たちは彼の知恵と雄弁に驚いた。しかし彼のあかしに説得力があればあるほど、反対者たちの憎しみは深まった。ドミティアヌス皇帝は激怒した。彼はキリストの忠実な支持者ヨハネの論法を論駁することも、ヨハネが真理を語るときに伴った力に対抗することもできなかった。そ

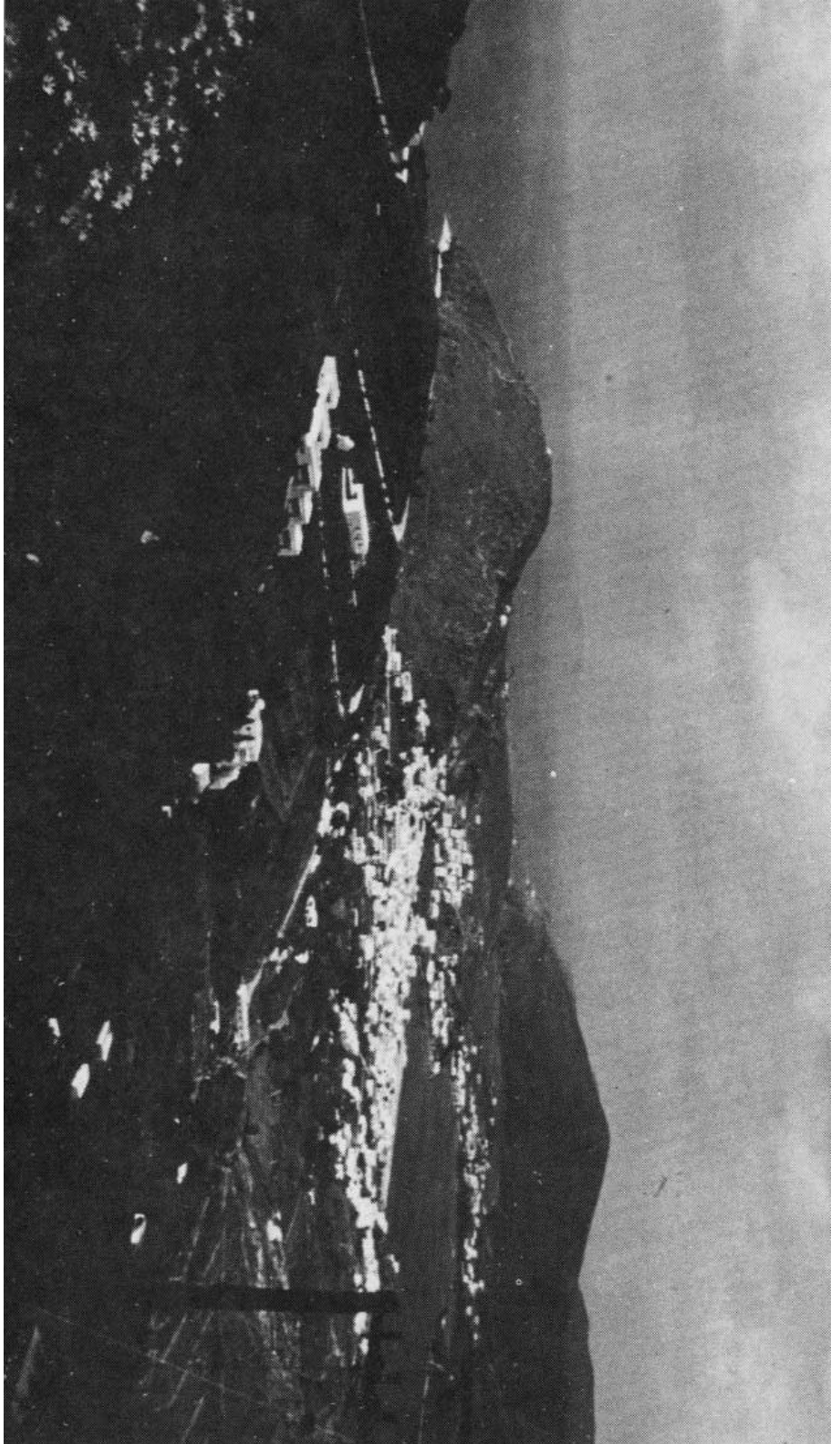
れでも彼は、必ずヨハネの声を沈黙させようと決意した。

ヨハネは煮えたぎる油の大海の中に投げ込まれた。しかし主は、燃えさかる炉の中の三人のヘブル人を守られたように、この忠実なしもべのいのちを守られた。こうして欺瞞者ナザレのイエス・キリストを信じる者たちはみな滅びると、言葉が語られたとき、ヨハネは、わたしの主は、サタンとその天使たちが主を辱め苦しめようと計るすべてのことを、辛抱強く受けられるのであると、言明した。キリストは世を救うために命をささげられた。わたしは主のみわざのために苦しむことを許され、光栄である。わたしは弱く、罪深い者であるが、キリストはきよく、罪のない、純潔なかたであった。主は罪を犯さず、語られることばにも悪意は見られなかった。

これらの言葉には影響力があった。ヨハネは、彼を大がまに投げ込んだ同じ男たちによって、大がまから出された。

再び迫害の手が使徒ヨハネの上に重くのしかかった。皇帝の命令によりヨハネは「神の言とイエスのあかしとのゆえに」有罪を宣告されて、パトモス島に追放された（黙示録一ノ九）。ここではもはやヨハネの影響力は及ばず、やがて彼は困難と失望のうちに死ぬにちがいないと、彼の敵たちは思った。

パトモスはエーゲ海にある不毛の、岩の多い島であり、ローマの政府により犯罪者の流刑の場所として選ばれていた。しかし神のしもべにとって、この陰気な住居は天にいたる道となった。ここで、生活の忙しい場面から、また、これまでの活発な働きから遮断されて、ヨハネは神とキリストと天使たちと



パトモス島 エリアス山頂（標高 245m）の聖ヨハネ修道院の庭から北に向かって写した、パトモス島の壮大な景観。聖ヨハネはこの島から小アジアの七つの教会へ手紙を書いた。中程の白く見える町はスカラ港で、人口 1180 を数える。

の交わりを持ち、彼らから今後の教会のための指示を受けたのである。この世界歴史の終末の場面に起こる諸事件のあらましが、彼の前に示された。そしてヨハネは、そこで神から受けた幻を書きしめたのである。彼の声が、彼の愛し仕えたかたをもはやあかしできなくなったとき、その不毛の島の岸辺で彼に与えられたメッセージは、この地上の国々に関する主の確かな目的を伝える輝かしい明かりとして輝き出るのであった。

パトモス島の崖や岩間で、ヨハネは創造主と交わった。彼は過去の生活を振り返って、これまで受けてきた祝福を思い、平和な気持ちでいつぱいになった。彼はクリスチャン生涯を送ってきて、「死からのちへ移ってきたことを、知っている」と、心から言うことができた（ヨハネ第一・三ノ一四）。ヨハネを追放した皇帝はそうではなかった。彼はただ戦争と大虐殺の野に、みじめな家庭に、嘆き悲しむやもめや孤児に、優越を望む彼の野心の実を見るにすぎなかった。

ヨハネは彼の孤立した家の中で、これまで以上に深く、自然の書や靈感のページに記されている神の力の啓示を学ぶことができた。彼にとって創造のわざを瞑想し、造物主をあがめることは喜びであった。以前には彼の目に飛び込んできたものは、森でおおわれた山々や緑の谷、実り豊かな平原であった。そして、自然の美しさの中に、創造主の知恵と巧みをたどることが彼の喜びであった。今、ヨハネは、多くの人たちにとっては陰気でおもしろくもなさそうな風景に取り巻かれていたが、彼にとって、それはまた別であった。彼の周囲のものは荒れ果てて、味気ないものであったかもしれないが、彼の頭上にひ

ろがる青い大空は、彼の愛したエルサレムの上の大空のように輝かしく美しかった。荒れて、ごつごつした岩に、海原の神秘に、大空の輝きに、彼は大切な教訓を読みとった。これらすべてに神の力と栄光を語るメッセージがあつた。

使徒は、地に住む人たちが神の律法をあえて犯したために地に氾濫した洪水のあとを、周囲に見た。水がどつと出て、海の深みから、また地から投げ上げられた岩は、神の怒りの激しくほとばしる恐ろしさを、鮮明に思い出させた。淵々呼びこたえる多くの水の音の中に、預言者は創造主の声を聞いた。無情な風にたけり狂う海は、彼にとって、立腹された神の怒りをあらわした。激しく立ち騒ぐ大波は、目に見えない手により定められた限度に抑えられ、無限の力を持つ神の支配を語っていた。そして対照的に、彼は、地の虫けらに過ぎない人間が、持っていると思ひ込んでいる知恵と力に得意になって、まるで神も彼らと似たようなものであるかのように、宇宙の支配者であられる神にそむいている、その人間の弱さと愚かしさを知った。岩は彼に、彼の力の岩であられるキリストを思い起こさせた。この岩かげに彼は恐れなく身を隠すことができた。岩の多いパトモス島に追放された使徒から、神を求める最も熱烈な魂の切望と、最も熱情的な祈りがささげられた。

ヨハネの経歴は、神が年老いた働き人をお用いになる方法の顕著な実例を示すものである。ヨハネがパトモス島に追放されたとき、多くの人々は彼の奉仕が終わった、折れた古い葦は今にも倒れるであろうと思っていた。しかし主は彼をまだ用いることが適当であるとご覧になった。以前の働き場から追放

されたが、彼は真理のあかしを立てることをやめなかった。パトモスにいてさえも彼は友人や改心者をつくった。彼のメッセージは喜びのメッセージであり、よみがえられた救い主が、天において彼らのためにとりなしをしておられ、ついにはその民を迎えにもどって来られることを宣べ伝えるものであった。そして主のために奉仕を続けて年をとった後、彼は生涯のこれまでのどんな時よりも豊かに天来の交わりを受けたのである。

生涯の力を傾けて神のみわざと取り組んできた人々に対しては、最も心のこもった敬意を表さなければならぬ。こうした老齢の働き人は、嵐や試練の真ただ中に忠実に立ってきた。彼らは病弱になっ
ているかもしれない。しかし彼らはなお、神のために彼らの本分を全うする才能も資格も持っている。
たとえ衰えて、若い者たちが負うことのできる、また、負わなければならないような重い責任を、負う
ことができなくとも、彼らが与えることのできる勧告は最も価値のあるものである。

彼らは間違いをしたこともあったであろう。しかし、失敗から彼らは、誤りや危険を避けることを学
んできた。だからこそ賢明な勧告を与える資格があるのではないだろうか。彼らは試みや試練に耐えて
きた。そして彼らの活力の一部は失われたかもしれないが、主は彼らを除かれない。主は彼らに特別の
恵みと知恵を与えておられる。

みわざが困難なときに主に奉仕をしてきた人々、真理のために立つ者がほとんどいなかったときに信
仰を持続けた人々は、尊ばれ、尊敬されなければならない。主は若い働き人たちに、こうした信仰の

深い人々と交わることによって、知恵と力と円熟とを身につけるよう望んでおられる。そのような老練な働き人が共にいるために、大変恵まれているのだということを、若い者たちは認識しよう。若い者たちは会議の場で彼らを礼遇しよう。

キリストのみわざに一生をささげてきた人たちが、地上での奉仕を終える時期に近づく、聖霊による感銘を受けて、これまで神のみわざに携わっていたときの経験を詳しく話すようになる。神がその民を導かれたすばらしい配慮や、試練から彼らを救い出された神の大きな恵みの記録は、新しく信仰に導かれてきた者たちに繰り返し語られなければならない。神はこの年老いた経験豊かな働き人たちが、彼らの持ち場に立って、人々を悪の大波に押し流されないよう救うために彼らの分をなすようにと望んでおられる。神は、武具を脱ぐよう彼らに命じるまでは、武具をつけているようにと望んでおられる。

迫害のもとに受けた使徒ヨハネの経験には、クリスチャンにとってすばらしい力と慰めの教訓がある。神は悪い人々の計画を阻止なさるのではなくて、彼らの策略を、試みや戦いの中にいながら信仰と忠誠を守り通す人々の利益となるように導かれる。福音の働き人は、しばしば迫害の嵐、激しい反対、不当な恥辱の真ただ中で働きを進めることがある。そのようなとき、試練や苦悩の炉の中で得られる経験は、そのために受ける痛みのもので値するものだということを思い出そう。こうして神はその子らをご自身のもとに引き寄せられて、彼らの弱さと神の力をお示しになるのである。神は、神により頼むことを彼らにお教えになる。こうして彼らに危急に立ち向かう準備をさせ、責任のある地位につき、与え

られている力を尽くして大切な目的を果たすようにさせて下さる。

各時代にわたって、神に任命されたあかしびとは真理のために恥辱や迫害に身をさらしてきた。ヨセフは徳と高潔を守りつづけたためにそしられ、迫害された。神に選ばれた使命者ダビデは敵から猛獣のように追われた。ダニエルはあくまでも天に忠誠であつたために、ししの穴に投げ入れられた。ヨブはこの世の財産を奪われ、肉体的に非常に苦しめられ、親せきや友人にきらわれた。それでも彼は高潔を保ちとおした。エレミヤは神から語るようにと与えられた言葉を語らないではいられなかった。彼のあかしは王やかさたちを非常に怒らせ、そのため彼は胸の悪くなるような土牢に入れられた。ステパノはキリストと十字架につけられた主のことを宣べ伝えたために、石で打たれた。パウロは異邦人に対する神の忠実な使命者であつたために、むちで打たれ、石で打たれ、ついに死刑にされた。ヨハネは「神の言とイエスのあかしとのゆえに」、パトモス島に流された。

こうした人間の不動の信念をあらわす模範は、神の約束 神の内住と支えて下さる恵み の確かなことをあかししている。彼らはこの世の権力によく耐える信仰の力を、りっぱにあかししている。どんなに暗い時にも神に頼り、どんなにきびしい試練にあい、嵐にもまれても、天父が船のかじを握っておられることを感じる事ができるのは、信仰の働きである。信仰の目だけが、現在の事柄のあなたをながめ、永遠の富の価値を正しく評価することができる。

イエスはこの世の栄光や富をめざしたり、試練のない生活ができるような希望を、主に従う者たちに

お与えになったのではない。それどころか、イエスは彼らに、ご自分に従って克己と非難の道を歩むよう求めておられる。世をあがなうために来られたイエスは、悪の連合軍に反対された。悪人と悪天使は、無情な同盟をつくり、平和の君にこぞって反対した。イエスのことばと行動の一つ一つが神のあわれみをあらわし、彼は世と異なっていたために、激しい敵意を引き起こした。

キリスト・イエスにあつて信心深く生きようとする者たちはみな、このようになるであろう。キリストの霊に満たされている者たちすべてに、迫害と非難が待っている。迫害の性質は時代によって変わるが、その本質、すなわち、その根底にある精神は、アベルの時代以来主の選ばれた者たちを殺害してきたのと同じものである。

各時代にわたり、サタンは神の民を迫害してきた。彼は神の民を苦しめ、殺害してきたが、神の民は死ぬことで勝利者となった。彼らはサタンよりも偉大な力の力をあかしした。悪人は肉体を苦しめ、殺すかもしれないが、キリストと共に神のうちに隠されているいのちに触れることはできない。悪人は人々を獄屋に監禁することができても、彼らの心を縛ることはできない。

試練と迫害を通して神の栄光　神のご品性　が、その選民の中にあらわされる。世人に憎まれ迫害されるキリストの信者たちは、キリストの学校で教育され訓練される。地上にあつては、狭い道を歩き、苦難の炉で精錬される。彼らはきびしい戦いを通してキリストに従い、克己に耐え、苦い失望を経験する。しかし、このようにして彼らは罪の罪深さと苦悩を知り、嫌悪の思いをもって罪を見るように

なる。キリストの苦難に共にあずかるとき、彼らは暗黒のかなたに栄光を仰ぎ、「わたしは思う。今の時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」と、言うことができるのである（ローマ八ノ一八）。

第五十七章 ヨハネ、黙示録を書く

使徒の時代にキリスト教の信者たちは、真剣さと熱意に満たされていた。彼らは主のためにたゆまず働いたので、激しい反対があつたにもかかわらず、比較的短い間にみ国の福音は地上の人の住む所へもれなく伝えられた。このときイエスに従った者たちがあらわした熱意は、後世の信者たちの励ましのために、靈感による筆によつて記録された。主イエスが使徒の時代におけるキリスト教会全体の象徴としてお用いになつたエペソの教会について、忠実なまことの証人であられるかたが次のように宣言された。

「わたしは、あなたのわざと労苦と忍耐とを知っている。また、あなたが、悪い者たちをゆるしておることができず、使徒と自称してはいるが、その実、使徒でない者たちをためしてみ、にせ者であることと見抜いたことも、知っている。あなたは忍耐をし続け、わたしの名のために忍びとおして、弱り果てることがなかった」(黙示録二ノ二、三)。

最初は、エペソの教会の経験は子供のような単純さと熱情が特徴だった。信者たちは神のみことばにことごとく従おうと熱心に努めた。そして彼らの生活は、キリストに対する熱烈で誠実な愛をあらわした。彼らは心にキリストが内住しておられたので、神のみこころを行うことを喜んだ。あがない主に對する愛に満たされ、彼らの最高の目標は、魂を主に導くことであつた。彼らはキリストの恵みの尊い宝を死蔵しようとは思わなかつた。彼らは自分たちの召しの重要さを自覺し、「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」という使命を担つて、地の果てにまで救いのよいおとずれを運んで行きたいという願いに燃えた。そして世は、彼らがイエスと共にいたことを知るようになった。悔い改め、ゆるされ、きよめられ、聖なるものとされた罪深い人々が、み子を通して神との共労者になつた。

教会員は心も行動も一致していた。キリストに對する愛が、彼らを共に結び合わせる金の鎖であつた。彼らは主を更にもつと完全に知ろうとした。そして彼らの生活にキリストの喜びと平安があらわされた。彼らは困っている孤児ややもめを見舞い、みずからは世の汚れに染まずに身をきよく保つた。そして、この事がうまくできなければ、自分たちの信仰の表明に矛盾し、あがない主を拒むことになると思つていた。

どの町でもみわざが進められていた。魂が改心し、こんどは彼らがこれまでに受けた計り知れない宝を他人に教えなければならぬと感じた。彼らは、自分たちの心を照らしてくれた光が、他の人々の上にも輝かないうちは心が安まらなかつた。不信仰な人々の多くはクリスチャンの希望の理由を知らされ

た。誤っている者、見棄てられている者、また、真理を知っていると言いながら、神よりも快樂を愛する者たちに、個人的に、靈感による温かい訴えがなされた。

しかし、しばらくして信者たちの熱意が衰えはじめて、神に対する愛も、お互いに対する愛も薄らいできた。冷淡さが教会にしのび込んだ。真理を受けたときのすばらしい方法を忘れる者もいた。以前の標準を保持していた者が一人ずつその持ち場で失格した。このような開拓者たちの重荷を分担し、こうして賢い指導の準備ができていたはずの若い働き人の中には、しばしば繰り返される真理にあきてしまった者たちがいた。彼らは新奇でびっくりさせるようなものを望み、教理の新しい面を紹介して、多くの人々を喜ばせようとしたが、それは福音の根本的な原則に一致していなかった。彼らは自信と靈的盲目から、このようなこじつけが多くの人々に過去の経験を疑わせて、やがて混乱と不信へ導くということを見きわめることができなかった。

このような誤った教理がしきりに説かれたとき、意見の相違が出てきて、多くの人々の目がそれ、彼らの信仰の創始者また完成者としてのイエスを見なくなった。教理の重要でない部分を討論したり、人の作ったおもしろい話にふけり、福音を宣伝することに費やされなければならない時間が浪費された。真理が忠実に伝えられれば、罪が自覺されて、改心したはずの多くの人々が、警告を与えられずに放置された。敬虔さが急速に薄らいで、サタンがキリストに従う者たちだと主張する人々をまさに支配するかのように見えた。

ヨハネが流刑を言い渡されたのは、教会歴史の中の、この危機の時であった。教会にとって今ほど彼の声を必要とする時はなかった。ヨハネが以前に共に伝道の働きをしていた仲間たちはほとんど全部殉教の死を遂げていた。残った信者たちは激しい反対に直面していた。外見はどう見ても、キリストの教会の敵たちが勝利する日が、それほど遠くないようであった。

しかし主は暗やみの中で見えないみ手を動かしておられた。神のみ摂理のうちにヨハネは、キリストがご自身について、また、諸教会を啓発するための神の真理についての、驚くべき黙示をお与えになることができるところへ導かれたのであった。

ヨハネを追放することで真理の敵たちは、神の忠実な証人の声を永久に沈黙させたいと思っていた。しかし、パトモス島においてこの弟子は一つの使命を受けたのである。この使命の感化は終わりの時まで教会を絶えず力づけるのであった。ヨハネを追放した人々は、彼らの誤った行為の責任を解かれたのではないが、天の計画を進めるために神の手中にある道具となった。そして光を消そうとしたその努力そのものが真理をくつきり浮き立たせた。

栄光の主がこの追放された使徒に現れたのは、安息日のことであった。ヨハネは、ユダヤの町や都市で人々に説教していた時と同じように、パトモス島においても安息日を聖く守っていた。彼はその日に閑して与えられていた尊いみ約束を自分のものとして求めた。「わたしは、主の日に御霊に感じた。そして、わたしのうしろの方で、ラッパのような大きな声がするのを聞いた。その声はこう言った、『あ

なたが見ていることを書きものにして……教会に送りなさい。そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に：人の子のような者がいた」と、ヨハネは書いている（黙示録一ノ一〇 一三）。

愛されたこの弟子は豊かな恵みにあずかっていた。彼は、ゲッセマネで主を見ていた。主のみ顔は苦悩の血のしたたりを残していた。主の「顔たちは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていた」（イザヤ書五二ノ一四）。ヨハネは、ローマの兵士たちに捕らえられ、古い紫の衣を着て、いばらの冠をかぶったキリストを見ていた。カルバリーの十字架にかけられ、残酷な嘲笑と悪口を浴びせられたキリストを見ていた。今、ヨハネは、もう一度主を見ることを許された。しかしキリストの姿は、なんと違っていたことだろう。キリストはもはや、人々に軽蔑され、侮辱されている悲しみの人ではない。キリストは神々しく輝いた衣を着ておられる。「そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようで……その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようである（黙示録一ノ一四、一五）。その声は大水の響きのようであり、その顔は太陽のように輝いている。その手には七つの星を持ち、口からはみことばの力の象徴である鋭いもろ刃のつるぎがつき出ている。パトモスはよみがえられた主の栄光でまばゆく輝いている。

「わたしは彼を見たとき、その足もとに倒れて死人のようになった。すると、彼は右手をわたしの上において言った、『恐れるな』」とヨハネは書いている（黙示録一ノ一七）。

ヨハネはあがめられた主のみ前で生きることができるよう力づけられた。それから驚いているヨハネの目の前に、天の栄光が開かれた。彼は神のみ座を見ることを許され、この世の闘争のかなたを見上げて、白い衣を着たあがなわれた者たちの群れを見た。ヨハネは天使たちの音楽と、小羊の血によって勝利した人々の勝利の歌と、彼らのあかしの言葉を聞いた。彼に与えられた黙示には、神の民が経験する胸をおどらせるような興味深い場面が次々に展開され、教会の歴史が終わりの時まで予告された。数や象徴で、非常に重要な事がヨハネに示された。そしてヨハネは、彼の時代や未来の各時代に生きる神の民が、やってくる危難や闘争を賢明に理解することができるよう、それを記録しなければならなかった。

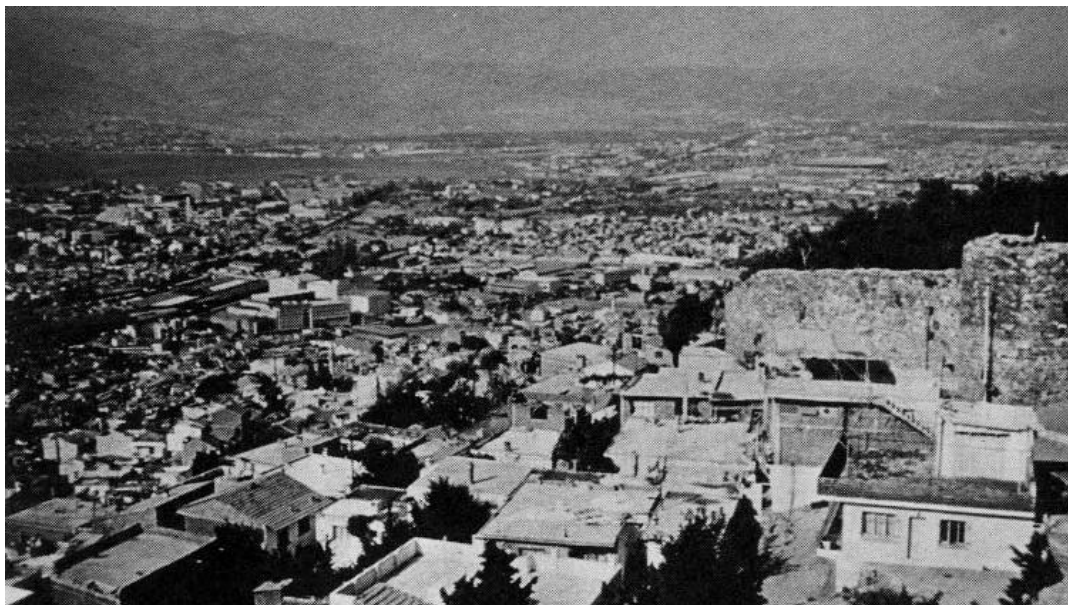
この黙示は、紀元後の全時代にわたって教会を導き慰めるために与えられたのであるが、それでも宗教家たちは、それが封じられた書物であって、その秘密は説明できないと主張してきたのである。そのため多くの者たちは、その預言的記録から身をそらし、時間をかけてその奥義を研究することを拒んだ。しかし神は、その民がこの書をそのようにみなすようには望んでおられない。それは「イエス・キリストの黙示」であり、「この黙示は、神が、すぐにも起るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え……たものである」。「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである」と、主は言われる（黙示録一ノ一、三）。「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き

加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。これらのことをあかしするかたが仰せになる、『しかし、わたしはすぐに来る』

（黙示録二二ノ一八 二〇）

黙示録には神の奥義が描かれている。その靈感による書に与えられている名、まさしく「黙示録」は、これが封じられた書であるという供述とは矛盾している。黙示とは、何か表されたものである。主ご自身がこの書に含まれている奥義を、そのしもべに表された。そして主は、その奥義がすべての人に公開されて研究されるようにと意図されている。その真理は、ヨハネの時代に生きていた人々と同様に、この地上歴史の最後の時代に住む人々にもあてられている。この預言に描かれている場面のあるものは過去に起こったものであり、あるものは今起こりつつある。またあるものはやみの権力と天の君との大争闘の終結を見させ、またあるものは新しくされた地に住むあがなわれた者たちの勝利と喜びを表している。

黙示録に書かれているすべての象徴の意味を説明できないからといって、そこに含まれている真理の意味を知るために、この書を探る努力をしても無益だと思ってはならない。ヨハネにこれらの奥義を表されたかたは、真理の熱心な探求者に天の事柄を前もって知らせて下さるのである。真理を受けるために心を開いている人たちは、その教えを理解できるようになり、「この預言の言葉を……聞いて、その



イズミルの市街 イズミルすなわち古代のスミルナをパグス山（標高 175m）から見おろした景観。小アジアの七つの教会の一つであるが、教会の跡は何も残っていない。この麓にはスミルナ教会の監督であったポリュカルポス（69 - 155年）が殉教した競技場の跡がある。



ベルガモの図書館 ベルガモのアクロポリスにエウメネス 世によって建てられたもので、4 部屋から成っていた。蔵書 20 万冊に上る大図書館であった。

中に書かれていることを守る者たち」に約束されている祝福を与えられるのである。

黙示録において聖書のすべての書が出会い、そして終わる。これはダニエル書を補って完成させるものである。一方は預言で他方は啓示である。封じられていた書は黙示録ではなく、ダニエルの預言の中で終わりの時代について述べている部分であった。天使は命じた、「ダニエルよ、あなたは終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい」(ダニエル書一二ノ四)。

使徒ヨハネに、彼の前に開かれるはずのことを記録するようにお命じになったのは、キリストであった。「あなたが見ていることを書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ベルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤにある七つの教会に送りなさい」と、キリストは命じられた。「わたしは……生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。……あなたの見たこと、現在のこと、今後起ろうとすることを、書きとめなさい。あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台との奥義は、こうである。すなわち、七つの星は七つの教会の御使であり、七つの燭台は七つの教会である」(黙示録一ノ一一、一八 二〇)。

七つの教会の名は、西暦紀元の異なる時代における教会を象徴している。七の数字は完全を表し、これらのメッセージが時の終わりまで及んでいることを象徴している。また、用いられている象徴は、この世界歴史におけるそれぞれ異なる時代の教会の状態を表している。

キリストは金の燭台の間を歩いているように述べられている。これはキリストと教会の関係を象徴し

たものである。キリストは絶えずその民と交わっておられる。主は彼らの真の姿を知っておられる。彼らの状態、敬虔さ、献身を見ておられる。主は天の聖所の大祭司であり、仲保者であるが、地上にあるご自分の教会の間を歩くかたとして表されている。キリストはたゆまず目をさまし、絶えず気を配りながら、見張り番の灯が暗くなったり消えたりしないように見守っておられる。もし燭台が単に人間にゆだねられるなら、ゆらめく炎は衰えて消えてしまうであろう。しかしキリストは主の家の真の見張りであり、宮廷の真の番人である。キリストの絶えざる守りと恵みによる支えは、いのちと光の源である。

キリストは右手に七つの星を持つかたとして表されている。これは、ゆだねられたことに忠実な教会は、失敗に終わることをおそれる必要がないことをわれわれに確証している。なぜなら、全能の神に守られている星は、一つでもキリストの手から奪われることはないからである。

「右の手に七つの星を持つ者：：が、次のように言われる」（黙示録二ノ一）。この言葉は教会の教師たち、すなわち、神から重い責任を負わされている人々に語られている。教会に豊かになければならないすばらしい祝福は、キリストの愛を表すはずの神の牧師と切り離せない関係にある。天の星はキリストの支配下にある。キリストは星を光で満たされる。また、その運行を導き、指示される。もしキリストがこれをなさらなければ、それらは落星になるであろう。牧師たちもそれと同様である。彼らは主のみ手の中にある道具にすぎない。そして、彼らがなし遂げるすべてのよいことは、キリストの力を通してなされる。彼らを通してキリストの光が輝き出なければならぬ。救い主が彼らの能力とならな

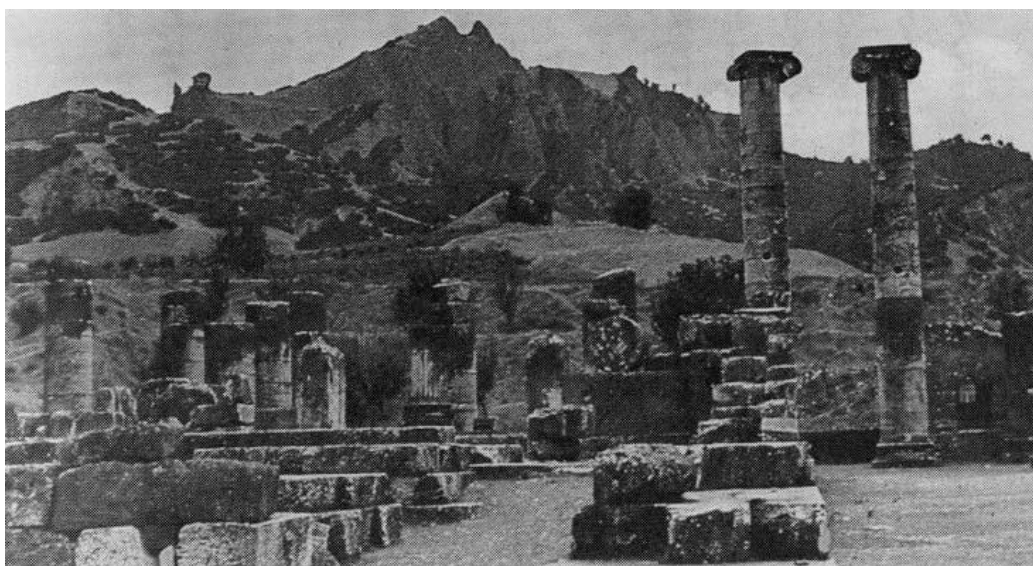
ればならない。キリストがみ父をご覧になるように彼らがキリストを見るならば、彼らはキリストの働きをすることができるようになる。彼らが神を頼みの綱とするならば、神はこの世にあらわす輝きを彼らにお与えになるのである。

教会歴史の初期に、使徒パウロが預言した不法の秘密の力がその有害な働きを始めていた。そして、すでにペテロが信者たちに警告していたにせ教師たちが異説を勧めると、多くの者たちは誤った教理に誘惑された。ある者は試練にあつてよるめき、誘惑されて信仰を捨てた。ヨハネがこの黙示を与えられたとき、多くの人たちは福音の真理に対する最初の愛をすでに失っていた。しかし神はあわれみによつて、教会を墮落の状態に放置されなかった。無限のやさしさを持ったメッセージの中で、神は彼らに対する愛と、永遠をめざして確実な働きをするようにという神の願いをお示しになった。「そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい」と、主は戒められた（黙示録二ノ五）。

教会は不完全で、きびしい譴責やこらしめが必要であつた。そこでヨハネは、福音の根本的な原則を見失つて救いの望みを危くしている者たちに、警告し、譴責し、懇願する使命を、靈感を受けて書いたのである。しかし、神が、必要と考へて送られる譴責のことばはいつでも、やさしい愛により、後悔している信者一人一人に平安の約束を与えて語られる。「見よ、わたしは戸の外に立つて、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいつて彼と食を共にし、彼もまたわ



テアテラ教会の跡 テアテラの町の中程にある教会跡で、イオニア式の柱頭が散乱しており、おそらく異教の神殿が改造されたものであったろう。



サルデスのアルテミス神殿 サルデスのアクロポリスの西麓、パクトルス川の岸边近くに建てられたもので、前 2 世紀のイオニア式神殿。南東端の2本の石柱はよく保存されており、高さ17.73m、直径 2 mである。この柱の後方に最初のキリスト教会がある。

たしと食を共にするであろう」と、主は述べておられる（黙示録三ノ二〇）。

戦いのさなかにおいて神への信仰を持ちつづけなければならない人たちのために、この預言者は賞賛と約束のことばを与えられた。「わたしは、あなたのわざを知っている。見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。……忍耐についてのわたしの言葉 あなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。」信者たちは次のように訓戒された、「目をさましていて、死にかけている残りの者たちを力づけなさい」。「わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい」（黙示録三ノ八、一〇、一一、一二）。

「兄弟であり、共に……苦難……にあずかっている」とみずから名のある者を通して、キリストは、ご自身のために彼らが苦しまなければならないことを教会にお示しになった（黙示録一ノ九）。幾世紀も
の暗黒と迷信の時代を見通して、この年老いた流刑者は、真理を愛するがゆえに殉教の死を遂げる多くの人たちを見た。しかし彼は、また、初期の証人たちを支えて下さったかたは、忠実に従ってくる者たちを、世の終末の前に通過しなければならない迫害の時代にもお見捨てにならないということも見ていた。「あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あなたがたは……苦難にあうであろう。死に至るまで忠実

であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう」と、主は言われる（黙示録二ノ一〇）。

ヨハネは、悪と戦う忠実な者たちみんなに与えられた約束を聞いた、「勝利を得る者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆるそう」。「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。また、わたしの父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう」。「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である」（黙示録二ノ七、三ノ五、二一）。

ヨハネは神のあわれみとやさしさと愛が、神の神聖と正義と力とに切合っているのを見た。彼は罪人がその罪のために神をおそれていたが、神の中に父を発見しているのを見た。また、大争闘が頂点に達したそのかなたを見たとき、「ガラスの海のそばに……うち勝った人々が、神の立琴を手にして立ち、「モーセの歌」と小羊の歌とを歌っているのを、シオンの上に見た（黙示録一五ノ二、三）。

救い主は「ユダ族のしし」また、「ほふられたとみえる小羊」の象徴でヨハネに提示されている（黙示録五ノ五、六）。これらの象徴は全能の力と自己犠牲の愛の結合を表している。ユダのししは、神の恵みを拒む者には恐ろしいものであるが、従順で忠実な者には神の小羊となる。神の律法を犯した者にとっては恐怖と怒りを表している火の柱は、神の十戒を守る人々にとっては光とあわれみと救出のしるしである。反逆者を打つ強い腕は、忠実な者を救い出す強い腕になる。忠実な者はだれでも救われる。

「彼は大きいなるラツパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」（マタイ二四ノ三一）。

世界の人口に比べれば、神の民は、常にそうであつたように、ごく小さな群れであろう。しかし彼らが、みことばに示されている真理に立つならば、神は彼らの逃れの間となつて下さる。彼らは全能の神の広い盾のもとに立つのである。神は常に多数を占めておられる。最後のラツパが死人の獄屋に響きわたり、義人が勝利して、「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか」と叫びながら出て来て、神とキリストと天使たちと、そしてすべての時代の忠実で真実であつた者たちと共に立つとき、神の子らははるかに大多数になるのである（コリント第一・一五ノ五五）。

キリストの眞の弟子たちは、克己をつらぬき通し、苦い失望を経験し、苦しい戦いをやり通して、キリストに従う。しかしこれは彼らに罪の深さと苦悩を教え、彼らは罪を憎悪するようになる。キリストの苦しみを共に受ける者たちは、キリストの栄光をも共に受けることになっている。預言者ヨハネは、聖なる幻の中に神の残りの教会の究極的な勝利を見た。彼はこう記している。

「わたしは、火のまじつたガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに……うち勝つた人々が、神の立琴を手にして立っているのを見た。彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とを歌つて言った、『全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大きいなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります』（黙示録一五ノ二、三）。



ヒラデルヒヤの教会 ヒラデルヒヤの町の中央部に残っている赤れんがの建物で、壁面にはキリストの絵が描かれているのがうっすらと見える。11世紀ごろのものである。



ラオデキヤの導水管 ラオデキヤの古趾の南の丘に長々と伸びている石灰岩の切石で作った導水管。これはデニズル付近から熱い水を引いているので、途中で冷え、なまぬるくなって飲み心地はよくない。

「なお、わたしが見てみると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた」（黙示録一四ノ一）。この世において彼らの心は神にささげられていた。彼らは知性と心で神に仕えた。そして今、神は「その額に「神の名を記すことがおできになる。」そして、彼らは世々限りなく支配する」（黙示録二二ノ五）。彼らは場所を請い求める者たちのように出たり入ったりしない。彼らは、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」と、キリストが言われる人たちの仲間である。神は彼らを神の子らとして迎え、「主人と一緒に喜んでくれ」と言って下さる（マタイ二五ノ三四、二一）。

「彼らは……小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である」（黙示録一四ノ四）。この預言者の幻は、彼らがシオンの山の上に立っているように描いている。聖なる儀式に備え、白い麻布を着ているが、それは聖徒たちの正しい行いである。しかし天において小羊に従う者たちはみな、まずこの地上で、いらだったり気まぐれにではなく、羊の群れが羊飼いに従うように、信頼し、慕い、喜んで服従しながら主についてきていなければならない。

「わたしの聞いたその声は、琴をひく人が立琴をひく音のようでもあった。彼らは、御座の前……で、新しい歌を歌った。この歌は、地からあがなわれた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができなかった。

った。……彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であつた」(黙示録一四ノ二―五)。

「わたしはまた……聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾つた花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下つて来るのを見た。」「その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであつた。それには大きな、高い城壁があつて、十二の門があり、それらの門には、十二の御使があり、イスラエルの子らの十二部族の名が、それに書いてあつた。」「十二の門は十二の真珠であり、門はそれぞれ一つの真珠で造られ、都の大通りは、すきとおつたガラスのような純金であつた。わたしは、この都の中には聖所を見なかつた。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである」(黙示録二一ノ二、一一、一二、二一、二二)。

「のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照」す(黙示録二二ノ三 五)。

「御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があつて、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。」「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門をとつて都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである」(黙示録二二ノ一、二、一四)。

「また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、

『見よ、神の幕屋が人と共にあり、

神が人と共に住み、

人は神の民となり、

神自ら人と共にいま』す」（黙示録二一ノ三）。

第五十八章 真理は勝利する

使徒たちがその働きの手を休めてから、十八世紀以上の年月が過ぎた。だが、彼らがキリストのために働き、犠牲を払ったその歴史は、いまだに尊い宝として教会に残っている。聖霊の導きによって書かれたこの歴史は、各時代のクリスチャンが一層強い熱情にかられて真剣に救い主のみわざに携わることができるように記録された。

弟子たちは、キリストから与えられた任務を果たした。十字架の使命者たちが出かけて行って福音を宣べ伝えたとき、かつて人間が見たことのないほど神の栄光があらわされた。聖霊の協力によって、使徒たちの働きは世界を動かした。わずか一世代のうちに福音はすべての国々に行き渡った。

キリストに選ばれた使徒たちの働きは、輝かしい成果を伴った。彼らが働きを始めたとき、ある者は無学であつたが、主のみわざに全的に献身し、キリストの指導を受けて、ゆだねられた大きな働きのために準備したのである。恵みと真理は彼らの心を満たし、動機を与え、彼らの行動を支配した。彼らの

いのちはキリストと共に神のうちに隠され、自己が姿を消し、無限の愛の深みに沈んだ。

弟子たちは、誠実に語り祈る方法を知っている人たちであり、「イスラエルの栄光」の力をつかむことが出来る人たちであつた。彼らは神のそば近くに立ち、彼らの栄誉をみ座に結びつけた。エホバは彼らの神であつた。神の栄誉は彼らの栄誉であつた。神の真理は彼らの真理であつた。福音に向けられる攻撃は、彼らの心に深く切り込むようなものであつた。そして彼らは全力をつくしてキリストのみわざのために戦つた。彼らはいのちのみことを提示することができた。なぜなら彼らは、神から聖別されていたからである。彼らは多くを期待して、それゆえに多くを試みた。キリストはご自身を彼らに現された。そして彼らはキリストから導きを求めた。真理への理解と、反対によく耐える能力とは、神のみこころへの一致と比例していた。神の知恵であり力であられるイエス・キリストが、あらゆる話の主題であつた。キリストのみ名 天下に与えられた、人々を救うる唯一の名 は、彼らによつてあがめられた。彼らがよみがえられた救い主、キリストの完全さを宣べ伝えると、彼らの言葉が人々の心を動かす、人々を福音へと導いた。救い主のみ名をのしり、その力を軽蔑していた多くの人々が今、十字架にかけられたかたの弟子であると告白した。

使徒たちが、ゆだねられた使命を成し遂げたのは、生ける神のみ力によるものであつて、彼ら自身の力ではなかつた。彼らの働きはたやすいものではなかつた。キリスト教会の初期の働きには困難と深い悲しみが伴つた。弟子たちは働きにおいて絶えず窮乏と中傷と迫害に遭遇したが、自分たちのいのちを

大事とは思わず、召されてキリストのために苦しむことを喜んだ。彼らの働きに優柔不断、不決断、目的のあいまいさなどはなかった。彼らは喜んで自己をささげ、また、神に用いられることをも喜んだ。自分たちの上に置かれている責任の意識が、彼らの経験をきよめ、豊かにした。そして彼らがキリストのために達成する勝利の中に、天の恵みがあらわされた。神はその全能の力をあらわし、福音を勝利させるために彼らを通して働かれた。

キリストご自身が築かれた土台の上に、使徒たちは神の教会を建てた。聖書の中で、神殿建設の姿は、しばしば教会の建設の例として用いられている。ゼカリヤはキリストを、主の宮を建てる「枝」にたとえている。彼はまた、異邦人がこの仕事を助けることについて述べている、「遠い所の者どもが来て、主の宮を建てることを助ける」。またイザヤは、「異邦人はあなたの城壁を築」と、述べている（ゼカリヤ書六ノ一二、一五、イザヤ書六〇ノ一〇）。

ペテロはこの宮の建設について書き、「主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストにより、神によるこぼれる霊のいけにえを、ささげなさい」と言っている（ペテロ第一・二ノ四、五）。

使徒たちは、ユダヤ人の世界と異邦人の世界という石切り場で、土台を築くための採石の仕事をしていた。パウロは、エペソの信者たちに宛てた手紙の中で述べている、「そこであなたがたは、もはや異

国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであつて、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあつて、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである（エペソ二ノ一九 一二一）。

更に、パウロはコリント人に書いた、「神から賜つた恵みによつて、わたしは熟練した建築師のよゝうに、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういふふうに住てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はつきりとわかつてくる。すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火は、それぞれの仕事が多様なものであるかを、ためすであらう」（コリント第一・三ノ一〇 一三）。

使徒たちは確かな土台、すなわちとしえの岩の上に築いた。彼らはこの土台に、世界から切り出された石を運んできた。建設者たちの働きに障害がないわけではなかった。キリストの敵たちの反対により、彼らの働きは非常に困難になった。彼らはにせの土台の上に築こうとしている者たちの偏狭、偏見、憎悪と闘わなければならなかった。教会の建設者として働いた多くの人たちは、ネヘミヤの時代に城壁を築いた者たちにたとえられる。彼らについては次のように記されている、「荷を負い運ぶ者はおのお

の片手で工事をなし、片手に武器を執った」（ネヘミヤ記四ノ一七）。

王も為政者も、祭司もつかさたちも、神の宮を破壊しようとした。しかし忠実な人々は、投獄され、拷問にかけられ、死刑にされても働きを進展させた。建物は次第に美しくなり均衡がとれてきた。ときには周囲の迷信という霧のために、働き人たちはほとんど目が見えなくなった。また、ときには、敵の暴虐に会って敗北しそうになった。しかし彼らはゆるぎない信仰と屈しない勇気をもって、あくまでも働きを推し進めた。

最初の建設者らは、次々に敵の手にかかって倒れた。ステパノは石で打たれ、ヤコブは剣で殺され、パウロは首をきられた。ペテロは十字架につけられ、ヨハネは島流しにされた。しかし教会は成長していった。倒れた人たちのあとを新しい働き人たちが受けついで、一つずつ石が加えられていき、こうして神の教会の宮が徐々に出来上がっていった。

キリスト教教会の設立のあとに、幾世紀にもわたる激しい迫害の時代が続いたが、神の宮の建設の仕事は生命そのものよりも大事だと思っている人たちに欠けることはなかった。そうしたことについてこう書かれている、「なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、（この世は彼らの住む所ではなかった）、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた」（ヘブル一ノ三六 三八）。

義の敵は、神の建設者たちにゆだねられた仕事をやめさせるための努力に骨身を惜しまなかった。しかし神は、「ご自分のことをあかししないでおられたわけではない」（使徒行伝一四ノ一七）。ひとたび聖徒に伝えられた信仰をりっぱに守る働き人たちが起こされた。歴史はこれらの人々の不屈の精神と英雄的な行為を記録にとどめている。使徒たちと同じように、彼らの中にもその持ち場にあって倒れた者が大勢いたが、宮の建設は着々と進んだ。働き人は殺されたが、働きは進展した。ワルド派（ワルデンス）ペジョン・ウィクリフ、フス、ヒエロニムス、マルチン・ルター、ツウィングリ、克蘭マー、ラチマー、ノックス、ユグノー（フランスの新教徒たち）、ジョン・ウエスレーとチャールズ・ウエスレー、そのほか多くの人たちが、永遠に持ちこたえる材料を土台のもとにもってきた。後年、聖書配布運動に雄々しく活躍した人々、異教の地にあつて大いなる最終使命宣伝のために道を備えた人々もみな、この建設工事を助けてきたのである。

使徒の時代以来、各時代にわたって神の宮の建設はやんだことがない。幾世紀にわたる過去を振り返ってみるとき、われわれはそこに、神の宮を作り上げている生きた石が、誤謬と迷信と暗黒をつらぬいて光り輝いているのを見る。これらの尊い宝石は、永遠にわたって、ますます光彩を増して輝き、神の真理の力をあかしするであろう。これらの磨かれた石のきらめく光は、光と闇、真理の金と誤謬の鉄くずとの著しい対照をはつきり示している。

パウロもほかの使徒たちも、そのとき以来生存してきたすべての義人たちも、みな宮の建設に各々の

役割を果たしてきた。だが、建築はまだ完成していない。今日生存するわれわれにも、なすべきわざ、果たすべき役割がある。火の試練に耐えられるような土台の材料 金、銀、宝石など「宮の建物のために刻まれた」ものを集めてこなければならない（詩篇一四四ノ一二）。パウロは、こうして神のために建設をすすめる人たちに、励ましと警告の言葉を述べている。「もしある人の建てた仕事がそのまま残れば、その人は報酬を受けるが、その仕事が焼けてしまえば、損失を被るであろう。しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、救われるであろう」（コリント第一・三ノ一四、一五）。いのちのことばを忠実に伝え、人々を聖潔と平安の道に導くクリスチャンは、耐久力のある材料を土台に加えているのであって、神の国において賢明な建築者として誉れを受けるであろう。

使徒たちについてはこう書かれている、「弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしをもつて、その確かなことをお示しになった」（マルコ一六ノ二〇）。キリストが弟子たちをつかわされたように、今日も、主はご自分の教会の信者たちをつかわされる。使徒たちに与えられていたのと同じ力が彼らのために与えられる。神を自分たちの力とするとき、神は彼らと共に働いて下さり、彼らの努力はむしくなることはない。彼らが携わっている働きは、神が印を押されているものだということを、彼らに認識させよう。神はエレミヤに言われた、「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じるところをみな語らなければならない。彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを救う

からである」。それから主はみ手を伸べて、しもべの口につけ、言われた、「見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた」（エレミヤ書一ノ七 九）。そして神は、われわれが、神の聖なるみ手がくちびるに触れたことを感じながら、与えられたみことばを語るために出て行くようにと命じておられる。

キリストは教会に神聖な責任をお与えになった。教会員はそれぞれ、神がその恵みの富と、計り知れないキリストの富とを世にお伝えになる器とならねばならない。世の人々に、キリストのみたまと品性をあらわす器ほど、キリストが望んでおられるものはない。人間を通して救い主の愛があらわされることほど、世が必要としているものはない。全天は、神がキリスト教の力をあらわすことができになる男女を待っている。

教会は、真理を宣べ伝えるための神の機関であって、特別の働きをする力を神から与えられている。もし教会が神に忠実であり、神のすべての戒めに従うなら、教会には神の計り知れない恩恵が内住するであろう。教会が真実に神への忠誠をつくし、イスラエルの神、主をあがめるとき、どんな勢力もこれに対抗することはできない。

神とそのみわざに対する熱意が弟子たちを動かし、偉大な力を發揮して福音をあかしさせた。われわれも同じ情熱を心に燃やし、あがないの愛の物語を、キリスト、しかも十字架につけられたキリストの物語を語る決意をすべきではないだろうか。救い主の来臨を待ち望むばかりでなく、これを早めることがすべてのクリスチャンの特権である。



神の約束は変わることがない。真理は必ず勝利する。患難から栄光への道は、
1 世紀の事実であると同時に、現代の現実でもある。

教会が世に従うことをやめて、キリストの義の衣を着る時に、教会の前には、輝かしい栄光の夜の明けがある。教会への神の約束は、永遠に堅く立つであろう。神は教会をとこしえの誇り、代々の喜びとなさる。真理は、それをさげすみ拒む人たちを通り過ぎて、勝利する。ときには一見妨害されたように見えても、真理の前進は決して阻止されたことがない。神の使命が反対に会うと、神はその使命が一層大きな感化を及ぼすように、それに力をお加えになる。こうして聖なる力を備えた真理は、どんな堅固なとりでもつきぬけ、どんな障害にも勝利するのである。

骨折りと犠牲のご生涯の間、神のみ子を支えたものは何であつたか。キリストはご自分の魂の労苦の結果をご覧になつて、満足された。キリストは、永遠をご覧になり、ご自身の屈辱を通してゆるしと永遠のいのちを受けた人々の幸福をご覧になった。キリストの耳は、あがなわれた者たちの歡喜の叫びを聞きとられた。主はあがなわれた人々が、モーセと小羊の歌をうたっているのを聞きになった。

われわれは、未来の、祝福された天の幻を持つことができる。聖書には未来の栄光の幻、神のみによつて描かれた光景が示されている。そしてこれらは、神の教会にとって大事なものである。信仰によつてわれわれは、永遠の都の入口に立ち、この世の生活においてキリストと協力し、キリストのために苦しむことを名誉とみなしてきた人々に与えられる、恵み深い歓迎のことばを聞くのである。「わたしの父に祝福された人たちよ」ということばを聞くと、彼らはあがない主の足もとに冠を脱ぎ捨てて、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさ

わしい。……御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」と叫ぶ（マタイ二五ノ三四、黙示録五ノ一二、一三）。

あがなわれた者たちは、自分たちを救い主に導いてくれた人たちにそこであいさつをし、全員が一つとなつて、人間に神のような永遠のいのちを与えるために、ご自分のいのちを犠牲にされたかたを讃美する。闘争は終わる。艱難も争いも終わる。あがなわれた者たちが、ほふられて、勝利の征服者として再び生き返られた小羊こそすばらしい、という喜びの歌をうたいだすと、勝利の歌が全天に満ちる。

「わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゆるの枝を手にとって、御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、『救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる』」（黙示録七ノ九、一〇）。

「彼らは大きな患難をとつてきた人たちであつて、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張つて共に住まわれるであらう。彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となつて、いのちの水の泉に導いて下さるであらう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとつて下さるであらう。」「もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去つたからである」（黙示録七ノ一四 一七、二一ノ四）。

〔解説〕

使徒たちの足跡をたどって

新約聖書の時代の都市

馬場 嘉市

（聖書学者。『聖書語句大辞典』
『新約聖書大辞典』等の編集責任者）

〈解 説 索 引〉

地 名	解説番号
ア テ ネ	24
アンテオケ (シリアの)	8
アンテオケ (ピシデヤの)	11
イコニオム	9
エ ペ ソ	15
エルサレム	1
カイザリヤ	5
コ リ ント	25
コ ロ サ イ	13
サ マ リ ヤ	2
サルデス	19
シ ド ン	7
ス ミ ル ナ	16
ダ マ ス コ	3
タ ル ソ	14
ツ ロ	6
テ ア テ ラ	18
テサロニケ	23
ト ロ ア ス	12
パトモス島	29
ヒラデルヒヤ	20
ピ リ ピ	22
ペ ル ガ モ	17
ポ テ オ リ	27
良 き 港	26
ヨ ッ パ	4
ラオデキヤ	21
ル ス テ ラ	10
ロ ー マ	28

解説は、エルサレムから始まってローマ、パトモス島に至るまで、使徒たちの歩いた道順に従って述べられています。ここでは読者の便宜を図って地名を五十音順に並べ、それが何番で説明されているかを示しました。

1 エルサレム

エルサレムはユダ山地の標高七九〇^{ハル}の丘に建った町で、四千年の国家興亡の歴史をもち、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三つの宗教が共に聖地として尊んでいる都である。一九四八年五月一四日、独立を宣言して、「イスラエル共和国」の首府となった。現在のエルサレム旧市街は一五三八年オスマン・トルコ帝国のスルタン、スレイマン 世（一五二〇―一五六六年）によって修復改築されたもので、石灰岩の切石を用い、銃眼を備えた高さ一二^{メートル}に及ぶ城壁で、八つの城門をもっている。街域の面積は九〇haで新約時代のもの（七五ha）よりも拡大されている。新市街は北西部に新設され、イスラエルの政治・文化の中心となっているが、これは旧市街の二三倍の面積があり、総人口は二八万五千に及び、イスラエルの第二の都市となっている。不幸にして一九六七年六月五日から一〇日までの、いわゆる六日戦争によって占領区域を拡大したけれども、和平の希望は切実である。一九七七年―二月二五日スエズ運河のティムサ湖にある平和の島でイスラエル首相ベギンとエジプト大統領サダトによる和平について、両国間の平和の基礎が置かれたことに

は希望が持てる。

エルサレムの歴史は古く、前二千年期に及ぶ。アブラハムの時代に引用され、テル・エル・アマルナ時代にはエジプトに属していた。ダビデが占領するに及んで、ここに都を定め、政治と宗教の中心とし、その子ソロモンはここに神殿を建立して宗教のゆるぎなき聖所とした。ソロモンの死後王国は分裂し、サマリアを首府とするイスラエル王国とエルサレムを首府とするユダ王国とに分かれた。この時代に預言者が続出し、国民を戒め、彼らの道徳と宗教を高めた。

前七二一年サマリアはアッシリアに滅ぼされて歴史から消えた。前五八六年にはエルサレムが新バビロニアに占領され、市民はバビロン捕囚に引かれたが、彼らは比較的寛容な待遇を受け、故国帰還の機を得た。前五三九年バビロンを征服するや、キュロス大王はユダヤ人を解放し、それから約四世紀間はペルシア時代、ヘレニズム時代を通して平和と繁栄を楽しむことができた。前一六八年、セレウコス王朝が干渉してユダヤの自治を冒し、これに対してマカベア一家が抗戦して独立に成功し、約二世紀にわたってハスモン王国とヘロデ王朝の時代を楽しむことができた。前六三年ローマの支配に入り、七〇年と一三五年との二回にわたるユダヤ戦

争によりエルサレムは完全に滅亡し、民族はディアスポラとして世界の各地を放浪するに至った。エルサレムは次々に征服者の手によって支配されるに至った。まずアラブ人により（六三七―一〇七二年）、セルジューク（一〇七二―一〇九九年）、十字軍（一〇九九―一二九一年）、マメルク（一二九一―一五一七年）、オスマン・トルコ（一五二七―一九一七年）と順次にエルサレムを治めた。

エルサレムの旧市街にはキリスト教徒にとつて見るべき場所が多い。まず「岩のドーム」、これはイスラム教の建て物であるが、アラビア建築の粋としてエルサレムの象徴となっている。次に聖墳墓教会で、これはコンスタンティヌスの建立したものである。その外アントニア塔、鞭打ちの教会、エツケ・ホモ門、ヴィア・ドロローサ、晩餐の部屋、ダビデの墓、鶏鳴のペテロ教会、城外ではオリブ山麓のゲッセマネの教会、山頂には復活教会などがある。新市街には国会議事堂、ヘブル大学、イスラエル国立博物館、書物の殿堂（死海写本が納められている）など近代建築物があり、イスラエルの古くして新しき姿を見ることができ、われわれにとってエルサレムはキリスト教発祥の地として魅力をもつ。

2 サマリヤ

サマリヤは北朝イスラエル王国の首府で、ナブルスの北西一四キロメートル、肥沃な平原から九一メートル高くなった丸い孤立した丘に建てられている。要害上の見地からここに都を移したのはオムリ（前八七六―八六九年）であり、彼は丘頂を平坦にし、城壁で囲んで居城を建てた（列王紀上一六ノ二四）。一子アハブ（前八六九―八五〇年）が増築し、ヤラベアム二世（前七八六―七四九年）は倉庫を城壁外に増築した。

前七二一年アッシリアの王サルゴン二世（前七二二―七〇五年）によってサマリヤは占領され、政治生命を絶った。同王はバビロンからクテびとをサマリヤに移住させ、彼らは残存イスラエルびとと雑婚して、のちの「サマリヤびと」と呼ばれる共同体の母胎となった。ペルシア時代（前五四九―三三三年）にはサマリヤはペルシア属州サマリヤと呼ばれる一地方行政区の首府として再興された。前三三二年アレクサンドロス大王（前三三六―三二三三年）によって占領、マケドニアの老兵を植民させた。前一〇八年ヨハネ・ヒルカノスがサマリヤを占領、市民にユダヤ教を強要した。前六三年ポンペイウスが占領、サマリヤをローマ属州シリア県に加えた。前

五七一五五年、ガビニウスの下に改修された。しかしこの町の最も隆盛期は、アウグストウス帝（前二七―後一四年）からこの町を賜わって、これを拡張し、パレスチナにおける有力なヘレニズム風の都市に再興したヘロデ大王の時代である。彼は前三〇―二〇年の間に新しい城壁で町を固めた。これは丘の下方を囲み、周囲三^{キロメトル}、面積九〇haの大都市に拡大されていた。彼はアウグストウス皇帝に敬意を表し、町の名を「セバステア」（ギリシア語で、尊厳者の意味）と改めた。第一次ユダヤ戦争のとき破壊されたが、間もなく再建された。二〇〇年ごろセヴェルス（一九二―二一一年）はサマリヤをローマの植民市に格上げして優遇し、バジリカをもつ広場を造営した。ローマ時代以後は町が衰退し、ビザンティン時代には一寒村に過ぎなくなった。

町の建っていた丘のなだらかな丘腹はオリーブ林とブドウ畑の緑に覆われ、平原には麦畑が広がっており、北朝イスラエルの繁栄が農業基盤の上に発達したさまを今日もしのぶことができる。

使徒行伝八ノ一二五にはサマリヤ伝道が記されているが、これはキリスト教が民族的な限界を越えて外国伝道に乗り出した第一歩として注目を惹く事件であった。

3 ダマスコ

ダマスコはシリア共和国の首府で、人口六五万を数え、世界の住み続けられた最古の町と考えられている。前二〇〇年ごろにはすでに存在しており、前一六〇〇年ごろにはエジプトとダマスコの間には通信が行われていた。ダマスコは、「砂漠の目」といわれるように、シリア砂漠を横切る旅行者には生気を取り戻せる楽園となった。ダマスコはアンチ・レバノンの峰ジェベル・カッシウン（標高二二〇^{メートル}）の麓、グウタ・オアシスの肥沃な平原に位置している。この平原は直径四八^{キロメトル}、標高六九〇^{メートル}である。バラダ川とアワジ川とがこの平原を潤し、農作物を豊かに実らせ、バラダ川は市の中央を東に流れ、両河ともはるか東方の砂漠に消えている。この地の伝説ではダマスコをエデンの園とし、北西方の近くにはアベルの墓がある。前一〇世紀にはダマスコはアラム王国の首府であり、ダビデはこれを攻めて貢物を入れさせた。（サムエル記下八ノ六）。この地にあったシリアの神ハダドの祭壇は全シリアの聖所のうち最も神聖なものとされた。アッシリア、新バビロニア、ペルシア、マケドニアは、前七三二年以降、順次にダマスコを支配した。前三三三年、ア

レクサンドロス大王の没後、プトレマイオス王朝とセレウコス王朝とはダマスコの争奪をめぐって戦った。第一世紀にはシリアはローマ帝国の属州とされた。この地には多くのユダヤ人植民があり、クリスチャンもかなりいたようである（使徒行伝九ノ二、二二ノ五、六、その他）。テオドシウス 世は三七五ごろ、この地に教会を建立した。イスラム教のウマイヤ王朝は六三五年にダマスコを占領し、これを同王朝の首府とした。一五一六年以降、オスマン・トルコ帝国はシリアとダマスコを支配した。

第一次世界大戦ののち、ダマスコはフランスの委任統治のもとに置かれ、第二次世界大戦ののち、一九四六年四月一七日に独立を宣言し、「シリア・アラブ共和国」となった。

今日も町の中央を東西に伸びた「真すべ」という街路が残っており（使徒行伝九ノ一）、その東端には「東の門」

（バブ・エ・シャルキ）、その北西三五〇メートルにはアナニヤの家、更に東の門を出て城壁に沿って南西五〇〇メートルほど進んだところにパウロが二階の部屋の窓から吊り下ろされたという教会がある。ダマスコの南西一五キロメートル、ジェベル・エル・アスワドの北中腹にはパウロの回心を記念するコーカブの教会が建立されている。さらにダマスコの北方には初代クリスチ

ヤンが住み続けているというセイドナヤの村、また今日までもアラム語を用い続けているマルーラの村があり、さすがに古いキリスト教の伝統が息づいている。

4 ヨツパ

シャロン平原の南端に位し、パレスチナの要港の一つであった。その起源は古く、ヒクソス朝代（前一七二〇―一五五〇年）の囲壁（厚さ三メートル）が認められ、トウトメス 世（前一五〇二―一四四八年）のアジア遠征都市表にヨツパを記している。しかし捕囚前にはイスラエルの掌中に帰したことはなく、依然としてペリシテびとに属していた。そのゆえにダン部族の領域はヨツパの東方にまでしか達していなかった。

（ヨシユア記一九ノ四六）。ソロモンの神殿建立の木材はレバノン山から切り出し、いかだに組んで舟に引かせ、海上をこの港に運んだ（歴代志下二ノ一六）。捕囚帰還後、第二神殿の造営にも同じ操作をした（エズラ記三ノ七）。ヨナはこの港からタルシシ行きの船に便乗した（ヨナ書一ノ三）。

前七〇一年ヨツパはアッシリアの王セナケリブに占領され、前四〇〇年にはペルシアの支配に服し、前三三二年アレクサンドロス大王に降った。ヘレニズム時代にヨツパはギリシア

化された都市となり、海港として発展しただけでなく、堅固な要害都市となった。プトレマイオス一世ソーテル（前三三―二八三年）はここにマケドニアの守備兵を駐留させた。マカベア一族は沿岸進出をねらい、第一にヨッパ占領に成功した（旧約外典・マカベア第一書一〇ノ七五、一二ノ三三他）。ここにヨッパは史上初めてユダヤ領となり、彼らは海上通商の門戸を得た。アレクサンドロス・ヤンナエウス（前一〇四―七八年）は錨の意匠をもつ青銅貨を鑄造した。海洋活動の記号をもつ貨幣は特にフェニキア、パレスチナの沿岸都市で鑄造されたものが多い。

前六三年ポンペイウスはヨッパを自由都市とし、そのためにユダヤ化は一時停滞したが、前四七年ユリウス・カエサルがこれをユダヤに返し、前三七年ヘロデ大王がこれを占領したが、市民の反対に会ってその対抗的海港をカイザリヤに開いた。ヨッパはきわめてユダヤ的要素が強い町として、エルサレム滅亡後も続き、またキリスト教の中心となった。新約聖書ではペテロがここでタビタを回生させ（使徒行伝九ノ三六―四一）、また海辺には皮なめしシモンの家があり、ペテロはその屋上で異邦人伝道の幻を示され、教会最初の異邦人伝道の門戸が開かれた（使徒行伝九ノ四三、一〇ノ一一

一、一八）。

今日では一九〇九年、ヨッパに北接して建てたテルアビブが急速に発展し、人口六〇万に及ぶ近代都市となり、ヨッパの町を合同している。上記のタビタの回生を記念する聖ペテロ修道院は旧ヨッパの丘の上に、皮なめしシモンの家は海岸の低地にあり、その屋上からの眺めは美しい。

5 カイザリヤ

ハイファとテルアビブとの中間、ペルシア時代のフェニキアの町「ストラトンの港」と呼ばれていた場所は、ヘロデ大王が前二二年から一〇年まで二二年の歳月を費やして建設した海港都市である。彼は皇帝アウグストゥスに敬意を表してこの都市を「カイザリヤ」（皇帝の町）と命名した。これは内陸に向かって半円形を描く城壁で囲まれた一五〇haの広大な町であった。そこには皇帝礼拝のための神殿、劇場、競技場、導水橋、下水溝などを備えた典型的なヘレニズム都市となり、俗に「小ローマ」と呼ばれた。

ここはローマ属州ユダヤ県の首府となり、ピラトを初め歴代のローマ総督の駐在地となった。第一世紀にはペテロがこの地のコルネリオの求めに応じてキリスト教をもたらし（使

徒行伝一〇章）パウロは総督ペリクスの前に立ち、ローマに護送されるときにはこの港から出帆した（使徒行伝二七ノ二）。この町におけるギリシア人とユダヤ人との紛争は六六年の第一次ユダヤ戦争の口火となった。この戦いは七〇年にティトウスによって鎮圧され、ヴェスパシアヌス帝（六九―七九年）は「捕われのユダヤ」の銘のある貨幣を鑄造してこの勝利を記念した。ハドリアヌス帝（一一七―一三八年）は第二次ユダヤ戦争を指導したバル・コクバの時にはこのカイザリヤに留まっており、彼自身のために神殿を建立していた。

第三世紀にはキリスト教の学者オリゲネスがカイザリヤ学派を興し、三三―三四〇年にはエウセビウスがカイザリヤの監督となった。五四三年にはクリスチャンの抹殺が計画され、ユダヤ人とサマリヤ人の協力によって実行された。六三八年にはイスラム教徒の手に落ちた。十字軍時代にはクリスチャンの手に取り戻したが、間もなくイスラム教徒の手に落ちた。一〇一年にはイスラム教のクリスチャン抹殺の場面となった。一二六五年スルタン・バイバルスによって占領されたが、のちトルコによって奪取された。現在はイスラエル共和国に属している。映画「ベン・ハー」の戦車競技の背景はこの古趾の競技場が使用されている。また一九六一年イタ

リア発掘隊はローマ劇場を発掘中に偶然に劇場の階段の踏み台としてあった「ピラトの石」を発見し、ピラトの存在の証明を得た。

6 ツロ

ツロは古代フェニキアの海港として姉妹港シドンと共に栄えた町で、ベイルートの南八六^{キロメートル}、シドンの南四五^{キロメートル}にあり、一九四四年一月一日独立を宣言して「レバノン共和国」となり、人口二万を数えるアラビア人の町である。元来は本土の陸地から一^{キロメートル}離れた岩石の島に建てられた要害の町であつたが、今日は砂に埋もれて本土とつながり、半島の形になっている。北港はシドンびとの港とされ、これは今日も港として活用されている。南港はエジプトびとの港とされ、規模も大きく、防波堤で囲まれていたが、今日は海中に没している。

ツロは前一九―一八世紀のエジプトの呪詛文に初めて記され、テル・エル・アマルナ文書（前一四世紀）には、ツロの王アビメレクがパロに忠誠であつたと記されている。ツロが繁栄期を迎えたのは、エジプトの勢力後退のちである。有名なフェニキアの水夫たちが古代世界における最初の海上貿

易の組織を樹立したのは、このツロが出発点となっていたのである。前一一〇〇年ごろ彼らはジブラルタル海峡を越えて航行している。

ヒラム一世（前九八六―九三五年）はダビデ（サムエル記下五ノ一）とソロモン（列王紀上五ノ一三）と友好関係を維持し、宮殿および神殿の造営に資材を提供している。後にはイスラエルの王アハブはエテバアルの王女イゼベルを妃に迎え、累をイスラエルに及ぼした（列王紀上二六ノ二九―三一）。ツロは前九世紀、カルタゴの植民市を開いてのち、

繁栄の頂点に達した。ネブカドネザル（前六〇五―五六二年）はツロを包囲して一三年に及んだが、勝敗がつかず、遂に平和条約を結んだ。ペルシア時代にはツロはパレスチナ沿岸に多くの植民市を開き、遠く南方のアシケロンにまで及んだ。前三三二年アレクサンドロス大王はツロを包囲し、本陸から長さ八〇〇^フ、幅六〇^フの突堤を築き、七か月の日子を費やしてこれを陥落させた。その後、通過上の競争都市としてのアレクサンドリアの興隆によりツロは衰微した。前二七三年プトレマイオス王朝の覇権を脱したが、前一九八年にはセレウコス王朝に隷属した。前一二六年ポンペイウスがツロを占領、その自治を許したとき、ツロは再び自由を得た。ローマ

時代を通じてツロは繁栄した。

新約にはかつて主イエスがこの地方に退かれたこと（マタイによる福音書一五ノ二一）、パウロの時代には信者がおり、彼は船待ちの七日を共に過ごしたことが記されている（使徒行伝二一ノ三七）。ツロの町は第二世紀末にキリスト教を受け入れ、監督の主座となり、数次の教会会議をもった。しかし後には反キリスト教的な哲学のゆえに、ツロはクリスチヤンにとって不愉快な町になった。しかしこの町の産る紫貝の染料は有名で、特に王の色として尊敬されている。

7 シドン

シドンはベイルートの南五〇^{キロメートル}にある町で、今日はサイダと呼ばれ、南レバノン地区の行政の中心として重要な地位を占め、人口四万を数える。この町の起源は古く、新石器時代（前四〇〇〇年）にさかのぼると言われる。

聖書はシドンをフェニキヤの最初の町としている（創世記一〇ノ九参照）。そして「シドンびと」という表現は、しばしばフェニキヤの全住民をさして使用されている（列王紀上五ノ六、一六ノ三一、比較）。

テル・エル・アマルナ土板によれば、シドンの王ジムリ・

アッダはエジプトの支配から離脱したようである（前一二九〇年ごろ）。彼の後継者たちはシドンの勢力を南方のドルマで拡張したが、ペリシテびとはこれに反撃を加え、シドンを滅ぼした（前一一五〇年ごろ）。この後、アッシリアの王テイグラテピレセル 世（前一一四一—一〇七六年ごろ）に対してシドンは沿岸諸都市とともに朝貢している。ツロの隆盛に伴ってシドンはフェニキヤの海港として重要性を失った。このちアッシリアの王シャルマネセル 世はシドンから貢を受け、新バビロニア帝国のネブカドネザルはシドンを占領し、ペルシア軍はギリシア遠征にシドンの艦隊を利用した。シドンびとはアルタクセルクセス 世に敵対して戦ったが、戦いに利あらず、四万の市民は陣没し、また残れる者は町と艦隊に火を放って焼死した。町の要塞は再築することができずに日を経た。シドンはアレクサンドロス大王には無抵抗で降伏し、ツロの攻略にはかえってアレクサンドロス大王に協力した。新約時代にはシドンの住民は主としてギリシア人が占め、町はギリシア文化の二中心として栄えた。この町は主イエスの歴訪に関連し（マルコによる福音書七ノ二四—三〇）、またパウロのローマ護送に際して寄港地として記されている（使徒行伝二七ノ一—三）。一八八七年に発掘されたアレク

サンドロスの石棺は現在イスタンブール博物館に保存されている。

8 アンテオケ（シリアの）

エルサレム教会がユダヤ的キリスト教を代表していたのに対し、アンテオケ教会は異邦人教会を代表し、外国伝道の根拠地として教会史上、重要な役割を果たした。

町は今日ではトルコに属し、オロンテス川の南岸、バルギルス山脈の北端をなすシルピウス山（標高四七〇^約）の北麓に位し、トルコ語で「アンタキヤ」と呼ばれ、人口四万を数える。

このシリアのアンテオケはセレウコス 世ニカトル（前三〇四—二八 年）が父アンティオコスの名に従って名づけた一六の町のうち最も有名である。この町は前三〇〇年ごろセレウコス 世ニカトルが建設し、彼は前三〇七年にアンティゴノスがアンティゴニアに定着させていたアテナイ人およびマケドニア人の老兵五三〇〇人を、このアンテオケに移住させた。町はヒッポダモス式都市計画に従って整然と建てられ、最初は二区から成り、第一区は広く、ヨーロッパ系植民が占め、第二区は狭く、シリアの土着民が占めた。第三区

はセレウコス 世（前二四七―二二六年）により、第四区はアンテオコス 世エピファネス（前一七五―一六三年）によって拡張され、それぞれ新しい住民をもって満たした。第五区はシルピウス山の頂を含み、ここにアクロポリスがあった。セレウコス王朝の動揺期に際し、アンテオケは一時（前八三―六六年）アルメニアの王ティグラネス 世（前九五―五五年）の支配下にあつたが、前六四年ポンペイウスにより、ローマ属州シリア県の首府とされ、前四四年カエサルによって自由市とされた。

アンテオケはローマ帝国第三の大都市（ローマ、アレクサンドリアに次ぐ）として栄え、当時は人口五〇万を算したといわれる。東西物資の交流と北に広がる肥沃な平原の農産物によって富を得て強力な産業基盤をもっていた。町の中央には東西に伸びた長さ七^{キロ}メートルの列柱道路があり、それは大理石の円柱で飾られ、上下水道が設けられていた。そこには数千の街灯が昼をあざむくばかりに夜の町を照らし、さすがに「東洋の女王」と呼ばれるにふさわしかった。

キリスト教は四〇年ごろこの地にもたらされ、最初の教団はディアスポラのユダヤ人によって形成され、バルナバとサウロ（後のパウロ）によって指導された。信者がギリシア名

で「クリスチャン」と呼ばれたのはこの地が初めてであり（使徒行伝一一ノ二六）、特に外国伝道の発祥の地としてエルサレム教会を凌いだ。

アンテオケは数次の教会会議の開催地として有名であるが、その後幾度か政権が変わり、一五一六年にスルタン・セリム世が所有して以来オスマン・トルコ帝国に属し、第一次世界大戦のときまで及んだ。一九一八年フランスの委任統治に属し、一九三九年にトルコに返還された。

9 イコニウム

イコニウムは小アジアの中部、首府アンカラの南二七〇^{キロ}メートルの地にあり、古くから栄えた町で、今日はトルコ語で「コニヤ」と呼ばれ、人口二万五千を数え、トルコにおける第八番目の大きな町である。奥地からこの町に來ると急にヨーロッパ風の趣が感じられ、奥地の泥土建の家屋は赤れんがの家が変わって明るい。ルカオニヤの乾燥した高原地帯におけるオアシスを形成する肥沃な地域（標高一〇三〇^{メートル}）に建てられ、小麦、亜麻の農産物また羊毛の織物の生産をもつて聞こえている。

この町の起源は遠く前三〇〇〇年ごろのヒッタイト時代に

さかのぼるとされるが、ギリシアの伝説によれば、ゼウスの子ペルセウスがこの地に来てメドウサの首をはね、これを木柱の上にかけたという。そこから古代の町の名イコニオムが生まれた。これは「像を持つ町」の意味である。この町は通商路の交叉点に当たり、特にメアンデル川の流域を通じてエペソとつながっており、セレウコス 世のヘレニズム化によってギリシア・ローマ時代を通じて繁栄した。パウロは第一次伝道旅行と第二次伝道旅行を通じてこの地を訪れている。（使徒行伝一四ノ一六、二一、一六ノ二）。

コンヤでメヴラアナ・ケラレッディン・ルミ（一二〇七―一二七三年）というホラサン生まれで、アナトリアに来たトルコの詩人、学者、哲学者が「踊る宗教」を創始している。これはペルシアの神秘思想の影響を受けたイスラム教一派で、毎年一二月七日から一七日までコンヤで盛大な祭が行われる。更にコンヤの博物館の屋外廊下にはルステラの人々によって建てられた皇帝アウグストウスの像の台座がある。コンヤの西方に少し離れた所にはテクラの双峰の山（標高一六〇〇^キ）があり、新約外典「パウロとテクラの行伝」に伝えるテクラの苦難に会いながら処女の純潔を守った物語の証拠となっている。

10 ルステラ

ルステラは中部アナトリアの町で、イコニオムの南二八^キにある。ガイドはその場所がよく判らないので、そこを少し行き過ぎ、ハトウンサライの村に行きその位置をたずねた。その村の古老が知っていると、車と一緒に乗り、もと来た道を引き返して古趾ゾルドウラの丘に着いた。そこは未発掘で、広大な古趾であり、各所にはローマ時代に使用された石材が散乱している。

ルステラの平原は肥沃である。ハトウンサライの北と南に小さな川が流れており、北の川は古趾の西側をめぐっている。ルステラのペルシアおよびヘレニズム時代における変遷はルカオニヤ地域としてしばしば引用され、第一にセレウコス王朝（前二八〇―一八九年）、次にアッタルス王朝（前一九一―一三三年）、最後にローマの属州と変わって行った。ローマ時代にはアウグストウスの時代に繁栄し、イコニオムの博物館屋外廊下にはルステラの市民によって皇帝アウグストウスに奉献した像の台座が保存されている。

その後ルステラはコンマゲネの王安ティオクス 世（三八―七二年）によって支配されたが、七二年これをローマ属

州に返し、アントニウス・ピウスはこれをキリキヤの一部とした。

パウロがこの地を訪れたときには、住民はルカオニアびとギリシア人、ユダヤ人、ローマの軍人から成っていた。そこで宣教中、パウロが跛者を治したことから、市民はゼウスとヘルメスが人の形を取って降って来たものとし、犠牲をささげてパウロとバルナバを祀ろうとした。パウロは事の次第を知って驚き、彼らを説得し、真の神を示して、人間に対する供犠を思い止まらせた（使徒行伝一四ノ八一―八）。ローマの詩人オウィディウス（前四三―後一七年）はその著「変身譜」の中に、この地をゼウスとヘルメスとが旅人の姿で訪れたが、市民は冷淡でこれに一宿一飯の情を拒み、ただパウキスとピレモンの老夫妻だけがこれを暖かく迎えて宿を貸した。神は市民の冷遇を怒り、洪水を起こしてこの町を滅ぼした。ただパウキスとピレモンだけが神々に助けられたとしている。ルステラの市民はこの故事に懲りてか、神の化身と考えるパウロとバルナバを神扱いにしたのであった。またルステラはテモテの故郷であり、パウロは第二次旅行の時彼を携えた（使徒行伝一六ノ一―三）。

ルステラの鑄貨はマルクス・アウレリウス（一六―一八〇

年）の支配の時代までも流通していた。その後の消息は明らかでない。しかし初期の教会会議が、三二五年から八七九年の間に数回開かれた記録があるところから、数百年の間は繁栄したことが知られる。

11 アンテオケ（ピシデヤの）

アナトリア中部のエフラトゥン・ピナルからベイシエヒル湖の東岸沿いに伸びた国道八二号線を北西に走ると、七〇^{キロ}北でヤルヴァチに着く。この道はかつて第一次伝道旅行の際、パウロとバルナバが通った道であり（使徒行伝一三ノ一四）、セルジुक・トルコ時代には、この道に沿い一日路ごとに石造建築の大きな隊商宿泊所を設けて、通商促進の便を計って好評を得ていたものである。

ヤルヴァチの町の東二^{キロ}北にピシデヤのアンテオケの古趾がある。アンテオケ付近に住みついた住民は古くからいたのであるが、町そのものはセレウコス 世ニカトル（前三〇―一二八 年）が創設し、マエンデル川に沿うマグネシアからギリシア系の植民を移した。町はアンティオス川を見おろす高台地に建てられ、東方からの交通の要衝の一つとなっていた。住民はギリシア人、ユダヤ人、フリュギア人から成つ

ていた（使徒行伝一三ノ一四、五〇）。

前三六年アントニウスはこれをガラテヤの王アミンタスの所領としたが、彼の死後、町をローマ属州ガラテヤ県に編入した（前二五年）。アウグストウスはアンテオケをローマの植民市とし、種々の造営物で飾り、そのために彼の生存中に神として祀られ、皇帝礼拝の対象とされた。實際上、また軍事上の目的をもって二つの道路が築かれ、ピシデヤの交通の便にした（前六年に完成した）。

アンテオケはビザンティン時代には有力な町として留まったようである。第四世紀のバジリカはその美しいモザイクとビザンティン式の墳墓のゆえに有名である。町はなお十字軍時代に要害として残っていた。

12 トロアス

小アジア西岸の北部、エーゲ海に面し、テネドス島に對面する町で、古代トロイアの南二五^{キロメトル}、現今のトルコ領にあるエスキ・スタンブルという古趾と同定される。

前三一〇年ごろアンティゴノスが建ててアンティゴニヤ・トロアスと呼び、前三〇〇年ごろリュシマコスが拡張し、アレクサンドロス大王を記念してアレクサンドリア・トロアス

と命名した。アウグストウスの治下にローマの植民市となり、コロニア・アレクサンドリア・アウグストウス・トロアスを完名としたが、一般には省略して単にトロアスと呼ばれた。

ローマ時代にはアジアとマケドニアをつなぐ要港として栄え、神殿、劇場、浴場また特にトラヤヌス皇帝の築構した導水橋などの遺物は今日も認められ、在りし日の繁栄を語っている。古趾はヴェロニヤ榿の茂みに掩われているが、周囲九^{キロメトル}に達した城壁は所々に残っている。大理石の円柱その他はイスタンブルのヴァリデ・イスラム教寺院を建立するために持ち去られた。

パウロは第二次伝道旅行の際、このトロアスでマケドニア伝道の必要を幻で示され、ただちにマケドニアに渡り、ヨローツパ伝道の第一歩を印した（使徒行伝一六ノ八一―一三）。

第三次伝道旅行の際パウロはここを経てマケドニアに向かいコリント人への第二の手紙二ノ一二、一三）、また帰路には船中で暗殺されることを避けるために陸路を取ることにした。そして、彼より先立った人々とトロアスで落ち合い、一週間を過ごした（使徒行伝二〇ノ五、六）。ここから一行は海路をアソスに向かい、パウロは単身陸路を進んでアソスに向かい、そこで一行と落ち合って乗船した（使徒行伝二〇ノ

一三、一四。この地のカルボの家にパウロが上衣と書物を残しておいたことが引用されているが（テモテへの第二の手紙四ノ一三）、その時期については明らかでない。

13 コロサイ

コロサイはラオデキヤの東一六^{キロメトル}、今日のホナズの町の近くにある古趾である。小アジアの西部、メアンデル川の支流リユコス川に沿い、ホナズ山（標高二五一六^{メートル}）の北麓に建てられている。この火山の爆発によって生じた火山灰のために肥沃な平原を発達させている。この町はヘロドトスおよびクセノフォンによって「巨大なる都市」と呼ばれている。クセノフオンの一万人の軍隊はパビロンに向かう途中ここに宿営した。この町の隆盛は毛織物と、エペソからユーフラテス川に通じる軍事・通商の幹線道路を扼していた地理的位置に負うものであった。毛織物は染色不要の美しい黒色の毛を出す羊毛で織られた。

パウロの時代にはコロサイの繁栄はラオデキヤに奪われて衰運にあった。しかもネロの時代に大地震に見舞われて次第に衰えた。しかしパウロ時代にはなお相当のユダヤ人およびギリシア人がいたが、主な住民は土着のフリュギア人であり、

その言葉はギリシア語であった。コロサイのクリスチャン共同体はエパfrasによって導かれたもので（コロサイ人への手紙四ノ一二、一三）、おそらく大部分は異邦人であった。この教会はラオデキヤとヒエラポリスの教会と密接に関係していた。この三つの教会はエパfrasの監督の下にあった。（コロサイ四ノ一二、一三）。

聖ミカエルはコロサイの町の守護聖徒となった。彼は洪水から町を守るために奇跡を行い、ホナズにおける大渓谷を切り開いたといわれている。第七世紀と八世紀との間にサラセン人が侵略し、のち一二世紀にはトルコが町を滅ぼし、歴史から消滅させた。古趾には荒廃した教会の趾、劇場の礎石、埋葬地などが見られる。

14 タルソ

タルソは今日トルコ語でテルスースと呼ばれ、トルコ中部の町で、人口六万五千を数え、キリスト教随一の使徒パウロの出身地として有名である（使徒行伝九ノ一、二二ノ三九、二二ノ三）。町はキリキア平原に位し、町を流れるキュトノス川にまたがり、地中海から一五^{キロメトル}内陸に建てられていた。川は町をやや離れた南方で古代のレグマ湖を形成し、そこは

船舶が溯江する良港となり、輕舟はタルソまでさかのぼることができ、地中海の通商港として繁栄した。またタウロス山脈を越えてアナトリア高原にはいる大通商路の起点としてタルソは陸路の中心でもあった。今日は国道一号線が通じアナトリア高原とキリキヤ平原を結んでいる。町はオレンジ、レモン、バナナ、イチジク、ナツメヤシなどの果樹に囲まれ、周辺には綿花の畑が広がり、灌漑用のセメントの樋で送水している。

イスラム教徒の信仰ではタルソの創設をアダムの子セツとしている。しかしギリシア神話ではベガサスの翼（タルソス）がここに落ちたことから名づけられたとする。町の起源はヒッタイト王国末期のころまでさかのぼることができる。この町の名タルジはアッシリアの王シャルマネセル 世（前八六〇―八二四年）の碑文に見られ、順次にアッシリア、新バビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマの支配の下に多種の文化的影響を受け、そのためにこの町は重層する文化および宗教のつぼとなった。前一七〇年以降アンティオコス 世エピファネスにより著しくヘレニズム化された。前六四年アントニウスはタルソを自由都市とし、前二年アウグストゥス帝はタルソの特権を拡大し、キリキヤ県の首府とした。当時

は隆盛をきわめ、人口五〇万を数えたと推定される。この多岐な人種、言語、生活様式、社会階級の混交こそ、若きパウロがそこに育った肥沃な精神的土壌であった。

タルソは商業的に重要な町であっただけでなく、また文化の中心でもあり、アテネ、アレクサンドリアにつぐ第三の学府であったといわれる。東と西、すなわちセムとギリシアの両文明の相接する所に位置し、古代世界に広く知られた哲学者を生み出した。タルソ出身のストア派哲学者アテナドロス（前七四―後七年）はそのひとりであった。

ローマ時代後期には平和の状態が続き、紀元二世紀と三世紀にはたびたび皇帝の訪問を受け、市は一連の名誉ある称号を称えるようになった。その後のタルソの歴史は、東西の打ち続く争いの歴史である。八世紀にはハルン・エル・ラシド（七八六―八〇九年）が市を占拠し、建造物に彼の足跡を残した。市は多くの変遷のちにベアジト 世（一三八九―一四〇二年）によってオットマン帝国に併合された。

15 エペソ

イズミルから国道六号線を南に約七〇^{キロメートル}進むとセルチュクの小さな町に着く。かつて「アジアの光」と呼ばれたギリ

シア・ローマ時代の町エペソの古趾はここから南西二キロメートルにある。セルチュクはかつてはアヤソルクと呼ばれたもので、それはギリシア語「ハギ奥斯・セオロゴス」(聖なる神学者)のトルコ語に訛つたものであり、第六世紀にこの丘上に建立された聖ヨハネ教会から名づけられたものであった。しかし一九一四年セルチュクと改められて今日に至っている。

小アジア西部の肥沃な平原を貫流してエーゲ海に注ぐカイストロス川の河口南岸に建てられ、河口から二キロメートルの運河を溯江して内港に達するようになっていた。

エペソの最初の住民はアジア系であつたが、前一世紀、ギリシアのイオニア植民が占領し、彼らの十二都市連合のひとつとし、またその首府とした。前五五五年リュディアの王クロイソスに占領され、まもなくペルシアの属州となり、次いでアレクサンドロス大王の勝利によつてエペソはマケドニア、ギリシアの支配下になった。沖積平原を占める町は洪水に見舞われがちであつたところから、前二八六年リュシマコスは水の届かないピオンおよびコレッソスの山麓に町を移した。この位置の変動により、アルテミスの神殿は城壁の外になった。前一九〇年ローマ軍はマグネシアにおいてアンティオコス世を破り、エペソを奪つてこれをペルガモの王エウ

メネス世に与えた。前三三三年アッタルス世の死後ローマ領となり、ローマ属州アジア県の首府とされた。元老院領として総督の駐在地となった。ローマと東方とを結ぶ主要地点のゆえに通商上大いに繁栄した。

新約時代の町は二九年の地震によつて破壊されたものを、ティベリウス皇帝が修復したものであつたが、それは後代ギリシアの国際的文化の精神を呼吸し、エルサレム、アテネと共に古代の三聖都のひとつとなった。当時の人口は二十五万を数え、それには多くのユダヤ人も含まれ、彼ら自身の会堂をもつていた(使徒行伝一八ノ九、一九ノ八)。パウロはエペソに約三年とどまつて伝道し、教会の基礎を置いた(使徒行伝一九ノ八、一〇、二〇ノ三一)。首府エペソにおけるパウロの伝道活動はアジア県の奥地深くその影響を及ぼし、ラオデキヤ、ヒエラポリス、コロサイなどの教会を見るに至つたようである。

古代世界の七不思議の一つとして有名なアルテミスの神殿は前八世紀にセルチュクの丘の西方平原に建てられたもので、その広大な造営は衆人の注目を惹いた。しかしこの神殿は前三五六年奇しくもアレクサンドロスの生まれた夜、一狂人の放火によつて焼失した。しかし、それと同大のものが前三二

三年ごろ完成し、紀元二六二年ゴート人に焼かれるまで存続した。神殿自体は奥行一〇三メートル、間口四三メートルで、パウロが見たのはこの神殿であった。神殿の中にはアルテミスの像が立っていた。またピオン山の西麓には半円形の劇場があり、二万五千の観衆を入れることができ、現存する古代劇場の最大のものである。この劇場の前の小広場から北西に向かってアルカディア通りが五〇〇メートル伸びて港湾に達している。発掘されたものの中には市場、図書館、競技場、公衆浴場、音楽堂などがあり、後代のもものでは聖ヨハネ教会、聖マリヤ教会、また町の西方アステイアゲスの丘（標高一三七メートル）にはパウロの獄と呼ばれるものがある。

パウロのなき後はヨハネがエペソで活動したといわれ、黙示録に記される小アジアにおける七つの教会の第一にエペソがあげられている（ヨハネの黙示録二ノ一七）。

紀元四三一年、マリヤの二重教会で第三回公会議が開かれ、ネストリオスの異端を斥け、キリストの神性と、マリヤを神の母（セオトコス）と認めた。

16 スミルナ

スミルナは今日イズミルと呼ばれ、小アジアの西部中央の

イズミル湾に臨み、トルコ第二の海港として繁栄し、人口五七万五千を数える。八〇キロメートル北方のペルガモと、七〇キロメートル南方のエペソとの中間に位し、国道六号線によって繋がれている。ヘルムス流域を通じて東方奥地との通商路の基点として重要性をもっていた。付近の豊かな農産物の集散加工地として今日も栄え、港湾には船舶の往復が多い。

前一一〇〇年ごろアイオリスの植民によって湾の北東部に町が建てられ、前六八八年ごろイオニア植民による十二都市同盟のひとつとなった。前六二七年リュディアのアルヤツテスに滅ぼされて以来、およそ三〇〇年間スミルナは荒廃に任ぜられた。アレクサンドロス大王はサルデスを占領後、スミルナの復興を意図していたが、その志を得ず、アンティゴナスにより、のちにはリュシマコスによってその意図が達成された。それは旧位置より四キロメートル西方に寄り、パゴス丘（標高一七五メートル）の西麓に新設されたもので、方形の区画と列柱とで飾られた舗装街路から成る美しい町となり、今一度昔の繁栄を取り戻した。ローマ時代を通じてその富、神殿、建築物、医学、科学の故に小アジアの最も重要な都市のひとつとなった。ミトリダ戦争の際にはローマに加担し、そのため帝政時代にはローマの恩恵に浴した。二六年ティベリウス皇帝とそ

の母リヴィア（アウグストゥス皇帝の妻）のために神殿を建立し、「皇帝の神殿守」の称号を得た。一七八年と一八一年の地震による被害はアウレリウス皇帝によって回復された。

「スミルナの冠」（黙示録二一〇「いのちの冠」比較）の句は要害アクロポリスの城壁に囲まれたバゴス丘を指す表現にふさわしい。アクロポリスの北方二三〇^のの斜面には競技場があり、大理石の断片が散乱している。ここは一五五年殉教したスミルナ教会の監督ポリュカルボスの埋葬された場所である。

スミルナは幾度か政権が変わり、地震に見舞われた（一八八三年と一九二八年）。一九二三年におけるギリシア人追放の際に大火災を生じ、その復興に全力を尽くした。今日は、「クゼル・イズミル」（美しきイズミル）としてトルコ人は、どこよりも勝って地中海の魅力として誇っているのである。

17 ペルガモ

ペルガモは小アジアの西端中央部、エーゲ海沿岸の東二四^{キロ}の地点に発達した町で、オスマン・トルコ時代からベルガマと呼ばれている。人口二万二千を数え、アクロポリスの下方にある。アクロポリスは肥沃なカイクス平原に位し、北

方から流れる二支流セリヌス川（今日のベルガマ川）とケティウス川との合流点に突出した丘に建てられている。東のケティウス川に面する側は峻坂となり、西のセリヌス川に面する側はゆるやかな斜面となつて肥沃な耕地も開けている。このアクロポリスの丘は平原から三〇四^のも屹立している。

町の起源は神話的で、ヘラクレスの子テレフスに引率されたアルカディア植民の一隊によって創設されたという。しかし前四〇一年スパルタ軍がカイクス流域でペルシア総督ティツサフェルネスと戦った事件以前の歴史は明らかでない。アレクサンドロス大王の没後、ペルガモはリュシマコスの支配の下に隆盛の途についた。ペルガモはフィレタエロス（前二八三―二六三年）の下に重要な地位を占め、王の称号を得た最初の統治者アッタロス 世（前二四一―一九七年）によってペルガモ王国となつた。彼は前二三〇年ケルト族の侵入を防いで救済者と呼ばれ、シリア王国から、タウロス山脈以西の領土を奪った。その子エウメネス 世（前一九七―一五九年）の下にペルガモは隆盛の頂点に達した。彼はローマとアンティオコス 世との戦いにはローマに加担し、シリア王国の小アジア領を与えられた。彼は身边に学者、美術家を集め、大図書館（二〇万巻を所蔵）を創設して、ペルガモをエジプ

トのアレクサンドリアに並ぶヘレニズム文化の一大中心とした。エジプトのパピルス禁輸処置のために書写材料を入手する途を絶たれたペルガモでは、羊皮紙を発明し、恒久的書写材料の道を開いたのであった。

アッタロス 世（前一三八―一三三年）はなんら王国隆盛に寄与するところなく短い治世の後、これをローマに遺譲した。前一三〇年ローマはペルガモ王国をローマ属州アジア県に組織し、ペルガモをその首府とした。ローマ時代には数多くの神殿、劇場その他の造営物でアクロポリスまた西方の平地を飾った。特にエウメネス 世の建てたゼウスの大祭壇は有名で、古代世界の七不思議の一つとされた。

キリスト教は早くからペルガモに達し、ヨハネはこの教会に手紙を送っている（黙示録二ノ一二―一七）。「そこにはサタンの座がある」という表現はこのゼウスの祭壇をさし、悪の力の大きかったことを示している。

この町は長く宗教の中心であり、監督の主座となった。一三〇四年セルジウツクの手に落ち、一三三六年現在のトルコの手に落ちた。

18 テアテラ

小アジア西部にあったリュディアの町、イズミルから国道一五号線に沿って北東に八五^{キロメートル}進むとトルコの繁栄する町アクヒサルに着く。人口四万五千を数える。ここが昔のテアテラの町の跡に建てられた町である。イズミルから国道一五号線を進むと右側にキベレの山（標高一六〇三^{メートル}）が見える。この山脈全体が地母神にして農業の神キベレの所有とされているのでこの名がある。古典の「シビルス山」、トルコ語で「マニサ・ダギ」と呼ばれ、肥沃な沖積平原を流れるヘルムス流域の南境をなし、東西四〇^{キロメートル}に及んでいる。石灰岩の露呈した断崖も見えるが、総じて樹木が多く、麓にはオリブの林が発達している。その東端には前一三世紀ごろに刻まれたキベレの岩壁浮彫があり、この平原の肥沃を守る女神として庶民の信仰を集めていた。ここからヘルムス川を溯り、その支流リュコス川に沿って北東に進むと次第に高地になり、テアテラの町に着く。

このギリシア風の町はセレウコス 世（前三二―二八〇年）によって創設されたもので、マケドニアの兵卒たちを植民させ、またユダヤ人をも植民させた。前一九〇年にセレウ

コス王朝のこの町の支配が終わり、次にベルガモ王国のテアテラ支配が前一三三年まで続き、その後ローマの統治下に入った。元来は小アジアを縦断する幹線道路を守るために、軍事的前哨地として建てられたものであるが、いわゆる「ローマの平和」のこの地への浸透によつて、その軍事的意義が失われ、重要な通商路を控えた有利さから商業都市として発達するに至つたものである。

テアテラから出土した碑文によれば、ここには諸種の同業組合があり、銅細工、皮革加工、染色、羊毛の紡織、亜麻布などの同業組合を含んでいた。この市の出身者ルデヤは紫布を扱う女性商人であつた（使徒行伝一六ノ一四）。彼女はおそらく同業組合を代表し、ギリシアにおける販売店の経営に当たつていたのであろう。一八七二年メルチデス教授はピリピで白大理石の碑文を発見し、それには「市は紫布の商人の間から顕著な市民、テアテラ出身のリュコスの息子アンティオコスを恩恵者として表彰する」と記されていた。

この町の守護神はテュリムノスと呼ばれ、リュディアの太陽神であつた。黙示録二ノ一八一二八のテアテラ教会への手紙にキリストを「燃える炎のような目」を持つ方としているのはこの太陽神をさし、「光り輝くしんちゅうのような足」

をもつ方としているのはこの地の銅工の同業組合に関連する表現とされる。更にこの地の教会は皇帝礼拝を強いられ、困難の中にあつたのである。しかし彼らはこれに抵抗した。

一五〇年ごろ、この地にはモンタニズムが流行した。これはモンタヌスによつて首唱された教えで、キリスト教の俗化に対する反世俗主義を唱えたものであつた。

19 サルデス

小アジアの七つの教会の一つサルデス（黙示録三ノ一六）は、今日トルコ語でサルトと呼ばれる小さな村の付近にある古趾と同定される。イズミルから東に向かつて伸びる国道六八号線に沿つて肥沃なヘルムス川の流域平原を東方の高原に向かつて走ること八七^{キロメートル}でサルトの村に着く。その北西の手前一〇^{キロメートル}ほどの左方（北）ヘルムス平原の北端に三つの円頂の古墳が見える。これはトルコ語で「ピン・テペ」（千の丘）と呼んでいるリュディアの大古墳群である。その東端にあるのはクロイソスの父アリユアッテス王（前六一七―五六〇年）の墳墓である。この辺りから広々としたブドウ畑が展開する。そのブドウは良質で、エーゲ海東岸の諸市に供給されている。

サルデスはツモルス山（標高二一四〇メートル）の北麓に建てられ、ヘルムス川の南五キロメートル、その支流パクトルス川に沿っていた。下部リュディア層からは鼠色の甕が出土し、これは土着の単色土器時代を代表しているところから、この町の起源は早期青銅器時代ないし後期青銅器時代であったとされる。前七世紀にはその富をもって古代世界に知られたリュディア王国の首府として栄え、金貨および銀貨を初めて鑄造し、貨幣経済の道を開いた。前五四六年クロイソス王の治世に、ペルシアのキュロス王に占領された。ペルシア総督の駐在地となり、スサから西方に伸びるペルシアの王の道の終点とされた。前三三四年アレクサンドロス大王は町を包囲し、アクロポリスに守備隊を配置した。その後セレウコス王朝の下に再び行政上の中心となった。前一八九年にローマ軍に下り、一三三年までローマの盟友ベルガモの支配下に置かれ、その後ローマ帝国の統治に帰し、紀元一七年に地震のために破壊されたが再建され、紀元後三世紀にわたって繁栄した。

アクロポリスは平原から二二四メートルの高さにそびえ、三面はほとんど垂直に近い断崖で、ただ南側からだけ近づくことができた。この難攻不落の要害も前五四九年にはキュロスにより、前二一八年にはアンティオコスによって占領された。そ

れは断崖の岩の裂け目を足がかりにしてよじ登った兵卒によって占領された（黙示録三ノ三「わたしは盗人のように来るであろう」を比較）。アクロポリスの西麓、パクトルス川の岸近くにはアルテミスの神殿が建てられていた。これは前四世紀のイオニア式の神殿で、現今は南東端の二本だけが残っており、直径二メートル、高さ一八メートルである。ローマ時代には内殿は皇帝礼拝のために保留された。このアルテミスは町の守護神キュベレと同定され、市民はこの密儀的祭祀に耽溺していた（黙示録三ノ四「衣を汚さない人が数人いる」を比較）。

七一六年にはアラビア人に征服され、一四〇三年チムール人に滅ぼされた。一九五三年以降発掘が続けられ、ユダヤ人の会堂、競技場、初代のキリスト教会などが発掘された。

20 ヒラデルヒヤ

小アジア西部、リュディア地方の町で、サルデスの南東四五キロメートル、今日のアラシェヒルの町と同定される。小アジアの七つの教会の一つで、奥地に建てられ、人口二万を数え、比較的大きな町で市民は大部分イスラム教徒である。ツモルス山の北麓とヘルムス川上流の支流コガムス川西岸の間の台地に建てられ、サルデスから奥地に延びる幹線道路を扼して

いる。火山地帯カタケカウメネ（燃える土地）の南西端にあたり、ブドウの産出をもって聞こえ、ブドウ酒の神ディオニソスの礼拝が盛大であった。

前一五〇年ごろベルガモの王アッタロス 世（前一六〇 - 一三八年）によって創設され、当初からこれをヘレニズム文化の中心とし、その感化を東方奥地の町々に波及させる門戸とする目的をもっていた（黙示録三ノ八「あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」を参照）。ヒラデルヒヤはベルガモと共に前一三三年ローマに遺譲された。紀元一九年の震災によって町は大破し、余震が長く続いたので市民の多くは城壁外に小屋をかけ、また天幕を張って住んだ。これはティベリウス皇帝によって復興され、ネオ・カイザリヤと称せられ、のちヴェスパシアヌス皇帝によってフラヴィアと改められたが、両者ともすたれ、元のフィラデルフィアの称に戻った。この地のユダヤ人植民はキリスト教に対し、最も激しい敵意を示した。この町の信者一人はスミルナでポリュカルポスと共に殉教の死を選んだ。

ヒラデルヒヤにおけるキリスト教の起源については何の記録も残っていない。しかし黙示録では小アジアの七つの教会の一つとして手紙があてられている（黙示録三ノ七一 - 三）。

使信において「少ししか力がなかった」（おそらくその起源が新しいこと）、またその前に「門を開いておいた」（おそらく小アジア中部に福音の拡大する機会が開けていたこと）と言われている。黙示録三ノ九に「見よ、サタンの会堂に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくて」と言われているのは、おそらくヒラデルヒヤのユダヤ人が、放縦で、異教的な生活に墮していたことを意味する。ここには古代の城壁、アクロポリス、劇場、神殿などの遺跡がある。昔は神殿の多いために「小アテネ」と呼ばれたほどであった。

この町は八年の抵抗ののち、一三九〇年トルコ軍の手に落ちた。

21 ラオデキヤ

ラオデキヤは小アジア西部の町で、エペソの東一五〇^{キロメートル}デニズルの北七^{キロメートル}の地点にある古趾と同定される。今日のエスキ・ヒサル^{キサル}の村の北方に位する高台地を占めている。エペソを出発し、国道八〇号線を東に進むと、一五〇^{キロメートル}でデニズルに着く。メアンデル川の流域に発達した肥沃な平原を走って東に進むのであるが、この地域はオリブ林が目立つ

て来る。いわゆる地中海のオリーブ栽培地域に入ったのである。さらにイチジクの木が広く栽培されており、この地域の特産品で干イチジクとして広く販売されている。この流域を通じて東西の文化交流が行われたのである。ラオデキヤはサルバコス山（標高二三〇〇^{メートル}）の北麓にある沖積層の平坦な丘にあり、メアンデル川の上流支流リュコス川の流域を俯瞰している。

初めはディオスポリスと呼ばれていたが、アンティオコス世（前二六一―二四七年）によって再建され、その妻ラオデイクの名に基づいてラオデキヤと命名した。アンティオコス世（前二二三―一八七年）は多くのユダヤ人（釈放された成人七千五百人）をこの町に植民させ、彼らはこの有力な要素となった。ヒラデルヒヤと同じように、ヘレニズム文化の普及を志向したものであり、他のヘレニズム都市と同様、神殿、劇場、列柱街路をもって飾られていた。ラオデキヤは一時ペルガモ王国に属していたが、前一三三年ローマの支配下に置かれた。エーゲ海とユーフラテス川とを結ぶ大交通路に沿った利によって商業都市として隆盛を極め、金融の中心地となった。

紀元六〇年の大地震で町は滅亡したが、市民は国庫の補助

を断わり、独力で復興し、その富を誇った（黙示録三ノ一七の「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが」と比較）。ラオデキヤはまた産業の中心で、ことに布地の製造販売をもって聞こえていた。この地方はやわらかな、光沢のある黒色の、染色不要の羊毛を出す羊が飼育され、その羊毛によって高価な織物が作られた（黙示録三ノ一八と比較）。

町の西方一九^{キロメートル}のアットウダにはフリュギアの神メーン・カロスの美しい神殿があり、それに近接して有名な医学校があつた。そこでは「フリュギアの粉末」と呼ばれる眼炎の妙薬を錠剤にして売っていた（黙示録三ノ一八の「見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい」と比較）。

一九六一―一九六三年カナダのケベック大学の探検隊が調査発掘し、ローマ時代の小劇場、ギリシア式の大劇場、カラカラの建立したニソフの泉の大神殿、オデオーン、体育場、スタディウム、三つのキリスト教会などが全貌を表した。これらは在りし日のラオデキヤの繁栄を物語っている。

一六六年にはサガリスがこの教会の監督であつた。一〇七一年にはセルジुकに占領され、一一一九年にはキリスト教徒によって回復されたが、一三世紀にはトルコに占領された。

22 ピリピ

ネアポリス（現今のカバラ港）はマケドニアの海岸で、パウロの一行は第二次伝道旅行の際トロアスを出港してこの港に上陸した（使徒行伝一六ノ一）。パウロは生涯に初めてヨーロッパの土を踏んだ地であり、感慨深いものがあったであろう。ここはエグナティア街道の一終点として海陸の交通の要衝に当たっていた。このネアポリスは今日のカバラ港で、マンドラ・カリの南斜面に発達した風光明媚の町である。人口四万六千を数え、マケドニアのたばこ輸出の中心となっている。パウロの一行は有名な石畳のエグナティア街道を通り、シュンボロン山の中腹を越えて一五^{キロメートル}でピリピに達したのである（使徒行伝一六ノ一、一二）。

ピリピはマケドニアの繁栄した町であったが、現在はフィリベドジク（小ピリピ）と呼ばれる古趾にすぎない。ピリピはパンガエオン山（標高一九五七^{メートル}）の北東に発達した平原に位し、ガンギテス川の低地を見おろす丘に建てられ、以前には、少なくとも前七世紀以降クレニデス（泉）の名で知られていた。それは丘陵付近に多くの泉があったからである。前三五八年、マケドニアの王フィリップス 世（前三五九-

三三六年）がこれを占領、拡張して自分の名に従ってフィリップ（聖書ではピリピ）と呼んだ。彼はパンガエオン山から年産一〇〇〇タラントの金を得て軍資金に当てたといわれる。彼は城壁をめぐらして要害を固めたが、その一部はアクロポリス、その他の地点に認められる。ビザンティン時代の城壁を含めて、その全長三・五^{キロメートル}に及び、街域は長方形で、面積八〇haに及ぶ広大なものであった。

前一六八年、パウルス指揮下のローマ軍がマケドニア最後の王ペルセウスを破って、彼の国土を占領し、前一六七年その支配を容易にするためにマケドニアを四つの地区に分割した。前一四六年、ローマはこれらの四地区を統合して「属州マケドニア」とし、テサロニケを首府とした。前四二年、ピリピ付近の平野においてオクタヴィアヌスとアントニウスとの軍隊が、ブルータスとカシウスとの軍隊を破り、そのためピリピは一躍有名になった。前三一年、オクタヴィアヌスはピリピをローマの植民市の位階に高めた。それはイタリア市民権の特権（免税と自治を含む）を伴い、ローマ軍隊の退役軍人の好個の植民地となった。守備隊が駐留したため人口の半分はローマ系、他の半分はマケドニア系、それに少数のユダヤ人系が含まれていた。

キリスト教はこの地で栄え、五世紀には大きなバジリカが建立された。四七三年にはゴート人が占領した。その後ビザンティンの監督区となり、一六一九年までそれを維持したが、それはドラマに移った。一九二四年以降それはカバラに移った。

町の西一・五^{キロメートル}にはルデヤがバプテスマを受けた川ガンギテス川があり、今日は「ルデア川」と呼ばれている（使徒行伝一六ノ一二―一五）。川の岸にはルデヤを記念する教会が新築されている。またパウロとシラスが投獄された牢獄が国道の少し上にある（使徒行伝一六ノ一六―二四）。その入口には「わたしにとつては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」（ピリピ人への手紙一ノ一二）の句が書かれている。このほか山頂にはアクロポリス、山麓近くにはエジプトの神々の神殿、バジリカA（五〇〇年ごろ建立）などがあり、古趾の中央を横切るエグナティア街道の道下にはフォーラム（長さ一〇〇^{メートル}、幅五〇^{メートル}）、マルクス・アウレリウスの造営）、バジリカB（六世紀、未完成）、体育場、公衆便所（水洗式で五〇の座席がある）、浴場、初期のキリスト教会（四世紀）などの遺物がある。

23 テサロニケ

今日はカバラからテサロニケまで国道二号線が走っている。パウロの一行も第二次伝道旅行の際、アムピポリスとアポロニヤを通過してテサロニケに至った（使徒行伝一七ノ一）。国道二号線を西に進むと間もなく右手にパンガエオン山が見えて来る。これは有名な金山で、年産一〇〇〇タラントの金を産し、フィリッポス世はこれをもって金貨を鑄造した。しかしパウロがこの山を見ながらこの地を通った時には閉山になっていた。およそ五三^{キロメートル}でアムピポリスに着く。それはストリモン川に取り巻かれたような形で、東岸に建っている。この川の西岸にはシシの像が立っている。さらに西に向かつて四五^{キロメートル}進むと右方にボルベイ湖が展開し、その中ほどに「ネオ・アポロニア」と書かれた標識が立っている。この南方にアポロニアの古趾があるのである。そこからカルキディケ半島を西に横断し、国道二号線を西に進むこと六〇^{キロメートル}でテサロニケに着く。

テサロニケはマケドニアの都市で、テルマ湾の奥深く（二五^{キロメートル}）、北東端に位し、コルティアティス山（標高二二〇〇^{メートル}）の南腹に展開し、あたかも大野外劇場の階段座席の観

を呈する美しい海港である。トルコ領となっていた時代には、トルコ名で「サロニキ」と呼ばれたが、一九一三年ギリシア領土となって以来、昔の名に戻り、「テサロニキ」が公式の名となった。現在は首府アテネに次ぐギリシア第二の都市となり、人口四〇万を数える。

前三一五年、マケドニアの王カサンドロス（前三一六―二九七年）が、近接の二六町村の住民を集め、新しい都市を建設して、そこに住まわせ、彼の妃テサロニカ（アレキサンドロス大王の異母妹）の名に従ってこの町の名を「テサロニケ」と呼んだのである。南東一キロメートルの地に、テサロニケに吸収された町の一つテルマ（温泉）があり、そこに湧出する温泉のゆえに、テルマと呼ばれていたが、古くはテサロニケ自身がテルマと呼ばれていたこともあった。前一六八年ピュドナの戦いの後、初めてローマの属州となり、ローマは統治上マケドニアを四つの地区に分割し、テサロニケはその第一地区の首府となった。前一四六年には、それらの四地区を統一してローマ属州マケドニア県とし、テサロニケをその属州の首府とした。この時代にテサロニケは最隆盛期に入り、「全マケドニアの母」と呼ばれた。前四二年ピリピ付近の平野における戦いでオクタヴィアヌスに加担したため、テサロニケは

自由市の特権を与えられ、毎年民会の選出した五ないし七名の「市の当局者」（使徒行伝一七ノ六、八）が自治的な市政を司った。

テサロニケが通商上重要な地位を占めていたのは、その良港のゆえのみでなく、バルカン半島を横断するローマの幹線道路エグナティア街道に沿っていたからである。

パウロが第二次伝道旅行の際にこの町を訪れた時には人口一二万を数える大都市であつたと推定され、ユダヤ人植民も多く、彼ら自身の会堂をもっていた（使徒行伝一七ノ一―一〇、ピリピ四ノ一〇、比較）。パウロは第三次伝道旅行の帰路、テサロニケを再訪した（使徒行伝二〇ノ一）。

テサロニケは旧市の延長となつていたので発掘された場所は少ない。ビザンティン時代の教会は現今ギリシア正教会として使用されている。ガレリウス帝の凱旋門は目抜通りのエグナティア街道にまたがって建てられ、美観を添えている。これは三〇三年の建造である。この北方五〇キロに同帝の葬祭殿が建立されているが、この丸屋根の葬祭殿は四〇〇年ごろキリスト教会に改造され、聖ジョージ教会と呼ばれている。

24 アテネ

パウロの一行は迫害のため夜陰に乗じてテサロニケを去り、西方八〇^{キロ}のベレヤにのかれた。エグナティア街道から南に外れていたが、比較的繁栄した町で、ユダヤ人植民も多く、彼らの会堂があつた。ここのユダヤ人は純朴で、福音を受け容れた信者も多かった。しかしテサロニケから押しかけて来た熱狂的なユダヤ人の扇動によつて伝道が妨害された。そこで信者はパウロの身を案じ、アテネに向かつて旅立たせた。パウロのアテネ行きは、おそらく海路によつたもので、メトネの港が、その南四時間路にあるブドナの港のいずれかで乗船し、テッサリ沿岸に沿つて南下し、エウボエア海峡を経てアッティカ半島の南端スーニオン岬を廻り、四日間の船旅を終わつてアテネの海港ピレウスに着き、そこで上陸し、おそらくハマクシトスと呼ばれた新しい街道を進み、北東へ^キアテネに着いたのである。

今日アテネは、ギリシア五二県のひとつアッティカ県に属する大都市で、独立戦争遂行後の一八三三年以来新生ギリシア国の首府である。アテネ市とその郊外ピレウスの都市部から成るアテネ首都圏の人口は二五五万に及び、近代工業が発

達している。一九七三年軍部の新たなクーデターによつて軍政権が倒れ、それ以降、共和制に移行して今日に至っている。

アテネ市における人類居住の歴史は新石器時代にさかのぼると言われ、水利に恵まれたアクロポリス（標高一五六^{メートル}）の麓に点々とこのころの居住跡が発見されている。後期青銅器時代のいわゆるミケネ時代（前一六〇〇—一五〇年）には、アクロポリス上に王宮が建設され、前三世紀半ばごろ、キクロペス様式の頑丈な城壁が張りめぐらされた。今日も二ヶ神殿の前面にこの城壁の一部を見ることができるといふ。

歴史時代に入つて前七世紀までは、アテネはむしろ後進国であつたが、前六世紀のソロンの改革（前五九四年）、ペイシストラトス一門の僭主政（前五四六—五一〇年）、クレイステネスの改革（前五〇八年ごろ）を経て頭角を現し、第五世紀初めのペルシア戦争では指導的役割を演じてデロス同盟を形成し、その盟主としてついには「アテネ帝国」を実現させた。サラミスの海戦（前四八〇年）の翌年、將軍テミストクレスはアテネ市を城壁で固め、軍事面における海軍主義を徹底させた。

前四四三年、ペリクレス（前四九五—四二九年）が將軍に

選ばれるや、いわゆるペリクレス時代と呼ばれるアテネの全盛時代が到来し、ギリシア古典文化の黄金時代を迎えた。有名なパルテノン神殿は建築家イクティノスとカリクラテス、彫刻家フェイディアスの協力によって前四四八年着工、四三八年に竣工した。哲学者ではソクラテース（前四七〇―三九九年）、悲劇作家ソフォクレス（前四九六―四〇六年）などが活躍した。この時代に、アテネは民会と民衆裁判所を最高機関とする徹底民主政の国となり、言論の自由に支えられてギリシア全体の文化の中心となった。

このアテネの繁栄はペロポネソス戦争（前四三―四〇四年）によって傾き、前四世紀後半以降ヘレニズム時代にかけて政治的意義を急速に失い、前一四六年ローマに征服され、ローマの属州アカヤ県に編入されるに及んでアテネは政治的重要性を失った。そして商業の中心はコリントが、学問の中心はアレクサンドリアが占めるに至った。アテネは自由都市としてアレオパゴス評議所による自治が許され、依然として過去の不滅の栄光の余光を保ち、パウロが第二次伝道旅行の際この地を訪れた時にはストア派およびエピクロス派の哲学が講ぜられていた（使徒行伝一七ノ一八）。当時の人口は八万を越えたと推定される。

パウロは安息日にはユダヤ人の会堂で論じ、また平日には午前中、市民生活の中心であったアゴラで出会う人々を相手に論じた。アゴラはアクロポリスの西端の北三〇〇メートルにあり、矩形の広場で、政治、商業の中心、また市民の社交の場でもあった。パウロはアレオパゴスの評議所に連れて行かれ、そこで有名な説教をした（使徒行伝一七ノ一九―三一）。アレオパゴスの丘はアクロポリス北端のすぐ西、標高一二二メートルの石灰岩の裸の丘で、南側東寄りの岩盤に切り込んだ一六の石段を登って達するようになっている。彼はここでキリスト教の弁明をしたが、信じた者の中にはアレオパゴスの裁判人デオヌシオとダマリスという女、またその他の人々もいた。デオヌシオの墓は丘の北西下方にあり、彼はアテネ教会の初代の監督に任じられたという。

25 コリント

パウロの一行はアテネを去って西方七〇キロメートルにあるコリントに向かった。今日は国道八号線が通っているので、車で簡単にいくことができるが、パウロの一行は徒歩でこの道を歩いて行ったのである。道々彼は、アテネにおけるエリート向きの想を練り、言葉を磨いた説教の効果の乏しかったことに

ついで深く反省したようである。「兄弟たちよ。わたしもまた、あなたがたの所に行ったとき、神のあかしを宣べ伝えるのに、すぐれた言葉や知恵を用いなかった。なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである」(コリント人への第一の手紙二ノ一、二)と述べているのはこの反省を反映しているのであろう。

古代のコリントは二つの海港(東にケンクレア、西にレカイオン)をもち、東西貿易の中継地として重要な地位を占め、通関税によって利を得た。船舶は遠く南のマレアス岬を廻って三〇〇^{キロメートル}も迂回するよりコリントの両港で、それぞれ貨物を陸上げし、陸路を運んだ。この地峡を横断する運河の必要は早くから感じられていたが、ネロが着手、ヴェスパシアヌスが継続したが中絶せざるを得なかった。今日の運河は一八八一―一八九三年に竣工したもので長さ六・四^{キロメートル}、幅二^{メートル}、水深八^{メートル}、水面からの高さ五〇^{メートル}である。橋を渡ると現今のコリントの町がある。一八五八年の地震で古コリントが全滅し、そのため一九二八年に現在の地に移転したもので人口二万八千を数える。

古コリントには泉が多く、アクロ・コリントの山(標高五

七五^{フィート})を背にした要害の地であったために、ギリシアにおけるもっとも早期の居住民の占めた町のひとつとなった。最初の居住は前四千年期にさかのぼるとされる。地勢上、商業、工業(真鍮細工、陶器)が発達し、ギリシアの重要都市の一つとなった。興亡起伏の歴史を辿ったが、その繁栄時代は前六―七世紀(バッキア朝、キプセロス、ペリアンドロス、プサンメテイコス時代)、前三世紀(ヘレニズム時代)、紀元一世紀(ローマ時代)の三つの時代であった。古代の囲壁は延長八^{キロメートル}で、アクロ・コリントのものを含め、海岸まで伸びたものを加えると延長一六^{キロメートル}に及んでいたとされ、人口は六〇万(うち^{2/3}は奴隷)であったと推定される。

前四四年、ユリウス・カエサルはこの有利な地理的条件に着目してこれを再興、ローマの植民市コロニア・ラウス・ユリア・コリンティエンシスと呼び、イタリアの自由市民と放逐されたギリシア人とを住まわせ、商業上の繁栄は急速に回復した。前二七年、アウグストゥスによってギリシアのマケドニアから分離、アカヤ県とされた。

パウロがコリントを訪れた時には比較的新しい都市で、ローマ人をはじめ、ギリシア、フェニキア、パレスチナ、エジプトからの植民が多く、全くコスモポリタンの都市として、

古い伝統をもつアテネよりも、伝道地として有望であった。パウロはここに一年六か月の間とどまって伝道し、有力な教会を創設した。信者は主として下層民および中産階級から成っていた（コリント第一・一ノ二六）。パウロはコリント滞在中にガラテヤ人への手紙、テサロニケ人への第一の手紙、第二の手紙をそれぞれの必要に応じて書き送った。

今日は広大なアゴラが発掘されて、レカイオンの列柱街路（第一世紀建造、十三世紀まで使用）、アポロ神殿（前五〇―五二五年建造）、プロプラエ、ペイレエの泉（夏では毎時四・五時の水を湧出）、ベーマ（パウロはこの法廷で、ガリオの裁判を受けた。使徒行伝一八ノ一四―一七）などの遺物を見ることが出来る。

26 良き港

ローマ行き of 航路でパウロは小アジアの南西端イスカンデル岬の町クニドの沖に達した。西風が強いために、そこから船首を南に転じ、クレタ島の東端サルモネ岬の沖を過ぎ、島の南東部を廻り、沿岸に沿って進み、良き港に着いた。

「良き港」（現今のカロイ・リムニオネス）はクレタ島中央部の南端リスイノン岬の東に位し、ラサヤの西八キロメートルにあつ

た。西側には石灰岩の小半島が海に突き出し、西風をさえぎる屏風の役割を果たしている。この半島の丘に見える白亜の建物はパウロの記念教会である。港の入口に二つの小島が見えるが、左の島には石油タンクが四基立ち並び、地中海を航行する船舶、とくにスエズ運河を通る船舶はここで給油することになっているという。パウロの一行はローマに行く途中この良き港に入港した（使徒行伝二七ノ八）。この港の重要性は今日も石油給油地になっている事実によって知られる。

27 ポテオリ

ポテオリ（今日のポツオリ）は海路二七〇キロメートルの長途の旅を終えてパウロが初めてイタリア本土に上陸した港である。パウロの一行はこの地の信者に暖かく迎えられ、一週間滞在してのちローマに向かった（使徒行伝二八ノ一三、一四）。

聖書のポテオリは今日ポツオリと呼ばれ、イタリア南部、ナポリ湾の北岸、ナポリの北西一キロメートルに位し、ローマの東方との通商活動の中心である。前五二一年ごろサモス島のギリシア人の政治亡命者たちによって建設され、「ディカエアルキア」と名づけられた。しかしポエニ戦争の際にローマ軍に占領され、彼らによって「プテオリ」と改名された。プツ

ツオラナと呼ばれる黄灰色の火山灰が地表を深く掩っているところから名づけられたのである。前一九四年ポツオリはローマの植民市となり、イタリアにおいて最大の港湾のひとつに発展し、また冬季にはローマの富裕階級の海岸避寒地として栄えた。のちにはローマのオステイア海港にその繁栄を奪われた。

今日のポツオリは人口六万、鮮魚の集散地として栄えている。しかし一九六九年九月分ら一九七〇年三月の間に七〇％も土地が隆起し、家屋の壁に亀裂を生じる事態が起こった。それはポツオリの地下基盤になっている溶岩が熱によって膨張したからである。イタリア政府は市民に無償で代換地を与えることにより、移転を呼びかけた。しかし市民の多くはこれに反対し、町に住み続けているのである。

28 ローマ

ローマは古代最大の帝国の首府で、「永遠の都」と呼ばれ、この都から広大な範囲の帝国を支配したのである。ローマは今日イタリア共和国の首府で、人口三百万を数える大都市である。

ローマはキリスト教にとって大きな意味をもっている。そ

れは征服者ローマの聖書国およびキリスト教に及ぼした影響がきわめて大きかったからである。主イエスの宣教と十字架死は、ローマのパレスチナ支配の時期に起こった出来事であり、キリスト教の二大使徒ペテロとパウロはローマにおいて殉教の死を遂げているのである。キリスト教迫害の暗い歴史を閉じ、コンスタンティヌス世（三三七―三四〇年）のキリスト教への改宗、テオドシウス世（三七九―三九五年）がキリスト教を国教に定めるに及んで、ローマ帝国の保護の下にキリスト教は発展の途を辿るに至ったのである。

ローマは、中部イタリアの大河ティベル河の河口をさかのぼった東岸に建てられた町で、地中海世界の中心に位し、その覇を制するに好適の地にあった。河口に近い海港オステイアを通じて帝国内の主要地域との海上交通が行われた。陸上には大道が各方面に放射し、「すべての道はローマに通じる」と言われたほどであった。海港オステイアに通じるオステイア街道は南西に伸び、下部イタリアに通じ、アッピア街道は南東に伸び、フラミニア街道、および奥地に塩を運ぶために使用されたサラリア街道（塩街道）は北方に伸びていた。ローマ建国は前七五三年、ロムルスによってパラティヌスの丘に基を定められた時に始まるといわれている。町はまず

パラティヌスの丘を中心に発達し、やがて市の街域は標高五〇メートル前後の「七つの丘」（黙示録一七ノ九参照）にまたがって拡大した。この街域を圍繞する城壁はセルヴィウス・トゥリウスの城壁と誤って呼ばれているが、実際は前三七八年から三五二年の間に元老院の命令によって構築されたもので、大山岩で作られている。囲壁内の面積は四〇〇haで、現在のエルサレムの旧市街（九〇ha）の四倍強であった。しかし人口の増加に伴い、北西郊外のマルティウスの原に向かつて庶民の居住が伸展した。アウグストゥスは旧市街と膨張した新市街とを合わせて一四区に分けた。ヤヌス神殿の扉を閉ざしたことを誇ったアウグストゥスの「ローマの平和」と呼ばれた泰平のゆえに、城壁が取り外されることを意に介しなかったのである。一四区のうち五区は旧城壁内、五区は一部が城壁内、一部が城壁外の両方にまたがり、第五、第七、第九、第一四の四区は全く城壁外にあった。このようにして第一区はポルタ・カペナと呼ばれ、旧城壁内にあったカペナ門はこの地区の中心になった。この広大な地域が帝政時代のローマであった。

二七四年アウレリアヌス皇帝は蛮族に備え、この市街地に城壁をめぐらした。それは今日も見られるもので、延長一九

キロメートルに及び、面積一六四〇haの広大な地域を含んでいる。ローマには広大な遺跡があり、ローマン・フォーラム、コロセウムを初め、聖ピエトロ大聖堂、クオヴァデイス教会、トレフォンタネ教会、パウロ教会などがある。

29 パトモス島

われわれはサモス島のピタゴリオンを出航してパトモス島に向かった。一五トンばかりの小さなディーゼル船に乗船したので、港外に出ると波は高く、強い西風を受けて船は横ぶれし、船が波に吞まれるのではないかと思われた。パウロの一行が強い西風を避けてスーニオン岬を廻ったのもかくやと思ひ、同感を得た（使徒行伝二七ノ七―八参照）。

左方にアルキ島、リプシ島を次々に間近に見ながら六〇キロメートルの海路を四時間かけてパトモス島中部の東側にある波静かなスカラ港に着いた。海上からの島の眺めは美しく、緑の濃い山上の聖ヨハネ僧院の城を構えたような白亜の建物は印象的である。

パトモス島は南北一六キロメートル、東西九キロメートル、面積四〇平方キロメートルで、わが桜島よりひとまわり大きい。三つの山塊が地峡によって結ばれているため海岸線は長く、六〇キロメートルに及んでいる。

地表は全く火山岩から成り、わずかに小麦、ぶどう、野菜の栽培ができるだけで、二千五百の島民の食料を充たすことができない。島民は主として海綿の採集で生活を支えている。

この島は早期にはドーリア人、次にはイオニヤ人によって植民されたが、ローマ時代には犯罪者の流刑地とされていた。黙示録の著者聖ヨハネは、九五年、ドミティアヌス帝（八一―九六年）の治世に、この島に流され、一八か月の流刑の日を過ごしたといわれる（黙示録一ノ九）。

島の全南部は聖ヨハネ修道院に属している。それは一〇八八年ビザンティン皇帝アレキシウス・コンソノスの許可を得て、ビテニアの大修道院長クルストロスが、エリアス山頂（標高二四五^{メートル}）の古代神殿趾に建立したものである。一種の城郭を思わせる構えで、堂内には古写本その他が所蔵されている。その庭から見おろす眺めは雄大で、西方の岸打つ白浪の碎け散るさまは美しい。

その少し下の中腹にはヨハネの黙示の洞穴がある。洞穴内にはヨハネが頭を置いて休んだという小さな台がある。ここから東方を眺めると小アジアの七つの教会は目に見えないけれども扇形に広がる地域に納まるのである。身は流刑にありながら、アジアの教会の情勢に気を配りながら手紙を書いた

ヨハネの心情を思うと身につまされるものがある。彼は教会の最後の勝利を確信していたのである。洞穴の天井には三つに砕かれた跡があり、それはヨハネが「わたしはアルパであり、オメガである」（黙示録一ノ八）という声を聞いたときにできたもので、父、子、聖霊の三位一体を表すと伝えられる。

〈年 表〉

聖 書 関 係

ローマ史関係

紀元31年	イエス・キリストの十字架と復活。ペンテコステ		
34年	ステパノの殉教 (行伝7章)		
35年	パウロの回心 (行伝9：1—9)	紀元37年	カリグラ、ローマ皇帝になる (在位37—41年)
35—38年	ダマスコとアラビヤにおけるパウロ		
44年	ヤコブの殉教 (行伝12：2)	41年	クラウディウス (聖書ではクラウディオ)、ローマ皇帝になる (在位41—54年)
44—45年	バルナバとパウロ、アンテオケで教える (行伝11：26)		
45—47年	パウロの第1次伝道旅行 (行伝13：1—14：26)	48年	クラウディウス、ユダヤ人をローマから追放 (行伝18：2)
49年	エルサレム会議 (行伝15：1—29)	51年	ガリオ、アカヤの総督になる (在位51—52年)
49—52年	パウロの第2次伝道旅行 (行伝15：40—18：22)	52年	ペリクス、ユダヤの総督になる (在位52—60年)
53—58年	パウロの第3次伝道旅行 (行伝18：23—21：18)	54年	ネロ、ローマ皇帝になる (在位54—68年)
58年	エルサレムにおけるパウロの逮捕 (行伝21：27—36)	60年	フェスト、ユダヤの総督になる (在位60—62年)
60—61年	パウロのローマへの旅 (行伝27：1—28：16)		
61—63年	ローマにおけるパウロ (行伝28：30, 31)	64年	ローマの大火、ネロのキリスト教徒迫害
67年	パウロとペテロ、ローマにて殉教	69年	ヴェスパシアヌス、ローマ皇帝になる (在位69—79年)
70年	テイトゥスによるエルサレム陥落、サンヒドリオン議会	79年	ティトウス、ローマ皇帝になる (在位79—81年)
廃止			
96年頃	ヨハネ、パトモス島で「黙示録」を書く	81年	ドミティアヌス、ローマ皇帝になる (在位81—96年)

〔注：聖書関係の年代は確定が困難であり、学者によって見解が異なる場合もある。なお「行伝」は新約聖書の使徒行伝のこと。〕

: 22……………下 157
コロサイ人への手紙
 コロサイ人への手紙に
 基づく…下 161—179
 1 : 25—29…下 49, 50
 2 : 7……………上 188
 3 : 11……………下 75
 4 : 7—14参照…下 147
 : 10……………下 130
 : 11……………上 182
**テサロニケ人への
 第一の手紙**
 テサロニケ人への第一の
 手紙に基づく
 ……上 276—289
 2 : 6, 9…………下 28
 3 : 1……………上 252
 4 : 3……………上 262, 270
 5 : 3……………下 236
**テサロニケ人への
 第二の手紙**
 テサロニケ人への第二
 の手紙に基づく
 ……上 276—289
 3 : 8, 9…………下 28
 : 10……………下 29
 : 11, 12…下 28, 29
テモテへの第一の手紙
 1 : 2……………上 220
 4 : 15……………下 37
 5 : 18……………下 17
 6 : 10, 11, 17—19 下 48
 : 15……………上 188
テモテへの第二の手紙
 テモテへの第二の手紙
 に基づく
 ……下 194—205
 1 : 12 …上 20, 下 209
 : 16—18…下 186
 2 : 4……………下 47
 : 9……………下 154
 4 : 6—8…………下 211
 : 10……………下 147
 : 11…上 182, 下 185
 : 14参照…上 317
 : 16, 17…下 188

テトスへの手紙
 1 : 7—9…………上 98
 2 : 6—8…………下 51
 : 11—14…上 221
 : 12……………下 202
ピレモンへの手紙
 ピレモンへの手紙に
 基づく 下 138—152
ヘブル人への手紙
 1 : 14……………上 165
 3 : 14……………下 217
 7 : 5……………下 16
 11 : 36—38…下 305
 12 : 1, 2…………上 336
ヤコブの手紙
 2 : 6, 7…………上 168
 3 : 17, 18…下 226
ペテロの第一の手紙
 ペテロの第一の手紙に
 基づく 下 212—228
 1 : 5……………下 230
 2 : 4, 5…………下 303
 4 : 14, 16 …上 168, 170
 5 : 2, 3…………上 93
 : 5……………上 215
ペテロの第二の手紙
 ペテロの第二の手紙に
 基づく 下 229—240
 1 : 19……………上 177
 3 : 14……………下 270
ヨハネの第一の手紙
 ヨハネの第一の手紙に
 基づく 下 249—259
 1 : 1—3…下 271, 272
 : 2……………下 247
 : 8, 9, 10…下 266
 2 : 4, 5…………下 266
 : 6…下 19, 20, 262
 3 : 1……………下 14
 : 1, 2…………下 248
 : 3……………下 262
 : 5, 6…下 266, 267
 : 14……………下 275
 : 24……………下 266

4 : 10……………下 14
 : 16……………下 263
ヨハネの第二の手紙
 ヨハネの第二の手紙に
 基づく 下 249—259
ヨハネの第三の手紙
 ヨハネの第三の手紙に
 基づく 下 249—259
ヨハネの黙示録
 1 : 1, 3…………下 287
 : 9……………下 273, 274
 : 10—13…下 285, 286
 : 11, 18—20…下 290
 : 14, 15…下 286
 : 17……………下 286
 2 : 1……………下 291
 : 2, 3…………下 282
 : 5……………下 292
 : 7……………下 295
 : 10……………下 294, 295
 3 : 4……………下 223
 : 5, 21…下 295
 : 8, 10, 2, 11 …下 294
 : 20……………下 292, 294
 : 21……………下 245
 5 : 5, 6…………下 295
 : 12, 13 …下 310, 311
 7 : 9, 10…下 311
 : 14—17…下 311
 13 : 8……………上 246
 14 : 1……………下 298
 : 2—5…下 298, 299
 : 4……………下 298
 15 : 2, 3…下 295, 296
 17 : 14……………下 53
 19 : 14……………下 223
 21 : 2, 11, 12, 21, 22
 ……………下 299
 : 3……………下 300
 : 4……………下 311
 : 27……………上 77
 22 : 1, 2, 14…下 299
 : 3—5…下 299
 : 5……………下 298
 : 17……………上 115
 : 18—20…下 287, 288

……下 116—120
25 : 13-27, 26章に基づく
……下 121—128
26 : 9—11……上 107
: 12……上 119
: 13……上 119
: 14……上 119
: 16—18……上 134
: 18……上 171
: 20……上 132
27章、28 : 1-10に基づく
……下 129—137
28 : 11—31に基づく
……下 138—152

ローマ人への手紙

ローマ人への手紙に基
づく ……下 54—66
1 : 14……上 265
: 21……上 5, 6
5 : 1……下 170
6 : 23……下 219
7 : 18……下 264
8 : 18……下 281
: 34……上 30
12 : 10……上 298
: 11……下 33
16 : 25……上 171

コリント人への 第一の手紙

コリント人への第一の
手紙に基づく
……上 322—347
1 : 1……上 134
: 12, 13……上 302
: 17……上 134
: 18, 19……上 260
: 23……上 264
: 26……下 153
: 26—29……上 134, 135
: 27, 28……上 260, 261
2 : 1, 4, 5 ……上 291, 292
: 2……上 135
: 2, 4……上 263
: 3……上 271
: 4……下 86
: 4, 5……上 134
: 6—13……上 271, 272
: 10……上 292
: 10—13……下 86, 87
: 14……上 293
3 : 1, 2……上 292

: 4—7……上 295
: 8, 9……上 297
: 10—13……下 304
: 11……下 169
: 14, 15……下 307
: 21—23……上 302, 303
4 : 1—5……上 298, 299
: 6, 7……上 299
: 11, 12……下 36
: 11—15……上 299, 300
6 : 19, 20……下 269
9 : 6……下 27
: 7—14……下 15, 16
12 : 4—12……上 94
: 28……上 94
13 : 4, 5……下 245
14 : 32, 33……上 215
: 33……上 99
15 : 3, 4, 8 ……上 130
: 55……下 296
16 : 9……上 309

コリント人への 第二の手紙

コリント人への第二の
手紙に基づく
……下 1—14
3 : 17……下 152
4 : 5, 6 ……上 224, 225
: 6—10……下 207
: 10……上 272
: 17……下 263
: 17, 18……下 44
5 : 17……下 169
6 : 3, 4-10……下 50, 51
7 : 1……上 216
8 : 1—4 ……下 23, 24
: 5……下 24
: 7, 11, 12 ……下 24
: 9……下 219
9 : 6, 7……下 23
: 8—11……下 24, 25
10 : 4……下 155
: 5……下 177
11 : 5……下 72
: 7—10……下 31
: 12……下 31
12 : 2, 4, 1, 11……下 161
: 12—15……下 32

ガラテヤ人への手紙

ガラテヤ人への手紙に
基づく ……下 67—73

1 : 1……上 134
: 3, 4……上 224
: 17……上 132, 135
: 18……上 137
: 21, 23……上 167
2 : 13……上 213
: 14……上 213
3 : 2, 26……上 224
3 : 16……上 238
4 : 12……上 224
6 : 14……上 226
: 14……下 264, 265

エペソ人への手紙

1 : 9……上 172
2 : 12, 13, 19……上 188
: 14 ……上 11, 173
: 19—22……下 303, 304
: 20……上 189
3 : 5—11……上 172
: 6……上 11
: 8……上 143
: 9……下 226
: 10……上 1
: 19, 18……下 161
4 : 13……上 308
: 14, 13, 17, 18 下 162
5 : 11……上 313
: 15, 16……下 162
: 25, 27……下 162
6 : 6……下 152
: 12 ……上 23, 236
: 14……上 77

ピリピ人への手紙

ピリピ人への手紙に
基づく ……下 161—179
1 : 3—5……上 235, 236
: 12……下 155
: 13……下 157
: 14……下 156
: 21……上 135
: 29, 30……上 235
2 : 8……下 13
: 13……上 170
: 15……上 223
: 16……上 222
3 : 5, 6……上 117
: 6……上 205
: 8—10……上 135
: 9……上 338
: 12……下 265
4 : 16……下 29, 30

マルコによる福音書

3 : 13, 14……上 10
 4 : 30……上 4
 8 : 36……下 47
 9 : 3……上 28
 : 39……下 246
 : 43, 45 …上 336, 337
 12 : 43……下 22
 : 44……下 22
 13 : 9……上 82
 16 : 15……上 187
 : 20……下 307

ルカによる福音書

6 : 38……下 26
 9 : 54-56新改訳 下 243
 12 : 48……下 18
 14 : 23……下 45
 15 : 7……上 164
 21 : 12, 16……上 86
 : 14, 15…上 100, 101
 22 : 32……下 213
 23 : 31……上 18
 24 : 21……上 18
 : 27……上 237
 : 45—48…上 19, 20
 : 49……上 25
 : 51……上 27
 : 53……上 29

ヨハネによる福音書

1 : 12……下 65
 : 14……下 166, 246
 : 14, 16……下 220
 : 16……下 247
 3 : 3……下 71
 : 14……上 108
 : 16……上 243
 : 33……下 259
 4 : 29, 41……上 112
 6 : 40……下 211
 12 : 32……上 269
 13 : 34……下 250, 253
 14 : 1—4……上 14
 : 3……上 28, 下 237
 : 12……上 14
 : 16, 17……上 43
 : 21……上 87
 : 26……上 48
 : 27……上 86
 15 : 20, 21……上 80
 : 26……上 47

 : 26, 27……上 15
 16 : 2, 4……上 80
 : 7, 13……上 32
 : 8……上 48
 : 12……上 292
 : 13……上 47
 : 14……上 48
 : 23, 24…上 29, 30
 : 33……上 16, 86, 88
 17 : 3……下 231
 : 10, 11, 20-23…上 17
 : 11, 14, 23, 21…上 92
 : 21, 23……上 13
 18 : 40……上 38
 19 : 6……上 38
 21 : 15—17……下 213
 : 18……下 238, 240
 : 20……下 241

使徒行伝

1 : 5—8……上 25
 : 6, 7……上 24
 : 8……上 112
 : 10, 11……上 27
 2 : 1—39に基づく
 ……上 29—42
 : 5……上 89
 : 36……上 177
 : 46……上 41
 3, 4 : 1—31に基づく
 ……上 54—69
 : 13……上 41
 : 31……上 71
 : 32……上 41
 : 33……上 44
 : 36……上 178
 4 : 32—5 : 11に基づく
 ……上 70—77
 5 : 12—42に基づく
 ……上 78—88
 6 : 1—7に基づく
 ……上 89—99
 6 : 5-15, 7章に基づく
 ……上 100, 106
 : 15…上 121, 下 191
 7 : 55, 56 …上 120, 121
 8章に基づく上 107, 116
 : 4……上 118
 9 : 1—18に基づく
 ……上 117—129
 : 5……上 119
 : 15……上 171
 9 : 19—30に基づく

 ……上 130—139
 : 25 ………上 137
 9 : 32-11 : 18に基づく
 ……上 140—153
 10 : 15……上 208
 11 : 17……上 209
 11 : 19-26, 13 : 1-3に
 基づく 上 166—177
 : 20……上 178
 12 : 1—23に基づく
 ……上 154—165
 13 : 4—52に基づく
 ……上 178—189
 14 : 1—26に基づく
 ……上 190—202
 : 17……下 306
 : 27……上 203
 15 : 1—35に基づく
 ……上 203—215
 15 : 36-41, 16 : 1-6に
 基づく 上 216—226
 16 : 5……下 87
 16 : 7—40に基づく
 ……上 227—236
 17 : 1—10に基づく
 ……上 237—248
 17 : 11—34に基づく
 ……上 249—261
 : 26, 27……上 12
 18 : 1—18に基づく
 ……上 262—275
 : 2—4 ……下 30, 31
 18 : 18—28に基づく
 ……上 290—303
 : 23……上 304
 19 : 1—20に基づく
 ……上 304—313
 19 : 21-41, 20 : 1に基
 づく …上 314—321
 20 : 4—21 : 16に基づく
 ……下 74—83
 : 27, 20, 21…下 45
 : 33—35…下 33, 34
 : 35……下 23
 21 : 17-23 : 35に基づく
 ……下 84—104
 22 : 14—16……上 133
 : 18……上 138
 : 19—21…上 138, 139
 : 21……上 171, 251
 24章に基づく
 ……下 105—115
 25 : 1—12に基づく

聖句索引

創世記

3 : 15…………上 238
22 : 18…………上 238
49 : 10…………上 239

出エジプト記

18 : 19—26……上 96
20 : 3…………上 162

申命記

1 : 16, 17……上 97
18 : 5…………下 16
 : 15…………上 238
 : 18……上 238, 239

列王紀下

1 : 3, 4……上 313

歴代志上

28 : 1, 8……上 97
 : 9, 10……上 97, 98

ネヘミヤ記

4 : 17……下 304, 305
9 : 20…………上 50

ヨブ記

22 : 21…………上 133

詩篇

15 : 5…………下 168
16 : 9, 10……上 243
19 : 8…………下 168
22 : 6—8, 17, 18…上 241
25 : 9…………上 302
34 : 7…………上 163
56 : 3…………下 159
68 : 32—34……上 27
69 : 8, 9, 20……上 241
72 : 14…………上 88
91 : 6…………上 163
119 : 130 ……上 307
125 : 1, 2……上 88
144 : 12……下 307

箴言

3 : 9, 10……下 25
11 : 24……下 26

28 : 13…………下 256

伝道の書

9 : 5…………上 312

雅歌

6 : 10…………上 93

イザヤ書

5 : 3—7……上 7
11 : 1…………上 239
 : 2, 3……上 240
26 : 3…………下 207
29 : 22—24……下 65, 66
32 : 20…………下 26
41 : 10…………上 88
42 : 1—4……上 240, 241
 : 6, 7……上 2
43 : 10—12……上 1, 2
49 : 8—11, 13—16
 …………上 2, 3
50 : 6…………上 241
52 : 14…………下 286
53 : 1—8……上 242
 : 5…………下 165
 : 7, 10, 12 ……上 244
 : 9, 10……上 243
55 : 3—5……上 239
56 : 7…………上 1
58 : 4…………下 99
60 : 10…………下 303
61 : 1—3……上 240

エレミヤ書

1 : 7—9……下 307, 308
2 : 21…………上 7
9 : 23, 24……下 231
23 : 5, 6 ……上 239, 240
33 : 17, 18……上 240

エゼキエル書

33 : 7—9……下 41, 42
34 : 4…………上 7
 : 26, 29—31 ……上 2
47 : 8—12……上 5

ダニエル書

12 : 4…………下 290

ホセア書

1 : 10…………上 187
 : 10参照……下 59
2 : 23…………上 187
6 : 3…………下 268
10 : 1…………上 7

ヨエル書

2 : 23…………上 52

ミカ書

5 : 1…………上 241
5 : 2…………上 240

ハガイ書

2 : 8…………下 218

マタイによる福音書

5 : 11, 12……上 189
 : 45……下 40
7 : 20……下 222
 : 23……下 110
10 : 34……上 86
16 : 22……下 224
 : 24……下 223, 263
17 : 8……上 63
18 : 15—18……上 328
 : 20……上 201
20 : 6, 7……上 116
 : 21—23……下 244
 : 25—28……下 245
 : 26—28……下 40, 41
21 : 42—44……上 62
 : 43……上 187
23 : 38……上 156
24 : 12……下 167
 : 14……上 116
 : 31……下 296
25 : 34, 21……下 298
 : 34 ……上 28, 下 310
27 : 17……上 38
 : 24, 25……上 38
 : 42……上 18
28 : 18, 19……上 305
 : 19……上 109, 187
 : 19, 20……上 24
 : 20……上 63

ホワイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)
- 3 国と指導者 (上巻)
- 4 国と指導者 (下巻)
- 5 各時代の希望 (上巻)
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)**
- 10 各時代の大争闘 (上巻)
- 11 各時代の大争闘 (下巻)

N D C 194/368P/22cm

転載複製を禁ず

1978年11月1日 発行

著者	エレン・G・ホワイト
訳者	清野喜夫
	安藤千代子
発行者	広田実
印刷所	福音社

〒241 横浜市旭区上川井町1966

発行所 福音社
電話(045)921-1414 振替横浜 599番

〒241 横浜市旭区上川井町846

発売所 健康と品性向上協会本部
電話(045)921-1121

製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN